

Angel Beats!～ちよ、
俺まだ死んでないんだ
けどオオオオオオオオ
オ！！～

日暮れ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは死後の世界よ――

どういいうわけか死後の世界に迷い込んでしまった銀さんの人情ギャグ物語？です。

基本銀さん以外銀魂キャラは出てきません。

さて音無くんが消えた世界で銀さんはどう立ち回ってくれるのか！

どうか温かい目で見てくださいと嬉しいです。

初投稿ですが、頑張りますのでよろしくお願いします。

目次

番外編

遊佐の戦線報告書 | 1

暇を持って余した神々(?)の遊び。

14

他人の誕生パーティーで本当に誕生日を

祝うヤツなんてまずいねえ | 38

男子戦線員の日常 | 49

常識常識って言ってるそのお前。今

すぐ常識って字を辞書で調べてこい、よ

くわかんなくなるから | 57

H a p p y n e w y e a r

68

E P I S O D E . 1 D e p a r t u r e

第一訓 | 79

第二訓 | 92

E P I S O D E . 2 G u i l d

第三訓 | 109

第四訓 | 125

エピソードのようなもの | 151

E P I S O D E . 3 M y S o n g

第五訓 | 153

第六訓 | 168

E P I S O D E . 4 D a y G a m e

第十五訓	第十四訓	第十三訓	f f a i r	E P I S O D E. 6	第十二訓	第十一訓	第十訓	F l a v o r	E P I S O D E. 5	第九訓	第八訓	第七訓
344	323	307		F a m i l y	275	259	247		F a v o r i t e	220	201	185

E P I S O D E. 9	第二十二訓	第二十一訓	第二十訓	n t h e D a r k	E P I S O D E. 8	第十九訓	第十八訓	第十七訓	第十六訓	E P I S O D E. 7	番外篇……と思わせといてエピローグ
I n Y o u r	448	431	416		D a n c e r i	399	383	367	359	A l i v e	355

Memory

第二十三訓

His Memory ①

492

His Memory ②

510

His Memory ③

536

第二十四訓

EPISODE. 10 Goodbye

551

Days

第二十五訓

563

番外編

遊佐の戦線報告書

……どうもこんにちは。戦線のオペレーターをしています、遊佐です。第六話で少しだけ出ましたね。

この企画は、私の出番が異常に少なく、コレはいかんと思った作者が尺稼ぎがてら立ち上げたものなのですが……

……まあ実際のところ、作者がテスト中に極限の状態で考えついた企画らしいのです。原作でもやっていますしね。

ともあれ、こうして仕事を任せられた以上、やるしかないようですね……
………セーの、

「名づけて、『遊佐の戦線報告書』。始まります」

★

今回調査するのは最近入隊してきた教師、坂田銀時先生です。

彼はこの世界史上おそらく初、先生としてこの世界に来た人間で、過去に何があったのか・好きな食べ物は何か・好きな女性のタイ……

戦線活動がない時はどうしてるかなどが全くわからない謎の人物。

戦闘力は戦線最強の椎名さんや我らが宿敵の天使以上といわれ、これからの戦闘の鍵になることは間違いないでしょう。

そんな彼の一日を盗撮じゃなかった観察してみましよう。

……少しだけ、楽しみです。

—AM 6 : 00 起床—

……意外と早起きなんですね。仕事は九時くらいから……というかまともに仕事なんかしないのに……

起きてすぐトイレに入ってシャワー浴びて……意外と潔癖症なのでしょうか？

—AM 6 : 46 朝食—

朝食は……

……

……見なかったことにします。

—AM 7 : 05 出勤準備—

——歯を磨いて、うがいをしうがいをしうがいをしうがいをし——計二十七回。何を気にしてるんでしょう？

——二度目のシャワー。さつきも入ったのに……

——鏡の前に立って三十分……ほとんど髪型変わってないと思うのですが……

——いつもの白衣じゃない……何か振りかけてますね。なんでしょうか、香水？

——AM8:24 出勤——

まさか準備に一時間以上かけるとは……

先生はもつと大雑把な性格だと思っていたのですが……意外なくらい几帳面です

……

……？ どうしてそんなに靴箱に張り付いて……？

——AM9:00 授業準備——

……ここでも鏡見てる……

引き出し何回も出したり引いたり……どうしたんでしょうか？

——AM9:15 授業開始——

銀時『うーい君たちおはようさん。早速教科書の54——』

『ねえ、今日の坂田先生変じゃない？』

『そうだよな。いつもの白衣じゃないし……なんか変な香水のニオイする。これ絶対

……』

銀時『おーいそつちうるせーぞ。一体どうしたつての？』

『いや先生今日なんかいつもと違うなーなんて……』

銀時『へ？ いつもと違う？ 何ごめん意味わかんない俺はこの世に生まれ出でた時からこの姿形をしているんだぜ？』

『いやだっつていつもの白衣じゃないし』

銀時『白衣なんて着てなかっただろーが俺は!!! ナニ？ ナニが言いたいのか？』

俺がなんかそんなもん意識してるとでも？』

『いや意識ってか』

銀時『そうさ銀さんはいつもこんな感じだよ？ お前こそ何なの？ さりげに意識してんじゃねーよオメーなんかのに誰もくれねーよ!!』

……？ 一体何のこと……

あ。そういえば今日って――

……すみません急用を思い出しました。しばらくしたら戻ります。

★

「……ちつ。あのガキどもめ……」

俺はイライラしながら職員室に向かう……つと、いかんいかん。

「……はー。今日も生徒たちは元気だなー！ カンシンカンシン！」

……なにやっつてんだろう、俺。

「あの、先生」

……ん？ 誰だ？ 声のしたほうに振り向く——と、

「……あ？ お前、その制服——」

その女子生徒がつけてる制服は俺が無理やり所属させられた『死んだ世界戦線』の連中と同じやつだった。

「……戦線のヤツか」

遊佐「遊佐、といます。」

女子生徒はとても長い——立華とタメはるんじゃねえかってくらいに長髪を両サイドでくくってツインテにしていた……

「……んで何だ？ 何かまた変なことでもおつぱじめようつてか？ 好きだねえーホント」

遊佐「いえ……そんなつもりじゃないのですが……コレ」

遊佐——そう名乗った生徒は俺に一つの小さな箱を差し出してきた。

遊佐「先生は、今日が何月何日かご存知ですか？」

「……は!! え!! し、知らないなあーそんなの。今日が何だつてのよ?」

!?! 遂に来た!?! 待ちに待った今日、この日の——

遊佐「……今日は、二月十四日。バレンタインです」

——最高の、イベント!!

っしややつたぜ坂田銀時!! 無駄に早起きした甲斐があったつてもんよ!

つてうおおい落ち着け。はしゃいでるの悟られたらかつこつかねえ恥ずかしい。ここは興味のないそぶりを……

「あ? え? バレンタイン? いやーすっかり忘れてたわ興味なくて……。……で? 何それ? くれんの?」

遊佐「はい、そのつもりです」

っしやキタアアアアアアアア!!! 見たか新八! 俺はホントはモテるんだよファイ

バーなんだよ!!

俺はチヨコの入った箱を受け取る。

「……開けてもいいか?」

遊佐「はい。どうぞ……」

俺はゆっくりとその箱を開ける——一体どんなチヨコが……

……ん? 何だこの紙きれ。

紙『チヨコ』

「おいてめえええええええええええ!!」

てめえ俺の純真おちよくて楽しいかコノヤロオオオオ!! おい! こつち向けこの!

遊佐「……………」

肩震わせてそっぽ向いてやがる……何コレ? 泣いていい?

遊佐「……失礼、しました……こつちが本物でプフツ」

……………

遊佐「すみません。既製品ではいろいろ欠けるものがあるかと思ひまして。謝りますから顔上げてください」

……………

俺は今度こそ遊佐とやらからチヨコを受け取る。

遊佐「こつちが本物です。折角なので手作りにしたのですが……いろいろ忙しかつたもので」

……………確かに、コレ購買で見たことあるやつだが……

——いつも高くて手が出せない高級チヨコ……

「……………おいしいのかよこんなたっけえもんもらって」

遊佐「女の子からのチョコは素直に受け取るものですよ」

「……………そんなもんかね」

遊佐「そんなもんです。それでは」

遊佐は踵を返し去っていきこうとする。

「おいちよつと待て」

遊佐「……………」

「来月まで憶えてるか不安だからよ……………今でお返しさせてくれや」

★—学園大食堂 内—

あれ……………どうしてこんなことになってるんでしよう……………？

銀時「ほれ、好きなもん食え」

……………

銀時「おいオバチャン肉うどん一つ！ 宇治銀時スペシャルで」

『おやアンタ女の子つれてんのにあんなもん食ったら引かれちゃうよ？ 普通のにしな

さいな』

銀時「うるせーババア。さっさと頼むわ」

『はいはい、どうなっても知らないよ』

「……あの、これは」

銀時「だーかーらー！」

先生はあきれたように言葉を紡ぐ。

銀時「チョコのお礼だったの！ さっさと好きなもん食べやがれ」

「いえ、でもそんな」

銀時「はい！ この中で何が好き!?!」

メニニューを私に広げて見せてくる。……

「……オムライス」

銀時「うし。おいババア！ オムライス追加で!!」

「……わ」

私の元に届いたオムライスには、『頑張れ女の子!!』とケチャップに書かれていた。

銀時「んあ？ なんて書いてあんだ？」

「……なんでもありません……」

すぐにケチャップを崩して読めないようにする……

銀時「うっお、うまそー」

……頑張って、みようかな。

「……あの、先生の好きな食べ物は何ですか？」

銀時「ああ？ 何だよ藪から棒に。合コンでもあるまいし」

「少し気になったもので」

銀時「ふーん……そうさなあ……好きなもの、ね……」

先生の答えを少し待つ。

銀時「……甘いもん、かな」

「え……？」

全く見当違いな答えが返ってきた。てつきり今食べてるものかと……

「あの……だからそんなによくわからないもの食べてるんですか？」

銀時「よくわからないじゃねえ。宇治銀時スペシャルだ。食う？」

「いいえ、やめときます……あの」

銀時「ふあ？ あ？ ふうん 今度 であふあふい？」

本当においしいそうにうどんに小豆をのせたものを食べている。

「あの、先生は……どこに住んでたんですか？ 一元の世界の」

銀時「どこって言われても……」

私は少し冷めてしまったオムライスを一口、口に運ぶ――

銀時「江戸、だけど？」

オムライスこぼしそうになった。

「……先生、江戸時代の生まれですか？」

銀時「は？ 江戸時代……ってのが少しわからねえが。まあ江戸の歌舞伎町に住ん
た」

……びっくりした……

「……あの、どんな風でした？ 江戸は」

銀時「あ？ どんな風って……あー……まずはだな？

宇宙から天人あまんどつつー宇宙人が

やってきて——」

★

——私は男の人が恐い。過去にそう思い知らされた。だけど……

……楽しい。

この人と話してるの、とても楽しい。

「……先生」

すっかり空になってしまった皿にスプーンを乗せる。

銀時「あ？」

「先生は……好きな人とかいましたか？」

ずっと——一緒にいたい。

銀時「……結構けつのアナ」

……？

「……あの、下ネタじゃなくて」

銀時「いやいやホントにいたんだって！ お天気キャスターやってる、結野クリステ

ルアナウンサーって人！」

お天気キャスター……

「……あの、もつと身近な人には……？」

銀時「あ？ バツカそんなのいるわきやねえだろ。俺の周りにはロクな女がいねえか

らな」

「……そうですか……」

……そうなんだ……

銀時「デザートでも食うか？」

「いいえ。結構です……先生」

銀時「あ？」

「また……こんな風に一緒にごはん食べてくれるかな？」

先生は一つ笑いをこぼして、

銀時 「よきかなー！」

そう叫んだ。

「……そこは『いいともー！』じゃないんですか？」

銀時 「いやいや。『笑ってよきかな』見てねーの？」

★

報告——坂田銀時は……

……とつても不器用でやさしい、私たち戦線の——教師でした。

★——作戦本部——そのころのゆりっぺ

ゆり 「……あの、せ、先生！ こっ……これ、ち、ちちちちゆよ……あああああ言

えないわよこんなこっぺずかしいこと!!!」

ゆり 「うええ……自分の性格が憎いわ……」

おしまい

「……この前の缶蹴りもそうだが、最近オペレーションまるつきり関係なくなってきたね？　ぶっちゃけお前遊びたいだけじゃね？」

ゆり「そんなことはないわ！」

ゆり「これはどんな過酷な状況、難題にも答えられる対応力や柔軟性を鍛えるためのオペレーションなのよ！」

松下「なんと！　このオペレーションにはそんなに深い理由が！」

高松「フツ……この肉体に更に磨きをかけるには丁度よさそうですね」

「いやお前ら単純すぎだろ!!　　そういやこないだもそうだったけど小学生だって納得いかねえぞこんなもん馬鹿か!!」

そんな俺のツツコミを無視して仲村は王様ゲームならぬ神様ゲームとやらに必要なものを黙々と準備している。アイツやってることもうリーダーってかガキ大将じゃね？

ゆり「なんでもいいのよ、みんなは真ん中に集まって！　ホラ銀さんさつさと電気消す！」

「教師を顎で使うな」

そう言いながら校長室の電気を切る。カーテンまで閉めてあるからどっちかつつと怖い話する時みてえだ。

.....

日向「銀さん」

「ふあつたはああああああああアアアアアアアアアアアアツ??!!」

日向「いやどんな叫び声だよ」

「お………おとおおどかしてんじやねーよ日向くん!!? あやうく首と胴体がサヨナラバイバイするとこだったよ!!?」

日向「いや俺はそんなアンタにおどろきだわ!」

仲村「はーい注目!」

そんな感じでだべつてると、仲村が大きな声で俺らに呼び掛けてきた。

仲村「ルールは基本的に普通の王様ゲームと同じよ「オイ今王様ゲームつつったぞ」黙りなさい。ここの箱に人数分の数字と『神様』と書かれた紙が入ってるわ。」

仲村「それを引いて、神様だった人は数字を指定して他の人に命令ができるってわけ」
仲村「ちなみに命令は絶対だから! 神様が死ねって言ったら全員その場で死になさい」

心配しなくてもお前以外そんな命令するヤツなんていねーよ。

直井「つまり僕が神様になれば合法的に銀時さんとムフフフ……」

「おい誰かコイツを殺してくれ」

仲村「じゃー早速始め……る前に、点呼とつときましょ！ 銀さん！」
「うーい」

仲村「日向くん」

日向「んー」

仲村「大山くん」

大山「はい……」

仲村「直井くん」

直井「呼んだか愚民」

仲村「藤巻くん、高松くん」

藤巻「できればまとめてほしくねえな……」

高松「同じく」

仲村「椎名さん、野田くん、松下くん」

椎名「あさはかなり」

野田・松下「うむ」

「かぶったな返事」

野田・松下「やかましい」

仲村「次、TK」

TK「悲しみのCarnival……」

仲村「遊佐さん含むガルデモメンバー」

ユイ「はい！」

ひさ子「呼ばれて来たら何だこの扱いは……っ！」

関根「うん……これは流石の私でもちよつと応えるな……」

入江「まあまあしおりん元気出して？」

遊佐「私だけ名前呼ばれました」

「んなんで胸張るな」

日向「つてか何で今更点呼なんて……」

仲村「行稼ぎ!!!」

堂々と言うな!!!!!!

仲村「じゃ、始めるわよー!! セーの——」

★—時は戻り—

仲村「ふっふっふふっふふん♪ 倒す倒すつて散々言つてたけど、神つてのもなかなか

悪くないわねー。どんな命令にしようかな〜」

藤巻「早速ゆりつべが神様だと……!!?」

大山「これはデンジャラスだよ！」

高松「まだ死ぬ覚悟が……っ！」

野田「俺はゆりっぺの命令なら何でもするぞ!!」

日向「……………」

くじを引いたみんなが恐怖におののいている中、日向は一人だけなぜかまぬけな顔をしていた。

日向「なあゆりっぺ」

仲村「何よ？」

日向「コレ……何？」

日向がみんなに見えるようにみせたくじに書かれていたのは……

『ハズレ（彼の腹筋を文字通り崩壊するまで笑わせる）』

仲村「あ引いたんだ、それハズレ」

日向「ハズレ!? 何ハズレとかあんの!？」

仲村「そこに書いてある事終わったらもう一度引けます」

日向「じゃあ誰を笑わせばいいんだよ!?! 彼って誰だ!？」

仲村「ふっ……ようやくの登場ね、出てきなさい!!」

その声を合図に突然作動した入口のトラップを押しつけ誰かがこの部屋に入ってきた!!

その影の正体とは——!!

チャー「何を隠そち、俺だ」

日向「ち、チャー!!??」

仲村「んじやがんばって〜」

日向「ちよつと待てえ!! こんなもんどう考えても無理ゲーだろ!!」

必死に日向が仲村に食らいつく。笑顔なんて感情、力のために悪魔に捧げてそんな毛むくじやらのおっさんに恐れおののいているのだろう。

仲村「笑わせればいいのよ? ロード十三章まで歌いきるわけじゃないし、簡単よ」

「おしいイイイイイイイイイイイ!! 今どつからロード出てきた!? ハ○ヒちゃん

か? ハル○ちゃんが憂鬱なのか!」

仲村「うるっさいわね……日向くんはさっさと行ってこい! じゃ王様から命令よ
!」

日向がぼそぼそと愚痴を零しながらこの部屋を出て行った瞬間に、緩みかけていた空気がまた凍る。今や神となった仲村は俺たちに一体何を……

仲村「五番と十番が乳繰り合」

「待てええええええええええええええええ!! 早速何言つちやつてんのお前!! この小説終
わるぞいろいろな意味で!!」

仲村「いいじゃない多分男同士なんだから。」

「よくねえわー！」

大山「ゆりっぺ流石にそれは……」

口に出さないだけで、大山以外の他のメンバーもうんざり顔だ。直井が「そんなものアリなのか……！」と顔をやけにいきいきさせているのは気のせいということにしておく。

仲村「……仕方ないわねー、じゃほつぺにキスしなさい！ とりあえずどつちからも一回ずつ。私たちはそれを見るから。精々腐女子のエサとなり果てるがいいわ!!
アーツハツハツハツハ!!」

「あなたは一体何て言う悪魔なんですか!?!」

仲村「ただの女子高生ですうー。で？ 誰が当たったのよ？」

「はあ……五番俺だ、十番は？」

「あの……私です」

そこで手を挙げたのは、仲村と同じ髪の色をした女子の姿だった。

仲村と違うのは、髪がもつと長いことと、アイツよか幾分か女子らしい所か。

ガルデモの……えっと、名前は……

「入江、だったか」

入江「えと、はい……」

その小動物を思わせる女子は俺に呼ばれて少し肩を揺らした。いつもビクビクしててまるでリスのようだな。

「んじや、さっさと終わらせんぞ」

入江「うええ!!? 今ここでやるんですか!?!」

「カタカナ使うな意味ありげになんだろーが。どこに行つてもどの道こいつらに見られんだから同じだろ」

できれば早く終わらせたい。なぜならうしろで仲村が「女子ですってえ……ツツ!!」と今にも飛びかかりそうな勢いで殺気を飛ばしてきているからな。

入江「じ、じゃあいきます……」

そのままの姿勢の俺に入江は背伸びをしながら迫ってくる。

目をぎゅつと締めて震えながら迫ってくる入江は何と言うか、結構かわいく見えた。入江「んっ……」

暖かく、柔らかいものが頬に触れる。

それが離れた途端、コイツの顔はかすかに紅く染まり、やっぱり結構恥ずかしいことをしてたんだと思いい知らされる。

直井「オイ……仲村ゆり。何だこれは、百歩譲って男なら許したが何だこの状況は……!!!」

藤巻「完全に二人だけの世界作ってるな……」

高松「まるで付き合い始めて一か月のみっちーよしりんカップルみたいですね」

ひさ子「例えがよくわかんねえよ……てか、これは流星に……」

仲村「フーツ、フーツ、フーツ……!!」

遊佐「……」

入江「つ、次は先生の番ですよ!」

「お、おう……」

入江が目を瞑る。俺はその頬に向けて顔を近づける。

とてもいい匂いがした。シャンプーか何かはわからないが……女ってみんなこんないい匂いがするの? そいや仲村もそうだった気が……

入江「ん……」

入江の頬に少しづつ近づく。あとほんの数センチ。吐息がかかる。心臓の高鳴りが聞こえてくる。彼女の——いや、俺のかもしれない鼓動が。

「入江……」

入江「先生……っ」

俺の唇が彼女の頬に当たる……瞬間、

仲村「だらっしやあああああああああ!!!」

遊佐「とう」

「ぶべらっつっつっつ!!!」

なぜか仲村と遊佐の蹴りが顔面に飛んできやがった。

「何すん……アレ?」

……あれ? 今俺何しようとした!? 今までしてしまつたことを少しづつ思い出してみる。

………うん。

「……恥ずかしい……っ!!」

年下の女子相手に息を荒げてキスしようだなんて俺は一体何をしよう……っ!!!

遊佐「先生が正気に戻ってくれてうれしいです」

仲村「今回の命令はこれで終わりよ! それでいいわよね入江さん!」

入江「あ……はい……」

何でちよつと残念そうなんだよもつと盛大に恥ずかしがつてくれよお願いだから!!

仲村「んじやも一回くじ引くわよ！ それと銀さん後で処刑だから」

「理不尽にもほどがあんだろーが元々はお前が言い出したことだぞ!!」

仲村「うるさい!! さあみんな引きなさい！ 神様だーれだ!!!」

仲村が半ば強引にみんなにくじを引かせる。

くじを引いた後の仲村の顔色が良くなるらないところを見ると、今回は神様ではないらしい。

竹山「今度は僕ですな」

「あ、何だ竹山いたんだ」

竹山「いましたよ！ 最初の点呼の時から「あれ？ 何で僕だけ呼ばれないんだろ

う」って部屋の隅で涙を堪えてたんですから!!」

竹山が神様くじを見せながら唾を飛ばしてくる。

竹山「みなさんも気付いてましたよね!! 僕の名前呼ばれなかったこと!」

仲村「……………」

大山「……………」

野田「……………」

高松「……………」

藤巻「……………」

椎名「……………」

TK「……………」

松下「……………」

直井「……………」

ユイ「……………」

ひさ子「……………」

入江「……………」

関根「……………」

遊佐「……………」

竹山「みんな嫌いだツ!!!」

ついに竹山が泣き出してしまった。他のはともかくTKまで無言である意味竹山
すげえな流石神様だ。

竹山「…………ふん…………僕にそんな態度取れるのもこれまでですよ? なんてったって
僕は今! 神様なんですから!!」

竹山が神様くじを高らかに掲げながら叫ぶ。

竹山「ふっふっふ…………では、ここにいる全員に命令です。」

全員って…………難儀なのはごめんだぞ竹山? 一体どんな命令を…………

竹山「僕をクライストと呼べ
!!!!!!」

.....

全員「「クライスト」」

竹山「ふっ……はは、最っ高の気分だ……はっはっはっはっはっはっは
!!!!!!」

全員「「……………」」

竹山「はっはっはっはっは、っは……」

全員「「……………」」

竹山「はっ、ははは……」

全員「「……………」」

竹山「……………あの、スミマセンこれだけです」

全員「「こんな命令に使うなアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!」」

竹山「ごごごゴメンナサイイイ!!」

★

その後竹山は「もう僕がやってほしいことはないので抜けます」と言って抜けてしまつた。たまにはクライストって呼んでやろう。

仲村「……じゃあ、くじ引くわよ……………神様だーれだ」

俺含むみんながやる気無くくじを手取る。竹山の件ですっかり盛り下がっちゃまっ

たなどうしてくれんだアイツ……

仲村 「んで？ 今度の神様は誰？」

「俺だよ」

そこには、神様くじをみんなに見せびらかすように揚げる――

「日向、お前よく戻ってこれたな」

日向 「おうよ！」

大山 「どうやってあのチャ―をあんなに笑わせたの？」

日向 「いや何かな？ 案の定何やっても駄目だったから何か適当に『今のはゲツガじゃねえ……剣圧だ』って言ったらもうアイツ大爆笑でさー！ ところでゲツガって何なんだろうな！ あっははは」

「よくもまあそんな中の人ネタを適当に言つてのけるもんだなお前は！」

日向 「へへ……銀さん、俺の……仇打ち？」

「何嬉しそうに言つてんだ……馬鹿」

「……卍解!! 鐵拳断か」

仲村 「うるせえんだよてめえらBLEACH劇場なら他でやれ!! もう何でもいいから早く命令しろや!!!」

「あーもう折角いいところだったのに!!」

日向「くっそ、しゃーねーな……」

日向が一つ咳払いをする。日向は一体どんな命令を……

日向「今一応夜だろ？ だから三番が二階のトイレに行くこと！ 俺と」

……

……いや、それ一応立派な罰ゲームになってておもしろそうんだけど……

……何故にお前と一緒に？

ユイ「あの、三番私なんですけど、何で先輩と一緒にトイレに行かないといけないんですか？」

日向「うっ……うるっせえな神様の命令は絶対なんだろ!? ホラさっさと行くぞ」

ユイ「ああちよ、待って下さい先輩ってばー!」

(怖いのか)

仲村(怖くてトイレ行けなかったのね)

☆

ユイ「……ちよ、先輩手繋がないでください汗ばんでて気持ち悪いです」

日向「なっ?! 俺はお前が怖くないようにって最大限の配慮をだな!」

ユイ「それが余計だってんでしょーがこのバカ先輩!」

日向「何だとチビで貧乳の癖に!!」

ユイ「そっちだつて万年彼女無し男のくせに!!」

日向「いましたあ彼女なんて両手の指じや足んないくらいいましたあー」

ユイ「嘘ですね! 一人ならまだしも私の知る先輩はそんなに彼女がポンポコできる

ような人じゃありません!」

日向「人を平成狸合戦みたく言うな!! お前に俺の何が分かるか!!」

ユイ「わかりますよ!! だつて私ずっと先輩のこと見てました……し……」

日向「……ん?」

ユイ「ツ……」

日向「……は? てことは……」

ユイ「……」

日向「……えーつと……」

ユイ「……」

日向「……とりあえず、進むか」

ユイ「……ハイ」

☆

藤巻「おー早かったじゃねえか日向……って何でお前ら二人顔真っ赤なの?」

ユイ「……」

日向「いや、ちよつとな……」

ともあれ日向は無事に帰ってきた。まさかトイレでムフフなことしてきたとかじゃねえだろうが何かあつたなあの二人。

仲村「じゃーこれで最後にするわよー！ 神様だーれだ!!」

みんなが最後のくじを引く。つてか意外と短かつたな、何だ？ 作者の気力がもたなかつたのか？

そんな妙な勘ぐりを入れる俺への復讐なのか、神作者はまた、この部屋に悪魔を誕生させた。

仲村「つしや神の再来いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

全員「ちつくしよまたかよオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

おおい勘弁してくれよ！ 俺はもう女子とキスなんかしたくねえよ!!

仲村「んじゃー六番！ 手を挙げなさい!!」

仲村は命令をするために六番が誰かを確認する。

大山「うあ、やつぱり来たかあ!!」

ん、今回初の大山だな。あの臆病な特徴がないのが特徴の奴に何かできるのか？

大山「僕は何をすればいいの……?」

仲村「別に大したことしなくていいわよ、天使に告白してくれたら」

大山「やったあ……ん? 何だって!？」

仲村「天使に告白するのよ。『こんな時に場所も選ばずゴメンナサイ。あなたのこと
がずつと好きでした、付き合って下さい』って」

大山「ええええええええええええ!!！」

……オイ、この展開何か見たことあんだけど?

日向「ちえ、告るだけでいいのかよ、何かズルイぜ」

「いやお前ウケ狙ってトイレ行っただけだよね?」

大山「そんな! 僕の身にもなつてよ!! そつちは肉体的なダメージで済んだかもしれ
ないけど、僕はメンタルのダメージがすごいよ!! だつて、女の子に告白するのなん
て初めてだよ!?! しかもフラれるわかつてるんだよおお……」

「いやだから肉体的ダメージ受けてねえんだよ誰も! エンジンで飛ばされてねえん
だよ誰も!!」

日向「つははウブなヤツめ、練習には丁度いいじゃねえか」

大山「僕は! 日向くと違って練習なんかしない!! 本気の恋しかしいんだよ
!!」

日向「何だど?! 俺が偽りに染まつたうすぎたねえ恋でもしてるつてのかよ?!?」

仲村「ごうるああああああああああああああああああ!!! どうでもいいから

そう言った日向の背中へ、やけに疲れたように見えた。

★

「……見つけた、オイ立華！」

立華「……？」

もう夜中だから学校にやいないものかと思っていたら幸い、立華は校内を少し歩いたところにいた。

立華「……何？」

「何とは随分と無愛想じゃねえか、今日はお前に言いたいことがあつて来たんだ」

「ちなみに……お前今歳いくつだ？」

立華「？ 十七歳だけど、永遠の」

「お前は一昔前のアイドルかよ……イヤ違うないけどさ」

立華「??」

「まあいい、立華——」

俺は立華の肩を勢いよく掴み、絶対に居眠りキムチなんかできないようにすると、口をゆつくりと開き………

こう口にした。

「——結婚しよう、立華」



仲村「……なんで？ その後は？」

「何かよお、『そんなこと突然言われてもつ困る！』ってハンドソニックで腹ぶっさされた」

仲村「そりや自業自得ね。大体天使はあなたが私に告白した時を目撃してるのよ？ そんなんでよく告白する気になったわよね」

「そんなに怒んじやねえよ折角メシ食いに連れて行ってるつてのに。カルシウム足りてねえんじやねえの？ オラ、お前も飲む？ イチゴ牛乳」

仲村「ところで、あなたイチゴ牛乳の着色料に何とかって虫の死骸が使われてるのって知ってる？」

「ぶっふおオ!!! オイてつめもうイチゴ牛乳飲めねえじゃねーかどうしてくれんだ!!!」

仲村「ふふっ……ならミルクコーヒーにでも挑戦してみたら？ ……な、何なら私が毎朝入れに行つてやつてもいいわよ!？」

「おおそりやいいな、今度入れに来てくれや」

仲村「！ ホント!？」

「？ ああ……」

仲村「やった、やった、やった♪」

「……何がそんなにうれしいんだか……」

★

立華 「結婚……ドレス? ケーキ……新婚旅行……」

立華 「……初夜」

立華 「……:……:子供の名前、決めとかないと」

★—次回予告—

直井 「神である僕が一度も神になれなかっただと……ッ!!」

日向 「いやあんなもんだのくじなんだからさ」

直井 「僕のゲームにかこつけて銀さんに——^ビしたり……^十……^八……^禁したりする計画が

パーじゃないか!! 僕と貴様で何が違うってんだ!!」

日向 「そんなこと考えてるから神様もお前を見捨てたんじゃないのかな!!」

直井 「かくなる上はやはり戦線の奴らみんな催眠術にかけて……ブツブツ……」

日向「ああもう勝手に違う世界に行ってるじゃねーよ!! よくこんなヤツ隣に置いとくな銀さんも!!」

日向「はあ……えーと、次回、第十六訓 E P I S O D E . 7 A l i v e その一だ。俺が大活躍する次回を楽しみにしてくれよな!」

直井「それは違うよ!!」

日向「幸運な人宿っちゃった!?!」

おたのしみにね!

他人の誕生パーティで本当に誕生日を祝うヤツなんてまずいねえ

……静かだ。

何も聞こえない、秋の夜。もつとも、こんな死後の世界に季節なんてあるのかわからないのだけれど。

そんな静かな夜の廊下を私たちは音を殺して歩く。目的地まで、早く、静かに。

あまり時間がたたないうちに、目的の部屋のドアの前に着くことができた。

私は様子を見る。

……

仲村「……クリア、突入」

私は後ろの仲間たちに指示する。それに反応して仲間たちはドアをこじ開け中に入る。

一応片付いてはいるが、何となくおっさん臭い部屋だった。

仲村（……いた）

仲村「目標確認、連れて行け」

私はそう指示した。その部屋にいた男をある場所へ連れていくように。

★

……………ん？

んだ、これ……………

アレ？ 何か俺……………浮いてね？

……………いやいやいやいやアリエナイって。俺は昨日自分の部屋に帰ってちゃんとベッドで寝たんだから、もー昨日飲みすぎたなこれだから二日酔いは全く……………

……………いややつぱり浮いてね？

……………いやいやいやいやいやいやアリエナイって!! だってあれだよ？ 昨

日の俺はアレがアレするアレだから! 絶対ナイから!!

試しに目を開いてみよう、そうすればいつもの汚え天井が……………

……………アレーおつかしいな目が開かない……………

もしかしてコレあれか？ 噂に聞く……………ぽっぽぽルターガイスト、的なの？

フンっ、フンっふん!! ……体が動かねえ。

……………えマジ？ これマジなやつ？ やだって俺今死んでる設定だぜ？ 見方によつ

ちや俺自身がユーレイだぜ？ なのにこんな……………

……………ちよ、霊さん？ いらっしやるんですか？ 何か私がお気に召さないようなこと

でもしたんですか？

「……霊さん？ 聞いてますか？ 助けて下さい!!? ねえ!! ちよつと!!! 霊
さアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ちよ、マジ洒落になんね俺こんんで死ぬのやだよ新八イ神楽アアアアアアアアア!!!」

「誰か助け——うげっ!!!」

助けて、そう叫ぼうとした途端に俺の体は突然下に投げ出された。

「何、何なの!!? 助け呼んで怒ったの!!? 霊さんマジ調子のもつてスミマセンした!! 昨日のアレは許して下さい!! けど昨日は俺にとって特別な——」

パンっパン!!

「えあ!?! 何この音と煙くさい匂い!?! 銃声!?! 霊さん何で銃なんてえげつないもの使えんの!?!」

そこまで言ったところで俺の目の前から何かが取り除かれ、至って明るい——いつもの校長室が写りこんだ。

「……あ? 何コレ」

俺は思わず鳩が豆鉄砲をくらったような顔になる。鏡は持つてねえが見てみたら絶対そんな顔だ。

そんな俺の目の前に、それぞれクラッカーとケーキを持った遊佐と仲村が現れた。

遊佐・仲村 「お誕生誕日日、おめでおめとうとござといます!!」

遊佐が持っていたクラツカーを鳴らす。

パンっパン!!

「……………お前ら……………」

この二人の他にも、戦線のメンツのほとんどが倒れている俺を見、拍手してくれている。

日向 「おめでとさーん!!」

大山 「おめでとー先生!」

野田 「ちっ、ゆりっぺに感謝しろ」

藤巻 「無駄に歳ばっか食いやがってよオ! めでてえなコノヤロお!!」

高松 「おめでとうございます」

松下 「おめでとう」

椎名 「フン……………あさはかなり」

TK 「時を越えてHello Again」

竹山 「今後とも僕をよろしくお願いします。このクライスト」

直井 「銀時さんお誕生日おめでとうございます!! これてまた一つ銀時さんが大きくなったと思うと僕はもう感無量ですよ!! 大きくなったと言えば銀時さん一応起きた

仲村「……あれ？」

遊佐「……………間違えました」

「間違えたじゃねーよ!! わざわざ十二時回るまで待つんだつたらもう少し早くやってくんなかったかな!?!」

仲村「ま、まあいいじゃないそんなこと、とりあえずパーティーよ!! さあ飲みねえ食いねえ!!」

「おいシカトしてんじや——むぐボフっ!? ば、なば何だこばれ!べ!?!」

日向「につしつし……こんな時に用意してた特製パイだ!! 日ごろの俺らの恨みを知れええええ!!」

「上等だこの童貞野郎が……チエリーパイお見舞いしてやるよコノヤロー!!!」

ワーワーギャーギャー——

★

……周りのクソガキどもはもう眠っている。暴れすぎて疲れたか? いつも銃や刀振り回してるつてのになさつけねえ。

部屋は汚れきっていた。パイやケーキのクリーム、ジュースの飲み残しや日向が演芸

で使った割りばしや手ぬぐいなど……

そんな有様の部屋の床に俺は一人で座っていた。座って一人でイチゴ牛乳を飲んでいた。

「——イチゴ牛乳の着色料にはエンジ虫という虫の色素が使われているのでは？」

「ああ？　なんん気にしてもしやーねーだろ？　人間寝てる間に何が口の中に入ってるかわかったもんじゃねえんだ。それ考えたら原型留めてないだけマシだぜ、遊佐」

遊佐は最後まで起きていた。今回のパーティの司会や取締役などをやってくれて疲れているだろうに今度はみんなを起こさないように片付けた。

遊佐「……すみませんでした、一日ずれてしまつて」

「全くだ。今度からは気をつけろよ？　人の誕生日をここまで無茶苦茶にしやがつて」

遊佐「……のわりに嬉しそうですね？」

「……ケーキがうまかつただけだ」

遊佐「そうですか……ふふっ」

遊佐はそこまで言うのと笑つた。小鳥がさええざる様に静かに、だが確かに楽しそうに笑つて見せた。

「笑つてんじゃねーよ、こちとら怒つてんだぞ？」

遊佐 「すみません、代わりと言っては何ですがこれを受け取ってください」

遊佐 はバレンタインのあの時のように、俺に一つの包みを渡してきた。

「またくだらねえ紙つきれなんかじゃねえよな?」

遊佐 「そうですか、では今度からそうします」

「おいお前の頭についてるそれは素敵なドアノブか? 思いつきり捻ったらどこかに行

けるのか? 試してみていいか?」

遊佐 「冗談です」

開けてみてください、遊佐にそう言われ、俺は包みを開ける。

……中にはやっぱりというべきか、一枚の紙が入っていた。

遊佐 『遊佐にいつでも何でも頼める券』です」

「いらっね!! 心からいらねえ!!」

遊佐 「いいんですか? 何でもですよ? えっちなお願いでも私は恥を忍んで聞いて

みせます」

「マジで!?!」

遊佐 「……そんなに喜んでくれるなんて嬉しいやら悲しいやらですが……ただ、それを使うにあたって一つ条件があります」

「……んだよ条件って? 一応誕生日プレゼントなんだからこれ?」

そこで遊佐は少し口ごもる。珍しく手をいぢくりながらもじもじしている。

遊佐「……でて下さい」

「……は？」

遊佐「頭、撫でて……下さい」

遊佐はうつむきながら必死に上目づかいでそう言ってきた。あまりにもか細い声で一度聞き逃してしまつたが、顔を真っ赤にしながら確かにそう言った。

「んだよそんな事かよ、オラ」

俺は遊佐の頭に手を置き、乱雑にかき回す。

遊佐「……ん……………あ」

そんな俺を眠たそうな目で見ながら遊佐はとでもリラックスした様子でいた。

遊佐の髪の毛の匂いがこつちにまで届いてくる。やっぱ女ってみんないい匂いするのな

……

遊佐「……先生…………？」

「んだよ？」

遊佐「私のプレゼント…………ちゃんと使つて下さいね？」

「……………ああ」

遊佐「約束、ですよ…………？」

「……ああ、もう寝ろ」

遊佐が俺の懐に倒れこんでくる。やっぱり疲れてたんだろう、必死に隠そうとしたっ
てこういうのは隠しきれないもんだ。

俺は遊佐の頭に手を置きながら、ゆっくりと目を閉じた――

★

仲村「フフ……ねえ先生？ 何コレ？ そこに落ちてたんだけど『遊佐にいつでも何
でも頼める券』って。あなた昨日遊佐さんに一体何頼んだの？」

「ちよつと待て違うぞ仲村!?! お前は勘違いをしている！ だから一旦その銃を置こう
!?! な!?!」

仲村「じゃあ何で二人抱き合って寝てたの……?」

「これは何というかいろいろあつて――」

遊佐「ん……せんせ、もっとお……」

「このタイムミングで何てまぎらわしい寝言吐いてんだテメえええええええええええ!!」

仲村「フフフ……♪ いっぺん、死んでみる？」

「待て仲村その銃弾入ってないよな!?! 入ってないって言ってくれ仲村おい仲村さんい
やゆり様!! 助け――」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!」

48 他人の誕生パーティで本当に誕生日を祝うヤツなんてまずいねえ

お
し
ま
い
♪

男子戦線員の日常

日向「なあ。彼女って、どやったらできんの？」

春風がわずかに部屋を吹き抜けていく。そんな日にあまりに暇すぎたのかアホな質問を吹っかけてくるアホな阿呆が一人。

俺たちは戦線の物資の管理という名目で、仲村に空き教室の掃除をさせられていた。当然やる気なんてものは無く、ただただ外をぼーっと見て。俺は宇宙の一部だ、そして、宇宙は俺の一部なのだどーしようもない妄想にふけていた所にこの質問ときた。

「ぼつかオメーそんなの、決まってんだろ？」

内心どーでもいいと思いつつも一応こいつは立場上俺の教え子だ。

人生の先輩としていろいろ教えてやるーじゃねーか。

「放課後の教室でだな？ 一人残ってプリント整理してる女子がいるだろ？ ホラ」

そうして俺は、目の前の野田を指さす。

野田「んもうかったるくてやってらんないわ背負い投げく!!」

日向「ってコレ女子じゃなくてオカマじゃねーか!!」

野田がクネクネと気色悪くハルバートを振り回す。

「あん？ 昔からよく言うだろ、『男は度胸、女は愛嬌、オカマは最強』って」

日向「いわねーよ何一つ『ああなるほど』ってならねえよ！」

「うるせんだよ黙ってやれ！ オカマ落とせねえでどやって女落とすんだよ」

日向「いやだつて落とすつつつても別の物落としているもの男として落ちているもの！！」

「え？ 何？ 一緒に堕ちたい？」

日向「どんな難聴キャラだ!! 俺をそちの道に引きずり込むな!!」

そう叫んで日向はもう諦めたかのように一つ溜息を零す。

日向「……まあいいや、で？ 次は」

「シミュレーションだ、お前は放課後一人でプリントを分ける野田I K K O子さんに話しかける」

日向「I K K O子って何だよ語呂悪すぎだろ絶対話しかけねえよそんなの……」

★

I K K O子「……おい、もう教室閉めたいんだけど」

「はあ？ ……つえ！ あ、ごめん……」

気持ち悪い。何が気持ち悪いって今自分かわいいんじゃない？ って思ってるのが伝

わってくるほどドヤ顔した野田の表情がもう気持ち悪い。

「それ、今日中にやらないとまずいのか？」

ＩＫＫＯ子「う、うん……先生に、頼まれちゃって」

そして、不覚にもちよつとかわいいと思ってしまったオレも、気持ち悪い。

「……ん、貸せ」

ＩＫＫＯ子「え？」

「手伝ってやるつつつてんだ、半分貸せ」

ＩＫＫＯ子「あ、ありがとう……！」

俺がＩＫＫＯ子のプリントを受け取るうとした瞬間だった。

ガラリラ、とあからさまな口効果音が響くとともに扉が開け放たれ――

銀時「ドドスコスコスコ（ryラブ注入!!）」

「何であんたまで出てきてんだよししかもオカマスターで!!」

★

野田「何だ、ダメダメではないか日向」

「てつめキャラ多いんだから全身全霊でO・M O・T E・N A・S Iしてみせろよ」

日向「どこのクリステルだよあれの対応できる奴がいたら奇跡だよ!!」

日向が床に膝をつき泣き言をほざく。

「お前のためにやってんだろーが。もうギブアップか？」

日向「ふざけんな！ もう一回だ!!」

★

銀時「もう一回！ アックシっ!!」

「アクションと言いたいんだろーが、カッコつけすぎてくしやみにしか聞こえんぞ……
て、手伝うよ……」

野田「わたし、『嫌いな女子アナランキング』で1位だったんです！ なので来年は1位を免れたいです！ まあ、ネタになりますし、悪名は無名に勝ると思ってるのでいいんですけど、もうちよつとランキングを下げられたら嬉しいですね。いや！ やつぱり逆に「V2達成」にしておこうかな！」

「今度は高橋○麻じゃねえか何で女子アナ攻めで言ってるんだよ!!」

つか独り言でそんなこと口走ってる時点でこんな奴と話したくない!!

銀時「はっ!! あれはまさか龍の巣!! あそこに天空の城クリステルが!!」

「そうやって拡大される○麻の鼻。てかカメラはどっから持ってきたしかも銀さんお前は一体誰設定だ！」

「ないからそんな所にクリステルもラピュタも!! 土曜プレミアムでも見たのか知らんがそこにはハナクソしか住んでない!!」

★

「つち、何回台無しにしてんだよ!! もう一回! フィーックシッ!!」

もはや完全にクシヤミになってしまった掛け声を合図にシユミレーションをスタートする。

正直もう辞めたいんだが……

野田「あ、親方! 空から女の子が!!」

「何でラピユタ引つ張ってるんだじゃあお前は一体誰だ女役じやなかったのか!!」

ツツコミどころが多すぎてさばききれねえよ!!

落ちてくる女とやらをキャッチする。これ一つの教室でできないはずなのにいったいどーなってんだ!!

俺はその女の子の顔を優しく覗き込む。すると――

銀時「もうどんだけ!!」

「どこまでI K K O引つ張るんだよ!!!」

思わず膝をついてしまう。

★

銀時「……ダメダメじゃねーか」

野田「もう諦めろ日向。俺は降りるぞ」

この無駄な茶番に付き合わされてなおそのデカイ態度とは何様だ……!!

……でも、おかげで忘れていた大事なことを思い出したよ。

俺は、まだ、終わってない!!

「……シータ」

野田「いや俺はあくまでパズー的な役割で——」

「いや、シーター！ 行こう!!」

野田の手を取り教室を飛び出す。

見せたいものが、君と一緒に見たいものがあるんだ!!

銀時「……わかってるじゃねーか」

走る。

銀時「例えモテなくても。不器用でも」

全力で走る。

銀時「相手がどんな奴でも関係ない。男がその人に抱いてる思い」

足が千切れそうになるまで、走って走って走った。

銀時「そいつを全力でぶつけられたら、それでいいんじゃないの？ 最高のプレゼン

トじゃねえか」

俺たちは屋上についた。

目の前に広がる空はすでに赤が差しており、大きな入道雲が立ち上っていた。

「……………これを、きみに見せたかったんだ」

野田「日向、いやパズー……………!!」

銀時「……………へっ、何だよ。久々に教師しちまったじゃねえか」

「……………ラピユタは本当に、あつたんだ!!」

仲村「——で？ あんたたちは教室の掃除をサボってこんなところ屋上に何の用かしら？」

……………目の前には、わずかに眉をひくつかせる我らが戦線のリーダー、仲村ゆりが立っていた。

「えっと、これはそのだなゆりっぺ！」

仲村「うんうん。話は処刑が終わった後にゆくり聞いてあげるから♪」

——その日、彼らは思い出した。

——やつらに支配されていた恐怖を。

——やつらがいる限り、彼女なんかできやしないという事実を。

常識常識って言ってるそのお前。今すぐ常識って字を辞書で調べてこい、よくわかんなくなるから

——俺たちが元居た世界と同じように、神社とかと同じように、神が作ったって言うだけあってこんな死後の世界にも神ってやつがいるみたいだ。

それが女神なのか死神なのかは俺にはわかりやしないが、わざわざみんなでのどかにのんびりUNOしてる最中に、それも超めんどくせえ厄介事を押し付けてくるあたり、とんでもねえ厄病神に愛されちゃったらしい。

やることがない俺らにわざわざ仕事を与えてくれるたあ、流石神様。いい性格してやがるぜ全く。

はてさて、そんな厄介事を押し付けてきたのは、まさしく神の使いであろう天使。つまり立華奏だった。

以下、回想。

★

立華「……ごめんなさい」

そう言うってペこりと頭を下げた立華の背後にあったのは、

ボロッポロに壊された楽器の山、山、山で。

仲村「これはヒドいわね」

立華「壊すつもりはなかったけど……オーバードライブはパッシブだから」

「お前それ言つとけば許してもらええると思つてない？ てかどーすんだこれ」

仲村「ガルデモを止めに入つたときね。加減できずにこうなつてしまった、と」

立華「……弁償します」

仲村「いーのいーの奏ちやん、一から作ればいいんだから！ その間トルネードはできなけれど、今の食券の量でなんとかなるものでしょ」

とはいったものの、全然なるとかなるものではなく。

仲村「んー困つたなー。ガルデモの代わりになるアイドルグループでもいれればいいんだけど……」

仲村「あ、じゃああんたやりなさいよ！」

以上、回想終わり。

★

「……どーしてこーなった」

おそらく読者のみなさんが思うであろうガルデモのメンバーを直接使うっつー案は、

我らがリーダー、仲村ゆり様の一言によってかき消された。

仲村「ユイはアホだし、ひき子さんはあれで歌そんなにうまくないし、入江さんはドラム無いとただの小動物だし、入江さんがそんなだから関根さんも暴走しないか心配だし。これが一番ベストなの!!」

とのこと。ご都合主義とはまさにこのことか。

なんてモノローグでくつちやべってる俺は今現在どうなっているかというと、

日向「誰!」

大山「うわあ、どこから見ても女の子の人だよ!」

椎名「か、かわいい……」

松下「ついに目覚めてしまったのか」

野田「結婚したい……」はっ!? 何を馬鹿なことを俺にはゆりつぺという心に決めた人が!!」

TK「何やこのドえらいべっぴんさ……絶望のcarnival」

ユイ「なんでそんな胸おつきいんですかーなんかムカついてきた!」

直井「せ、先生!? ボクと正式に愛し合うためとはいえ何も女にならなくても! ボクはむしろ男のままのほうがああでも美しい!! 神であるボクを軽く凌駕するこの美しさはさながら美の神アフロディーテ」

高松 「いい肉体ですね。惚れ惚れします」

藤巻 「それ今のこいつ相手だとセクハラだかな。にしても……ブフツ!!」

入江 「あ、あれ?? 先生は男で、だけど目の前の先生は女の人で——」

関根 「はいいみゆきち考えちやダメだよー? ありのままを受け止めるの」

ひさ子 「あんたのありのままの姿を見せた結果がこれってことかよ……」

遊佐 「松たか子もびっくりですね」

「あーもううっせえええええええええええええええええええええ!!」

……女になっていた。

★

「まさかまた女になる日がこようとは……」

俺は自然と重くなった自分の胸を揉みながら肩を落とす。

「あーもー超やだわー女とか。立ちションできねーし裸になるわけにもいかねーし
チヨー不便」

ふにふに。

仲村 「早速自分の胸揉みしだいてるやつのセリフじゃないわね……というかあなたそ
んなに欲求不満だったの? ヤダ怖い近づかないで」

「お前こそ俺の身体を女にした奴が言うセリフか」

仲村「私じゃないわよ。ねー奏ちゃん♪」

立華「ねー」

へーそーなんだー。

ふにふに。

「——いや『ねー』じゃねーだろおおおおおおお!!」

「何これ!? 俺が落ち着こうとして胸をもんでるのがわかんねーのか! もうむっちゃ痛えんだよ! おっぱいもげるくらい揉みしだいて今にも取れそうなんだよ!! 銀さんどーなんのコレ!? 取れたら元に戻るの!? 俺の消えたバズーカとおっぱいとで等価交換なの!?!」

ふにふにふにふにふにふにふにふにふにふに!!

仲村「わかった。わかったからモノローグでおっぱい揉むのやめなさい。若干狂気すら感じるわ」

立華「私が、Angel Playerであなたを女にしたの。ゆりに頼まれて」

仲村「さつすが奏ちゃん! 出来は最高ね!」

立華「えっへん」

「ちよいとちよいと。そういうのは普通本人の許可を取ってからだろう? 学校で習わなかったか? 常識ググレカスという文字をg g r k s」

仲村「先生があんたなら常識もなにもないでしょ。あんたこそ常識という文字を y h o r k s^{ヤホレカス}」

y h o r k s って何だそれ初めて聞いた、憶えておこう。初めて聞いた言葉は使えるようにしておくのが常識だもんな。

立華「……だけど、一つ問題が」

「あ？ 何だ立華。忙しいんだが」

仲村「ちよつと、人が話してる時くらい i p a d しまいなさい。ヤホるのは後よ。常識でしょ？」

「せんせー、常識ってなんですかー？」

仲村「自分の心に聞きなさい。で？ 奏ちゃん、問題って何？」

立華「えつと、実は——」

ねえ銀時、常識って何？（銀時裏声）

それはね坂田、護らないといけないルールのことだよ。

立華「このプログラムでは、まだ一人しか女の人にできないの」

仲村「へー、じゃあ仕方ないわね……」

……ルールって、何？（銀時裏声）

★

仲村「というわけで、集まってもらった五人の猛者たちよ!!」

暗闇からスモークが焚かれ、そこに降り立つ五人の勇士たちを包み込む。

仲村「メンバー001はこの人、戦線の女教師! 坂田銀子ちゃん!」

「銀子です。とりあえずストパーの人は全員死刑♪」

仲村「メンバー002は彼女! 自称神、だけど今日からは銀子ちゃんの女神です!

直井文子ちゃん!!」

直井「愚民ども、首輪付けて散歩してあげるからボクと銀子さんの前にひれ伏しなさい……」

い……」

仲村「メンバー003はなんと! ちゃらんぼらんなあの人! 日向秀子ちゃん!!」

日向「えーやだちやらんぼらんとか秀子わかんない」

仲村「メンバー004! 一体誰得なんだ!?! 高・松子ちゃん!!」

高松「とりあえず脱ぎます」

仲村「最後のメンバー005は誰得シリーズ! てか誰も見たくなかった! 松下五

段子ちゃん!!」

松下「んもうやだわゆりっぺつたらん♪ 言いすぎよおいくら私が可愛いからってん

♪」

藤巻 「百鬼夜行か何かか？」

日向 「……うるせえヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!!!
ない……」

ヴエエエエもう俺お婿に行け

高松 「あ、秀子ちゃんが泣き出した」

日向 「ぐずつ……この際俺のことは置いてくにしても!! 何で松下五段と高松なんだよ!! 大山のがよっぽどそれっぽくなっただろーが!!」

大山 「くじで決まったんだからしようがないじゃないか。あーひやひやしたよー」

日向 「くじつてか見えない何かに操作された気分だぜ……これならまだ銀さんみたいに根っから女になるほうが百倍マジじゃねえか」

松下 「何言ってるのよん秀子! 私たちなら今回のトルネード行けるはずよ!! 自信もちなって!!」

日向 「その名で呼ぶな松下五段子!! 語呂わりいんだよ何でこんなオカマキャラ定着してんだよ!!」

野田 「うっ……なんか吐きたくなってきた」

高松 「それはいけない。私のこの立派なおっぱいに包まれて休まないと」

野田 「オボロツシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!
日向 「野田アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!」

椎名「あさはかなり……!!」

「あれ椎名怒ってない？ 何そのクナイ？ 何で松子と五段子のところに行くの？
ねえ」

直井「銀時先生おそろいですね!! これはボクと銀時さんが赤い糸で結ばれているこ
とを暗に示している証拠ではないでしょうか!」

飯にそうだとして、その糸は腐ったポロポロな糸だろうよ。

遊佐「……」

「……どうした、遊佐」

遊佐「いえ、あっちの有象無象を見て先生のせいで失った自信を取り戻そうとしてる
だけです」

「自信って、お前十分かわいーじゃねーか。失くさず持つとけ」

遊佐「……先生は私をレズにしたいんですか？」

「あれ？ キャッチボールが出来てないぞ？ 何明後日の方向にボール投げてるの？」

遊佐「多分気付いてないだけで、ストライクゾーンど真ん中の絶好球ですよ、それ」

仲村「はいオペレーションまで一時間切ってるわよ！ だべってないで準備しなさい
ー」

松下「せーの、行くわよん!!」

高松・直井「オオオオオオオオオオオオ!!!」

「おー」

日向「ホントにやんのかよ……」

★

『今日もライブ楽しみー』

『え? ガルデモじゃねーの?』

『なんか、別のアイドルグループだって』

『何だソレむっちゃテンションあがる!』

『オイ! 始まるぞ!』

「——いきます」

銀子・直井・日向・松下・高松「c r o w s o n g!!」

『』
『』

★——生徒会会議室——

立華「……目が見えなくなった人13名、気絶した人56名、行方不明になった人6

8名、ゴリラや筋肉に囲まれる幻覚を見てしまう人98名、その他あのライブによって被害にあった人395名……」

直井「それはひどいですね」

立華「……」

直井「……」

立華「あなたも主犯の一人よね？」

直井「さて、何のことやら」

おしまい

Happy new year

★―対天使用作戦本部―

仲村「みなさん、あけましておめでとうございまーす！」

「突然呼び出しというお前は一体誰に向かって挨拶してんだ久しぶりすぎて狂ったか」

現在この校長室には戦線の幹部連中に俺、さらにはガルデモの四人までもが集まっていた。

仲村「みんな、今日が何の日だかわかる？」

松下「む？ PCゲームの発売日か？ ついにこの、松下五段もとい護弾の活躍をk

isのみんなに見てもらえる日が来たようだな！ 決めるぜワシ!!」

日向「いや違うだろ。あーあれだ、あれ。フジツボ保護デーとかなんかそんなんだ」

大山「ええ!! そんな日があるの!?!」

竹山「いやそんな日は無いと思います。ちなみに今日はボクの誕生日だったりもします。このクライス」

高松「トレーニングの日ですね。この肉体に磨きをかけるには絶好の日です」

野田「はっ！ 何をバカなことを。こんなこと決まっている。ゆりつぺに捧ぐ愛の日、ゆりつぺlove, sデーだ!!」

直井「何を言っているその愚民。それを言うなら今日は銀時先生に捧ぐ愛の日、銀時先生love, sデーだろうが！」

藤巻「お前らのそれ毎日だろーが。あれか？ 8月9日でバクチの日か？ うつひよやりイひさ子今から麻雀だぜ！」

TK「Take it to the lucky」

ひさ子「お？ いいねえまたカモにしてもらいたいなんてさ。あんたらもどう？ たまには」

入江「い、いや。私はそんな、麻雀とかできないですし……あつ、大貧民くらいなら！」

関根「やるわけないじゃないですかー！ 昔無理矢理やらされて大負けしたんですから!! ひさ子先輩強すぎですよもう!!」

椎名「……あさはかなり」

遊佐「椎名さんは割と強そうですね、ギャンブル」

ユイ「常時ポーカーフェイスな先輩に言われてもですけどねー」

「オイイイイイイイイイイ!! 黙って聞いてりやアホなこと言いまくりやがつて

お前らに耳は無いのか!? その頭の横に着いているのは餃子か何かか!? ラー油をつけておいしくいただけるのか!? 開口一番言ってたろーが『おけましておめでとう』って！ お正月だよお正月!!」

「「あー」」

こいつら、マジで納得したツラしてやがる……

仲村「そう、今日はお正月……今年の初めよ」

遊佐さん、と一声かけ、仲村はいつものデスクに腰掛ける。

声をかけられた遊佐は、恐らく打ち合わせでもしていたんだろう、どこからか出してきた用紙を連中に渡す。

仲村「終わりよければすべてよしって言葉があるけど、でも、それでも始まりがグダグダだったら終わった時に報われないと私は思うの。終わった後に自分の行いを振り返ってのっけから黒歴史全開なんてもう最悪じゃない。私だったら穴がなければそこに作らせてでも入りに行くわ」

こいつは正月にいやな思いでもあるのか。

仲村「だから、この書類に正月にやるべきことをリストアップしてあるのよ。これをコンプリートすれば、今年2015年を楽しく過ごせるってわけ」

仲村「冬休みまったただ中のこの時期、一般生徒は家に引きこもって勉強だのゲームだ

のをしてるに違いないわ。そんな時、あえてこのオペレーションを行うことによつて、今年への活を入れるの」

日向「ゆりつぺにしちやー、粋な考えだな」

藤巻「おお、さすがゆりつぺだぜ！」

高松「ふつ、これからのこの肉体の発展を願ひ、とりくんでみましょうか」

なーんかやな予感がするんだけど……

仲村「じゃ、オペレーションOSHOGATHU、スタート!!」

★——初夢——

直井「さあ、今からお前は夢を見る。一富士二鷹三茄子……」

竹山「うぎやああああああああああ!! ク、クラクライストおおおおお……」

……」

野田「うごぼろつしやああああああ!! ゆりつぺゆりつぺゆりゆり……」

松下「ああああああああああ!! 天使ちゃん天使ちゃん天使ちゃん……」

「……どんな夢見てんだよ」

日向「うごおう……やめろ鷹よ! ふ、富士山に遭難してしまつたオレに唯一残つた

食料のナスをかつさらつていくのをやめてくれええええええええ……」

「悪夢じゃねーか!!」

★—初詣—

野田「ガラガラガラガラーン!!! 今年こそゆりっぺとイチヤイチャラブラブできますように!」

直井「ぺこり。からんからん。ちやりん。ぺこりぺこり。パン、パン! 今年こそ銀時先生とイチヤイチャラブラブできますように!! ぺこり」

『あの一、何で君らは私の前に五円玉持つて並んでるのかな? しかも口効果音かなりうるさいよね。私校長だよ?』

大山「いやー、なんか神主さんっぽかったからつい。あはは」

日向「主に頭とかが。ぶぶっ」

『ものすごい失礼だね君らは』

★—羽子板—

関根「いくよみゆきちー……うおらあ!!!」

入江「うひやあ!!」

関根「あつははーやったぜみゆきち今度はヒゲ書いてやるー」

入江「うああああやめてええええええ……」

ひさ子「今年も入江は大変そうだな」

ユイ「関根センパイは楽しそうですけどねー♪」

★—鏡餅—

日向「つってコレ鏡餅じゃなくて鏡餅の形をした黒ヒゲ危機一髪じゃねーか!!　そして
何でオレが黒ヒゲ役!?!」

「よこしよー」

日向「痛い!　痛いから先生ホントに刺さってるからこれ!!」

椎名「御免!」

日向「つってうおおいやめる椎名その数のクナイにやられちゃオレが文字通りの蜂の
巣にぎやあああああああ!!!」

★—こま回し—

野田「……フン!　勝負で俺に挑むとは……血迷ったか、TK!」

TK「Get you Little Kills!」

高松「では、行きます!　ベイブレードバトル!!　1、2、3!　ゴーシュー!!」

野田「行け!!　俺のドラグーンGギャラクシーターボT!!」

TK「Hurry Up!　今なら間に合う、Oh!　飛んでつって抱きしめてやれ

!　ドラシエルグラヴィティG!!」

日向「もはや違う競技になってるだろ!!」

★—人生ゲーム—

遊佐 「……結婚しました」

「そうかい、そりやよかつたな」

遊佐 「相手は誰でしょうか」

「いや知らねえけど」

仲村 「……子供が出来たわ」

「そりやおめでたいこつて」

仲村 「相手は誰かしら」

「いやだから知らねえけど」

「何？ 何でさつきから俺に聞くの？ 脱税がバレた俺へのあてつけかコラ」

関根 「ホントにぶちんだなー先生は。みゆきち入らなくていいの？」

入江 「しおりんが付けたインクが取れないの！」

関根 「あちゃー、なんかごめんね？」

★—蹴鞠—
けまり

松下 「よし！ 椎名、頼んだ！」

藤巻 「うし！ 椎名次こつちに——つててめえ止めてんじやねーよ!! 何でつま先で
毬を持てるんだよ何だその無駄な集中力!？」

大山「椎名さんはギルド降下作戦以来、銀時先生に勝つために日々集中力を鍛えてきたからね。日に日に指先に増える箒やハサミを見ると少しドキドキしたよ!」

藤巻「アホだな」

椎名「あさはかなり」

★—凧揚げ—

「……で、何であんたはつり竿なんか持つてるの?」

フィッシュ斎藤「勿論、二代目川の主を釣り上げて、凧の材料にするためさ!」

日向「うおおすげえぜフィッシュ斎藤!! おい野郎ども手伝いやがれ!」

「「おう!!」」

「テメーはどこか遠くの学校で筋肉バカと剣道バカと普通のバカとネコバカつれて野球でもしてろ」

★

「……はあ、やっと終わった」

開始から数時間、暗くなってきた運動場に突っ伏す俺。

仲村「いやいや、まだ一番大事なのが残ってるわよ、忘れたの?」

「あ? もう何もねーだろーが」

朝渡された用紙をひらつかせながら、なんだが目をギラつかせている連中に言う。

日向「いやいや銀さん、まだ残ってるぜ」

藤巻「そうだぜ、とぼけんよ」

直井「まだあるじゃないですか」

大山「大人から子供への」

「「お年玉が!!」」

「はあああああああああああ!!　ぎっけんな腐れガキどもテメーらにあげる玉なんざあるわけねーだろ自分の○○○○でもしやぶってる!!」

仲村「そー言わずにーねー?　銀時センセ♪」

ひさ子「甲斐性の見せどころだぜ?　先生」

「甲斐性?　何ソレ食えるの?」

関根「銀ちゃん先生ごんだけお年玉あげたくないんですかー!　いーじゃないすかケチー!」

入江「し、しおりんってばー!」

椎名「なら、腕づくで!」

「おおよつたらあ俺を倒してお年玉を奪ってみせろ!!」

仲村「よつし約束よ?　かかりなさいみんなー!!」

「うおおおおお!!」
「だらっしやあああああああ!!!」



地面に転がる戦線の男連中と、膝をつく俺。

日向「ホントに、全員、倒しやがった……ふっ」

藤巻「どんだけケチなんだよこのおっさん……」

仲村「どう? 楽しかった?」

「てめー後でたたっ切ってやるから覚悟しとけよ……」

仲村「2015年は楽しい年になりそうね」

シカトかよ……

でも、まあ。そうだな。

「こんなうるせえ連中との一年なら、また満足せずに済みそうだな」

仲村 「ふふっ、今年もよろしくね、銀さん」

「おう、あけおめことよろめりくりな、仲村」

仲村 「……めりくりは要るの？」

おしまい

立華 「……そもそもこんな世界にお正月なんてあるのかしら」

「シッ!!」

おしまい!!

E P I S O D E . 1 D e p a r t u r e

第一訓

— あれ、空が真つ黒だ

— あれ、真つ黒なのは俺じゃねーか

— あれ、なんか前にもこんなことなかったけ

— あれ、っていうか「真つ黒なのは俺」ってどういう状態なんだっけ

— あれ、ちよつと待て、俺……

「……！ ……きて下さい。起きて下さい！」

— 誰だコノヤロー、こちとら折角気持ちよく寝てるトコなのに。

「……んだよチクシヨ、母ちゃん今日は日曜だろ？ もうちよい寝かせてZZZZ」

「日曜じゃないし私は母ちゃんじゃありません！ 起きて下さい坂田先生！ 初授業で

寝坊なんて感心できませんよ！」

……あ？

「……おいアンタ。今、何て？」

「だから……坂田先生、仕事です」

………あー、先生ね。うん、……

「はあああああああああああああああああああああ!?!」

★

「……いい? 今回のオペレーション”ファインドオブトゥルー”の目的はさつき説明したとおり、NPCに紛れてる私達と同じ『人間』を見つけて戦線に引き入れることよ」
一人の少女が3, 4人の少年に向かって柔らかな口調で説明する。流れるような紫の髪や、華奢で可憐な身体からは想像もつかないほどに、彼女の瞳からは強い意志が感じられる。

「うっわオペレーション名ダッセ」

その少女を取り巻く少年の一人——日向秀樹はそう呟く。

「なんか言ったか?」

「いえ何も」

「そ。ならいいわ。今回のオペレーションは”消える”可能性が大きい危険な任務よ。健闘を祈るわ。日向くん、大山くん、高松くん」

「ええええ!!? 僕そんなこと聞いてないよ!?!」

大山と呼ばれたその少年は突如突きつけられた事実には驚きを隠せない様子で叫んで

いる。

「ふっ……この筋肉にかかれれば消されるなどありえないことですよ」

高松と呼ばれた少年は冷静沈着といった様子で眼鏡を上には押し上げる。

——なぜか上半身裸のまま。

「……まあ、消えねえようにうまくやるさ」

「そう……じゃ、オペレーション、スタート!」

高らかにそう言い、少女——仲村ゆりの戦いは今日も始まる。

★

「……とは言ったものの、授業に参加するだけじゃNPCとそれに紛れてる人間の区別なんかつかねえぜ? ゆりっぺ」

仲村ゆりは、ゆりっぺと言われて少しだけ顔をしかめるもすぐに日向の質問に答ええてみせる。

「わかってるわよそんなこと。授業中になんか期待してないわ」

「? じゃあ一体何に期待してるの? ゆりっぺ」

「そりゃあ——」

『うい席に着けー』

そこまで言ったところで、先生の声が響き渡る。その声で会話は一時中断。とりあえ

ずは先生の声に耳を傾ける。

『今日からこのクラスの現国を担当する新任の先生を紹介する。入ってください』
(新任の教師？ 今までにそんなことあったかしら……)

教室に入ってきたのは……死んだ魚の目をした、無気力な銀髪の天然パーマな男であつた。

『じゃあ先生、あとはよろしくお願いします』

「へいへい……」

自分の尻を掻きながらだるそうにそう答える教師。

(そりゃあ、こういう——ミラクル……とか)

「あー今日からテメーらの現国を担当することになった——」

「——坂田銀時だ」

★

「なにか質問は？」

その一言に教室中が凍りつく。なぜならその男は……どこから質問していいのか分

からなくらいつつこみ所が満載だったからだ。

『……はい』

クラスの一人が手を挙げる。その瞬間目の前のだるそうにしている先生はめんどくさそうに顔を歪める。

『あの……なんでタバコ吸ってるんですか？』

「あー？ これはタバコじゃねえ。レロレロキャンデーだ」

『普通レロレロキャンデーから煙はでないんじゃない？……？』

「それはな、ものすごくレロレロしてるからだ」

『……』

「他に質問は？」

もう誰も彼に質問しようという気になるものはいなかった。今の間答で彼がとても非常識だということに早くも気が付き始めたのだろう。

「じゃあ授業始めるぞ。そこのお前、おい」

『えっ!? 自分ですか？』

完全に不意打ちだったらしく、指をさされた生徒は激しく戸惑っている。

「そうお前。教科書の31ページから読んでみる」

『は、はい！ えっと……「彼は困惑した。なぜなら、今の正一のセリフは」……』

「あーあー違う違う！ どこ読んでんだテメー。教科書31ページだっつてんだろ。ナムチャが殺されるとこ」

『え？ ナムチャ？ いやっつか教科書って先生の持つてるそれ……』

その言葉で教室の視線が先生の手元を集まる。

『ジャンプ……ですよね』

「ああ？ もしかして持つてねえの？ しゃーねーな、隣のヤツに見せてもらえ」

『いやいや、だから教科書もなにも……それジャンプだろうがアアアアアアアア!!』

激昂した生徒なんか知らんとはかりにハナクソをほじくる先生に向かって、その生徒は不満をどんどんぶつけていく。

『誰も持つてねえよ！ だってそれジャンプだもの！』

「ギヤーギヤーギヤーギヤーやかましい、中二の男子かお前は」

『うるせえよ！ 高二だ俺は!! 大体、現国の授業でジャンプ使うって聞いたことねえ

よ！』

「少年の教科書だろうが。友情・努力・勝利。俺たちはそれを学んで大人になっていくんだよ」

ボリボリと頭を掻き、説教をたれるように一言。

「教科書ももってねーで授業受けるなんて非常識にもほどがあんだろーが」

この瞬間、教室の空気を言葉で表すと『お前が言うな！』というカンジになっていたことだろう。

「あーあーもういいよ。持っていないヤツ全員、今から購買行って買って来い。あ、ついでにいちご牛乳とコロツケパンもヨロシク」

どうやらこの教師、どこまでも本気で言っているようだ。

生徒全員、渋々といった面持ちで財布片手に教室を出て行く。

——ただ数人を除いて。

「……あ？ オメーらはジャンプ持ってるの？ えらいねー」

「あなた遂にジャンプって言ったわね……あなたにいくつか質問があるの」

教室の端で談笑してる連中を残して、とても真剣な表情で先生に近寄る少女。だがその顔は——なにか、面白いものに惹かれる感情を押し殺しているようにも見えた。

「あなた、『人間』？」

唐突にわけの分らない質問を飛ばす生徒に、露骨に顔をしかめる先生。

「おいおいガチの中二か？ やめとけて。後になって後悔するよ？ 絶対」

「そんなんじゃないわよ！ もういい。質問を変えるわ……あなた、いつこの世界に来たの？」

「……………」

「心当たりがあるようね。戸惑うのも無理ないわ」

「……………」

「…………？」

この世界に来て戸惑うのも無理はない。が、これは流石に戸惑いすぎじゃないか？

そう、少女に思わせるほどに、彼は言葉を失い、うつむいていた。

「…………zzz」

「つて寝てんのかよー！」

「ちよ……マジ勘弁。昨日ぜんぜん寝てねーの、もう実質二時間くらいしか寝てないの」「あなた……この状況なのに随分と余裕なのね？」

頬を引きつらせながら少女は問う。

「あん？　こちとら女になつたり他のジャンプ作品に殴り込んだり主人公の座奪われたりとかしてきてんだよ。今更こんんで動じるか」

「……もういいわ、日向くん、大山くん、高松くん」

「へい」

「な、何？」

「何でしようか」

「任意同行よ、連れて行きなさい」

「オイオイちよつと待て！　任意同行って何!?　あれほとんど人攫いだからね!?　俺をどこに連れて行くつもあばばばばばばばばばばば」

次の瞬間、教師の身体が床に突っ伏した。

「たりりらつたらー！　特製スタンガン。コレでもう憎まれ口叩けないわね」

「ゆりっぺいいのかよ、一応教師だぞ!」

「かまわないわ。多分コイツ『人間』だもの」

「!?　……聞いたことねえぞそんなの」

「私もよ。それは直接コイツから聞くしかなさそうね……それより、早く作戦本部に連れてくわよ！　頑張れ男の子！」

「結局俺たちが運ぶのかよ!？」

★

……………あれ？ 俺どうなったんだっけか。確かあの非常識な女に気絶させられて

「——やあこれはどうだ？ 『死ぬのはお前だ戦線』」

「私が殺されるみたいじゃない!」

「いや、勿論相手はあの女だ」

「んだ？ 最近眠らされてばっか……」

「じゃあこつち見なさいよ。…… 『死ぬのはお前だ戦線』」

「うっ！ やべえ、確かに俺が殺されそうだわあ……」

「他には？ 何か案は無いの？」

「……………ああ？」

何してんだこいつら。

「これかっこよくな？ 『走馬灯戦線』！」

「それ死ぬ寸前じゃない」

「じゃあこれでどうだ？ 『決死隊戦線』」

「死ぬのを覚悟してるじゃない！」

「『絶体絶命戦線』」

「絶体絶命じゃない!!」

「じゃあ『無敵艦隊』！」

「今度は戦線じゃなくなってる……」

「玉碎戦隊……」

「殴るわよ？」

「ライト兄弟！」

「大喜利か!!」

一体なんの話し合いかはわからねえ。ただ、なぜかこいつらからはヅラと同じ匂いがある。もう嫌なくらい匂ってくる。関わりたくねえ……

「もう……最後は戦線なのよ！ これは譲れないわ！ 私たちはこの戦場の第一線にいるのよ？ もっとマシな案は無いの？」

「ねえ、その人もう起きてるんじゃない？」

「え？ ああ！ 気がついた？」

「——見たトコ校長室みてえだが……お前らここで一体なんの話し合ってるの？ 三十字以内で簡潔に述べよ」

『『死んでたまるか戦線』に変わる新しい部隊名を考えてるのよ！』

「意味がわからんしわかりたくもない」

「あなたも何かない？ 一応教師でしょ？」

『『通り魔戦線』』

「あなた一体私たちを何だと思ってるの……」

少なくとも何も知らないヤツにスタンガンあてるような奴らは通り魔とっていいと思うぞ俺は。

「通り魔とは言ってくれるじゃねえか……」

「うるせえよ『死ぬのはお前だ戦線』」

「何聞いてんだお前なんか恥ずかしいだろうが！」

「つたくどいつもこいつも中二病発病しやがってよ。先生として言うぞ？ 恥ずかしい

から止めときなさい」

「……あなた、この世界のことほんとに何もわかってないのね」

……

「いいわ。教えてあげる。私たち……あ……えと、今なんだっけ？」

「『死ぬのはお前だ通り魔戦セグボア!』」

「元に戻すわ! 我らが『死んだ世界戦線』は、ずっとこの世界である敵と戦ってるの!」

「この——死んだ後の世界、その最前線でね!」

第二訓

——なんでこんなことになってんだか……

★

「——……死後の世界？　おいおい中二にもほどがあるぜ冗談だといつてくれよ3000円あげるからお願いだからホントにマジで頼むからアアアアアアアアアアアアアア!!」

「全部本当よ、私たちがこの世界で何年生きてると思ってるの?」

「ウソだろ！　俺まだ死んでねえよ!」

「……記憶喪失の類ね」

あ？　なんだそれ。

「よくあるのよ、死因が事故とかだったらね。事故による強いショックで生前の記憶がスコーンと抜けちゃうの」

いや、生前の記憶は覚えてるんだが……

「とにかく！　あなた、このままだと消されるわよ」

「ああ!?　もうこれ以上何も言うなよ！　こちとら急な展開についていけてねえんだよ!!」

「はあ……順応性を高めなさい。あるがままを受け止めるの。っていうかあなたこんなには慣れっこなんじゃなかったの？」

「このアマ……」

「……消されるってなんだ。誰に消されるんだ？ お前らは何と戦ってるってんだ」

「……天使よ」

「……はい？」

「消されるということはつまり、成仏するということ。今の肉体は消滅し、魂は浄化され、別の生き物に宿っていくわ」

「えーっとつまり……何だ？」

「次はフジツボかもしれん、ヤドカリかもしれん。フナムシであるかもしれん、ということだ」

「……マジかよ。」

「なぜ浜辺に集中しているのかとつつこむ余裕もなさそうな顔ですね……ちなみに意味なんてありませんよ」

「……コイツこの中で一番ウザいな。もしかしてツラの生まれ変わりか？ なんか無性に殴りたい。」

「そして！ 私たち『人間』を消そうとしている戦線の敵、それが天使なの」

天使ってまた……

「……俺はどうすればいい？」

「さつきも言ったじゃない。順応性を高めなさい。そしてあるがままを受け止めなさい」

「それで？」

「戦うのよ、私たちと共にね」

……はあ。

どのみちこの世界は知らないことだらけなんだ、そんな状況で外歩いてたらその“天使”ってのにすぐ消されちまうだろうよ。

「……わーったよ」

「早まるな！ ゆりつつぶぐふあああああつあああ……」

……

「……なんかすごい勢いでバカが現れてハンマーみたいなので飛ばされていったんだが？」

「アホだ……」

「自分の仕掛けた罠にはまってやがる……」

ってかホントお前ら校長室で何してんの？ 戦争ごっこ？

「ああ、言い忘れてたけどここに無事に入るには合言葉が必要なよ。対天使用の作戦本部というわけ」

このガキ共……俺が先生なの忘れてない？

「ちなみにここ以外に安全な場所なんてありませんから」

っ……マジでこのアマ……

「んー？」

……はあ。

「……合言葉は？」

「——『神も仏も、天使もナシ』よ。よろしく、新人さん」

今日は厄日だわ、いやホント。

ゆり「ああ自己紹介が遅れたわ。私はゆり。この戦線のリーダーよ」

まあそれはなんとなく見ててわかるが。

ゆり「んで、彼は日向くん。あなたと同じちやらんぼらんだけど、やるときはたまにやるわ」

日向「ああ、よろし……ってフォローになつてないぜ!？」

おいおい俺はこんなのと一緒の扱いなの？

ゆり「彼は松下くん。柔道五段だからみんなは敬意を持って、松下五段と呼ぶわ」
松下「よろしくな」

なんかロリコンそうだ、勘だけど。

ゆり「彼は大山くん、特徴がないのが特徴よ」

……ひどい言われようだな。

大山「えへへ……ようこそ、戦線へ」

TK「Come On Let's Dance！」

「え!? 何!? 誰この人!？」

ゆり「この人なりの挨拶よ。みんなTKと呼んでるわ。本名は誰も知らない、謎の男
よ」

……そんなヤツが仲間でもいいのかよ? どーなってるのこの戦線?

ゆり「眼鏡をいちいち持ち上げて知的に話すのは高松くん。ホントは馬鹿よ」
初対面で見抜いたけどな。

高松「よろしく」

ゆり「あと、彼が藤巻くん」

藤巻「藤巻だ坊主」

新八みてー……あーつと……出番、多いといいな。

ゆり「んで、さつき飛んでいったのが野田くん」

「あーあの馬鹿ね」

ゆり「そうそうその馬鹿よ。あと、その影で『あさはかなり』って言い続けているのは椎名さんで、こつちに座ってるのは岩沢さん。陽動部隊のリーダーよ」

椎名「……」

岩沢「……」

なんてーか……からみずらい。ただただ。

ゆり「あと、ここにいないだけで戦線のメンバーは何十人と校内に潜伏してるわ」

こんなのはまだ何十人も……

「やっぱり抜けていい?」

ゆり「駄目よ」

藤巻「なんでだよゆりっぺ!? そんな天然パーマいてもいなくても戦力にならねえぜ」

「あ? んだ新八やんのか」

ゆり「やめなさい……藤巻くんもだけど、みんなにもこの人の説明が必要みたいね。自己紹介して」

「……ちつ。坂田銀時。ここじゃ教師やってる」

一同「……!!」

ん? 何? 臭った? 確かにこの服昨日からつけてるっぽいけどさそんなに強烈?

大山「その人……本当に『人間』なの?」

ゆり「ええそうよ。よく考えなさい。あなたより特徴ありまくりじゃない。死んだ目に天然パーマ、銀髪」

「……?」

ゆり「ともかく、あなたはしばらく隣においておきたいの。オペレーションは今日からスタートよ。頑張れ新人!」

「はあ!? オペレーションって何だよ聞いてねえぞ!!」

★

——つてなわけで今は屋上で絶賛たそがれ中なわけだが……

ゆり「……?」

なんでコイツいんの?

「あー……でかい学校だな、つてか、あのグラウンドで部活してる連中は勧誘しないのか?」

ゆり「え? あああいつらは人間じゃないから」

「んあ？」

ゆり「だから、人じゃないの。彼らは。私たちはNPCって呼んでるわ」

「最新型のパソコンか？　ウチにそんなもん買える余裕はありません」

ゆり「違うわよ。ノンプレイヤーキャラクター、略してNPC。一応人間みたいなのだけど、中身は無個性でまるで人形みたいなの」

「はーん」

ゆり「そして、NPCは歳をとらないし死なない。これは私たちも同じね。私たちはもう死んでるからこの世界では絶対に死なない」

「へー……」

ゆり「でね？　ここが少し面白いところなんだけど……普通教師も全員、NPCのはずなのよ。これが私たちが驚いた理由」

「……………」

ゆり「あなたは、この世界で始めて先生として来た人間なのよ」

「それで？　その意味するところは？」

ゆり「まだなんとも言えないわ。だからこうしてあなたの隣にいるんじゃないの」

「……………お前らの目的は？　こんな戦線まで作って、お前らは一体なにがしたいんだ？」

天使を消したあとお前らはどうするんだ」

ゆり「……私たちが生きてきた世界では、人の死は無差別に、無作為に訪れるものだった。だから抗いようもなかった。でもこの世界は違う。天使にさえ抵抗すれば存在し続けられる、抗えるのよ！」

「……そして？」

ゆり「私たちの目的は、天使を消し去り、この世界を手に入れること！」

「……………」

ゆり「……何も言わないのね」

「スケールがでかすぎてな」

ゆり「……まあいいわ。さっきも言ったけど、今日の……あと十数分くらいでオペレーション開始よ。しやきつとしなさい」

「へいへい……………」

ゆり「期待してるわよ」

なんでそんなにノリノリなのかね……

★

ついさつきから、俺にとって初めてのオペレーションとやらが開始された。

俺の任務は天使の迎撃……オペレーションの目的は、一般生徒から食券を巻き上げ

る、だったかな。あいつらほんとに停学にしてやろうか。

……かれこれ二十分もここにいるが、天使らしいヤツもみあたらねえ。楽なところって言うてたが……ってか当然のように銃渡されたんだが、マジ天使ってどんなヤツ？

確か……女、銀髪、小柄で——

「……………ここで何をしてるの？」

「——金色の瞳、だったかな」

★

「……………よお、お前が天使か？」

「私は………天使なんかじゃないわ」

「じゃああそこに何しに行くんだい？」

俺は今現在陽動部隊とやらがライブをやっているところを指差す。

「ライブを止めに行くの」

「そうか——じゃあ、ここは通せねえな」

「……………なんで？ あなたは先生でしょう？ 校則は守らないと」

わかっててタメ口だったのかなめやがって。

「あのなあ………お前、天使じゃなきやあ名前なんてーんだ」

立華「……………立華。立華、奏」

「あのなあ立華。どんなヤンキーでもな？ 人間には味方が必要なんだよ。お前は校則を守る側の味方。俺は校則を犯す側の味方だ」

立華「……………」

「知ってるか？ こんなときの対処法」

「どつちかが折れるまで…………自分の正義貫くしかねえんだよ」

★

立華「正義…………」

「そうだ。あいつら止めたいんなら、俺を殺して行けよ。どうせこの世界じゃ死なないんだろ？」

立華「…………じゃあ、お言葉に甘えて」

立華「——Guard skill:Hand sonic」

…………え…………ナニ？ その手の刃物。

「つ！ ちよつと待て！ 話し合おうぜ？ 一旦」

立華「あなたが『俺を殺して行け』って言ったんじゃない」

「いやあれは雰囲気というかノリというかだな！」

おい冗談だろマイク!? ステファニーったら突然手から刃物生やしやがったぜ

キヤツホウ!

立華「……っ!」

うおおマジかマジで来やがったアアアア!

「っそ……んのヤローが!」

俺は立華に銃を向け——ただけどあれえ? おつかしいなあ銃ってこんなカタチしてたかなあ? まるで切られてるみたいだけどあれえ?

立華「……………」

……アイツの足元に落ちてるのって……あきらかにこの銃の破片……だよな?

「つやべえ! 死んでたまるかよ!」

俺は他の連中がいるところに全速力で向かう。

立華「……………」

あの、無言で追いかけてくるの止めてくれませんか進撃の天使ですかお願いだから助けて梶くうううううううううう!!

「どこが楽なトコだあの女!? 俺狙い撃ちされてんじゃん! スナイピングされてんじゃんテンシ13じゃんんんんん!」

つてか他のヤツらどこ行つた!? マジで洒落になつてないぜこんなの!!

立華「……………」

くっそ……ここまでかよ……っ!

立華「——っ!」

!? 立華が飛んできた何かを弾いた? あれは……あの馬鹿が持ってたハルバートか!!

馬k野田「ちっ! はずしたか」

日向「待たせたな!」

「お前は……ヒュウガ!」

日向「ヒナタです!!」

TK「gじゃそf g j わ」

え? ナニもう一回言つて?

藤巻「一番よえートコ狙われたんじゃねーのか!」

大山「まだハンドソニックだけだよ!」

日向「広い場所へ!」

松下「後退しながら多重攻撃!」

高松「了解」

こいつら……

日向「いくぞ……!」

日向「打てっ!!」

立華「――Guard skill:Distortion」
……!! 銃弾が曲がってる!?! ホントにバケモンかよ野郎!

日向「……っ! 遅かったか!」

野田「ちっ! これだから銃は!」

椎名「……ふっ!!」

立華に向けてクナイが飛んでいく。アイツ忍者か!?

立華「………っ」

あさはかなりが飛ばしたクナイをいともたやすく……

日向「まずい、突破されるぞ、踏ん張れ!」

くっそ……せめて獲物さえありやあ……

半歩後ずさりした俺のかかとに、何かがあたって。んだコレ。

……!?

藤巻「もう……これ以上はっ……!!」

「おい、お前から全員下がってろ」

日向「っはあ!?! 無理だ新入り! 天使は強すぎる!」

「いやいや、ヒーローは遅れてやってくるものってね」

俺は天使の前に歩き出す。

大山「危ないよ先生!! そんな木刀……ひとつで!

藤巻「へっ! 死に急ぎやがった」

椎名「……………」

そんな俺に天使は容赦ない一振りを浴びせる。

立華「——!!」

「——っっ!」

松下「…………? —— なっ!」

「…………ふう、あぶねえ」

日向「!? 天使の攻撃を、防いだ…………!」

「さあ…………お前ら、反撃開始だ」

★

さつきから俺の前でありえないことが起きている。

昨日この世界に来たばかりの新入りが…………天使と互角に戦ってるんだ。

天使「——」

新入り「——」

俺らには見えないほどの攻防。相手は俺らが数十人がかりでやっと足止めが効くバケモノだぞ?! 何者なんだよコイツ!?

そんな俺たちの上から、白い……紙、いや食券が降ってきた。
作戦成功だ!

「オイ新入り! 時間稼ぎ終了だ退くぞ!」

新入り「へーい……つと!!」

新入りが天使を思いっきり吹き飛ばし、その隙にこつちに戻ってくる。

新入り「んで何? これ適当に取りやあいいの?」

藤巻「あ、ああ……」

しんじらんねえ、あの天使相手に互角以上だなんて……!!

「アಂತ……何者だよ? 本当に」

思わずこぼれた質問。それは、多分今ここにいる戦線のみんなが感じていることだろう。

新入り「んあ? 決まってるだろーがヒユウガヒナタくん」

「ヒナタひできです!」

決まってるって……?」

新入り「——先生だよ、お前らの」

「…………いや！　そういうことじゃ」

新入り「あーうるせーよもう！　ハラ減ってんだこちとら。あと……」

新入り「俺のことは社長と呼べ」

E P I S O D E . 2 G u i l d

第三訓

ゆり「高松くん、報告お願い」

高松「はい。武器庫からの報告によると、弾薬の備蓄がそろそろ尽きるそうです。次一戦交える前には、補充しておく必要があります」

大山「新入りも入ったことだし、新しい銃もいるんじゃないの」
「いや俺銃使うつもりないけど」

日向「はあ!? あんな変な木刀でこの先戦つてくつもりかよ? 無理はいわねえ、飛び道具も使い慣らしといたほうがいいぜ」

「いや慣らすも何も立ば……天使に銃効かなかったじゃねえか」

日向「そりゃあそうだが……」

ゆり「はい静かに! どの道銃や他の武器が無くなったら私たちが天使と渡り合うこともできなくなるんだから!」

……

ゆり「そんなわけで、本日のオペレーションは『ギルド降下作戦』といきましょう!」

降下……………

日向「ああちなみに、空からじゃなくてここから地下に降下な」

「!? だ、だよなー! そうそうもうふざけてんじゃねえよー勘違いするヤツの気が知れねえぜなあヒユウガネジくん?」

日向「ヒナタだつつつてんだろうがいい加減覚えようぜ!」

「いやだつて、そつちのがカツコよさそうじゃん天使に向かつて『ヒデキ六十四掌!!』とかできそうじゃん?」

日向「どこの忍だよ白眼とか使えねえよ!」

「いやでも回天くらいならできるつて絶対!」

日向「つ……………そうか?」

「出来る出来る! 自身持つてヒナタくん!」

日向「じゃあ、やってみるぜ…………? いくぞ! 『ヒデキ掌回天』!!! くつはああああああああああ!!」

「ところでさ仲村、地下つて何だ?」

日向「つてスルーすんなよおおお!!」

いやだつて本気ですとは思わないじゃん? 正直引いたぞ。

ゆり「私たちはギルドと呼んでる、地下の奥深くよ。そこには、武器製造のスペシャ

リスト達がそろってるわ」

「はーん、そこでやつこさんに見つからないようにシコシコ武器作ってたってわけね」

ゆり「そういうこと。ギルドを押しえられたら、武器支援がなくなり私たちに勝ち目はなくなるわ」

ちよつと待つて、と言いい仲村がどこかに電話？ をかける。つてかそんなもんどつから持つてきてんの？

『へーい』

ゆり「私だ。今夜そちらに向かう。トラップの解除を頼む」

『了解！ 今晚だな、待つてるぜい！』

ゆり「……よし。今回はこのメンバーで行きましょう」

「すみませんボクそろばん塾あるんで抜けていいですか？」

ゆり「来ないと五ヶ月断食と強制労働」

「おいおめーらあああああ!! それでも銀魂ついてんのかあ!!」

藤巻「突然何言ってるんだこのオッサン」

高松「さあ、意味不明ですね」

藤巻「いや常時上半身裸のお前が言えることか？」

大山「あれ？ ねえ野田君はいいの？」

「つてかそもそもどこにいるんだあの馬鹿は」

日向「あの馬鹿はどうせまた単独行動してんだろ」

TK「Right. Let's go.

「あ、シメはお前なんだ？」

★

——えーと……ここは体育館か。柔道のヤツと数人が舞台の下の椅子が入ってる引き出し引つ張ってるが、何するつもりだ？

またあのバカ女が『オペレーション・スタイルオンチエアーよ！』とか言ってるイス取りゲーム始めイッテエエ!!

ゆり「なんか今失礼なこと考えてたでしょ」

「考えてねえよ！俺はただ『こんなところに隠し扉なんてゆり様はホントに天才なんだなあ』って思ってただけだ！」

ゆり「それこそ絶対にウソじゃない！殴るわよ!？」

「殴ったあとに言うな！お前はアレか、脊髄反射でしか動けないのか！ちつとは脳使えこの単細胞女！」

ゆり「はあ？めっちゃ脳使ってるんですけど？こつちだつてこの先二十くらいのおペレーションの予定たててそれ全部記憶してるんですけど？あなたこそ脳みそ

使っていないんじゃないの!? だからそんな曲がりくねった頭になったのよ少しは脳みそ使いなさいよ!」

「んだとお前なんか天然パーマの苦しみがわかるかあああああ!! 『天パ 苦し』ってググったら『天パだから自殺する』って出てきたヤツの痛みがわかるかああああ!!」

ゆり「そんなこと知らないわよ!! 人はね、コンプレックスをバネにより高みを——」
 大山「ねえいいの? ゆりっぺたち置いてって」

藤巻「すぐ追いつくだろ。さっさと行くぞ」

★

ゆり「あなたのせいで置いてけぼり食らったじゃない!」

「全部俺のせいかわしわかった表でろや」

ゆり「わっ!! 上見ないですよ! スカートの中見えちゃうじゃない! 私から先に下りとかげよかった……」

「誰がテメーのパンツなんか見たいかよ」

ゆり「何だど!? コレでも生前は結構モテたんだぞ!」

「死んだヤツが生前の自慢すんな……っておい、なんか下の様子がおかしいぞ」

ゆり「……? おーい!! 日向くん!」

日向「あ！ ゆりっぺ遅いぜ何やって……つてそんなのは後だ！ とにかくこっちへ
！ ほらアンタも！」

何だ？ ……!?

野田「だったもの」

ゆり「ここで何があつたの？」

日向「ああ、それは——」

★

大山「ギルドに入るのも久しぶりだね」

松下「暗いな……」

藤巻「おい！ 誰かいるぜ……！」

一同『一体何が……!?!』

野田「——ふっ……！」

日向「うわあ……馬鹿がいた」

野田「ゆりっぺはどこだ？ いないのか？」

日向「わざわざこんな所で待ち構えてる意味がわかんないよな」

大山「野田君は、シチュエーションを重要視するみたいだよ」

野田「質問に答えろ!!」

大山「ゆりっぺならまだ上であの新入りの先生と話してたよ?」

野田「なっ!! あの教師……ひやっぺん殺してくる!」

藤巻「あーもーややこしいからお前もうどこにも行くなよ!」

野田「うるさい! ゆりっぴぐふああああああええあああつああああ!!」

いーっもひーとーりーでーあーるいーてーたー♪

★

日向「……というわけだ」

「いやただの末期患者じゃねえかあああああああ! 中二という名のオオオオオ

!!」

ゆり「それより……そのさつき流れてたって歌な」

日向「ゆり」

ゆり「え? ああ大丈夫、私は正常よ?」

あ、お前もそれ思った? まあメタになるから触れないでおくが。

ゆり「野田くんは何で——って聞くまでもないか」

仲村は目の前にぶら下がってるハンマーのトラップみたいのに目を向けながら話す。

こいつは何だ、ハンマーに何か縁でもあるのか?

「こんなところにもトラップ仕掛けられてんのか?」

日向「見ての通りだ。ギルドへの道のりには対天使用の即死トラップがいくつも仕掛けてある。その全てが今も稼働中というわけさ」

「昨日解除したんじゃねーのかよ」

大山「トラップの解除忘れかな?」

藤巻「まさか俺達を全滅させる気かよ!」

ゆり「いいえ。ギルドの独断でトラップが再起動されたのよ」

松下「何故!」

ゆり「答えは一つしかない。——天使が現れたのよ」

この答えにみなが戦慄する。まあ目の前で一人死んだからな……

松下「この中にか……!?!」

TK「Just round them」

椎名「不覚……」

「俺たちは何があっても死なない。それだったら俺たちごと天使をトラップで撃退しよう、ってか」

高松「……なかなか分かってるようですね。どうですか? この高松と一緒に頭脳班でも」

「黙れ頭脳ババロア班」

ゆり「ギルドの所在がばれ陥落すれば、銃弾の補充も壊れた武器の修繕もきかなくなるわ。そんな状態ではまともに天使と戦うなんてできない。ギルドの判断は正しいか」

日向「天使を追うか？」

藤巻「トラップが解除されてねえ中をかよ！」

「あの天使がこんなバカ正直なトラップでくたばるとは思えねえ」

ゆり「そうね。トラップは悪魔で一時的な足止めに過ぎない。追うわ、進軍よ！」

★—ギルド連絡通路 B3—

「なあ、他にはどんなトラップがあるんだ？」

日向「いろんなのが有るぜえ？ 楽しみにしてな」

「いや言ってくれないと対策が立てられ」

椎名「——ッ！ まずい、来るぞ!!」

「ほらだから言つたじゃんんん!! ……あれ？ 何だよ何も起きねえじゃ」

岩『ゴロゴロゴロゴロゴゴロゴ……!!』

「ぬああああ期待させやがってええええええ!!」

藤巻「げっ！」

日向「ああ悪い悪い……くっつぶ！ あんたみたいなの会ったの初めてでさーおもしろいなってよ」

だからってそんな笑うかね……？

日向「俺あんたみたいなの……好きだぜ？」

「コレ^{ホモ}なのか？」

日向「ちげえよ!!」

★—ギルド連絡通路 B 6—

ゆり「開く？」

藤巻「もう少しだ」

ってかココ暗いな……なんか、ココ前にも見たような……

そんなことを考えてた瞬間、入ってきた扉が突然閉まりやがった!

大山「ああしまった忘れてたよ! ここは閉じ込められるトラップだった!」

「そんな大事なことを忘れるなよ! バカなの? バカなの!」

椎名「あさはかなり」

なんでコイツこんな冷静にあさはかなりってんの!? ……明かりがついた——って

ことは多分この後待ってんのは……!!

ゆり「ここからヤバイのが来るわよ!」

藤巻 「よけろ！」

ゆり 「しやがんで！」

ほらやっぱりこれレーザーじゃんんんんんん！ バイオー見たもん！ 楽しかったもん！ 3は覚えてないけどオオオオオオ！！

仰向けになって迫ってくるレーザーをかるうじてよける。

「あれ今髪ちよつと切れた!? おい誰か見てくれ俺の頭どうなってる？」
椎名 「あさはか……ではない!？」

「おいあさはかではないってどういう状態!? どうなってるんの俺の頭!？」

藤巻 「うるせえ！ 第二射来るぞ！」

第二射は……二重線か！ このままで避けれるよかった！

藤巻 「第三射来るぞ!!」

オイオイ一息つく暇もないってか!?

ゆり 「第三射なんだっけ!？」

あれ、この展開まさか……

藤巻 「エックスだ！」

うわきたよ最強の刺客うううううう!! あれに隊長っぽい人はやられたんだ!

「あんなんどうしろと!？」

ゆり「それぞれで何とかして!!」

そりやねえぜりーダー!!

俺は何とかエックスを飛び越えて無傷ですんだ……が、

松下「早く開けろオ！」

あ、死亡フラグ。

松下「——グオウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「松下あああああー!　ロリコンの松下ああああ!!」

藤卷「開いたぞ!　急げ!」

その声で全員が我先にと出口になだれ込む。

ふう、助かった……と思つたら、

大山「オヴヴヴヴヴヅヅ……」

特徴がないヤツがリバースしていた。

ゆり「今度の犠牲は松下くんかー、あの体じゃ仕方ないわね」

藤卷「少しはダイエットしろつてもんだ」

え?　みんなアイツはスルー?

日向「スゲーもん見ちまつたんだろうなあ、アイツ、目の前で。俺はお前が生きてて

くれて助かったぜ」

やっぱりコレか？ ホモなのか!?

日向「あー、ちなみに切り刻まれてもしばらくすりや元に戻るぜ？」

……

「便利な世界だな」

日向「……………」

★—ギルド連絡通路 B 8—

……なんだよココ。イヤにひらけてるな。

椎名「——！」

!?! 天井が……落ちてくる!?

ゆり「トラップが発動してるわ!」

大山「ああしまった忘れてたよ! ここは天井が落ちてくるトラップだった!」

「だからそんな大事なことを忘れんなよ! わざとだな!?! わざとやってるだろ!?!」

うわアアアアアもう死んだアアアアア……っ!! ……???

——!! 天井が、止まってる……?!

TK「フウア!!」

一同「TK!」

T……K。

TK「Hurry up! 今なら間に合う! Oh, 飛んで行って抱きしめてやれえ……!!」

テ、ティーケ

ゆり「ありがとう」

藤巻「じゃな」

日向「達者でな」

大山「うわわ! ふん、くの!」

……

「……ありがとう」

——ドオオオオオオオオオオオンン……!!

ゆり「TKまでもつ、犠牲に……!」

「……………」

日向「お、おい? だからダイジョブだつて! ヘーキヘーキ」

TKえつ……俺はまだ、お前のことなんも知らなかったよ……!

お前こそ、本当の

漢だっ……!!

ゆり「……犠牲を無駄にしないようにね……行きましょ」

第四訓につづくう!!

第四訓

★—ギルド連絡通路 B9—

つたくよ……今度は一体何が仕掛けられてやがるんだ？　もう何回死にかけたと思ってるんだよ。

ゆり「——!？」

日向「!? どうした？」

おいおいまさか……!？」

ゆり「何か……っ!!」

一同「うワアアアアアアア!!」

遂につ……床が落ちやがった!!

大山「ああしまった忘れてたよお！　ここはああああ……」

「おいお前はボケのために命かけるのか！　それでいいのかお前の人生大山アアアアア!!」

ちなみに状況を整理すると上から、あさはかなり↓新八↓銀さん↓日向↓仲村の順でぶらさがっている状態。重ってーなチクシヨ！

「っ！ おいあさはかなりいい!! 手エはなすんじやねえぞ!」

日向 「この人数無理があるだろ! 俺とゆりっぺも落ちるか!」

ゆり 「ちよつと! 勝手に決めないでよ!」

椎名 「ここで一気に戦力を失うのは得策ではない!」

「ちっ! 仲村! 早く登れ!」

日向 「いけるかゆりっぺ……っ!」

ゆり 「それしかないでしょ……んっ!!」

「っつ……おい上は気にすんな全力で登れ!!」

ゆり 「……………」

「早くしろこちとらキツイんだよ!!」

ゆり 「あなたの服白衣だから掴みにくいのよ!」

「どこでもいいだろうがさっさと掴め!」

ゆり 「わかってる——フンっ!! ……」

仲村が俺の腰のところでもた止まった。

「おいしい加減にしろよ今度は何だ!」

ゆり 「あの……私男の人に抱きつくのとか初めてで」

「んななんどーでもいいわ!! さっさと登れや落とすぞテメエ!!」

ゆり「う、うん……!」

仲村の顔が俺の顔の前に止まる。息がかかる。

ゆり「何であなたこっち向いてんのよ……!」

「知るか! もういいからさっさと登って下さいお願いしますウー!」

ゆり「え、ええ……。うわっ——!!」

——仲村の腰が俺の頭のところに来たところで異変は起こった。

え? 何突然あたりが暗くなった……って何だこのやわらかいの。

ゆり「あ……っ! ちよっ……動かないで……んっ」

仲村がなんてゆうか……えっちな声で叫ぶ。

は? え? 何じゃコレって……

その空間はすぐに開けて仲村の無駄にたくましい雄叫びが聞こえてきた。

ゆり「よしや登りきったアアアアアアアア!! おかーさーん!! 私もうお嫁に

いけないよオオオオオオ……」

あー……何かごめん、仲村。

日向「……先生え、もう、無理だ」

「!? おい!? 大丈夫か日向……って何で前のめりなの?」

日向「へっへ……目の前であんなことされちゃあな……もう、耐えられない……っ

！」

……日向。

日向「なあ先生……最後に一つ頼みだ。アンタのこと……『銀さん』って……呼んでいいか？」

「……ああ」

日向「ふっ……ありがとう……銀さん……!!」

そのまま日向は自分で手を放していった――

日向――

ゆり「えっ、えと!! ひ、日向くん……は？」

なんで急によそよそしくなる。

「ああ……日向はな放送禁止用語が禁則事項ですして――あなたは十八歳以上ですか?――なつたからって自分から落ち

ていった」

ゆり「くくくくくくつっ!」

ん? 何本気で顔赤くしてんのただの上品な下ネタだよ!?

ゆり「あつ……あなたは、平気なのね……?」

「あん? 俺をあんなチエリーと一緒にするな」

ゆり「……………」

おい無言で蹴るな俺が何したってんだ。

ゆり「……………遂に四人になっちゃったわね」

うわ見てわかるくらい膨れてらっしゃるよ。

藤卷「へっ！ よくもまあ、新入りのためえが生き残ってるもんだな……………」

「あ、何だいたんだ新八」

藤卷「いたわ！ そんな新八って誰だ！」

ゴホン、と一つ咳払いをして、

藤卷「次はためえの番だぜ……………」

おいおい学習しようぜお前そういうこと言うど……………」

★—ギルド連絡通路 B13—

「……………ほーら言わんこつちやない」

藤卷「」

ゆり「水攻めね……………あら藤卷くんカナツチだったの」

そんな軽くていいんだいものことだけど。

椎名「——プハッ……………出口はこつちだ、来い！」

「お前何でもできんな流石忍者」

椎名「やめろ、照れる」

ゆり「……………」

水の中を進み隠し通路らしき道を進む。……

★—ギルド連絡通路 B15—

こりやあ……鍾乳洞、か？

学校の地下にこんなもんまでつてこいつらのこの無駄な行動力何なの？

ゆり「……プハっ！」

お、仲村あがってきたか。

「ほらよ」

仲村に手を伸ばす。

ゆり「ありがと……うわあ！ 見ないでよ!!」

「見るか!!」

水からあがってきた仲村の服はもう別の物語じゃね？ つてくらいに透けていた。

ゆり「だつて！ だつてえ……!!」

「おい落ち着けキヤラ見失つてる」

これまでにないほどに取り乱してみせる。やっぱこいつも女子高生なのな。いろんな意味で。

「ほれ、コレ使え。濡れてるけど隠すくらいはできんだろ」

俺は着てた白衣を仲村に渡す。うわさつみ！

ゆり「あ……ありがと、う」

なんでそんなに歯切れ悪いんだなんてそんなに顔赤いんだよ。

椎名「ゆり、こつちだ！」

ゆり「椎名さん？」

少し離れたところで椎名が俺たちを呼ぶ。もう出口見つけたのか、アイツマジ弱点
ねえ最強だな。

ゆり「じ、じゃあ、行きましょう」

どんだけテンパってんだよもう落ち着けよ流石に。

椎名「——!!」

!! 椎名が何かを感じ取った!? まさか、またトラップか!?

一体何が——

ヌイグルミ「ドンブラコッコードンブラコ」

……は？ 何アレ？

ゆり「あれは……!!」

何だよただのヌイグルミじゃ

ゆり「……………っ」

突然脚を動かし始める仲村。……………?

★—ギルド連絡通路 B17—

「残ったのは俺らだけか……………」

ゆり「ふえっ!? あ、あなたまさか私にいかがわしいことするってんじゃないわよね
!？」

「するかバカ、落ち着け」

ゆり「あ……………そうね、ごめんなさい。冷静じゃなかったわ」

そう言うのと仲村は壁に拳を叩きつける。

ゆり「本当の軍隊なら、みんな死んで全滅じゃない。酷いリーダーね……………」

「……………いやいや俺らは『死なない』って最高のステータスを持った兵士だ。これを有効活用して何が悪い？」

ゆり「……………」

「……………はあ」

俺はその場で座り、腕を枕にして眠り始める。

ゆり「……………? 何してるの？」

「少し休むぞ。トラップにかかって天使の足止めも出来てるだろうし別に時間がないわ

けじゃないんだ。てゆうかい加減眠たい」

仲村はそんな俺を見て少し微笑む。

ゆり「ふふっ……そうね、服も乾かしたいし」

★

「……よお」

ゆり「何？」

「なんでお前があんな奴らのリーダーやってんの？ あんな奴ら、俺だったらまとめきれずにみんな八つ裂きだぞ」

ゆり「あなたならそうでもないとおもうけど。そうね……初めに歯向かったから、それだけの理由よ」

「天使に？」

ゆり「ええ」

……

ゆり「兄弟がいたのよ」

「……？」

ゆり「私がまだ生きてた頃の話よ」

「この世界に来る前の……か」

ゆり「そう」

★

「私を含めて四人兄妹よ。私が長女で、下に妹が二人、弟が一人いたわ」

「両親の仕事がうまくいってたこともあって、すごく裕福な家庭だった。自然にかこまれた、まるで別荘のような家で暮らしてた」

「夏休みだったわ。両親が留守の午後、見知らぬ男たちが家にいたの。真夏なのに暑そうな目だし棒をかぶってね。……一目で悪いことをしに来たんだ、って分かったわ」

「私は長女として、絶対にこの子供達を守らなくちゃ、って思った」

「……でも、敵いっこないじゃない。ね？」

「連中は、もちろん金目の物狙いよ。でも、奴らは見つけ出せなかったの。むやみに窓ガラスやテレビを壊したりして、苛立ちを見せ始めた」

「……そして、連中は私たち兄妹にとつて、最悪のアイデアを思いついたのよ」

《オネエチャン？ アンタハ長女ダ。家ノ大事ナモノノ在リ処グライ教エラレテイルダロウ？》

《地震ガ来タラソレヲモツテ逃ゲナサイダトガ、強盗サンガヤツテキタラソレヲ差シ出シテオ帰リネガイナサイトカサア、聞カサレタ覚エアルダロウ？》

『し、知らない……そんなもの、知らない』

《サア、ソレヲ探シテオイデ。僕ラガ氣ニ入ラナカッタラコノ子タチトハ悲シイコトダケド一人ニツキオ別レニナツテシマウヨ?》

《一人ニツキ十分。十分ゴトニ一ツ持ツテオイデ》

「私は必死に、家の中を探し始めた。頭がひどく痛かった。吐き気がした。倒れそうだった」

「あの子達の命がかかつてるんだ。探し出さなきゃならないんだ! けど、あいつらが気に入る価値のあるものなんてわからない。」

『はっ!? 時間が!?!』

『急がないと、急がないと! この一番大つきな壺を持つていこう』

『——う、重い……! これだけ重いなら、きつとすごい価値があるに違いない……!』

『きつ……く、う、ああ!!』

——ガシヤアアアアアアアン——

『……!? えつ、あつ! 直さない! 早く……痛つ!』

『は……あ、ああ——』

★

ゆり「——警察が来たのは三十分後。生きていたのは、私、一人だった……」

「……………」

ゆり「別にミジンコになったって構いはしないわ」

ゆり「私は、本当に神がいるのなら、立ち向かいたいだけよ。だって、理不尽すぎるじゃない」

ゆり「悪いことなんて何もしていないのに。……あの日までは、立派なおねえちゃんであられた自信もあつたのに……」

ゆり「守りたい全てを三十分で奪われた。そんな理不尽ってないじゃない……そんな人生なんて、許せないじゃない……っ！」

「……お前は、悔しいのか？」

ゆり「……？ 悔しいに、決まってるじゃない……!! あんなことさえなければ、私は」

「——バカ言ってるじゃねーよ」

ゆり「!?」

「お前は、こんな事件が起きた事に悔しがつてるんじゃないやねえ……兄妹を助けられなかった自分を悔やんでるんだろう？」

「そのくせそれを認めようとししないで、『神』なんているかもわからねえヤツのせいにして、こんなカラッポの戦線まで作ってよ……」

ゆり「……つでも、あの状況から救われる未来なんて」

「もし、お前が金目の物の場所を知っていたのなら。もし、お前が自分たちを人質に身代金を取ることを野郎どもに提案していたなら。もし、初めて野郎どもを見たときにすぐに逃げようとしていたなら。」

ゆり「そんなの……助からないかも！」

「そうだな。……でも助かったかもしれない」

ゆり「——!!」

「また家族そろって、笑って泣いて、いろんなことをして生きていけたかもしれない」

「本当は気付いてるんだろう？」

「『もし今の自分があの場にいたら』。一度は考えたことあるだろう？ これでも人間観

察は得意なほうだ」

「お前はそんな後悔に潰されそうになってる。そんな自分が——許せねえんだ」

ゆり「——つ、何よ。あなたに、何がわかるのよ」

「何もわからねえよ」

ゆり「じゃあ！ 私のことを知った風な口で喋らないでよ！」

「……お前は、全部一人で背負いすぎだ」

「自分の過去、後悔。あいつらのこと。その他など……お前はそれに潰されそうに

なってる」

「あいつらの前では気丈に振舞っても……まだ男に抱きついて顔赤くするくらいのだだのガキだ」

「あいつらは……お前が自分たちのせいで潰れるトコなんざ見たくねえだろうよ」

ゆり「じゃあ、他にどうしろって」

「背負ってもらえよ、あいつらに」

ゆり「……………」

「あいつらはお前にいろんなもの背負ってもらってるんだ。あいつらだってお前のいろんなもの背負いたいだろうよ」

ゆり「でも、でも！ 私はリーダーだし、」

「ちっ……………じゃあ」

「——俺が背負ってやるよ」

ゆり「え…………？」

「実はだな？ 一応俺は『死んだ世界戦線』ってゆう部活の顧問ってことになってる。先生にくらい悩み打ち明けろ」

ゆり「……っ」

「お前があいつらに背負われる勇気が出るまで……俺がお前を背負ってやる」

「お前がハラ抱えて笑ってる時は、それ以上バカでかい声で笑ってやる。」

「お前が醜いツラで泣き喚いてる時は、それ以上きたねえツラで泣いてやる。」

「あいつらに背負われる勇気が出るまで——俺が傍でお前を護ってやる」

ゆり「……な、に？ それ。プロ、ポーズ？」

目の前のかよわい少女は——仲村は、目に涙を溜めてそう言った。

「バカ言え。お前にプロポーズなんかするかよ」

ゆり「……………」

「だけど、」

ゆり「…………？」

「泣く場所くらいは作ってやらあ、そう言っただ」

ゆり「——うえ、うああああああああ！ うエエエエエエん!!」

仲村は、今まで抱えてたものを全て降ろしたかのように、ただただ、泣き続けた。

★

ゆり「……あなた、さっきのアレかなり恥ずかしかったわよ？」

「それ聞いてワンワン泣いてたやつが何を言うか」

ゆり「あ、あれは！ ……ってあ、着いたわ。アレがギルドの入り口よ」

「……おいおい、上で見たのと同じだな。好きだねえーこういうの」

床につけられた地下への入り口を開けて、そこから降りようとする。

ゆり「ちよ、ちよつと待ちなさい！ 今度は私から降りる！」

「なんでだよめんどくさい」

ゆり「あなたならスカートの中見かねないもの」

「……もうそれでいいよ。さっさと先行け」

俺らはバカ長いはしごを降りる……

………！ これが………ギルド………！！

★—ギルド最深部—

「おいおいすげーな。こんなのが地下にあったのかよ」

「!? ゆりっぺだ！」

「来た！ 無事だったんだ！」

「こいつらがココで武器を………って多すぎじゃね!？」

「あのワナの中たどり着きやがったかゆりっぺ！ 流石だな！」

ゆり「そのことなんだけど………トラップ解除しないほうがいいって提案したの誰？」

「え？ ああ俺だけど？」

ゆり 「フンツツツツ!!」

「グボエアアア!!」

ゆり 「アンタのせいだなあ……………! 私はなあ……………!!」

何やってんだあいつは。

「おい、そんなことより天使は？」

「お、アンタが噂の新人かい？」

「さつきまで進行は止まっていたが、また動き出したようだ……………。……………!」

!?!? これは……………?」

「天使がトラップにかかった音……………」

「おいおい近いな随分と……………」

「ゆりっぺ……………」

ゆり 「——ここは破棄するわ」

!?!? そんな! 正気かゆりっぺ!

「そうだぜ! 武器が作れなくなってもいいのかよ?!」

ゆり 「大切なのは場所や道具じゃない……………記憶よ。あなたたちそれを忘れたの？」

「いや……………」

「おいおいまた中二設定か仲村？ 聞かせてくれよ」

ゆり「この世界では命あるものは生まれ……けど、形だけのものなら生み出せる。それを合成する仕組みと、方法さえ知ってれば本来何も必要ないのよ。土くれからだつて作り出せるわ」

「だが、いつからか効率優先となり、こんな工場でレプリカばかり作る仕事に慣れきつてしまった。」

「チャ、チャーさん……」

え何コイツも高校生!? 俺より老けてない!?

ゆり「本来私たちは、形だけのものに記憶で命を吹き込んできたハズなのにね」

チャー「なら、オールドギルドへ向かおう。長く捨て置いた場所だ。あそこには何も無いが……ただ、土くれだけなら山ほどある。あそこからなら地上へも戻れる」

「(ハハ)は……っ」

チャー「爆破だ。天使はオールドギルドへは渡らせん。あそこは俺たちが帰れる、唯一の場所だ」

「し、しかし……。!?!」

また……天使がトラップにかかった音……

「すぐ上だぞ……!?!」

チャー「持っていくものは記憶と、職人としてのプライド。それだけだ。違うか？
おまえら!」

一同「……はい!!」

チャー「よし、爆薬を仕掛けるぞ。チームワークをみせろ!!」

一同「はい!」

えー何コイツ俺よか先生やってない？

……俺も先生しないとな。

ゆり「……? どこいくの?」

「あ? トイレだトイレ。大のほうな」

ゆり「なっ……早くしなさいよね!」

「へいへい……」

★

「……よお、また会ったな」

立華「……ここは何?」

「てめーみてーなちっこいガキにやちつとばかし早いところさ」

ゆり「よい……しよつと。ふう……」

「んあ? お前男のトイレについてくるなんて厚かましいねえ」

ゆり「うるさいわね。あなたこそ一体どこに行こうってのよ。ここにトイレなんか
いわよ」

「うるせえ、トイレの標識が見当たらなかったただけだよ」

立華「……………よくわからないけど、トイレなら向こうよ。さつき借りさせてもらっ
たわ」

……………

「……………おい、ホントに天使って極悪なの？　むっちゃ親切なんですけど。親切すぎて逆
に痛いんですけど!!」

ゆり「わ、私に聞かれても知らないわよ!」

立華「?」

「……………ほん。あのだな立華。またアレだ、ここは通さねえぜ!　みたいな感じだ」

ゆり「っそうそう、そんな感じよ!　とりあえず私たちと戦いなさい!」

なんだコレ……………こんな立華も相手にしてくれ

立華「……………わかったわ」

ですよねーこの世界にいるんだもんねこの子も普通なわけないよね畜生!!

立華「——Guard skill:Hand sonic」

「はあ……………おい仲村俺が攻める。援護に回れ」

ゆり「了解。お手並み拝見ね。適当やったらあなたから打ち抜くからね」

「おっけ——……いくぜい!!」

★

……すごい、話しに聞いていた以上……!

天使「……っ」

銀時「らあ!」

天使のあんな苦しい顔、始めて見た……

つと! 援護射撃!

「……ふっ!」

私は天使に向けて三発発砲する。

天使「っ! ……!!」

当たった! 二発は弾かれたけど本格的な戦闘モードの天使に銃弾が当たるなんて

……

見るとあの先生……銀時は、私が当てやすいように常に天使が私に背を向けるような形で攻めている。ここまで計算してると……?

天使「——Guard skill: Delay」

……!?! スピードが上がった!?!

銀時「うわつと！　ちよこまか動くな!!」

ヤバ……少し押されてる!?　何か……

「二人ともどけエ!!」

後ろを見ると、でっかい大砲を構えたギルドの連中が立っていた。

「あんたたち、やればできるじゃない！　そんなの簡単には作れないわよ!?　ホラアン

タもこつち!」

私は被害が及ばない安全地帯に避難する。

銀時「ああ!?　ちよつと待てすばしこくて振り切れねえ!!」

「行くぜええ!!　総員退避!!」

銀時「え、ちよつま」

「てっ!!」

銀時「てめえらああああああ!!」

……!?　何!?　この爆風!?

ゆり「やったの!?!」

「大大破……」

「ちつ……やっぱ記憶にないものは適当には作れねグバア!!」

「適当に作るな!!」

銀時「おまえら……コレ終わったら血祭りな」

「ホラ先生だつてあんな醜いパーマになつちやつてる！　まるで実験失敗後の博士よ!?」

銀時「いやコレ元からアアアアアアア!!」

チャー「おいてめーらコレを使え!!」

「何コレ……手榴弾!？」

「つしやいくぞ!!」

「オラオラオラアアアアア!!」

みんなが一斉に大量の手榴弾を天使に投げる。

天使「――Guard skill:Distortion」

今更デイストーションで弾いても無駄よ!!　おつ死ぬ!!

天使「……!!!」

手榴弾が爆発した。ダメージはなくてもそろそろ……

「全員退避完了!!」

チャー「よし！　ギルドを爆破する！　いいな？」

「やって」

チャー「爆破!!」

私の目の前でギルドが破壊されていく。これで天使も少しは銀時「わりの、忘れもんしちまった。ちよつと取つてくるわ」

「はあ!?! あなた何言つてるの!?! ここは今まさに火の海で……ちよつと! ちよ——」

★—オールドギルド—

チャ—「何年ぶりだろうな。本当に何もありません。ははっ! 笑えらあ……ひでえねぐらだよ全く」

……

チャ—「うし! うじうじしてても仕方ねえとつと始めるぞお前らあ!」

一同「うおおおおお!!」

「……………」

チャ—「……あの兄ちゃんのことか?」

「!?! 何で!」

チャ—「見てりやわかるさ。ありやいい男だ……男にモテる男、つて言つた方がいいか。……惚れたか?」

「だ、誰があんな万年死んだ魚な目のヤツなんか!!」

そんなことない。そんなことない!!

私は通信機を片手にメンバーに呼びかける。

『バカども、お目覚め？ ギルドは破棄、天使ごと爆破したわ。総員に告ぐ。至急、オルドギルドへ！ 武器の補充はそこで急ピッチで行われている。天使が復活する前に総員、オルドギルドへ！ 繰り返し返す。急げ、バカども！』

そうだ、私は戦わなくちゃいけないんだ。

もう、あいつらを背負ってしまったから……

だけど、もし少しだけ疲れたり、くじけそうなきがあつたなら、その時は——

——私の荷物、ちゃんと背負ってよね、先生。

エピソードのようなもの

「……………」

「よ、気付いたか」

「ここは、保健室？」

「まあ、そんなトコ」

私は……………確か地下にいて、爆発に巻き込まれたはずじゃ……………

「あなたが助けてくれたの？」

「一回死んだけどな」

「そうだったんだ……………」

「……………ありがとう」

「どういたしまして」

「……………でも何で？ あの時私と戦ってたあなたが」

「……………あのなあ立華よ。俺ア別に、テメーの敵って言うてんじやねえさ。テメーがやろうとしてることも大体分かってるしな」

「……………」

「俺は、この戦線を絶対にテメーと戦わなくていいようにする。だからその時は——」
「……その時は？」

「——一度くらい、笑ってくれや」

.....

E P I S O D E . 3 M Y S o n g

第五訓

——えー突然入ってきたら何コレ？

ゆり「……なぜ新曲がバラード？」

その前になぜ校長室で一曲きめこんでるの？

岩沢「いけない？」

ゆり「陽動にはね」

「陽動って……ああ、トルネードのときの。てめーが弾いてたのか」

ゆり「ええ。彼女は校内でロックバンドを組んでいて、一般生徒の人気を勝ち得ている。私たちは彼らに直接危害は加えないけど、時には利用したり、妨げになるときはそこから排除しなくてはならない。そういう時、彼女たちが陽動するの。」

「NPCのくせにウチのアイドルヲタクのような奴らだな」

日向「アンタの家庭の事情とかは知らんが……つまり、彼女たちのバンドにはそれだけの実力と魅力があるってことだ」

「へえー。今度オペレーションサボって聴きにいつていい?」

ゆり「殺すわよ?」

「すみません機会があれば聴きにいつてよろしいでしょうか?」

岩沢「ふふっ……いいよ。いつでも来な。……で? ダメなの?」

ゆり「うーん。バラードはちよつとね……。しんみり聞き入っちゃったら、私たちが派手に立振舞えないじゃない」

岩沢「そ。じゃ没ね」

「うわヒドイ。一生懸命書いた曲をそんなバツサリー」

一同「そうだそうだー」

ゆり「つ別に曲自体を否定しようとかそんなんじゃないわ! ただ作戦に不向きってだけよ! つてかアンタたち、先生が来てキヤラ変わってない!」

野田「貴様ら、ゆりっぺに齒向かうか!」

ゆり「あーあなたはいいいから。……さて、気を取り直して」

仲村がひとつ咳払いをする。

ゆり「総員に通達する。銀時先生」

「あ? 何だよ」

ゆり「カーテン閉めろこの愚図が」

「先生を顎で使うなってか何かギルドのときから俺の扱い酷くない!?」
渋々カーテンを閉める。何だよ！俺が何したってんだ！

ゆり「今回のオペレーションは『天使エリア侵入作戦』のリベンジを行う。決行は3日後」

日向・大山「おぉー!!」

「は？ 天使エリア!？」

高松「その作戦ですか。ですが前回は…」

「ち、ちよつと待て！ 天使エリアって何」

ゆり「今回は、彼が作戦に同行する」

シカトすんなヨオオオオオオオオオ!!

「よろしく」

あ？ 誰だこのガキ。

大山「椅子の後ろから!？」

高松「メガネ被り…」

野田「ゆりっぺ、何の冗談だ」

藤巻「そんなのが使い物になるのかよ」

ゆり「まあまあ、そう言わないでくれる?」

野田「はッ!! なら、試してやろう!!」

「そんなんだから友達できないんだよ気付けよいい加減」

竹山「ふっ……3. 14159265358979323846264338327

95028841971693993751058209——」

野田「うぐっ!! やめろおおお!!! やめてくれええええ!!! ああああ!!!」

松下「まさか、円周率だとオ!？」

高松「メガネ被り」

大山「やめてあげて!! その人はアホなんだ!!」

ゆり「そう、私たちの弱点は——」

「うぐああああああああ!! 殺せ!! いっそ殺してくれエエエエエエ

エエエエエエ!!」

ゆり「つてなんであなたまで苦しんでるのよ!？」

★

ゆり「……私たちの弱点は、アホなこと!!」

「リーダーが一番アホすいませんなんでもないです」

ゆり「前回の侵入作戦では我々の頭脳の至らなさを露見させてしまった。しかし!!

今回は天才ハッカーの名をほしいままにした彼! ハンドルネーム竹山くんを作戦

チームに登用。エリアの調査を綿密に行う！」

高松「今のは本名なのは？」

竹山「ボクのことは……クライストとお呼びください」

「うわまた出たよどんどん出るな中二」

竹山「……3. 1415926535897932384626433832795

0288419716——」

「へっ！　そう何度もウギグアアアアアアアアアアア!!」

野田「あがあががああああああああああ!!　あひ、うヒヒヒヒヒあひ……」

ゆり「ちよつと竹山くん！　軽く精神崩壊しかけてるじゃない！　やめなさい白いほ

うはもつとやっていいから！」

「お前どんだけ俺のこと嫌い!？」

ゆり「え!!　べ、別に嫌いというワケでは……その……」

何でそこで顔赤くすんだよ話しにならなくなるだろうが!

ゆり「と、とにかく!!　天使エリアに入るには高度なハッキング技術が必要なの。そ

こで竹山くんの出番ってわけ」

竹山「ボクのごときはクライストと」

「なあ、天使エリアってどんなトコだ?」

竹山「……………」

日向「天使の住処で、中枢はコンピュータで制御されてるんだよ！」

ゆり「そのどこかに神に通じる手段があるの」

「ホントかよ……………」

大山「こいつはとんでもない作戦だ！」

ゆり「2度目と言うこともある。天使も前以上に警戒しているはずよ。ガルデモには
いつちよ派手にやつてもらわないとね！」

岩沢「了解」

TK「get chance and look！」

★—学習棟B棟 掲示板—

「よいしょ、よいしょ……………」

「おい何してんの？ 無許可で宣伝活動は校則違反だぞ」

「ふえっ！ す、すみませ——つてあ、あなたでしたか」

「んあ？ 俺のこと知ってるの？」

「はい！ いつもでかい斧持って歩いてる先輩が、『ヤツは災悪をもたらすから注意し
ろ』とか何とか言っていましたー！」

あの野郎今度消す。

「おいコレ、体育館占拠って書いてあるけど許可とか取ってんだらうな？」

「とつてるわけないじゃないですか！ やばいです、前代未聞ですよ!! しかもゲリラライブじゃなく告知ライブですしね。先生たちもほおっておかないし、どんな邪魔が入るかかわからないですよー！」

「オイ、俺一応先生だけど？」

「でも、今回の作戦はそうしてでも人を集める必要があると聞きました……」

おい俺の話は無視か!?

俺は手渡されたチラシを見てみる。Girls Dead Monster……

「ところで、お前ダレ？」

「同じ戦線の仲間なのに名前覚えてなくてナチュラルに名前聞ける非常識さも聞いたとおりですー！」

「いい加減殴るぞコラ」

ユイ「ひっ……ユ、ユイです！」

「よろしく」

ユイ「ありがとうございます！ まだ陽動班の下っ端ですが……あでも！ それでも満足です！ ガルデモのお手伝いですよ!? 知ってますか？ ガールズデットモンスター、略してガルデモは！」

ユイ「女の子だけであの演奏力、そして何ととってもボーカルアンドギターの岩沢さんの存在感!!」

さーつとと、飲みもんでも買ってくるか……

ユイ「作詞作曲までしてしまうんです!! 私のお気に入りはcrow song! サビの転調がですね、思い切りがよくていいんですよ! 歌詞もですね、まさに岩沢さんのことを

★—自動販売機前—

えーつと、イチゴ牛乳イチゴ牛乳……つと

「……?」

不意に歌声が耳に届いてくる。何だよ、噂のガルデモか?

俺は音のなる方へと脚を運ぶ。

★—学習棟A棟 空き教室—

へえ……うまいもんだな。

ひさ子「……おつと」

何だ、弦でも切れたか?

ひさ子「悪い、すぐ張りなおす」

岩沢「オツケー、んじゃ休憩……ん」

「ういっす」

入江「あ、あなたは噂の」

関根「非常識って有名な先生だー！」

「あーもういいからそういうの。あ、ちなみに岩沢以外の三人とここにいない遊佐ってヤツは紹介する機会ないから名前先にふつとくぞ」

ひさ子「なんかよくわからんがグサツとくるな今の言葉」

「それより、ライヴの準備もいしがしつかり授業も出るよ」

入江「え!? あ、あなた戦線のメンバーじゃ……」

「まあ違いねえが、その前に俺は先生だからな」

ひさ子「ははっ何だよソレ……岩沢！ お前の言ってたとおりだ、おもしろいなコイツ」

おい俺先生って言ったよね？ コイツってなんだコイツって。

岩沢「……で？ なんか用かい？」

「別にそんなんじやねーよ。さっき言ったろ。機会があつたら聴かせてくれって」

岩沢「ああ、あれ。生憎と今は休憩中だよ」

「そうかい、じゃあまた今度だな」

岩沢「あ、ちよつと待った」

ん？ 何だ？

岩沢 「あんたとは一度二人で話したかったんだ。少し外出てもいい？」

ひさ子 「さっさと戻ってこいよ」

関根 「右に同じー！」

入江 「あ、わ、私も……」

おい俺の意見は無視かよ……何でこの世界のヤツは人の話を聞かないヤツばかりなんだ？

★——空き教室前廊下——

「……………」

岩沢 「……………」

……………え何!? 俺から振らないといけないの!?

「あー……………すげえな。ガールズズエットモンスター、だっけか？ 一般生徒がハマるわけだ」

岩沢 「ありがとう」

「……………」

岩沢 「……………」

……………えー話題終わらすなよ何なんだよお前よお!!

岩沢 「あんた」

「あ？」

岩沢 「記憶が、ないんだっけね」

.....

「生前の記憶は全部覚えてる。死んだときの記憶がどうも思い出せないんだ」

正直俺死んでないんじゃないのか？ みたいな受け止め方だしな。

岩沢 「そりゃ幸せだ」

「そうでもないさ」

岩沢 「.....？」

「俺の一生なんて、ずっと泥まみれだったよ。これから何が起こっても後悔なんて出来なくなるくらいにな」

岩沢 「.....誰かの記憶、聞いた？」

「.....ああ。仲村のを、少々な」

岩沢 「仲村って.....ああ、ゆりのか。あれは最悪ね。あたしのはそんなに酷くない」

「何だよそこまでって。誰かに暗殺でもされたのか？」

岩沢 「ははっ何その発想.....たいしたもんじゃないよ」

岩沢 「好きな歌が歌えなかった。それだけ」



「両親は、いつも喧嘩ばかりしていた」

「自分の部屋もなく、その怒鳴り声の中隅で小さく丸まって、耳を塞いだ」

「自分の殻に閉じこもるしかなかった。どこにも、休まる場所はなかった」

「そんな時出会ったのが、SAD MACHINEというバンド」

「そのボーカルも私と同じ、恵まれない家庭環境にいて、精神的につらい時期は耳をイヤホンで蓋して、音楽の世界に逃げ込んだと聞いた」

「私もそうしてみた」

「全てが吹き飛んでいくようだった……。ボーカルが私の代わりに叫んでくれる、訴えてくれる！ 常識ぶってるヤツこそが間違っていて、泣いているヤツこそが正しいんだと。孤独な私たちこそが、人間らしいんだと。理不尽を叫んで、叩きつけて、破壊してくれた！」

「私を、救い出してくれた」

「このギターコイツと出会ったのは、雨のゴミ捨て場」

「私は、歌い始めた」

「何も無いと思ってた私の人生にも、歌があっただ……。』

《本気かい？ 君の成績ならどこにだって……》

『もう、両親には頼りたくないの』

「バイトをして、お金を貯め、レコード会社のオーディションを受け続ける日々」

「卒業と同時に、私は絶対にあの家を出て、上京して、そして——音楽で、生きていくんだ」

「そう思った」

『ア、レ……？ 疲れ、てるのかな……』

『こんなんじやギター弾けない……今夜の路上は中止して、休も——か——』

「——次に目覚めたとき、私は言葉を話せなかった」

「頭部打撲、脳梗塞による失語症……」

「原因は、両親の喧嘩を止めようとしたときのとばっちりだった」

「運命を呪った」

「何処にも逃げ出せなかった」

「そのまま、私の人生は、ここで、終わった——」

★

ひさ子「岩沢ー？ おせえよ早くしろ！」

岩沢「ああひさ子！ オーケー」

ひさ子「待ちくたびれてるよ」

「おい」

岩沢「……………何？」

「お前が倒れたとき——親は、泣いてくれたか？」

岩沢「……………泣いてくれた、と思う」

「そうかい。よかつたな」

岩沢「……………？ 良いことなんて一つもないさ。私はアイツらのせいだ」

「なんで止めに行つたんだ？ 喧嘩」

岩沢「……………」

「親に喧嘩してほしくなかつたからだろう？」

岩沢「……………」

「お前の失つた声を代償としてそいつらが得たものは、多分無茶苦茶大きいものだと思うぞ」

「お前の人生は、無駄なんかじゃねえよ。ま、お前にとつちやなんの救いにもならねえだろうけどな」

岩沢「……………変なヤツだね、アンタ」

「よく言われる」

岩沢「ははっ……………今から練習再開するけど、聴いてくかい？」

「ああ、そうさせてもらうわ。どうせ暇だしな」

岩沢 「アンタ教師じゃなかったっけ？」

「しっかり仕事やってると消えちまうんだろ？」

第六訓

★—体育館—

——いい？　今回は最小限の人数で作戦を行う。作戦決行は本日、19：00。

——オペレーション、スタート！

遊佐（……少ない）

「……特等席だぜ」

私は愛用のギターを舞台の袖に置く。ライブの時はいつもそうしてきた。

「時間だ……さあ、」

「派手にやろうぜ!!」

★

えーつと……これは……

日向「……開いた」

ゆり「よし……突入」

いやちよつと待てお前ら……

そんな心の叫びを無視して野郎どもは扉を開きそこに足を踏み入れる。

野田 「——クリア」

日向 「クリア」

ゆり 「……よし、まずは侵入成功ね」

「……は？」

ゆり 「天使エリアへ侵入……ドア閉めなさいよバカ！ 竹山くんはコンピュータの方

よろしく」

竹山 「クライストとお呼びください」

「おい、てめーら、これって……」

俺はその部屋の電気をつける。

そこには、女子寮の部屋と思しき部屋が広がっていた。そりやそうだよ。だってここ

「ただの女子寮だろうがアアアアアアアア!! 何だ天使エリアって! 『たちばなか
なで』 っっておもくそドアに書いてあったぞ!!」

野田 「貴様何をする……!」

松下 「女子寮だぞ! 電気を消せ!」

松下が電気を消す。

「前々から思ってたがなあ松下!! お前本当にロリコンだったのか!？」

松下「なっ……！ 確かに天使ちゃ……天使はカワイイとは思いますが、それは何とか」

「今天使ちゃんって言おうとしたら!? ほれやつぱりロリコンじゃねーか!!」

松下「違う！ 俺は決してロリではない!!!」

そんな俺を無視して仲村とタケイストは作業を続行している。マジ今度停学にすっかんなお前ら!!

竹山「……パスワード、ですか」

ゆり「前は誰にもわからなかったの」

竹山「なるほど……ボクの力の見せ所だ。解析に入ります」

オイオイやべえんじやねえの一応犯罪だよコレ!!

野田「ほう、一応使えるみたいだな」

「だーかーらーやめろって言うてううえええい!?」

松下「すこし拘束させてもらう」

野田「それ以上喋るようなら、喉元搔っ切るぞ」

「ふざけん……なっ!!」

松下・野田「なっ……!?!」

俺は松下の拘束を抜けだし臨戦態勢に入る。

「へっ！ ガキ共に押さえられる俺じゃ——」

竹山「3. 141592653589793238462643383279502

88419716939937510582」

「うごろうアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

野田「うへーうへへへへへへへへへへ……バカも天才も同じ類人猿なんじゃーい

!!」

日向「すまん野田……銀さんを拘束するためだ耐えてくれ……!!」

★

「——!!」

『うおおおおおおお!!』

『いえーい!! スゴーイ!!』

——どうして。

——もつと集まってくれ!

岩沢「——♪」

ひさ子 (Alchemy!? こんな序盤で!?)

『オオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

ユイ「いいぞー!!」

岩沢「——無限に生きたい。無限に生きられたら、すべて叶う——」

『Alchemyよ!!』

岩沢「でもいろんなものが、あたしを追い込んでく——」

『お前たち!! 何してる!?! おとなしく部屋に戻れ!!』

『やだよ!! ぜってーみてえもん!!』

『おまえらこそ帰れ!!』

『そーだそーだ!!!』

……来やがった!!

——みんな、もっと盛り上がってくれ!

——いや、そうさせるのは誰でもない。

私たちの力なんだ!!

遊佐「——天使、出現しました」

★

「了解。……竹山くん」

竹山「今、パスワードを高速で割り出すプログラムを走らせてます。すぐ終わります。」

あ、あとボクのことにはクライストとお呼びください」

竹山「……………入りました！」

「よくやったわ竹山くん！ 全てのデータを写して！」

竹山「時間がかかりすぎます！ 一時間は必要です。あと、ボクのことにはクライストとおおおおおおおおお」

日向「ハードディスクごと引っこ抜くか!？」

「バレるじゃない！」

日向「どうする…………!？」

「とにかく怪しいデータをを見せて竹山くん!!」

竹山「クライストです…………っ！」

竹山くんが一つのファイルを開く。

日向「学生リスト…………？」

「NPC…………いや、私たちも混ざってるか」

……………

遊佐『陽動班、取り押さえられました。天使が戻ります』

「ちっ……………(こ)までね」

日向「今回も得るものなし、か」

「……退散するわよ。先生と野田くんは？」

銀時「ふへへ……円周率がいち、円周率が……円周率が……」

野田「あべへ……類人猿は天才の第一歩なのだよげふえふえ……」

松下「もう手遅れだ……狂ってしまっている」

「つたく、しようがないわね……」

私は既に廃人と化した二人の前に立ち一言。

「二人ともー！ 起きないと、おでこにキスしちゃうぞ〜？」

野田「ゆゆゆゆりっぺの寝起きチューだとおおおお!! つてうおああああ

あ!! 何で起きてしまったんだオレエエエエエエ!!

日向「流石ゆりっぺあざとい！」

松下「だが……」

銀時「うへへ……円周率が3、円周率が3、1、円周率が3、14……うああああ

あああ!! $\pi \parallel 3$ 、14159265358979323846264338327

9502884197169399アアアアアアア!!

日向「もう元にもどらねえんじやねえのコレ……」

「……あなたたちは先に行つてて」

日向「や、でもよゆりっ」

「文句あるの?」

日向「ありません!!」

日向くんたちを外に出す。ドアが完全に閉まったことも確認した。

……え? やるの? これ?

き、キスよ!! 相手はこんなオツサンよ!?

や、でもやるっていつちやつたし……そ、そもそもおでこだし!!

大丈夫よ! セーフよね? ……多分。

目を閉じ、少しづつ自分の唇を彼の額に近づけていく。

もう少し……くっこそ、何でこんなにドキドキするのよ!

あと、数センチ——

銀時「へへへ。え、円周率!?! ウギヤアアアアアアアアアア!! こつちに来る

なアアアアアア!! ……あ?」

……

銀時「え? あの、ゆりさん? コレは一体……」

「悪かったわね……」

銀時「へ?」

「死ぬええええええええええ!!!!」

銀時「ちよ、仲村落ち着ぐげごががががががががががががあああああ!!」
こんの——バカ!!

★

『くっそ！ フザけんなよ!!』

『やめてあげて!!』

『俺たちのためなんだよ！ 離してやってくれよ!』

『彼女たちの音楽が支えになってるの！ お願ひ!!』

『今までは大目に見てやってただけだ。凶に乗るな!!』

……………つ。——!!

銀時「つたく……………何なんだ大体誰のせいで…………」

『ああ銀時先生、来てくれましたか』

ひさ子「っ！ おい先生！ 何とかしてくれよコレ!」

銀時「ああ？ 何言ってるの？」

関根「……………!?!」

銀時「散々やりたい放題やって、最後に大人に頼るのは感心しないぜ?」

ひさ子「……………つでも！ アンタだってこの戦線のメンバーだろ!?!」

銀時「だから言っただろーが……………俺は先生だ。こんなことするなら、自分たちで何と

かできるようになってからやれ」

ひさ子「!! ……………アンタ、最悪だな」

銀時「なんとも言えよ。ところで安西先生？ こいつら一体何したんですか？」

『いや安西じゃないのですが…………それがですね？ こいつら体育館勝手に占拠して、わざわざ宣伝までしてライブやってたんですよ！』

銀時「…………あ？ すみませんどうも話が食い違ってるようで」

『え？』

……………？

銀時「いやこいつらね？ 体育館で練習してただけなんですよ。体育館の使用許可は

俺が出しました」

『は!? そんなの聞いてないですよ!』

銀時「いやだって言ってますもん。忘れてたもので」

『忘れてたって…………』

銀時「こいつらが『たまには体育館で練習したいですう！ 先生、おねがぁー…………』

とか何とか言うもんで許可出したんですがね？ 練習してると一般生徒どもが勝手に

集まりだしたようで」

『…………つじゃあ！ あの昼の宣伝活動はどうなんですか!? 校内のあちこちにチラシが

張られていた!』

銀時「そうそれ! どうもソイツのせいで一般生徒集まっちゃったみたいで……あ! アイツです。あのピンクい頭したアホっぽい女子生徒」

★

ユイ「?」

★

『……都合良過ぎじゃないですかね』

銀時「そんなことないですよ。な! お前ら! 色仕掛けで俺をたぶらかして体育館の使用許可ぶんどったもんなお前らな!」

ひさ子「なっ……!!」

入江「い、色仕掛けって……」

関根「あははー……先生言うねー」

……この先生——やっぱり、

「……はっ」

おもしろい。

★

ひさ子「い、岩沢!?!」

岩沢 「何だよひさ子だってむっっちゃ迫ってたじゃないか」

ひさ子 「うえ!!? そ、それは……」

俺はポニーのねえちゃんに向かつて笑いかける。

どうする? 一生ギター弾けなくなるか色仕掛けの変態生徒になるか!

ひさ子 「あーもう……… やったよ! やりました!」

関根 「あ、じゃあ私もー」

入江 「せせせ関根っち!!」

『お前はどうかんだ! やったのか!』

入江 「ひっ……や、やりました……」

「ほーら言ったでしょ?」

『っ……こいつらが話を合わせてるだけかもしれない!!』

「……わーりましたよ……」

俺は舞台のマイクに向かつて声を張る。

《オイてめーらあああああ!! 今てめーらの愛すべきガルデモが無実の罪で拘束され

ている! 一つ聞くぞ? 今日、体育館で練習って聞いてここに覗きに来たヤツ手エ挙

げろ!!》

その声を聞き、一瞬体育館が静かになる……

『……はい』

『はい』

『はーい』

『はい!』

『『はい!!!!!!』』

「……だぞうですよ。どうなんですか? センセイ?」

『……離してやってください』

その声で拘束されてたメンバーは自由になる。

『……ただし、教師に対する不順な交渉は指導に値する! 覚悟しておくんだな……』

「ま、がんばれよー」

『坂田先生、あなたもです』

「え、マジ?」

岩沢 「——先生」

「あ? 何?」

『………何だ』

岩沢 「その……最後に一曲、いいですか?」

コイツ……俺が折角底つてやってるのに！

「はあ……勝手にしろ」

『先生!!』

「どのみちここまで大きな騒ぎになつちや大して変わりませんよ。満足いくまでやらしたら次からやらないかも知れないですよ？」

『ぐ……一曲だけだ!!』

岩沢「ありがとうございます……ひさ子、入江、関根。あと……先生。お前らにも聴いておいてほしい」

「おいお前いい加減に先生への口の利き方を改めろ」

岩沢「……最後に、一曲。」

— My song —

——なあ、先生——

「何だよ」

——あの時は言えなかったけどさ、あんたの、あの言葉。……結構救われた——

「……そうかい。せいぜいミジンコになっても元気だな」

——ははっ、最後まで面白い先生だな——

——ありがとう——

ひさ子「……岩、沢……？」

★

日向「わかったことをまとめてくれ。ゆりっぺ」

「……天使は自分の能力を、自分で開発してた……それは悔しくも、私たちが武器を作る方法と同じだったのよ」

大山「それって……どういうこと？」

「……確信がないの。今は、まだ言えない……」

藤巻「……何だよ。みずくせえぜゆりっぺ！」

——私たちと同じ方法をとる必要があるということ。

そこから導き出されるのは、最悪の設定だ——

……どこにも神なんていやしない……？

どうして天使なら神から力を授からない？

どうして自作などする必要がある？

高松「……では、もう一つの案件です」

……

高松「岩沢さんは、何処に消されてしまったのか……？」

野田「天使に消されたんじゃないのか？」

日向「ライヴ中だぞ?! いくらなんでも……」

野田「じゃあ何がおきたってんだ」

大山「誰が一体……岩沢さんを……」

「……誰も。」

「あの子が納得しちゃった——それだけの話よ」

銀時「ごつめーん遅れちゃったー待った？ みんなブグア!!」

「ふん……」

日向「おい野田あー。ギルドの時からおかしいと思ったがゆりつぺのヤツまさか……」

野田「ん？ 何だ？ まさか……ゆりつぺが俺のことを好きになってくれたのか!？」

日向「いや、ちよ違」

野田「そうだそうに違いない！
アアアアアアアア!!
ゆりっぶゲバツハアアアアアアア

E P I S O D E . 4 D a y G a m e

第七訓

——あ……これって何だ。グラウンド……？

「はあ……はあっ……！」

何で俺、こんなところに……何して……

——カキーンン……

あ——

★

野田「そいつが岩沢のかわりだど!？」

藤巻「ありえねえ……」

「……あ」

……夢、か。

ユイ「ユイっています！　よろしくお願いします!!」

……

「誰コイツ」

銀時「んあ？ てめー寝てて聞いてなかったか？ だめだよー人の話ちゃんと聞かないと、あそこにいる独裁者みたいになっちゃうぞ？」

ゆり「おい聞こえてんぞゴラア!!」

銀さんが我らが戦線の独裁じゃねえリーダーにたこ殴りにされている。もう答えは期待できないな……自分で何とかしよう。

真ん中で何人かがピンク頭の女子を囲んで話し合っている。内容は……

高松「いいですか？ Girls Dead Monster はロックバンドですよ？」

松下「アイドルユニットにでもするつもりか？ いやそれもあるいは……天使ちゃん……とはなざ……」

おい松下五段お前は結局それでいいのか……つとそれは置いといて。

———どうやら、岩沢のかわりを探してるみたいだな……

少し寂しいがまあ当然か……あいつがいないと陽動がまともにできんから……

ユイ「いやいや、ちゃんと歌えますから！ どうか聞いてから、判断してください!!」
そういつてせつせと準備し始めたが——

「——いつまで待たせんだよ!!」

もう軽く二十分くらいたつてるぜ!? トロトロトロトロロロしやがってきつきとしろよ!!

ユイ「す、すいません! あとこれだけ——あよつしやアア完成イイイイ!! いやっほう! そんなじやいきま——」

あオイそんなマイク振り回したら——

ユイ「いやっほグエ! ……は…っ…」

「うっわ!」

マイクのトンカチが都合よく天井を壊しいい具合に引っかかり絶妙な感じでマイクの配線が首に巻きついてあの世にフライアウェイしそうな感じになっている……何で俺こんなに説明口調!?

高松「何かのパフォーマンスですか。」

藤巻「デスメタルだったか……」

TK「Crazy baby」

銀時「いいねー何か、こう胸に来るものがあるね。まるで死にかけの人目の前で見るような」

ユイ「死、シヌ」

「おい、何か事故っぽいぞ」

……とりあえずこの天然デスメタル女を床に降ろす。

ゆり「とんでもないおてんば娘ね……クールビューティーだった岩沢さんとは正反対」

銀さんの処刑を終えてすつきりした表情のゆりっぺがつぶやく。

高松「Girls Dead Monster のリードボーカルとしては、いかなものかと」

松下「別の者を探さないか？ もしくは天使ちゃんとコラボレー」

「別のヤツ探しますか」

ユイ「こらあああああああ!!! せめて歌聞いてから決めろや！ これでも岩沢さん

の大ファンで全曲歌えるんだからなあ!？」

「歌わなくて既にこの調子じゃなあ」

歌いでしたら突然照明が落ちてくるとかありそうだ。

ユイ「……………ひぐっ」

「……………は!!? え!!?」

銀時「あーあ、なーかした」

「ああ!! 俺何も変なこと言っていないだろ!」

何突然泣いてるんだよ俺がヒドイみたいじゃねえか!!

松下「……何か、他にアピールできることはないか?」

松下五段がやさしく語りかける。となりで銀さんが『やはりロリコンか……』と言っているのはもう無視しておこう。うん。

ユイ「ぐすつ……うん。」

松下「じゃあとりあえずそれを見せてくれ」

ユイ「……はい! やってみます!」

涙をぬぐい、立ち上がる。こいつもなんだかんだで結構な根性してるな。

ユイ「いきます! セーの……!」

さーとと、一体何のアピール

ユイ「ユイ☆にゃん♪」

……………

「……すまん。コレは何のアピールだ?」

ユイ「何って先輩決まってるじゃないですか! 可愛さアピールですよ! 可愛かつたでしょ?」

たでしよ?」

「……ああ、とりあえずもう一回やってみてくれないか?」

ユイ「んもーうしようがないなあ先輩は。もう私の虜になっちゃいましたか？ いきますよーせーの、ユイ☆にゃ」

「そーゆうのが一番ムカつくんだよオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ユイ「ぐげっあダダダダダダダダダダ!!! ギブ！先輩ギブ!!」

クツソ胸クソ悪い後輩に叩固めをかましてやる俺。あつれクソつて二回言っちゃった！ テヘ♪

ユイ「せ、先輩！ 折れる！ 折れちゃいます！」

銀時「おいおいそのくらいにしとけよ？」

おもむろに銀さんが俺の肩を掴み止めにかかる。何でだよ！ 何すんだ!?

「あ!?! 銀さんはムカつかねえのかよ!?!」

銀時「いや俺は別に今の可愛いと思うんだが」

「はあ!?!」

銀さんの言葉に思わず言葉を失ってしまふ……うそだろ！ アレのどこが!?

ユイ「ほつらー！ ユイにゃんは可愛いのですよ！」

「しんじらんねえ……ん?」

ゆり「——ゆり☆にゃん、か……? いやアイツとかぶるな……ゆりっぺ☆にゃ」

「……お前はお前で何やってんだ?」

ゆり「——！！！！！！
は、え!? な、何もやってないわよ!」

「……………」
ゆり「ほ、本当に…………」

「……………」

ゆり「…………ええそうよ、練習してたのよ! 彼ぶりっこ結構好きみたいだし私もやってみようって実践練習してたのよ! 少しでも彼の気を引きたかつたのよ! 滑稽よね、笑ってよ! 笑いなさいよ! 笑うが良いわ! あーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!」

ゆり「あーっはっはっはっはっは!!」
「落ちてけけけけ何か知らんが別の人入ってるぞ!」

朱鷺dゆり「ブツブツブツブツブツ…………」

「おいおいゆりっぺが違うベクトルにいつちまったぞ! ええと…………あーもう!」

銀時「あーもう何やってんだお前は! ぜんぜんなつてねえよ代われ」

「銀さん…………」

野田「貴様、ゆりっぺをどうするつもりだ!」

銀時「馬鹿、励ますだけだよ。女つてのはな? 今の自分が悩んでるものを見抜き、その答えを教えてくれる男にコロツといつちまうもんよ」

いやそんなしなくてもゆりっぺお前にコロツといつてるんだが……

銀時「……あー仲村？」

ゆり「ぐすん……何よ」

銀時「お前はぶりっこよか今みたいな自虐パフォーマーとして売り出したほうが人気に」

「ちよー……つとまつたああああ!!!」

銀時「あ？ 何だよ的確なアドバイスだろうが。絶対人気出るぜ？ 人気出すぎて金

髪美少女スパイになっちまうぜ？」

「だからそれがいけねえっていつてんだろが！ もはや別のキャラじゃん！ 別のアニメじゃん！」

俺は銀さんに激しくツツコミをいれる。忘れてたけどこの人度を外れた非常識だった……!!

銀時「ちつ、しゃーねーな……仲村！」

ゆり「何よ!! どうせ、私なんかより朱鷺d」

「だからストーツプってば!!」

ゆりっぺまでおかしくなってる！ 対応できない!?

銀時「……仲村。お前はお前で可愛いと思うぞ、何もしなくても」

ゆり「ふえっ?! え……あの……」

……何だよこのラブコメ。とりあえず銀さん死ねよ。百回くらい。野田に処刑してもらおうかな。

「おい野——」

野田「」

何かまたトラップにかかつてるしよオオオオオ!! 何だよ! さつきまで平気だったじゃん!!

ユイ「すみませんあたしおいてけぼりなんですけどー!」

ゆり「えへへ……あ、ま、まあそれは置いといて! ……へへ」

おい置いとけてねーぞ頼緩んでるぞ!

ユイ「で!? どうなんですか!?!」

ゆり「とりあえずやる気と他人をムカつかせる才能だけはありそうね」

「逆に言えばそれしかないな」

藤巻「ねえな」

高松「ありませんね」

ユイ「くおらあああああああ!! そんなあいまいな感性で若い芽を摘み取りにかかるなあ! それでもお前から先輩かあ!?!」

「いやものすごい確な感性だと思うんだが? それでも俺らは先輩だ。」

野田「この時点で既に言動に難ありなんだが」

大山「どうするの？」

再度この娘について議論する。俺はもう別にどーでもいいんだが……

ゆり「さつきも言ったけど、やる気だけはありそうね。無駄にうるさいし」
あ、それ言えてるわ。

藤巻「単にミーハーなだけだぜ」

ゆりつぺが数秒考えるそぶりを見せていると、ここで銀さんが口を挟む。

銀時「後はアイツらに任せようぜ？　そもそも、バンドメンバーを俺たちの独断で決めるのが間違ってる」

アイツら……ってーと他のガルデモメンバーか。

「実は？」

銀時「もうめんどくさいしそれっぽいこと言つてこのめんどくさいヤツをアイツらに押し付けてパフエ食いに行きたい」

「あ、教師にあるまじき発言だな！それ俺も行きたい！　けしからん！一緒に行っていい？」

ユイ「こうるあああああああああああ!!　本音と建前が逆になってる!!」

何だよコイツはさつきから。若本さんでも目指してんのか？

ゆり「……もういいわ。先生の言うことももつともだし、後はバンドメンバーに任せ

ましよう」

ユイ「ホントですか!? やったああ!! ギターのひさ子さんと組める! ひさ子さんのあの殺人的な」

銀時「さーいくぞー」

一同『さんせー』

俺たちがぞろぞろと校長室を後にする中、いまだにアイツは一人でガルデモについて語っている。ああ、アイツもアホなんだな……

★—学園大食堂 内—

ゆり「はあ……バンドがあんなんじや、球技大会で大々的な作戦は行えないわねー」
「球技大会ってそんなもんまであんの……つてかそれより何でナチュラルに俺の至福のパフェタイムに紛れ込んでるの?」

みんなで校長室抜けてくからおかしいと思つたよ畜生!!

ゆり「別にいいじゃない自腹なんだし……おーキタキタチョコパフェ!」

仲村は一口アイスをスプーンにすくい、もう一つの質問について答え始める。

ゆり「そりや球技大会だつてあるわよ。普通の学校なんだし……んふーほいひー」

普通の学校には銀髪の天使や不死身の生徒達なんかいないだろうが。

日向「今年はおとなしく見学か?」

今年はって去年までなんかしたのかこの不良どもめ。ってかホントみんないるのな。

ゆり「何いってんの！ もちろん参加するわよ」

その一言に戦線のみんなが仲村を見る。

……どうやら今までとは違ったオペレーションみたいだな。

大山「ま、まともに参加したら消えちゃうんじゃないの!？」

ゆり「もちろんゲリラ参加よ！ いい？ あなた達。それぞれメンバーを集めてチー

ムを作りなさい！ ……一般生徒にも劣る成績をおさめたチームには——」

そこで仲村は大きく息を吸って、少し笑みを浮かべながら……

ゆり「——死よりも恐ろしい罰ゲームね」

一同『はあああああああああああああ!?!』

——死刑宣告を言いやがった。

ユイ「こらあああ!! こっち無視してパフェ食うなあ!」

「もちろん俺は教師だから参加し」

ゆり「しなさい」

ですよねーそう思ったよクソっ!!

ユイ「シカトしてんじやねーぞコラ……あああああ!!」

銀時「あ？ 何大声出してってかお前いつから——」

俺がピンク頭の方を振り向くと——

立華「いつって……その紫の人が『ゲリラ参加よ！』っていったところからだけど」
——あヤツバコレ積んだな。

★

日向「て……天使……!!」

藤巻「……!!」

野田「フン……何の用だ！」

ウチの男性陣が臨戦態勢に入る……

(……おい仲村、そーいや作戦の話外でして平気だったっけ?)

ゆり(ヤバいわね)

(忘れてんなよ一応リーダーだろうが!!)

ゆり(だって！ パフエ食べたかったんだもん！)

お前はパフエと自分を含む俺らの命どっちが大事なんだ……

立華「……ゲリラ参加、って何のこと？」

立華が眉間にしわをよせて聞いてくる。顔こええつて！

大山「え!? あーそれは……」

大山が説明を入れようとするが……大丈夫かお前で？

大山「……………あ、あははは」

「ダメなら引つ込んでろよ!!!」

大山「あうっ」

無駄なことと言わないうちに大山を引つ込ませる……さて、どうしたもんか……

「これはな立華……実はだ、近々この学校に転校生がやつて来るんだか……そいつがどうやら『ゲリラー・サンクア』という名前なんだ。俺らそいつの話しててさー」

ゆり「いやいくらなんでも無理があるだろおおおおおおおおおお!!」

ちよっ!! 黙れ折角俺がいい感じにだましてるところなのに!!

ゆり「こんなんでもだませるの相当の天然よ!」

ああそこらへんなら心配ないな。だって——

立華「そうだったんだ……!」

相当の天然だしな、コイツ。

ゆり「……………」

開いた口が閉まらないって感じだがそんなに驚くことか？

立華「……とりあえず、授業には出てね」

立華が食堂を後にしていく……

……ふう、何とか乗り切ったな……

ゆり「……ま、まあこれ以上ちよつかい出されても面倒だしとりあえず解散！ チームは今日までに決めておくこと！」

仲村が残ったパフエを口にかきいれて食堂を出る。さつて、どうしたもんか……

日向「おい銀さん」

「あ？」

そんな俺に日向が話しかけてくる。まあ、大体内容はわかってるが……

日向「銀さん……俺にはお前が必要だ」

「!!??」
やはり……

「!!??」
ホモコレなのか……

日向「ちげえよ確信すんな！ チームのことだ！」

俺に肩を組んで声を潜めて喋りかけてくる。

日向「組もうぜ銀さん！ 負けたらえらいことになる……ゆりっぺは本気だ」

少し肩を震わせている……昔なんかされたか。

「ちなみに何された？」

日向「どうせすぐ治るからってやんエツチ！を——された」

「ほ、本気でやろうか!! うん!!」

ウソだろあの女もうまともに顔合わせらんねえよ恐すぎだろ!!

「…………で? 他にメンバーは?」

日向「ふっ…………任せろ。人望で生き抜いてきたような男だ最強のチームを作ってやる

ぜ!!」

どの口が言ってたんだか…………

第八訓に続く――

第八訓

「……んで？ 最初は誰んどこ行くの？」

痛いくらい自信満々に歩く日向に向かって聞く。

日向「まずはだ……ひさ子かな」

「ん？ ひさ子ってーと……あー……？」

そんなヤツいたっけか？

日向「ガルデモのメンバーだろうが銀さんこの前がつっぴりからんでたろ!!」

あれれ、そうだっけ？

日向「つたく……アイツは無茶苦茶運動神経いいから今のうちに引き込む!! 引き込

めりやあととはこつちのものよ、いくぜ銀さん！」

★—学園大食堂—

日向「うええ!! 高松のチーム入っちゃったの!？」

ひさ子「うん。」

日向「わっつけわかんねえぜ何で待っててくんねえの!？」

あっさり断られてやんのププツ。

ひさ子「アンタの誘い待ってるほうがわけわかんないわよ。ってかソイツいる時点でアンタと組みたくない」

「は？ 俺？」

俺コイツになんかしたっけ？

ひさ子「とぼけてんじやないわよ……あんたのせいでウチらガルデモは痴女の集まりって評判になってんだから!!」

あーあの時のねえちゃんか。

「ぼっかおめーあの時助けてやっつたろーが！」

ひさ子「それとコレとは別。感謝はしてるけどアンタとは組まない。それじゃ」

精一杯の悪意をこめた言葉をおいて去っていきやがった……

……俺も嫌われたもんだな。

日向「いったー、アイツいたら戦力になったのに……」

「すばらしい人望だな」

日向「いや他人のフリしてっけど半分はアンタのせいだからな？」

いやいや何のことかな？

日向「……仕方がない。ちつとぼっかし卑怯だがリーダー格の松下五段をメンバーに誘おう」

「もう取られてんじゃねえの？　ってかあのロリコン仕事できんのか？」

日向「アイツは待つててくれてるよ……なんつーか、さ。マブダチなんだ。」

ハハッ、照れるな……と続ける日向。

は……お前あのロリコンとそんな深い関係だったの……

★—体育館　裏—

松下「ああ、それなら竹山のチームに入ったぞ？　断る理由もなかったしな」

日向「はああ!？」

「くっく……マブダ……マブダチって……プフェっ!!!」

日向「うああ、ちよつとまてえええ!!」

ちよ、お前、どんだけ必死……ぶはっ!!

日向「なぜだ!?　お前だけは信じてたのに!!」

松下「いや、これから先肉うどんが当たった場合は全てまわしてくるっていうから……」

はっ……フッ……!!

日向「に、肉……」

「友情が……肉うどんに負けてブハっはははははは!!　さつきコイツ、マブダチなんだ、照れるなははっとか言ってプフェ!!」

「ばらすなよってかいつまで笑ってんだよおおお!!」

★―教員棟 裏―

「ひーひー……なかなか笑わせてくれんじやねえかブホツ!!」

日向 「いつまで笑ってんだよ……」

おいおいシーンはないがしつかりTKにも断られてるからってそんなに自暴自棄になるなよ。

「あーあ、俺も『お前がTKみたいになってるからな』って言いたかったぜ全く」

日向 「何の話してんだ……ってか、俺アンタに種目何かとか言ってたっけ?」

あ……そいや聞いてねーや。

「うんにゃ。何すんの?」

日向 「野球だよ」

するってーとあと7人……

「……なあ、ホントにお前に任せて大丈夫か?」

日向 「うぐっ」

自分でも不安になってたかこの野郎。

「お困りのようですなー! ふっふっふ……」

どこからともなくってか真横から声が響いてくる!

「なっ……!! だ、誰だ!」

日向「いやなんでそんなにオーバーリアクション? って何だよ悶絶パフォーマンスのデスメタルボーカルか」

あーあのピンク頭(ユイ)ね。

ユイ「!! こんの……そんなパフォーマンスするキャラに見えるか!」

日向「見えるよ充分……んで、何のようだよ?」

「言つとくが可哀想な男に媚売つても胸はふくらまねえぞ?」

日向「誰が可哀想な男だ!!」

ユイ「誰が貧乳ですか!!!」

両方自覚あんじゃねーかよ。

ユイ「つとそれは置いて……メンバー足りないんでしょ? アタシ戦力になるよー?」

日向「んあ? 戦力? ……ちよつと待てよ、オイ銀さん!」

おもむろに日向が俺を呼ぶ。

ふっ……考えてることは一緒か。

日向「デッドボールを顔面に受け危険球……」

「わかってんじゃねーか。そうなりや相手ピッチャー退場……」

日向「……そうか当たり屋!! よし! 採用だピンク頭!!」

ユイ「お前の脳みそ鼻からとろけて零れ落ちてんじやねーのか!!! フン!!」
特に理由のない暴力が日向を襲う!!

日向「ぐはああ!! つか……おま、俺先輩だかな……?」

「いや後頭部に蹴りはないと思うぜ俺も……」

ユイ「おおとー。先輩のお脳みそおとろけになって、お鼻からおこぼれになっておいでは? ちなみに先生は先生だから一応自重しておきます! ですけど……」

「おいお前こつち向いて警告してるひまとかあんの?」

ユイ「ふえ? 何のことで」

「死ねコラアアアア!!」

ユイ「ぐぶえあ!!!」

あー言わんこつちやない……

顔面にいい蹴りを貰って激しく吹き飛ぶピンク頭。

ユイ「センパイ……イタイです……」

日向「俺だっついてえよ!!!」

ちつ……いちゃいちゃしてんじやねーよ俺へのあてつけか!

「めんどくせー……おいピンク! お前採用」

ユイ「ホントですか!？」

日向「オイ冗談だろ!! 何でこんな頭のネジが外れたヤツと!」

「お前ら全員ネジ外れるどころか腐って落ちてんだろーが。どうせ俺がいたら勝てるんだし、人数集めんのが先だろ」

日向「つ……へえ。結構自信あるんだな、野球やったことあんのか?」

「ねえ」

日向「ねえのかよ!!!」

★—体育館 倉庫—

日向「椎名っちー? どこいんだよ椎名っちー!」

「ねえその椎名っちーのやめてくんない? そのうち『銀時っちー! わんおんわんやろーツス!』とか言いそうで怖いから」

日向「言わねーよ何の話だ!! ……って、お!」

いや割とマジで俺アレ出てないから対応に困る……あ、いたいた椎名っち。

椎名「……何用だ?」

日向「探したぜー? お前運動神経いいじゃん!!」

椎名「測ったこともない」

日向「絶対イケるって!! 野球しよう!」

ユイ「ほうほうチーム名はさしずめ、リトルバス」

日向「だーまってるこの脳内腐敗女が!!」

椎名「……あの日から……」

おいお前ら何か語ってんぞ聞いてやれ。

椎名「その新入りに遅れをとってしまった理由を、ずつと考えていた。」

日向「ギルド降下作戦の話か？ 確かに、新入りの銀さんが生き残ったのは伝説もん

だわな……俺だって途中でリタイアしたのに」

いやお前そり立って勝手に落ちただけだろうが。

椎名「お前の力が私と同等……いやそれ以上あるだろうことはうすうす感づいている

……しかし私も忍術を極めし忍。あの程度、何のことではないはず……」

「いやだからお前らもつと頭鍛えようぜ？ お前なんかおもちゃの犬のために命一つ差

し出してるんだかな？」

椎名「ただ一点及ばなかったとすれば……それは集中力……!」

「いやだから話聞こうぜ？ お前のかわいい物に対する誤認がなきやああはならなかつ

たんだって？ なあ？ 聞いてる？」

椎名「あの日以来私は……この竹箒を指先の一点で支えている!!」

……

ユイ「アホですな」

日向「言うな。アホだが戦力なんだ」

いやお前も言うてやるなよ。

椎名「いい頃合だ……勝負だ——侍」

★—体育館 裏—

「つたく、箒立てて何の勝負だよ?」

椎名「もちろん真剣勝負だ……本気で来い。獲物は持っているな?」

「ああ、一応な」

日向「つてストーツプストップストップ!! 何お前から今からバトっちゃうわ

け!」

「そのつもりだが?」

日向「そりやマズイだろ色々と! つか……アンタ、侍って……」

アレ……言ってなかつたっけかな?

「まあ見ときな………おい! 始めていいぞ」

懐から自分の獲物を引き抜く。それを確認したと同時に椎名が十数本のクナイを投

げてきた。

「こんなもん……牽制にもならねえぜ!!!」

日向「……すげえ!! 全部見切って叩き落した……」

ユイ「あ、あの先生……あんなに強いんですか!？」

ふははは驚いたかてめえら。

「ふっ……こんなもん、麻生太郎でも読める漢字を探すくらい容易いことよ……」

日向「例えばイマイチわからねえし逆に難易度上がってるが、すげえぜ銀さ——」

ユイ「……………」

椎名「……………」

……………え? 何? 何黙ってるの?

日向「……………あ、あの、銀さん……」

「あ? 何だよ」

日向「あの、えっと……さ、刺さってる……額に……」

……………

「——フンツツ!!! ……え? 何が?」

日向「あの……急いで抜いてもわかるから……完全に刺さってたよな? ……大丈夫

か?」

「いや、だから何のことってウアアアアアアアアアアアア!!!」

目をそらしてた椎名からのクナイの追い討ちが頬を掠めた。

日向「なっ……銀さん！」

「て、テメー!! 負傷してるやつに対しての容赦はないのか!!」

ユイ「今認めましたね」

日向「認めたな」

「……くそ! んのヤロ!!」

俺は椎名に向かって突っ込んでいく。ヤバイ早く終わらせねえと恥ずかしい死にそう。

そんな俺に向けてクナイを投げる椎名。

「んなもん牽制にならねえって言ってるんだろ!!」

クナイをはらい椎名のトコへ——あれ? 椎名は?

椎名「——っ!!」

……しまった、後ろ——

椎名「ハアツ!!」

——なんちやって。

椎名「!!」

俺の首をかき切ろうと伸びてきた椎名の腕を見切り、避け、掴み、体勢を大きく崩してやる。

それだけで――

椎名「――あ」

この勝負に、けりがつく。

「オオオオオオオオオオオツ!!!」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオンンンン……

日向「……え、どうなっ……た……?」

ユイ「あれ、見てください先輩! 先生の攻撃――」

……

椎名「……お前、わざとはずしたな」

「それが何か?」

椎名「手加減なんてされる覚えはない!!! 本気で来いと言ったはずだ!!」

「はあ? なんてお前みたいなヤツに本気なんてださねえといけねえんだよめんどくさい」

椎名「……っ」

日向「お、おいそんな言い方……」

「そんなに俺に本気ださせてえんならな――」

椎名「……?」

「——もっと強くなりやいーじゃねーかよ」

★—第二連絡橋—

「……よっし、これで四人そろったな」

日向「つてかいきなりバトってんじやねーよおおおおお!!!」

日向のシャウトが俺の耳に刺さっていく。

「ちよ、ウルセ何だよ!!」

日向「はあ……はあ……も、もういい。言つてもどうせ無駄だしな」

「じゃあ突然叫ぶなよ恐いだろーが。」

日向「はいはい悪かったよ……えーつと、あと最低でも五人か……しかたねえ、アイ

ツを入れるしかねえな……」

ユイ「アイツというと……ふむふむアホばかり増えていきますね!」

★—第二連絡橋下 河原—

野田「……はっ! むん! フツ……ていいいいいいいい!!」

……文字だけじゃつたわらねえが、野田は今ハルバートを使いこなすトレーニングを

しています。

日向「アイツを誘うやつなんかいいねえ。直情的でゆりつぺ以外のヤツの指示には従わ

ないからな」

それ遠まわしに友達いないって言ってるの？　いくらなんでもあんまりじゃない？

コイ「つまりあの人もアホなんですか？」

日向「だがアホは利用できる！　しかも見る、長い棒を振らせたなら右に出るやつはない」

「んじゃ、いつちよ誘ってみますか」

野田「フン。遂に来たか……決着の時がな!!」

ホントに誰からも誘われなかったのかよ……

野田「さあ……どっちがゆりつぺに相応しいか決めようじゃないか……坂田!!」

えー何で俺……？

日向「うあああだがまず小手調べ！　球技大会でお前とコイツ、どちらの運動神経が上か見せてもらおう！」

野田「何故？」

おい流石のアホも騙せなくなってきたんでんぞ大丈夫か？

日向「強いだけじゃゆりつぺは振り向いてくれないぜ……？」

野田「……………」

いやさすがにそれは

野田「フン、いいだろう」

「アホだ……」

ユイ「利用されることに気付いていない……」

★—学習棟A棟 屋上—

……結局、それ以上戦線メンバーは集まらず……

日向「……くそっ！」

日向はとてモイライラしていた。

「戦線メンバーほとんど他にとられてんじゃねーかよ。ついてく人を間違えたか俺？」

椎名「まだ五人だぞ？ どうするつもりだ？」

器用に箒を指で支え続けている椎名が尋ねる。

日向「……その箒降ろせないのか？ 真面目に喋っててもギャグにしか見えねえぞ

……」

椎名「それは私の集中力が途切れた時だ」

お前は試合中もずっとそれでいくつもりかアホも休み休み言え。

「ハア……おい日向！ 残りのメンバーのあて、ちゃんとあるんだろうな？」

日向「……」

「？ おい日向!!」

日向「あ、？」

「どうした、日射病ですか？」

日向「ああいや、なんでもねえ。ちよつとボーつとしちまった。」

……………

日向がぼつが悪そうに頭を押さえる。

日向「そうか、しよーがねえな。あとは一般生徒でまかなうか……………んあ？」

日向がふいに目をそらす。

ユイ「はいはい!! 私、仲のいい友達連れてきますよー!!」

「あん？ 友達……………？ つてか俺が集めたほうがはええんじや……………？」

★—学習棟C棟 廊下—

1 『あ、あたしたち……………その』

2 『ユイにやんさんのファンっていうか……………』

3 『勝手に親衛隊っていうか—』

……………

ユイ「ユイにやんは才能に驕ることなく、地道にストリートライブとか積み重ねてきてますから!!」

あーその……………なんといいですか……………

日向「ミーハー女ばっかじゃねえかこんなもん戦力になるか……？」
おいお前俺が我慢してることを！

俺は一つ大きなため息をつく……こんなんで大丈夫かよ……

「あー日向？ こいつら合わせても八人なんだが？ もうお前影分身でもしろよいつそのこと」

日向「できるかそんな高等忍術！」

日向も大きなため息をつく。そしてこう続けた。

日向「……しかたねえ、コレだけそろえば充分だろ！ そもそもゲリラ参戦だ。センター抜きにして、ライトとレフトを中間より守らせれば充分さ！」

「いいのかー、そんなん………で………」

……あーそういえば忘れてたわ……

「……おーい、日向、うしろ………」

日向「ん？ 何だよ後ろに何か……うあああ!!」

外でこんな話したら――

立華「……………」

……………寄ってくるの忘れてた。

★

立華「……………あの」

日向「……………何のようだよ？俺たちやなんもしてねえぜ？」
今からするんだけどな。

立華「そうじゃなくて……………転校生」

「は？」

立華「今ゲリラーって聞こえたから……………いつ来るの？」

日向「……………あ？」

ユイ「……………アホですね」

コイツマジか。

「あ、ああ……………もうすぐ来る、みたいだな……………」

立華「そう……………楽しみ……………」

そういうって立華はテケテケと歩いていってしまった……………

……………え……………

「えつと……………じ、じゃあ日向！球技大会がんばるぞー」

日向「うえ!! お、おー」

一同「お……………」

第九訓につづく……………

第九訓

★―球技大会第一会場 野球場―

TK「Fooooooooo!!」

カキイイイイイイイイン!!!

藤巻「おおおおお!!」

TKの振ったバットがボールを見事に捕らえた。ボールははるか遠くへ消えていく

……

審判『ホ、ホームラン!』

一塁に向けてのんびりと走り出すTKに歓喜の声上がる。

藤巻「うおお流石だぜTK! 死ぬまで何やってたか謎だらけだっぜい!!!」

TKはそれに答えるようによくわからないことを口走っている。

TK「don't stop dancing!」

★―球技大会第二会場 グラウンド―

松下「――フンツツ!!」

モブ「うおおホームランだ!!」

★―対天使用作戦本部―

ゆり「ふむふむ……ゲリラ作戦は順調な滑り出しのようねー。さつて、天使ちゃんのご気分はいかがかしら……ふふっ♪」

まるでずっと欲しかった服でも買ってもらった少女のように仲村ゆりは笑いをこぼす。

★

ユイ「おお!! 我らが戦線チームはどこも順調に勝ち残ってますよー!!」

日向「んじや、いっちょ俺らも、」

「フン………行くとすつか!!」

一同「おー!!」

★

『またかよ………』

日向「この次に進めんのは俺たちのチームに勝った方、つてことで! ジャンケンしてくんない?」

『………どんどんチームが増えてきやがる………』

一般生徒たちは自分らの試合を邪魔されたことでイライラしていた。

まあフツの反応ですよね……

おいよくねーぞどういうことだ!!

日向「打順はつと……じゃ、一番！ 銀さん頼むわ」

「ちつ……うーいいいいいい!!」

突然野田が俺を押しつけて日向の前に出る。何だよ!?

野田「俺は!？」

それくらい落ち着いて聞けないのかお前はアホかアホだったなすまん!

日向「まあ待て。んで二番が俺、椎名が三番。そして四番が——」

そこで日向は野田の肩に手を置き、

日向「——お前だ」

四番に野田を指名する。

言われたとたんに顔が引き締まったところを見ると、こんなアホでも四番の意味くら

いは知ってるらしい。

日向「走者一掃しねーと、お前の負けだかな?」

野田「フン……いいだろう! ……容易いこと」

お前はそれしか言えねーのか。

日向「うっし! 七点以上でコールドだ! 天使が来る前に片付けちまおうぜ!」

日向「よーし行くぞ! ファイツおおおおおおう!!」

一同「……………」

日向「…………お、驚くべき団結力のなさだな!! うん!」
自分がスベったの団結力のせいにするなよ。

★

審判『…………プレイボール!』

一瞬何で先生が参加してんの? みたいな目で見られたがそんなもんはもう無視だ。
常識を捨てろ俺。

コールド狙いね…………そんなじゃ、いつちよ派手にやってみつか!

相手ピッチャー『……………つ!!』

俺の後ろのキャッチャーミットめがけて鋭い玉が飛んでくる。

「ぞら…………よつとオ!!」

カキイイイイイイイイイインンン…………

うむうむ、狙いどおり。

日向「ほ、ホームラン!!」

ユイ「スゴイです先生! 戦闘といい無駄にスペック高いです!!」

おいてめえ後で覚えとけよ。

俺は塁を回る。肩を落としてる相手メンバーを見下しながらゆっくり走るってーの

はなかなか心地いいもんだな。

★

野田 「つ……あれくらいのこと、俺だつて出来る片手で出来る！」

日向 「ほーう？ んじや俺と椎名が意地でも罍にでるから、ヨロシク四番！」

野田 「フン……任せておけ!!」

★

——カキイイイイイイイインン……

——キイイイイイイイインン……

さつてと……ベンチ戻つてきたことだしあいつらは……

……ん。順調に罍に出れてるな。次は……

野田 「ふつ。全く……遊びもいとこだな……」

……大丈夫か？ バットの持ち方からしてアホっぽいし。

片手は……まあ椎名もだったからいいとして……逆手で持つなよバットを……

椎名も椎名でホントに片手で箒立てながら打つてたしよ……ホントこの戦線何なの

? アホしかいねえの?

相手キヤツチャー『……いいのか?』

ほら相手からも心配されてるよ? 今のうちに直しといたほうがいいって恥ずかし

いって！

野田「何が？」

あダメだあの子素だわ素であれがホントの持ち方だと思ってるわアホだから。

相手キャッチャー『……………つ、来い!!!』

ヤベーよひやくぱーナメてると思われたよ！

相手ピッチャー『……………フンっ!!!』

野田「てあれやあ！」

キイイイイイイイイン!!

うおお意外と伸びるよコレ！ 伸びる伸びる伸びる……

審判『ホームラン!!』

おいマジかよあれで!?

……………アホってすげえんだな……………

相手キャッチャー『そんなあ……………』

……………まあ、その後のミーハー軍団はいわずもがなとして……

この回の俺らの得点は……………俺がソロ、野田がスリーランホームランを決めたから……

四点か。

ワールドまであと三点以上……………めんどくせえ。

★

そんなこんなで、相手の攻撃が始まった！

「んじや日向、テキトーに頼むわ」

俺は日向のグローブにボールを押し付ける。

日向「うええ!!? 俺が投げんのかよ!」

「いやな? 俺が投げてもいいんだが……」

日向「だが、何だよ?」

「なぜか俺が投げたら野田が変に張り合って試合にならないような気がしてな……」

日向「何だよソレ妙に説得力あるな……」

いやなぜだろう。虫の知らせってやつかな?

日向「……わかったよ。ただし、俺は変化球投げらんねえからしつかり取れよ!」

「りよーかい……」

★

日向がフォームへと入る……

日向「……ふっ!!」

相手バッター『うあああつ!』

おお結構速い!

審判『ストライク!』

……なかなかどうして、案外いいチームみたいだな。

★

その後相手の全ての攻撃を0点に抑え、二回に一点、三回に三点取った時点で俺たちのコールドになった。

その時椎名の高く上がったボールをスライディングでキャッチするというフラインプレーが箒を装備することによって奇跡的にアホにしか見えなかった。

すごいな、ただの箒にそんな効果が……!!

★

遊佐『……日向チーム。三回、コールド勝ちです。』

ゆり「……よし、みんな順当に勝ちあがってきてるわね」

望遠鏡を片手に戦線の様子を観察しながらゆりは遊佐へと繋がっている通信機に呟く。

ゆり「みんな死より恐ろしい罰ゲームとやらを恐れて必死ね。滑稽だわ♪」

遊佐『戦線ではゆりっぺさんの罰ゲームを受けた者は発狂し、人格が変わると有名ですから。かくゆう私も……』

ゆり「そうね……ってどんな罰ゲームよ! それに私あなたに何もしてないでしょ

!

遊佐『冗談です。でも数年前の日向さんのアレは少しやりすぎかと……』

ゆり「いいじゃんすぐ治るんだし……おおっと、あぶりだしに成功ね……」

そう言ったゆりの望遠鏡に映るのは生徒会長である天使と一般生徒の副会長、そしてその後ろにいたのはなぜかこの学校の野球部レギュラー達だった。

ゆり「こっちは武器もなし、あるのはバットとグローブ……はたしてどんな“平和的解決”を求めるのかしら……つてか後ろの奴ら見たらだいたいわかるけど。……楽しんでみね」

★

俺の目の前に広がる光景は、堂々とここまで一緒にあがってきた仲間たちと、それに立ちふさがる生徒会会長・副会長ならびに野球部レギュラーの方々だった。

なんか、某漫画みたいにドンツツ!! つて効果音が似合うような光景だが一体天使が俺らに何しよってんだ?

天使「……あなたたちのチームは参加登録していない」

銀時「いやいや生徒会長。こういうのは参加することに意義があるのでですよ」

……やっぱりゲリラ参加を咎めに来たか。

直井「生徒会副会長の直井です。我々は生徒会チームを結成しました」

おもむろに隣の一一般生徒の副会長が話しに入ってきた。

生徒会チームつて……後ろの野球部レギュラー達のことかよ!?

直井「あなたが関わるチームは、私たちが”正当な手段”で排除させていただきます」

つ……いくらなんでも勝てるわけねーじゃん。

ユイ「ハン！ 頭洗って待つとけよなオラア!!!」

ああ……コイツはいつでもアホなんだな……

銀時「ばつか違いーよ、洗うのは手だ。頭だったら衛生上の身だしなみだろうが」

ユイ「あそつかー！ 流石先生！」

「いやそれも違うから！ それも身だしなみだから！」

銀時「じゃチ○○^ピ?」

「下ネタかよ今から何すんだよ俺らは!!」

全くよ……何でこんなマイペースかなこいつらは……

★

そつからの戦線メンバーの試合は散々なものになった……

野球部ピッチャーはまともに塁にも出させてもらえず――

出たとしても守備が堅すぎてすぐアウト――

奴らが打つ玉は全て点に繋がり——

遊佐『高松チーム、竹山チーム。二回コールド負けです』

ゆり「くううう!! あんなの反則じゃない!!」

俺達は、窮地に立たされていた。

ゆり「はあ……残りは一チームか……誰のチーム?」

遊佐『日向さんのチームです』

ゆり「ぐはつ! ……天使にフェアにぎやふんと言わせるつもりだったのに……全く

使えない奴らね! ん……あれ、でも日向くんのチームって……」

ゆり「……ま、まあ最後の試合だし? ちよつくら応援にでも行ってみようかしらね

? 別にだれかれが気になるとかじゃなく!」

遊佐『誰に言い訳してるんですか?』

★

そして——

審判『ではこれより、決勝戦を始めます!』

俺らの試合が始まった!

——初回、俺らの攻撃。

まずは銀さん、俺、椎名が何とか出塁して満塁に。そこで野田のホームランで大量四得点！ 今日だけ大好きだぜ野田!!

「……銀さん、ホームランうたねえのか？」

ベンチで銀さんに聞いてみる。銀さんがゴロなんて珍しいな……

銀時「ぼつか、かつ飛ばしすぎたらやべえだろ？ 敬遠にされちまう」

「あそつか」

そこまで頭回らなかった……

「じゃ、野田にもあんま飛ばすなって言った方が……」

銀時「あいつに相手を取りにくいボール飛ばせてか？ いくらなんでも無理がある

さ。アホで不器用だからな、今のままでいい」

取れるだけ取つちまえ、と言った銀さんの顔を見ると、なんとなく……何か大丈夫な

気がしてきた。

……なんだかんだで先生なんだな……

——一回の裏、相手の攻撃が始まった！

ピッチャーは前の試合に引き続き俺が勤めたが、流石に野球部、難なく飛ばしてくる。

「……………タイム！」

これはいつたんタイムを取って銀さんと話し合うべきだな。

「やべえ……………ウチの外野はザルだから飛ばされたらしまいだぞ……………」

銀時「うし。上出来だ。そろそろピッチャー代わってやるよ……………あと、こんな時の秘密兵器を用意しちゃうのが俺みたいな出来る男だよな」

「はあ？」

銀さんが顎で外野を指す。すると、そこには見慣れた柔道着を身につけ外野に立つ俺のマブダチの姿があった。

「ま……………松下五段!! 何で!?!」

銀時「いやな? 『俺んとこの助っ人に来てくれたら今度天使とデートさせてやる』って言ったら一瞬で駆けつけてくれた!」

松下五段しつかりロリコンが板についてるがもうソレでいいんだな…………

と、ともかく!

ユイ「ふえっ!?!」

「よくやったぜ銀さん! コレで外野の守備もバッチリだぜ!」

ユイ「ダダダダダダイダイチアダダダセンパイいたいはず! いたいはず!!」

おおっとはずみで喜びの卍固めしちまったわりいな!

ユイ「イダダダ何でなんでワタシがががががああとで殺す!!」

……その後の松下五段の活躍はソレはもうすごかった!

外野に行つたボールはどこに飛んでもどんな体勢でも取つてくれる。

——逆に言えばどんだけ天使とデートしたいんだよつて話なんだが……

……まあいい! これでウチにも勝ちの目が見えてきたつてもんよ! 戦線ナメンな!

審判『スリーアウト、チェンジ!』

俺達がベンチへ戻ると……なぜかゆりっぺがいた。なぜかありえないくらい笑顔で。こわつ怖いよ! 人でも殺したのか!?

ゆり「あんたたちやるじゃない! この調子なら勝てるわ! 天使の思うままにならないことがかつてあつたかしら……? いい気味ね♪」

おい本音漏れてんぞ。

遊佐「ゆりっぺさん、悪役のようですよ?」

「っ! うおお遊佐!! お前いつから!」

突然ひよこつとでてくんなよびつくりするだろうが!

遊佐「いえ。あちらの茂みから期を窺っていたもので……それより、レモンのはちみ

つ漬けを作つてきました。食べてください」

遊佐がタツパーに丁寧に閉じてあるレモンを差し出す。

「おお流石遊佐気が利くぜ！」

ゆり「何よ私は利かないつての!?!」

一切れ摘んで口に放る……うおお絶品!!

銀時「うおすつげコレうめーわ。サラッとこういうの用意できる女の子っていいよね」

ゆり「っ!?! ……………」

あ、地雷踏んだ。

遊佐「……………」

ゆり「……………」

遊佐「……フツ」

ゆり「うううウガアアアアアアア!!! 何なのよ!!!」

おいひそかに女の戦い繰り広げんな!

銀時「おいそろそろ行くぞ！」

あなたはこいつら何とかしてから……って気付いてねえか。この人も結構ニブいな。

「……………おうー！」

——そっからはもう点取り合戦だった。

どっちも取って取られて……守るより攻めろって感じた。

まあウチのミーハー達は役に立たないとしても……

野田・銀さん・松下五段の三人を敬遠にするのは流石に無理があつたらしく、点が入らなくていく。

——そして——

「勝てるかも、しれない……最終回、一点差——」

——ツアアウト……ランナー二・三塁……

銀時「……タイム！」

……

銀時「やべえな。ぶっちゃけ俺素人だし、おさえらんねえ……」

……

銀時「……おい、ひできくーん？」

「え……？」

銀時「どうした？ 体調悪いならベンチに引つ込みやがれ」

「あ、いやいや！ 昔……生きていた頃に、似たようなことがあつたっけ、ってな」

「……スゲー大事な試合だったんだ——」

銀時 「……おい、お前……震えてるぞ」

え？

「は？ ……つそつか……？ 変だな……」

銀時 「……話したいことがあるなら言ってみろ。聞いてやつから」

……この人は本当に——

「……よく、覚えてねえんだけどさ……俺、野球部でさ。……甲子園目指しててさ」
「死にそうに暑くて、ロン中泥の味しかななくて……そういうのは覚えてんだ——」

★

「最後の地方大会の最終回。ツーアウトで、ランナーが二・三塁にいてさ……」

「……簡単な、セカンドフライがあがったんだ——」

——カキーン……

「ほぼ定位置……ただ」

「それを……取れたのか、落としちまったのか——」

「それだけは、思い出せねえんだ——」

「……いや、取れてたんなら忘れるワケねえよな……」

「きつと……取れなかったんだ」

《ちっ！ かける声もみつからねえ……！》

《みんなの三年間の努力を、一人でムダにしちまったんだからなあ……》

《強烈な疫病神だよ……!!》

《あんま言うなよー。さつきから、動いてねえぜ？ アイツ》

『—————』

《立ち直れんのかよ……》

《俺ちよつと心配だから、センパイに相談してみるよ——》

《よお、話しは聞いたぜ？》

『……………』

《大変だったなあ》

『……………』

《辛いだろう？》

『……………』

《そんなお前に今、必要なのは——》

『……………？』

《こーいうのじゃないか？》

「そのセンパイは一つの袋を俺に差し出した。中には白いコナが入ってた」

《ダーイジヨブ！ まあ……気軽に一回だけでいいから。試してみろよ、な？》

《……楽になれるぜ？》

『楽に——なれる？』

「……楽になれる、全部忘れられる。この苦しみから、この罪悪感から虚無感から!! 全

部開放される——」

「そのときは、そう思ったよ」



「……まあ、結果こんなトコ来る羽目になったけどな」

審判『おい！ まだ終わらんのか!!』

「あ……ハイすいません!! 銀さん、ピッチャー頼むぜ！」

銀時「……………おう」

——ツアアウト、二・三塁。

みんなが注目して見ている。この試合の結末を——

銀時「——ッ!!」

「決めろオ！ 銀さん！」

相手バッター『……………フンッ!!』

——カキーンン……

銀時「……つくつそ……!!」

……!!

——まさか——

セカンドフライ——

「あの時と——同じだ——」

コイツを取れば——終わるのか——？

——そいつは——

——最高に気持ちがいいな……——

銀時「は——いちよつとどいてくれな」

——へ？

銀時「だらつしやああああああああああああああ!!」

いつの間に隣にいた銀さんが……持ってた木刀でボールを無茶苦茶に、がむしやらにどこかへ飛ばしてしまった。

銀時「ふーっ、飛んだ飛んだ」

審判『ホームイン!』

あ………

「……………めえ」

銀時「あ？」

「……………てめえ何しやがる!!!」

銀さんの胸倉に力任せにつかみかかる。

「アレ取れてたら勝ちだったのに!! ……いや、んなことはもうどうでもいい。アレ取れてたら!! 俺は——」

銀時「消えることができたのに、か？」

「——!!」

逆に銀さんも俺の胸倉を掴んでくる。

銀時「甘えたこといつてんじゃねーよ」

銀時「聞いた話じゃお前、戦線立ち上げ時からいる古株なんだってなあ？」

銀時「戦線立ち上げ前からアイツ仲村にずっと付いていつてたんだってなあ？」

銀時「今までアイツと一緒に戦線支えてきたんだってなあ!？」

「それがどうしたんだよ!!」

銀時「だったら!! 背負ったもん放り投げて勝手に一人で消えようとしてんじゃねえ

!!」

「……………」

銀時「アイツを支えるって決めたんだろう？ アイツと一緒に戦線背負っていくって決めたんだろう!!」

銀時「ならアイツらに背を向けて逃げるようなことしてんじやねえよ!!」

銀時「消えんなら背負ってるもんに全部カタあつけて、誰の迷惑にもならねえようにしてから消えやがれ!!!」

.....

銀時「生前はクスリに逃げて、今回はこの世界そのものから逃げるのか？」

銀時「もうやめにしようや。そんなこと」

銀時「一度くらい前を向いて、立ち向かってみようや」

銀時「進めなかつたら、俺達がそのきつたねえ背中押してやつからよ」

銀時「止まっちまったら、俺達が代わりに進んで、お前の道を作ってやつからよ」

.....

銀さんが俺の胸倉から手を放す。

膝から崩れ落ちる俺。

「ハハ……何なんだよアンタ、本当に現国の教師かよ？ 言ってること全く意味わかんねえぜ……」

銀時「……………」

「だけど——」

銀時「……………」

「アンタの言葉は——なんかこう、魂に届いてくる」

銀時「……充分だろ」

審判『ホームイン！』

銀時「あ」

審判『ゲームセット！』

銀時「……………ひなて」

「言つとくが、はたから見たらアンタが勝手にボールかつ飛ばして逆ギレして俺に掴みかかったようにしか見えなからな？」

俺はベンチを指差す。

「アイツの怒りを買ったのは、多分アンタだけだぜ？」

そこには、なぜだろうか俺が見たこともないような装備を固めたゆりつぺが立っている。

モチロン標的は——銀さんだろう。

ゆつくりと、しかし確実にゆりつぺがこちらに近付いている。

おそらく事情を知らない俺以外のヤツと銀さんには、その足音がカウントダウンに聞

こえたことだろう。

何の、とは——恐ろしくて俺には言えないがな。

銀時「ちよ待て仲村話せばわかる落ち着ゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲグブエエエエエエ
エエエエエ!!!」

銀時「裂ける裂ける裂けアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ア!!!!」

その断末魔の叫び声は、俺達の球技大会の終わりを告げるように、ただひたすら。ひ
たすらに響いた。

で処分したので問題なし。今後このような事がないように生徒に厳重注意すべき。

第十訓

ゆり「ついに……来るべき時が来た、か」

おい早速中二発言してんじやねえよ恥ずかしいだが。

不本意だが俺の所属している戦線のリーダー、仲村ゆりはいつものメンツの前に立ち、眩いた。

「何ですか？ お菓子パーチーでもしようってのかズリイ俺も呼べやコラ」

ゆり「そんなのだったらどれだけ良かったか……」

憂いをおびた表情で、今までの人生を振り返るようなそぶりをする。

ゆり「——天使の猛攻が始まる……！」

!! 天使の、猛攻って……

一気に全身に力がめぐる。どうやら一大事なようだ。

「……へえ、何だよ？ 遂にやつこさん俺らをつぶしにかかろうってか？」

ゆり「そんなんじゃないわ」

じゃあ、何だつて——

ゆり「……テストが近いのよ」

!!! な………テ、テストが近いって……!!!

それは……つまり………!!!

「——ただテスト面倒なだけじゃねーかアアアアア!! お前らテストくらい真面目に受けるよ!!」

変な期待させやがってクソが！ 一気に力抜けたわ!!

ゆり「ぼつかあなた何言ってるの!? まともに受けたら消えちゃうから困ってんじゃない!! これは立派な一大事よ!!」

いやそうは言ってもな……

高松「この時期天使は、私たちにテストを受けさせいい点を取るように仕向けてきます。……その攻撃に負けて何人の同士が帰らぬ人となったか……くっ!」

おいおいこんなにまぬけな話なのに何でこんなに重いんだよ!

ゆり「けどこのテスト期間……逆に天使を落とすし入れる大きなチャンスとなりえるかもしれない!」

藤巻「何かいいことを思いついたみてえだなゆりっぺ。聞かせてもらおうぜ……」

ゆり「……天使のテストの邪魔を徹底的に行い、赤点を取らせまくる。そして、校内順位最下位に突き落とす」

「……おいおいえらく陰湿な手を使うもんだなりリーダー様よ」

大山「それが何になるの？」

ゆり「名誉の失墜——生徒会長として彼女は威厳を保っていられるかしら？」

そこで仲村は意地の悪い笑みを浮かべた。

野田「それで天使が弱くなると？」

ゆり「少なくとも教師や一般生徒の見る目が変わるわ。その行いには今までなかった変化が生じる……」

松下「例えば、どんな？」

ゆり「さあ？　そこまで私には読めない」

松下「じゃあ意味なんてないんじゃないのか？」

ゆり「そうね……けど、彼女がもし神の創造物である天使なんかじゃなく、その精神は鋼でないとしたら。私たちと同じ人の魂であるのなら。その名誉の失墜は彼女に精神的な打撃を与えることになる……」

……

「テメーの背負う二つ名は……鋼。鋼の——鍊金術師！」

日向「っ……いいねえ、その重つ苦しい感じ。背負ってやろうじゃねーの!!」

ゆり「つてあなたたち全然喋らないと思つたら何ハガレン名シーンごっこやってんのよ! それに日向くんあなたにいたってはソレ今回の初台詞よいの!!」

日向「いやなんかむつかしい話してるからさ、頭追いつかなくて」

ゆり「とことん馬鹿ね……野田くんでも聞けてるのに」

「あ、日向ソレ俺も俺も——」

ゆり「あなたは聞く気がないだけでしょ殺されたいの?」

うえーやっぱバレてた?

ゆり「……まあいいわ。まずは今回の作戦メンバーを決める。天使のクラスでテストを受けるための根回しはすでに完了しているわ」

ホントこいつらの時々見せる異常な行動力何なの? 恐いんだが。

藤巻「じゃあメンバー全員で固めちまったらいいんじゃないのかあ?」

ゆり「『じゃねえかあ?』じゃないわよ! ミスは許されないのでから!!」

そもそも作戦自体がミスだらけな気もするが……

ゆり「作戦が途中でバレたら私たちはすぐにも別の教室に移されて、天使に赤点を取らせる細工ができなくなるのよ?」

元々それが普通だ。

野田「なるほど……なら俺はパスだ」

「おおよくわかってんじやねえかアホのくせに」

日向「お前が成長してくれて俺は嬉しいよ、うん」

高松「まあ妥当な判断でしょうね」

野田「お前ら全員狩られたいか？」

やつてみるコラ。

ゆり「まあ野田くんは今回役に立たないとして……今回のメンバーは——」

野田「……………」

おい野田そんな肩落とすなって笑えてくんだろーが。

息を吸い、今回のオペレーションのメンバーを発表する。

俺いませんようにいませんように！！

ゆり「——高松くん、日向くん、大山くん、竹山くんで行くわ」

っしややつたこれでダラダラでき

ゆり「ああちなみに先生は言わなくてもわかっているわね？ 頑張つてー！！」

「期待さすなコノヤロオオオオ!!! 最近俺使いきだろいい加減疲れたわ！」

ゆり「いや先生という立場は今回のオペレーションでも有利に働くだろーし……」

そもそもあなた一応ここでは主人公なのに出版減らされてもいいの？」

「精一杯頑張らせていただきます仲村様」

ゆり「よろしい。今回のメンバーは見た目が普通なヤツを選んだだけだから、選ばれなかったからって悲観しなくていいわ」

いや喜ぶやつはいれど悲しむやつはいないと思うぞ？　と言ったら殺されそうなので言わないでおく。

ゆり「うん。賢明な判断ね」

「人の心を読むなバカ」

ゆり「はいはい……じゃあ」

ゆり「オペレーション——スタート!!」

★—学習棟B棟 教室—

黒板にはこの教室と同じ数の席が書いてある紙が張られた。それにはその席にあたる番号が振られている。

ゆり「テストの席はその日の朝、くじ引きで決定される。これで天使の近くの席でないと、細工は一気に困難になるわ」

そこで俺らの視線は立華の席に集中する。

黒板向かって一番右の列……前から二番目、か。

ゆり「いい？ あの席の前を引き当てなさい」
またサラリと無茶を……

日向「そんなじゃま、俺から引かせてもらおうかなー」

日向が教卓のくじを引きに行く。ちなみに立華の前の席の番号は……36か。
ゆり「まーアイツの事だし一つ前は無理か」

「少しは期待してやれよ同意見だが」

日向「20……ハズレたー」

軽い感じで日向がこっちに戻ってくる。

ゆり「流石日向くん期待を裏切らないわね悪い意味で」

日向「うえ!? 何だよ……何かテレるぜ」

褒めてねえ。

日向「……なんか気のせいかな銀さんがつめたい気がする……」

高松「では、次はこの私が」

次にツラもどきがくじを引きに行く。

高松「11番……天使からは遠いです」

「じゃあ次、大山行っていい」

大山「う、うん……」

無駄に力の入った腕でくじを引く。そんなに緊張するのか、大変そうだな。

大山「33……あははー、全然ダメだー……あうう……」

いやそんなに落ち込まなくても。

ゆり「次、あなた行きなさい」

「いや俺先生ですけど!?!」

ゆり「え? ……ああごめんなさい。なんとなく次はあなたが行くのかなって何か流れる的に」

おい変なもん拾ってんじやねえよ馬鹿。

ゆり「じゃあ私か……何が出るかな♪」

いやそんなくじ引き楽しまれても。

ゆり「……25、つと。オレも遠いな」

「だから変なもん拾うなってんだバカヤロウ!!」

ゆり「何よあなたができないから私が代わりにやっただけでしょーが!! 何か文句でも!?!」

「大アリだわ!! そして何のことかわからない方は原作のアニメ第五話を四分十八秒あたりからチェックだ!!」

ゆり「お前も大概じゃねーかあああああああ!!」

高松「あの、席順はいいのですか？」

ゆり「あああああああ!!　そうよ席順!!　誰かいらないの!?　横でも前でもいいから!!」

てか席順一つでダメになる作戦って……

竹山「一つ前です」

竹山がくじを掲げてそう言った。持つてるくじには36と書かれている。

流石だぜ竹山!　心なしか眼鏡がキラーンってなってる気がするよ竹山!!

ゆり「よっしやあ!」

「同じ眼鏡なのにヅラとはえらい違いだな竹山よ!　よくやった竹山!」

高松「ヅラじゃないのに……」

竹山「クライストって……」

日向「おおっと銀さんの発言によって二人がしよぼくれちまった!」

ゆり「ま、それはいいとして……竹山くん!」

竹山「……何をすればいいんですか?　それと僕のことはクライス」

ゆり「あなたは答案用紙が配られる際、二枚持つておきなさい!　一枚はもちろんあなたのね。それでもう一枚は答案を回収する時天使のものとすりかえる」

うおお流石我らがリーダー、シカトとはメンタルにくることを簡単にやってくれる。

ゆり「そっちの答案用紙は白紙に……いや、白紙じゃ逆に不自然にとられるわね……うん。バカみたいな答えを並べておいて」

竹山「と、言われましても……」

「んなんでーでもいいだろうが。お前の持つてるそういうビデオの題名でも並べとけ」

竹山「物理のテストですよ!? というか、そんなもの一本も持ってません!」

「……お前のパソコンにいくつか隠しフォルダにパスワードがかかっているものがあつたんだが?」

竹山「フン! 甘いですね、僕のセキュリティはそんなものでは……あ」

「……あーあ」

ゆり「……もうそれでいいから書いときなさい。あとしばらく私に話しかけないでねクズ」

クズ「せめて、せめて竹山と呼んでください……」

つーか俺が言うのもなんだがそれ白紙よかよっぽどおっかないことにならない?

高松「では、回収の時はどうするのですか?」

ゆり「ふっ……日向くん!!」

日向「——これが人体練成を……カミサマとやらの領域を侵した、咎人の……」

ゆり「……」

日向「……………すまん」

何だお前、お前の中ではハガレンがきてるのか？

ゆり「……………答案を回収する時、タイミングを見計らって何かアクションを起こしなさい。全員がそつちに集中するように」

日向「んなムチャな…………」

ゆり「さっきのやればいいじゃない」

日向「できるか!!」

「あんなノリノリだったやつが何を言うか」

ゆり「で、その瞬間を見計らって竹山くんが後ろの席の回収し終えた答案用紙から天使の用紙を引き抜き、偽者とすりかえる」

日向「そんな都合よくいくか…………？」

ゆり「とにかく、こんなただ見た目が普通なだけだとは思わなかったけど、想定外のこと起きてても、慌てずにみんなでフォローしあっていくのよ!」

『だけ』に重みを感じる…………

竹山「…………あ、ちょっと待ってください。名前の欄には何て書けばいいんでしょう…………？」

ゆり「……………あー! そういえば名前の欄何書いたらいいんだろう! 天使の

名前ってなんだったつけ!？」

竹山「……………」

こっから竹山は空気がそうか分かったぜ!

「立華奏だろ? 『立』つに中華の『華』で音を『奏』でるって書いて」

ゆり「……………」

日向「……………」

大山「……………あ、あははは」

高松「……………」

竹山「……………」

「ん? 何だよテメーら?」

★

立華「……………なんか大切なフラグが壊された気がする……………」

第十一訓に続く――

第十一訓

……そろそろ、かな。

「うーし、テメーら座れー。自分勝手に立って歩いてるヤツは俺が財布の中身抜き取ってやるからなー」

『アンタが一番自分勝手じゃねえか!!』

戦線メンバーと一般生徒を座らせる。

「えーと、先に言っとくがカンニングは禁止な。やるんならバレないようにやれー。バレたら俺まで怒られんだかな？」

『もうおよそ教師の言葉とは思えねえよ……』

だつて俺本当は教師じゃねえもん、つてかまたお前か。いつもいつもツツコんできやがって何なんだ？

「えーと、物理のテストな。せいぜい頑張れー。……開始」

俺の一言で生徒たちが答案用紙を広げ、問題を解いていく。

さあ、始まった——俺たちのオペレーションが。

★

「……………くああ」

……しっかし、テストの監督ってのはヒマでしょーがねえな、テスト始まって二十分経ってるってーのにまだ終わりやがらねーし。

えつと……答案回収の時に日向が何かやるんだったよな……

アイツ絶対スベるな。

つてかそもそも、俺が言った案をもしあのクズが採用したらだよ？

《地球上で物体が落下するときの加速度は約何m/s²か。》《A. 天上女学院！ イケナイ生徒会長編 く生徒会長つていつも放課後ナニしてるんですか》とか……

やっべーよマジやっべーよ。いや何がやっべーつてこんなそれっぽい題名ポンつて出てくる作者の脳内がやっべーよ。

いや別によく見るとかそんなんじゃないよ？ 作者学生だしまだそういうのは早いしね？ ホントだよ？

★

キーンコーンコーン……

テストの終わりを告げる鐘が鳴り響く。

……やつと終わったああああ!! 先生ダツリイイイイ!!

「うーい、じゃあ後ろからさっさと集めろやコラ」

『コラって何だ俺ら生徒だぞ?!』

「……お前俺に律儀にツッコまなくてもいいんだぞ? 俺にツッコんでたら主要キャラ

扱いされると思ったら大間違いだからな?」

『……………』

やっぱそれ狙いかアホめ。甘いわ!!

答案用紙が続々と前に集まっていく。

……そろそろか……

日向「……………くっ……………!!」

一体どうやってスベるのか見せて

日向「たつ……………ただいまー〇鳩!」

……………!!

ゆり「は? アイツ何言って」

立華「……………!!!」

その瞬間、立華が立ち上がる。

……この手があった。

立華「——クツクツク……………よく戻ったか我が半身よ……………待ちかねたぞ。さあ……………我に

生贄を捧げよっ！」

ゆり「……………は？」

日向「おー、ハラ減ったか○鳩？」

立華「フツ…………○鳩とは仮の名にすぎぬ…………我が真名はレイシス・ヴィ・フェリシ
テイ・煌…………！ 偉大なる夜の血族の真祖なり…………」

立華はまるで何か乗り移ったかのように中二的セリフを繰り返して来る。
その隙に竹山が答案をすりかえた。

とりあえずは完了だな。

ゆり「…………つ！！」

日向「おー今作るからラララララララララララララララララアアアアア
!!?」

日向「どぐうああああ!!」

天井に激突した!!

いーつーもひーとーりーであーr

日向「ぐぶああ…………」

「日向アアア!!!」

『おいおい何だよ』

『飛んだぜ!? 何か変なこと言った途端』

『スゲエ……』

★

「……おいおいアレは少しやりすぎじゃねえか……う?」

ゆり「あなたがミスしたときのために椅子の下に推進エンジンを積んでいたのよ。どうだった日向くん? ちよつとした宇宙飛行士気分は」

日向「俺ミスしてねえだろちゃんと天使の氣イひけてただろ!!!」

ゆり「あなたのは……なんかヤバイ雰囲気だったから自己判断で飛ばしただけよ。何か文句でも?」

日向「うぐつ……何もいえない……つ」

立華「ねーあんちゃんまだー?」

ゆり「ホラあなたのせいで天使が何か違うキャラに目覚めちゃったじゃない!! どうしてくれんのかって可愛いなこの娘!! 持って帰っていい?」

日向「鼻息荒えよダメだ嫁になんか絶対にださねえ!!」

「おい落ち着け。あー……立華? ちよつとやりすぎだ元に戻れ、な?」

立華「……あなたがそう言うなら……」

おい何でちよつと落ち込んでんだよクールキャラ嫌なの? キアラ変えたかったの

!?

立華は何か暗いオーラ纏いながら席に戻っていった……

ゆり「ちつ……作戦成功、じゃ次は高松くんがみんなの気をひく役ね！」

おい舌打ちすんな違うキャラだったろーがあんなもん。

高松「っ!?! そ……それは日向さんの役割では？」

ゆり「オオカミ少年の話、知ってる？」

高松「繰り返し返させるウソは、返って信憑性を失っていく……」

ゆり「そーいうわけ♪」

まさかそのために人数揃えたってわけじゃあ……

ゆり「さあぁね……？」

だから心読むなプライバシーもクソもねえなこの女!!

高松「じ、辞退を!!」

ゆり「やれ」

高松「」

日向「……諦めて飛んでこい。そして天井に激突しろ？」

おつかねえ……俺先生でよかつたわ……

高松「っ絶対全員が注目する何かを考え出さなくてはあ！」

竹山 「あの、次の回答はどのように？」

「……いーなお前は楽で。持つてるいかがわしいビデオの題名延々と書くだけでいいもんな？」

竹山 「書いてませんよ!! それにこつちだつて大きなリスクをはらんだ任務を帯びてるんですよ!」

高松 「では代わってください」

竹山 「イヤですよ!」

日向 「やつぱそつちのがいいんじゃないかねーかくじ運がよくてよかつたなあ!」

「そーだそーだ!」

竹山 「これは僕にしか出来ない神経のいる作業なんだ!! そつちは飛ぶだけで頭使わなくていいじゃないですか!!」

「そーだそーだ!」

日向 「んだとこつちはバカつてかアアン!!」

「そーだそーだ!」

ゆり 「ゴウルアアアアアアアアアア!!! 喧嘩するなああああああああああ

!!!」

「そーだそーだすみません」

立華「……………」

そのバカでかい声を注意しに来るつもりなのか、不意に天使が立ち上がった。

ゆり「やっぱ」

立華「……………」

これは俺がフオローすべきだな。

「おいオメーらうつせえぞ!!」ロリとシヨタの魅力なんてこんなところで語るんじゃねえ!!」

日向・ゆり「語ってねええええ!!!」

★

……本日二回目のテスト、教科は世界史。

答えは『地球は宇宙人に支配されている』という体で答えるらしい。ごめん立華。先生がしっかりしてなくて。

——キーンコーンカーンコーン……

「うーい、じゃあ後ろからぱと集めろー。一番遅いやつモモパンツな」

『……………」

うむ。ツッコまなくなったな。

高松「……やるしかない、か」

突然高松が立ち上がる。一体何をするつもりなんだ……？

高松「先生、実は私——」

……

高松「——着痩せするタイプなんです!!」

そういつて制服を脱ぎ、ムダに鍛え上げられた肉体を見せてくる……が、

……!!!……………激しくどーでもいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい

いい!!!

んなの今カミングアウトすんなよ! もっと他になかったのかアホ丸出しか!

高松「……………どうですか?」

「いやどーですかって言われても」

『……実は私も!! 着痩せするんです!!』

……は?

『ワタシも! ホントはバスト80あるんですよ!』

いや、ちょっと待

『アタシも!!』

竹山（うらやましい……）

ゆり「……っ!!」

「いつて！ おいテメエ何人のこと蹴ってんだ。銀さんなんかした？」

ゆり「あら、悪かったわね」

コイツ謝る気ねえな何でこんな怒ってんの？

ゆり「それより、高松くんがうまくいったせいで高松くんの席の推進エンジンが無駄になっちゃったじゃない！」

高松「それがなによりじゃないですか。結果誰も苦しい思いをしなかった……！」
肉体を誇らしげに見せつけるな高松！ なぜムダに鍛えている……？

「おい高松ここに約一名苦しい思いした人がいるんだが？ てかい加減上着ろ」

ゆり「まあともかく、今回も首尾はバツチリね！ クズ……竹山くん」

竹山「やつとまともに竹山って呼んでくれた……！ ではそろそろクライス」

ゆり「調子にのんな」

竹山「ハイ」

……女こええ。

んなことを考えてる途中に仲村がおもむろに俺のほうを向く。何だ!? また心読まれたか!?

ゆり「じゃあ、次は先生！ 行ってみましょうか！」

は!? 何で俺が!!

大山「うわやった当たらなかつた！ けど何か見せ場を取られた気がするよ？ アレ

？」

日向「あ？ そんな予感どうでもいいだろうが気にするなよ」

大山「そんな！ 僕の身にもなつてよ！ そつちは肉体的なダメメーヅで済んだかもしれないけど、僕はメンタルのダメメーヅがすごいよ!? だつて！ 出番取られるのなんて初めてだよ!? しかもそもそも出番なんてあまりないんだよおお……」

日向「つハハひ弱なヤツめ、人生経験としては丁度いいだろ」

大山「僕は!! 日向くんと違つて出番がない時に無理にでしゃばつたりしない!! 自分の少ないシーンを全力で演じきつてるんだよ!!」

日向「何だと!? 俺が出番だけあつて適当に流してるダメキャラだとも言つてもりかよ!?!」

つてかお前ら何やつてんの？ ねえ!? それ以上はちよつとヤバイからやめような!?! な!?!

ゆり「ゴウルアアアアアアアアアア!!! この小説のヒロインは私なんじやああああああああ!!!」

「誰もんなこと聞いてねえよ!!!」

立華「……………」

そのバカでかい声を注意しに来るつもりなのか、不意に天使が立ち上がった。

あれ?　なんかこれデジャヴ。

やつべフオロー!!!　早くしないと!!!!

「おいテメーらアアアアアア!!　テレビを見るときは部屋を明るくして離れて見やがれ!!」

日向・ゆり「何の話をしてんだよ!!!!」

★

……………本日テスト三回目、教科は英語。

答えは全てカタカナで答えるらしい。小学生か!!

——キーンコーンカーンコーン……

はあ……………めんどくせえ……

「……………後ろから答案前にまわせー」

続々と答案が前に集まっていく。

……………うん。全列集まったな。

「は？」

『何で私じゃダメなんですか!!!』

「え？ ちよ」

『先生!!』

『先生!』

『先生……』

『銀時先生!』

『坂田先生!!』

みんなが俺の白衣につかみかかり、纏わりついてくる。

「ま、待って俺が何したってアアアアアアもう!! やってられつか!!!」

生徒をふりきり教室から逃げる……

が、なお追いかけてくる生徒たち。

『『ギントキセンセイいいイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイ!!!』』

「ちよ、!!何でバイオオハザードみたいになつてんのいつからこの学校ラクーンシティになつたんだよ女こええよ助けてレオンくんんんんんんんんん!!!」

★

ゆり「あ、えうえ、と、突然好きって言われてもそんな、いろいろと準備があるし！
ま、まず結婚……ってまだ付き合っていないのに!?　じ、じゃあまずデート?　どこを
回るってのこんな世界の!?　ええあつとそれ」

日向「ゆりっぺ……もうダメかもしれないな……」

第十二訓につづく——それはそうと銀さんもげろ

第十二訓

——雨は嫌いだ。

こんな世界でも天気は変わる。雪はまだ体験してないが……雨は降る。

——俺はこの世界の雨が嫌いだ。

何でかなんてわからない。わからないが……この世界は、俺たちに何か不幸なことがあつた時にだけ雨を降らせる。

ザアザアと、打ち付けるように。

★—学習棟A棟 屋上—

竹山「クライスト……クライストって……ぐずっ」

大山「あああ初めてのの告白は本当に好きな人がよかつたなあ……」

高松「キヤセ心理教……悪くないですね」

ゆり「えうえつと私はやつぱり一緒に住んだほうがいいと思うんだけど……あ！こ
こ寮生活じゃない！ いやでもそれくらいの障害乗り越えてこそその恋愛だと私は」

このオペレーション……難易度が高すぎたのか、屋上でみんなが自分の思っているこ
とをさらけ出す。

誰が聞いてるわけでもないのに、こんな綺麗な晴れの日は俺らの心を軽くする。

青い空に少しの浮雲。晴天といったわけではないが、適度に雲が漂う一番心地いい日和なんじゃないか。

「ふああ……ああ」

思わずあくびがこぼれる。こんないい天気屋上で仰向けになつてたらあくびも出てくるか。

青い空に白い雲。白い――

銀時「……………」

「……………ちじれ毛？」

銀時「誰の頭が白髪の子○毛だコノヤロー！」

「うわ!! ……何だよ銀さんか」

いつの間にか銀さんがおれの目の前に立っていた。

ついにこの世界にも未知のモンスターが出現し始めたかと思つたのに……

「大丈夫か？」

銀時「大丈夫？ 今大丈夫って聞いたこのアホ？」

そう言つた銀さんの白衣は一部破れ、なんとなくほこり臭いし顔には少しアザがある。

うん。全然大丈夫じゃないなコレ。

銀時「くっそ、あいつらホントにゾンビかよ……いや違うないか。不死身だし」

「自業自得だろ。つてかそれよりゆりっぺ何とかしろよ！ さつきからずつとこんなだぞ?!」 おかげで話がまとまらねえ……」

俺は天に向かつて必死にラヴコールを贈ってるゆりっぺを指差し、銀さんにそう言った。

銀時「へーへー俺のせいですよ……仲村ー」

ゆり「へ、え、ふえ!? アレ? 先生……先生はおかしいか何かしつくりこない……」

銀さん? 銀ちゃん……坂田くん……?」

下を向いてあたふたしながら必死に上目づかいで銀さんを見ている。

ダメだゆりっぺが完全乙女モードになっちゃってるよ。こんなゆりっぺに最初に会いたかった……」

銀時「いや知らねえよどうとでも呼べそんなことは置いといてだ仲村。あの告白な——」

ゆり「え!? な、何!? 私一応家事できるししつかりしてるから専業主婦には」

銀時「アレ嘘」

ゆり「——」

うおおゆりっぺが固まった！

必死に『いい奥さんになります』アピールをしている状態で停止しちまった!!

銀時「……おーい？ 仲村？」

ゆり「……………ふふへ」

ゆりっぺが不敵に笑い出す。あー……コレやばい時のゆりっぺだ。心なしか天気も曇ってきた気がする。

ゆり「うううへへへへふへうふふへへへはは」

銀時「え、ちよ中村どしたの？ どこぞの追い詰められた新世界の神みたいになつてっぞ」

既に狂気の塊と化したゆりっぺはおもむろにスカートのポケットから何かを取り出す。

ゆり「ふふふふへへへ♪ あつれく？ 何かなあこのボタン？ 押してみよっかなあ♪」

手元には——確か、俺が天井を突き抜けフライアウェイしたときにゆりっぺが持っていたボタンがあった。

おそらく銀さんも思い出したのだろう。それを見た途端一気に顔が青くなる。

銀時「いやオイ待て仲村落ち着け推進エンジンなんて一体どこに仕掛けられてるんだ

そんなもん押したら」

ゆり「ポチツとな！」

銀時「押したらどうなるかかかあああああああああああああ!!!」

日向「銀さああああああん!!!」

ゆりっぺがボタンを押した瞬間に、銀さんのスリッパから煙が出てずっと遠くの運動場の中心に墜落してしまった……

……何かグシャって聞こえたのは気のせいだろう。そうだろう。

ゆり「もしもの時のために彼のスリッパを超小型推進エンジン付きに改造してあったのよ。どうだったかしらね？　ちよっとしたスカイダイバー気分は♪」

「おお元に戻ったってかよくそんなもん作れたな……」

元に戻った(？)ゆりっぺの異常な残虐性にうんざりしつつ、ここにいない銀さんのかわりにツツコミを入れる。

乙女心を傷つけられたとはいえこれは少しやりすぎじゃ……

ゆり「じゃ、午後の作戦会議といきましょうか。野郎ども集合!!」

その屋上に響く声で、俺たち男連中四人はゆりっぺの周りに集まる。

まるで何事もなかったかのように俺たちをまとめてみせる。流星はリーダーだな

……

日向「なあゆりっぺ、こんなこといつまで続けんだ？ こっちは飛ばされて天井に激突して大変なんだぜ？」

ゆり「テスト期間中ずつとよ。何か文句ある？」

日向「ありません」

ゆりっぺは笑って答えたが、確かに放たれる謎の覇気みたいのに気圧される。ゆりっぺのやつ銀さんの一件のせいで余計にやさぐれてないか!? 笑顔なのに笑ってないってどういうことだ!!

日向「だ、だけど明日はメンバー変えたりとかしないのか!？」

ゆり「松下くんとかTKって重そうだもん」

日向「飛ばすの前提かよってか松下五段はともかくTKは重くないだろ!!」

ゆり「知らないわよそんなこと」

ぶつきらぼうにそう答える。

もはや暴君だ……いや今までも似たようなもんだったけど。

まわりのみんなが希望をなくしたような眩きをもらす。

大山「明日は出番あるかなあ……」

高松「……今度は豊胸パッドでも持って行くか」

……あれ？ 希望をなくしたってか俺以外結構乗り気じゃね？

——そうしてオペレーションはほぼ完璧にこなされていった——

★—教員棟一階 職員室— 数日後

……テストから数日。生徒たちが落ち着きを取り戻した頃に、俺が所属している戦線にとつてはこれ以上ない出来事が起きた。だいたい予想は出来たが……

立華「……………」

職員室にいる先生方はみんな一言も発せず、ただ一人の生徒を囲み、怒りのこもった視線を送る。

その視線の先にいるのは、当然のごとく立華だ。

——『数日前のテストで、生徒会長である立華奏は全教科0点……しかもその全てが教師を小ばかにしたような回答であった。このことについて既に生徒間でも噂が絶えない。これは生徒会の信用に大きくかわつてき、早急に対処が必要である。成績云々はまず置いておいて、このようなことをする者を生徒会長という立場に置かせてよいものか話し合いが必要である』とのことだった。つたく、こちとら数日前の運動場落下で粉砕した首と背骨が痛むつての……

音はしない。一人ひとりの息遣いや椅子のきしむ音が聞きたくもないのに耳に届いてくる。

『……確認だ。立華……お前は何故このようなことをした?』

一人の教師が立華に質問する。

立華「……………」

答えなんか返ってくるわけないだろう。俺らがしたことだ。こいつはただの被害者なんだから。

『お前は生徒会長だろう? できるなら生徒の鑑になるように心がけて欲しいものだが』

立華「……………」

『……何とか言ったらどうだ!?!』

一人の教師が机を怒りに任せ叩きつける。いつもならなんてことない乱雑なだけの音が今は妙に心に響く。

立華「っ! ………………」

その音に驚いたのか立華は少し震えていた。それを押さえるように自分の制服の裾をぐつと掴む。

『……坂田先生、試験官をしていて不審な点とかは見当たりませんか?』

いかにも体育教師つていうようなガタイのいいジャージ姿の奴が一つ溜息をもらし、俺のところを見、質問をする。さて、どう答えたものか……

本当のことを言うわけにもいかんしそれ以前にあれだけ派手に騒ぎ立てたんだ。『何もなかった』と言うのは簡単だが、信用されんかもしれんな……

そんなことを考えてる最中、立華が俺に視線を向けるのに気づく。その視線にはほんの少しの希望に似た色が混じっていた。俺が助けるとでも思ってるのか？

「……………何も、ありませんでしたよ？ 数人の生徒がやけにやかましかったのを除けばつすけど」

『ふうむ……………』

その答えに納得したのか、教師は俺の顔から目をそらし再び立華へ向ける。

これでいい。これで立華の無実を証明するのは不可能になったんだ。これで……

『……………残念だよ立華くん、君はもう少しまともな生徒だと思っていたのに。少なくともあの仲村ゆりよりは』

立華は一切弁解しない。当たり前つちや当たり前前だな、弁解のしようがない。

全教科の全問不正解……しかもまとも書いているのは自分の名前だけ。どう弁解しろってんだ？

そんな状態じゃ何言ってもまず信用されない。いくらだつて嘘はつけるからだ。誰も立華の肩を持つヤツがないからだ。

『……………直井くん』

直井「はい」

ふと、一人の教師が名前を呼ぶ。すると一人の生徒が立華と先生の前に出てきた。頭には学生帽を身に着けており、制服を誰よりも整えて……まさしく優等生、といった感じだ。

……いつか会った生徒会副会長様か。一体何の用だ？

『……生徒会担当の吉田です。私は、このような事態を引き起こした立華奏を速やかに解任。生徒会長代理……場合によってはそのまま生徒会長をここにいる現生徒会副会長の直井文人くんに任せたいと思います。どうですか？』

その意見にほとんどの教師が賛成の声をあげた。立華の顔はますます曇っていく。

『では……よろしいですね。立華奏さん、あなたは今日限りを以て生徒会長を——』

これでいい。これでいいんだ……なのに——

「ちよつと待てよ」

なんで声なんかあげちまうかな、俺。

★

『……なんですか、坂田先生。さつき問題がないとおっしゃったのはあなたですよ？』

俺は気がついたら立華の生徒会長解任を阻止しようとしていた。生徒会長を辞めることは俺にとつても戦線にとつても都合のいいことなのに——

——どうにも、ただの冤罪で生徒会長辞められるのは気に入らねえらしい。

他の教師からは溜息や舌打ちが漏れ出す。これ以上この話に時間を割きたくねえのな……当然か、俺だってそうでもん。

「確かに、見てる限りじゃ不正行為とかは見当たらなかった……が、コレ」

『それは……………ッ!?!』

俺は懐から数枚の紙を取り出した。それを見て教師どもの顔色が変わる。

そう、これは——

「——テスト後すぐに、ある生徒の机から出てきた答案用紙だ。どういうわけか名前の欄に立華奏と書いてある」

——立華の、本当の答案用紙。

「俺が自己判断で採点したところ、テスト平均96点つー超優秀な数字が出てきましたけど?」

まあそこらへんの一般生徒に採点させたんだが。

『どういうことだ!?!』

『答案のすり替え…………?』

『立華は冤罪だったのか?』

この職員室でさまざまな意見が飛び交う。この答案を見せることにより、さつきとは

空気ががらりと変わった。

『あ、あんたが立華を信用しないから!』

『あなただつてドヤ顔で立華さんに説教してたでしょ!!』

『俺は何も言つてないからな!!』

『おいアンタそれでも教師かよ!!!』

さつきまでの怒りに満ちた雰囲気ではない。教師全員で冤罪の生徒を責め立て追い込み、あまつさえ必死に励んでいた生徒会を辞めさせようとしたことをどうにかしようとする空気。先生のメンツが丸つぶれで責任を誰かに押し付けようと目を真つ赤にしてる空気だ。

『でも! テスト中それに気付けなかった坂田先生はどうなんですか!?!』

大人の汚え責任のなすりつけ合いが俺にも飛び火してきた。上等だよ、テメーらには言いたいことが山ほどできた。

「それよりも……テメーら責任のなすりつけ合いばかりかしゃがってよ、立華に謝ろうつてヤツは一人もいないのか? 俺から言わせればテメーらみんな教師の風上にも置けないクス野郎だよ」

『……ッッッ!!!』

俺の一言で教師どもの仮面が剥がれ落ちた。もはや教師の顔ではない、ただの泥にま

みれた馬糞みたいなツラだ。

『コノ……言わせておけば!!!』

一人の教師が俺に掴みかかる。が、それを止めようとする者は一人もない……行動に出さないだけで、みんな俺のツラあ殴りたくてウズウズしてるからな。

教師が腕を大きく振り上げ、拳が顔に迫ってくる――

直井「待ってください」

拳が目の前に来て俺がそろそろ正当防衛しようとしたときに、生徒会副会長が教師の腕を掴み制止させた。

直井「ここで殴ってしまつて、その上誰も止めようとしなかつたなんてことになつたら……本当に教師失格になつてしまいますよ?」

その一言に教師どもが固まつてしまう。自分らのしたことがいささか教職と離れすぎてたことに今更気づいたようだ。

俺を掴んできた教師が手を放す。やつとこいつらも冷静になつてきたらしい。

直井「さて……落ち着いたところでその生徒会長の答案の件ですが――」

直井が俺に話しかけてくる。何をしようつてんだよ今更。

直井「――本当に本物ですか?」

「はっ」

直井の言った言葉は俺の体を硬くする。しかしそれとは逆に教師の目に光を宿らせた。

そういうことかよ……セコいマネしやがって!

直井「その答案が本物なら立華奏さんの冤罪が証明され、今まで通り生徒会業務に励めます……しかし、あくまでそれはあなたが今懐から出してきたもの。偽装なんていくらでもできます」

「だから……これはテスト後すぐにあの教室の机から出てきたもので」

直井「ではすり替えが行われたと仮定します。すると十中八九その机に座っていた生徒がすり替えを行った犯人です、その生徒の名前を教えてください。」

………ツツ!!!

直井「………言えないんですか?」

直井が意地悪くほくそ笑む。

その席に座っていたのは……戦線メンバー、竹山。俺がこのことを言えば、今回のオペレーションのことが割れる——

コイツ……このオペレーションのこと知ってやがった……!!

『では、すり替えは実行されなかった!! つまり今までの問答は全くの無駄、ということですね坂田センセイ?』

教師がさつきとは打って変わった態度を見せる。

簡単なことだ。立華が冤罪でこつちが危なくなるのなら、それをもみ消して立華には
堕ちてもらえばいい……

「コノヤロー……!!」

『では、立華……』

立華「……………」

『今日を以て生徒会長を——解任する』

★—教員棟一階 職員室前廊下—

立華「……ありがとう」

結果立華は生徒会長を辞任……という形で解任された。

俺は立華を護れなかった。

それでもこいつは俺に礼を言う。俺は何もできなかったのに。

「すまねえな……庇えなくて」

立華「……それでも、ありがとう」

……………

「大丈夫か？」

心当たりのないことで0点取って怒られて、挙句ずつと頑張ってきた生徒会を辞めさせられたんだ。

今のこいつのシヨックは大きいだろう。

立華「別に……平気」

そう言つて、立華は歩いて行つてしまつたが……

立華「……………」

「いった！ ちよ、気を付けてよ」

どこが平気なんだあのガキ。ふらっふらじゃねえか言つたそばから人にぶつかつてるし、生まれたての小鹿かつてぐらい足震えてるし。

……ん。よく見たらぶつかられたヤツ……あの紫の髪……

「……お前かよ、仲村」

立華にぶつかつた生徒は仲村だった。

天使の一大事に偶然ここを通りかかつた、というわけでもないだろう。

「職員会議を盗み聞きたあ、結構いい趣味してんな」

仲村「でしょ？ 褒めても何も出ないわよ」

詫びれるようすなんて全くない。そもそもそんな気持ちがあつたのならこんなオペレーションなんて元々やってなかつたらう。

仲村「……あなた、何であんなことをしたの？」

仲村は壁に背を預けながら俺に質問する。『あんなこと』とはおそらく、俺が立華を庇ったことだろう。

仲村「受け取り方によっては、あなたのアレは戦線への裏切りに対応するのよ？ わかつてるの？」

仲村は咎めているんだ、俺が立華を庇ったことを。

もし俺が庇って、あの教師どもが立華の生徒会長解任を取り消しでもしたら、戦線が今まで目的にしていた『打倒生徒会長・立華奏』への大きなチャンス潰すことになっていた。

んなこと俺にだってわかつてる。だけど、

「あいにくと俺はそんなに器用にできてないらしいぜ？」

仲村「……………」

「本当はお前もわかつてるんだろ？ こんなことに意味なんて無いことくらい」

仲村「……………」

「天使は——人間だ」

……その言葉に仲村は少しだけ驚きの表情を見せる。

やはりこいつもわかつていた。だけど認めたくなかった。

今まで必死こいて追つてきていた神への糸口がニセモノだったなんて。

今まで自分たちがしてきたことが全くの無駄だったなんて。

仲村「……今夜、オペレーショントルネードを決行するわ。あなたも参加しなさい」
それでも仲村は前へ進もうとする。この暗闇の中を、先に何もないと知った上で、まだ戦おうとする。

「へいへい……」

仲村「それじゃ」

仲村はそれだけ言うのと俺に背を向け、どこかへと歩いて行ってしまった。

「さつてと……どーすつかなあ……」

廊下にはどういいうわけか一人の人もいない。さつきの職員室よりも静かだ。

足音が響く。ギシギシと遠くまで。

そんな中不自然な音が一つこだます。グシャつという……まるで——硬い壁と骨がぶつかり合い砕けてしまったような音が。

「クソ………っ！」

拳から血が垂れる。その音と拳の血の理由は、今までもこれからも……俺だけが知ってればいいことだ。

★

「ううう……緊張する……」

今日は私の初ライブ、岩沢さんが抜けた穴を私が塞がないと……!!
照明が落ちて暗い中、一般生徒の顔が目に入る。

たくさんたくさんたくさん——

「うああ私もうダメです!!!」

やばいもう逃げだしたいお菓子食べたい!!

思わず後ろを向いてしまう。

ひさ子「おいユイ」

「ふえっ、な、何ですか?」

ひさ子さんがこんな状態の私に声をかけてくれた。

ひさ子「お前がそんなんじゃないや、私が岩沢に会わせる顔がないじゃないか」

私の肩に手をかけ、ひさ子さんはそう言った。

そうだ、今から演奏する曲って……

——その曲、岩沢が残していた最後の曲なんだ——

——ええ!?! そんな曲に私が歌詞付けてよかつたんですか!?!——

——そうだな……この新曲と、第二期ガルデモにみんなが反応してくれるかどうか

……それ次第だな——

……そうだ、この曲は岩沢さんが私たちに残してくれた最後の曲。

私がおんなじや岩沢さんにまで恥をかかせることになる!

ひさ子「少しの失敗くらいあたしらがカバーする。だから楽しめユイ!」

関根「そーだよ! 人生楽しんだもんがちなんだからねー」

入江「私たちもう死んでるけどね……頑張って、ユイ!」

ひさ子さんや先輩たちはこんな時になってまで私の心配をしてくれた。

「……ありがとうございます!」

照明が上がり、私たちの姿が一般生徒の前に出る。

『おい、始まるみたいだぞ!!』

『何だよあのピンク頭、岩沢はどーした!』

『まさかメンバー交代……?』

やっぱり岩沢さんのフアンの人はシヨックを受けてるみたいだ。

だけど何とでも言えばいい。

私は私のすべきことをするだけだから!!

『この曲は——』

Thousand Enemies——!

「不機嫌そうな君と過ごして、わかったことがひとつあるよ——」
「そんなふりして戦うことに必死——」

『——おお』

『うおおおおおおおおおおおおお』
『!!!!!!』

★——学園大食堂 内部——

俺たちはオペレーションのために大食堂の入り口付近に立っていた。

食堂からあのピンクいのの歌声と一般生徒の歓声が聞こえてくる。あいつらのライヴが始まったみたいだ。

俺らの仕事は前と同様、邪魔するヤツ——まあ主に立華らしいが、そいつを迎撃すること。
しっかし……

「……暇だよー家に帰りたいたいよイチゴ牛乳にあんこぶちこんで浴びるように飲みたいよー」

日向「どこまでも無気力だになってかそのカオスの塊のようなスイーツは何だ!？」

日向が俺にツツこんでくる。中々のツツコミだが……

それができるってことは逆にそれだけ暇ってことたる。

「つかこれも立華こねーぜ？ 今からでも間に合う俺らもあの光るヤツ持ってライブ見に行こうよ」

日向「そんなもの流石の一般生徒も持ってねえよ！ あの会長代理の直井文人サマが来るかもしれないじゃんか」

「……………そうかその手があつたな、よし！ みんなであいつの所に迎撃という名の殺戮を」

日向「ちよつと待てええ!! そりや言つたのは俺だが会長代理はNPCだ！ 傷つけたらダメだろ！」

「…………ちつ」

日向「本気でやる気だったのか……ん、ああ!？」

日向が突然すつとんきような声を上げる。ライフルのスコープを除いた途端にだ。

「何だ？ あの子のスカートの中でも見えたのか」

日向「どこのマサラタウンの話だつてちげえよ!! 天使だ！ 天使が来た！」

日向は、天使が来た。そう言った。

……来たのか？ あの状態で？

「ちよ、貸せ」

俺は日向からライフルをぶんどり立華がいると言っていた所を見る。

いた。確かに、立華だ。だが………

立華『……っ………たっ』

立華は歩けば歩くほどに花壇やゴミ箱、そこらじゅうにあるものにぶつかっていた。

………昼の生まれたての小鹿が治ってねえ……

日向「ガードスキル発動前に——」

「あー日向？ 大丈夫だ、あれ」

日向「あ!? 何で!？」

俺は日向にライフルを返し立華を見るように促す。

すると日向の顔が面白いほどに変わっていった。あんな立華の姿は見たことがないのだろう。

日向「……何だありや」

「昼、生徒会長辞めさせられた時もあんななんだった。がつつり引きずってるよアレ」

日向「あ………」

★—学園大食堂 内部—

私は遊佐さんと一緒にライヴの監視をしていた。

万一般生徒が何か妨害をしたり、天使が侵入してきたら厄介だからだ。

高松「——ゆ——さん!! り——!!」

そんな時、上で監視をしていた高松くんが何かを訴えてきているのに気づく。

こんな大騒ぎじゃ何言ってるかわかんないわよ!!

高松くんもそれを悟ったのか、大きな身振りでどこかを必死に指差しだした。

その方向に目を向ける——と、

(——天使……!?! 何で、外は何してるのよ!!)

天使が食堂に侵入していた。一大事だ、すぐに手を打たないと——

天使「……………」

……………? ふと疑問に思う。天使は何をやっている?

天使はライヴを止めようとガルデモの所に行こうとするわけでもなく、必死に人ごみをかき分けてここに進んでゆく。

ライヴを止めようとしな……? じゃあなぜわざわざこんなところに?

高松『どうしますか?』

トランシーバーから高松くんの声が響く。高松くんも今のこの状況をつかみかねて

いるんだ。

「ちよつと待つて高松くん！」

トランシーバー越しに高松くんを制止させる。ここから見える高松くんの顔はひどく歪んでいた。

鏡を見れば今の私もそんな顔になってたことだろう。わからない……

何かが違う、今までの天使とは。様子がおかしいだけか……？

天使「……………」

天使は人ごみにもまれながらも、券売機の前に辿りついてみせた。

(ただ食事しにきただけでも言うの……？)

そこで天使は、誰も頼まない、食べるのは完全自己責任でお願いしますって張り紙で有名な激辛麻婆豆腐の食券を買っていた。

(なっ！ どういうこと!?! 私たちに食べさせて憂さ晴らしでもするつもり!?!)

遊佐「ゆりっぺさん、盛り上がりは最高潮を迎えてると見受けられます、指示を」

「え……？ ああ」

遊佐さんの一言で冷静になる。

どうする……？ こんな天使見たことない。戦意がまるでない、借りてきた猫のよう

な……

「……回せー」

遊佐「回してください」

遊佐さんがトランシーバーで送風機担当のメンバーに合図を送る。それとほぼ同時に各所に設置された送風機が回り始めた。

まるで紙吹雪のように食券が宙に舞い、窓から外に流れ漂っていく。いつも思うがこの瞬間には何か心に来るものがある。これが見たいがために私はこのオペレーションしてるのかもしれない。

天使「……あ……………」

自分の今夜の食事が無くなったというのに一般生徒どもは意にも介さない。彼らの頭には今ガルデモのライブのことしかないのだろう。

——これで本当に、私たちとこの世界との戦いは終わったの……？

★

「……ん」

見張りをしている俺の手の平に一枚の紙が下りてくる。トルネードで巻き上げた食券だ。

食券が大食堂の窓という窓から雪のように降り注ぐ。それに光があたり、もはや何か神聖なものまで感じさせた。いつもいつも無駄に壮大だな、ホントに天使でも来るん

じゃないか？

俺は手の平の食券が何か確認する。

……『麻婆豆腐』？　こここの学食にそんなあったか？

★―学園大食堂　フードコート―

日向「っ！　何だよソレ、誰も頼まないことで有名な激辛麻婆豆腐じゃん!!　猛者でも白いご飯に丼にして食うんだぜ？」

麻婆豆腐の食券を眺めていると、後ろから日向が聞きたくなくなかった情報をペラペラと語ってきた。

「マジかよ、俺辛いのが苦手なんだが……」

……しばらくして、学食のババアからその激辛麻婆豆腐が手渡された。のだが
……

日向「……まるで血の池だな」

普通なら日向のこの発言にツツコミを入れるとこだが、今回は……あまりにも的を射すぎて、何も言い返せない……!!

通常の麻婆豆腐に少し見られるはずのひき肉の灰色の部分が、なぜだか全く見られな

ああああああああああああああああああああ

ふふふふはへへへ……はっ
!!!!!!

「な……何だ今のは……？」

何か恐ろしいものにとりつかれたような——数十秒前の記憶がない！

気づいたら日向と二人で藤巻の口に麻婆豆腐たらふく突っ込んでたって我ながらなんだが何やってんの俺!?

こ、これか!? この麻婆豆腐が!?

ゆり「それ、天使が買った食券よ」

いつの間にか同じ机に座っていた仲村が話しかけてくる。

日向「ははふふへはへへ……はっ!!!! ……おいマジかよその話!」

おお日向復活したか……ってんなもん今はどうでもいい。

あいつが……これを……

「……怒られて、生徒会辞めさせられてしよぼくれて好物食べようとしたらこれか?」

日向「踏んだり蹴ったりじゃねえかよ、何か恐ろしく哀れに感じてきた……」

哀れ——ね。

★

——彼の言うとおおり、薄々感づいていたことではある。やはり……天使は人だ。

失意の底で慰めに好物の麻婆豆腐を食べにくる天使がどこにいる？

生徒会長としての義務から、風紀を乱しまくる私たちを野放しにしておけなかったんだ……

私たち……いやもつと前から、ここに来た人間が状況を理解できずに戦い、武器を作り出したから、それを抑えるために彼女もガードスキルを生み出し始めた……これが事の顛末か。

滑稽ね。今までしてきたことが、本当にただの徒労でしかなかったなんて……

★

俺が死に物狂いでこの何ともカオスな麻婆豆腐を食い進め、あと一口と迫ったところで——ソレは起きた。

机に座ってたただ食事をしているだけの俺たちを、突然十数人の一般生徒が囲んできたのだ。

そして、その一般生徒の後ろから出てきたのは——やはり、というべきか。

直井「そこまでだ……」

立華を蹴落とし、生徒会長の座に登り詰めた元副会長……直井文人。

野田「何だ貴様らは!？」

最初に声をあげた野田だけじゃない。他の戦線メンバーもこの状況を呑み込めずに

戦々恐々としていた。

何人かは銃まで取り出す始末だ。

直井「色々と容疑があるが、とりあえず時間外活動の校則違反により全員反省室へ連行する。僕が生徒会長となったからには、貴様らに甘い選択はない……」

一般生徒が俺らを拘束する。こいつら全員生徒会か……？ いや、風紀委員と連動してる。

わざわざ風紀委員総動員してまで俺らを罰したいのかよ？

「おーおー新生徒会長様は随分と熱心だねえ。念願の生徒会長になってはしゃいでんのか？」

俺の言った言葉に何人かの風紀委員の腕に力がこもる。随分と信頼が厚いこつて

……イヤ、逆かな？

直井「なんとでもどうぞ……」

直井がおもむろに右手をあげる。

それを合図に俺らを囲んでいた一般生徒が反応し、連行しようとする。

直井「——連れて行け」

★——次回予告——

「ええ？ 何コココという状況今……あ、んだこれカンペ？ どれどれ……」

「——『いつまでも第〇訓に続く……じゃおもしろくないから今回から急遽、銀さんには次回予告をしてもらいます』だあ!？」

「ったく、本編のほうも最近キツくなってるってーのにネタ大丈夫かねえ……」

「次回、EPISODE. 6 Family Affair 第十三訓……まあそんなわけなので、万一ネタが切れたら仲村が脱ぎます!」

仲村「脱ぐかああああああああああああああああああああ
!!!!!!」
お楽しみにね!

E P I S O D E . 6 F a m i l y A f f a i r

第十三訓

★—第一反省室—

ここは反省室、と呼ばれる部屋らしい。

校則違反をした生徒や今の生徒会長の直井文人に逆らった者がここに入れられ、反省を強いられる。

目下私も反省中なわけなのだけど……これだと反省のための隔離というにはいささかやりすぎね。

部屋の中にあるのはトイレとベッドのみ。食事も学食のよりすつとマズいし……早く帰ってパフエ食べたいな。

そんなことを考えていると、ふいに入口からわずかに光が差してきた。

『仲村ゆり。反省終了だ、出る』

直井文人のいいなりの一般生徒がぶつきらぼうにそう言った。私が終わりつてことは他のみんなもそろそろ終わったみたいね。

……その予想に違わず、外に出るとイライラした面持ちのみんなに会うことができ

た。

「やつほ、あなたたち。元気にしてた？」

日向「元気なもんかよ！ メシはマズいしトイレから悪臭漂つてたしおまけにそんな所に三日も入れられてたんだぜ!？」

藤巻「やつと解放された……シャバの空気サイコー!」

大山「藤巻くん刑務所から出てきたんじゃないんだから……」

TK「shakin', breakin', out」

反省室から解放され三日ぶりに外に出て、みんなが激しく愚痴をこぼす。

部屋には多少の差はあったみたいだけど、やつぱりみんなも同じような部屋にいたのね。

高松「天使を失墜させれば私たちの楽園となるのではなかったのですか？ この学校は……」

上半身裸でポージングをしながら高松くんが訪ねてくる。はてしなく変態ね。

「あなたみたいな変態を楽園に解き放つたらそれこそ終わりじゃないのよ。てゆうか早く上着て」

★—第一連絡橋下 通路—

日向「何なんだあの連中は……」

野田「今度来たら天使同様返り討ちにしてくれる！」

いまだに憤りを晴らせない男連中がブツブツ言い続けている。全く、もう終わったからいいじゃないのよ。むかつくけど。

「物騒なこと言わないで。一般生徒だから駄目よ……にしても変ね」

そう、むかつくけど私たちが監禁されたのはそんなに問題じゃない。ご飯を抜かれても毒を盛られても私たちは死ぬわけじゃないから。

問題はこんなことをする一般生徒がいる、ということだ。

「私たちにこんな形で反省を強いる生徒なんていなかった……」

少なくとも天使が生徒会長として存在していた今までは。

日向「天使が抑止力になってたんじゃないのか？」

日向くんの見てもわからないでもない……でも何か引つかかる。

そもそも、あんな半ば拷問のようなやり方で反省させるNPCなんて存在するの？

「……NPCの行いは基本的には私たちのなすべき模範。だけど、その感情は人間と同じもの。どんな偏屈な奴がいたって不思議じゃないってこと……？」

松下「つまり……行き過ぎた奴もいる、ということだな？」

高松「それがあの生徒会長代理……」

日向「返り討ちができない分天使よか厄介だぜ……」

……今の日向くんの言うとおりで。天使は我々の敵、だから私たちは彼女と闘っている。

けど私たちは一般生徒に手は出さない。だから会長代理に攻撃はできない――

……都合がよすぎる。いくらなんでもここまで――

松下「どうする？ ゆりっぺ」

松下くんが意見を求めてくる。

そんなこと聞かれても困る。実際今は打つ手が無いのが現状。どうしようもない……これなら天使とドンパチやった方がずっとスムーズに事が運んだわ。だが、何か――

ユイ「色仕掛けいきますか☆」

黙れ頭パーこちとら今真剣な考え事してんだよ!! と思ったが彼女のメンタルのため、心に留めていてやろう。

日向「お前のどこに色気があるんだよ？」

……

ユイ「なっ……んだと見たことあんのか!？」

……

日向「上着越しでもじゅーぶん分かるわ」

.....

ユイ「うっ……揉んだことあのかコラ!? 絶妙な柔らかさなんじやーい!!」

「黙れコラパー子テメーのナイ乳の話なんか聞きたくねえんだよ! 折角序盤はクルルに行こうとしてんのに台無しだわ!! 日向テメーもイチャコラなら別んどこでやれ!!!」

こつちが心の中で留めておいたら調子に乗りやがって!!

ユイ「ぐはっ!! ナイ……………」

日向「別にイチャコラしてねーよ!!」

私の怒号を聞き日向くとパーはそれぞれの反応を見せた。うーん愉快愉快。やっぱこつちのほうがしっくりくるわね♪

そんな私たちの目の間に、一つの缶ジュースが置かれた。

缶にはこう書かれていた……いちご牛乳、と。

置いた本人は、私たちが見慣れた天然パーマをしている。目は死んだ魚の——つてもうこれ以上濁せないわね、バレバレだもん。

うちの戦線の先生、坂田銀時が手すりに腰掛けるようにしていかにもダルそうに立っていた。

日向「てつめ銀さん一人だけ逃げやがって!!」

銀時「だーから前に言っただろーが! お前らと先生である俺とでは信用のされ方が

違えのー」

銀さんは私たちをあざけるようにそう言う。

直井文人が私たちを連行したとき、一人だけやつらの手を逃れて反省室行きにならなかったんだ。こんな女の子まで甘んじて罰を受けてるってのに何なのよコイツ!!

銀時「ま、これが大人の器用な生き方ってやつ?」

日向「直井にコピ売りまくって逃がしてもらった大人が何を言うか」

「アレけつさくだったわねー。指紋が無くなんじゃないかってくらいに手揉みするアンタの必死さって言ったら! ぶぶぶ」

銀時「大人ってのはな? 時にプライドを捨てて相手に尻尾振らないといけなかった

りもするんだよ」

藤巻「それが大人だってんなら俺は大人になんかなりたくねえ。一生高校生のままでいるぜ」

大山「ドヤ顔の所悪いんだけど、僕らこのまま行くと一生高校生だよ?」

先生が戻ってきたからかな……私たちの空気が少し軽くなる。さっきまでのピリピリしたような雰囲気はどこに行ったのかしら。いるのといないのでこんな戦線の雰囲気の影響が出るなんて……何なのよこの人。何かこの人と話していると調子でないし……

銀時「いやーお前らがいない三日間幸せだったわ。仕事はしなくていいわ肩こりがとれるわ女子に告白され」

「いっぺん死ねやゴラアアアアアアアアアアアア!!」

銀時「俺が何をしグふつはああああああ!!!」

椎名「あさはかなり……」

★—対天使用作戦本部—

俺はさつき殴られた頬を抑え、目の前にいる俺の顔をこんなにした奴にイヤみたつぷりな視線を向けながら話を聞く。

つてて……つたく折角三日間幸せだったつてーのに。厄介なやつらが戻ってきちまったな。

高松「で、これからの活動はどうしますか?」

服を着て一見まともな人に見えるような高松が仲村に尋ねた。なぜこの何か非常時っぽい状況で最初にその質問をしないんだ馬鹿か。

ゆり「同感ね」

「久し振りで悪いが人の心を読むなというかサラツと流してるがすげえなお前!! なんでもきんのな!!」

ゆり「あら、ごめんなさい」

「……………」

仲村バーカーホ間抜けビッチ。

ゆり「聞こえてるわよこの万年無気力男が！ そつ……それに私はまだしつ……したことないわよ!!」

「つちよ仲村さん!? 何をするかと思えばよりもよつて自分の経験カミングアウト!? 女の子がそんなこと言っちゃいけません！」

ゆり「つとにかく！」

まだ顔が赤いままの仲村は崩れた空気をリセットするかのように目の前の机をドンツツと叩く。

「ワンピー」

ゆり「黙れ。みんな、試しにちよつと動いてみましょう。……とりあえず、それぞれ好き勝手に授業を受けてみて」

校長室にいる全員に聞こえるように大きな声でそう言う仲村。

その理屈で言ったら俺は好き勝手に授業をすればいいんだな？ ラッキー面倒事が一つ減った！

ゆり「あ、一般生徒の邪魔はあんまりしないように。……以上。解散」

仲村がそう言うのと戦線の連中は続々と校長室を出て行った。三日ぶりの学校を楽し

みたいのか？ ガキどもめ。

さーつてと、俺も厄介なことにならないうちに――

ゆり「先生！ ちよつと待ちなさい」

……後ろを振り向くと――つてか振り向かんでもわかるか、この部屋にはもう俺と仲村しか残つてない。後ろで仲村が俺のことを呼び止めた。

だーから早く帰りましたの……

「……何だよ、悪いがデートの誘いはまた今度な」

ゆり「別に誘つてなんか……つて誘つたらデートしてくれるの!? ホントに!？」

仲村が俺の一言に顔真っ赤にして身を乗り出して異常な食いつきを見せる。いちいち食いつくな冗談だよ。

ゆり「つてそうじゃなくて……コレ、あなたに持つておいてほしいの」

そういつて仲村がポケットから取り出したのは、いつも作戦で使つてるトランシーバーだった。これここじゃなかなか作れないもんなんじゃねーの……

「何で俺に？ 言つとくがもしかしたら出ないかもだぞ？ 居留守決め込むかもだぞ？」

ゆり「なんでもいいわよ。いいから持つておいて」

俺は渋々仲村からトランシーバーを受け取り、懐にしまいこんだ。

ゆり「確かに渡したわよ……それじゃ」

「おう……あ。あと、仲村！ 一つ忠告な」

俺は校長室から出て行くこうとする仲村を呼び止めた。そういや言つとかないといけないことがあつたな……

ゆり「……何？」

「会長代理を探ろうとしてんなら、気をつけろよ？」

仲村の表情が一瞬動く。やっぱ図星か。

仲村は溜息を漏らし、少しバツの悪そうな笑みを浮かべながら再び俺に話しかけてくる。

ゆり「何よ、あなたの方こそ人の心読んでんじやないわよ」

「俺がんなことできるように見えるか？ それだけお前が分かりやすいだけだつての」

それだけ言つて俺は仲村を残し、校長室を後にする。

最後に見た仲村の顔がちつとぼつか嬉しそうだったのは、やっぱり気のせいじゃねーんだろーな……よっし、脳内保存完了つと。

★

——天使がもう動かない。夕べ、それは証明できた。

——残る問題は、生徒会長代理……攪乱しまくつたらどう動く？

——厄介なヤツを引つ張り出してきちやったわね。

★—学習棟A棟 教室—

今、この教室には二種類の人間が存在していた。

一つ目に該当する生徒は先生の話をしっかりと聞き、ノートをとったり問題を解いたり……中には眠つてる者もいるのだが、『授業を受けている』と解釈する分には何の問題もないだろう。

二つ目の者は——

大山「……………!!」

堂々と机の上にポテトチップスを出している彼のように、授業を受ける気がない者、
だろう。

大山（すごいドキドキする……授業中にお菓子を食べるなんて!）

大山（い………いただきますっ!）

——パリッ。

大山（た、食べた……今! 食べた!!）

大山（僕授業中に堂々とお菓子食べちゃってる——なんて思い切ったことしちやってるんだ!!）

今現在、この少年のように授業を受ける気がない者はというと……

藤巻「通らばお入り……!!」

ひさ子「残念! リーチ、七対子……ドラドラ親満♪」

藤巻「なっ!? んだよくっそひさ子の一人ゆきじゃねえかよ!!」

TK「Just wild heaven」

松下「女相手に何たる体たらく……!!」

麻雀をしたり……

『うう………』

『………』

野田「zzz……」

他人の机の上で眠ったり………

椎名「——!」

指先に定規やら箒やら鋏やらを乗せて落とさないようにしていたり……

高松「フン! フン! フン! フン!!」

床で黙々と腕立て伏せをしたり……

日向「バンツツ……違うな……パンっ! これだ!!」

なぜかできもしない手合わせ錬成の練習をしたり……

ユイ「せんせートイレ!」

銀時「勝手に行けよ行ってもう戻ってくんない」

一分ごとにトイレに行ったり……

銀時「つたく……いいかい？ BLEACHの『何……だと!?』の数を計算する問題はテストに出るぞーノート取つとけー」

先生ですらこんな有様だ。真剣に話を聞きノートを取っている生徒たちが可哀想に思えてくる。

ユイ「……よっし、せんせートイレ!!」

銀時「勝手に行けって言ってるよねっつかお前違う学年だろーが何でここにいんのかしくない?」

……58、59、一分。

ユイ「……うむ。せんせートイレ!!」

銀時「お前わざとだろ? ぜってーわざとだろ!」

……一分。

ユイ「せんせートイレ」

銀時「一生トイレに行けない体にしてやろーかアアアアアアアアアア!」

激しくブチギレた先生がピンク頭の生徒に掴みかかる。自分だって全力でふざけてただろうに。

生徒たちの空気が一瞬凍りついたが、それとほぼ同時に教室のドアが勢いよく開けられる音が響く。

直井「そこまで貴様ら！」

教室に生徒会長代理、直井文人が入ってきたのだ。

教室を安心とも不安とも取れない矛盾した空気が包み込む。まじめに授業を受けている生徒にとってはこいつらを追っ払ってくれて清々する。がその反面、この生徒会長代理……かなり評判が悪いのだ。前生徒会長の立華奏よりずっと規則に厳しく、噂では校則違反すると監禁されるとも聞いたことがある。

日向「うお、来たな……直井文人サマが」

直井「他のクラスの先生から騒がしいと苦情があつて来てみれば……また貴様らか。これはどういうことですか先生？」

直井文人は先生に質問をする。先生相手だというのに控える様子は全く無く、これはむしろ見下しているようにも見えた。

銀時「あん？ 勘違いだろなんにもねーよ」

ユイ「ぐ……ぐるじーぜんぜー！」

直井「女子生徒に掴みかかり今にも殴りそうな男が言うような台詞じゃありませんね。ある意味天晴れです」

銀時「褒めても何もでねーぞ」

直井「ええそうですね。出たとしても大したものは期待できなさそうだ……おい」

直井文人は一緒に連れてきた生徒に命令する。こいつらを連行しろ、と。

直井「先生……二度目はありませんよ？」

直井文人に命令された生徒が先生を含む授業を妨害した生徒を捕まえにかかる。

藤巻「うおやつべ失せるぞ!!」

TK「I, l l b e b a c k」

銀時「あーばよー! とつつあーん!!」

だが、これに捕まる彼らではないようで、まるで煙のようにすぐにどこかへと消えて行ってしまった。

直井文人は黙ったまま黒板を見つめる。そんな直井を見て、彼の手下たちに言い知れぬ緊張感が走った。

『捕まえろ』と言われて取り逃がしてしまったのだ。この人なら絶対に何か罰を与えらる。彼らはおびえながら直井文人の次の言葉を待った。

しかし、当の直井本人から出た言葉は、それとは全く関係のないものだった。

直井「女子生徒に暴行を加え、その上授業放棄とは……もう逃げられませんよ? 先

生……」

直井文人は、まるで自分の思い通りになって嬉しい気持ちを感じたような、見た目だけとてもさわやかな笑みを浮かべた。

彼以外、まだこの笑顔の裏の感情を知る者はいないだろう。

★—次回予告—

「はい、じゃー今回は——」

日向「待って待っていい!! 俺の扱いヒドすぎんだろ! セリフ少ないしあれじゃ完全にただのイタイハガレンマニアじゃねえか!」

「あーもうっせーな。今に始まったことじゃないだろ?」

日向「ついさっき始まったことだわ!!」

「はい、じゃー来週の Angel beats! FULLMETAL AHOCHHE MISTは」

日向「違いますから! アホケミスって何だ!? 第十四訓、EPISODE. 6

Family Affair その2だから!!」

「FULLMETAL AHOCHHEMIST!!」

日向「アイキャッチ入れんな!!」

お楽しみにね!

第十四訓

★—学園大食堂 3F 裏—

大きな音が鳴り響く。

拳が何かにぶつかり、その何かが碎ける音。何度も、何度も。

生徒は泣いていた。血の涙を流していた。何度も謝った。すみません。次こそは、と。

それでも音は止まない。その代わりと言わんばかりに生徒の隣にいる人影は笑う。

何度も何度も殴りつけ、何度も何度も虐げることよろこびに悦を感じながら——それは傲慢に満ちた笑みを浮かべていた。

——大きな音が鳴り響く。

ゆつくりと閉じる扉の音と、傍に立っていた紫の髪の少女にも気付けなくなるほどに。

★—学習棟A棟 廊下—

「……と、これからどーすっかな……」

直井文人から逃げ果せた俺は、しばらく同じような所をふらふらとしていた。

「逃げてきたから教室に戻るわけにもいかねえしかと言つて職員室にいたらほかの教師どもに何言われるかわかつたもんじゃねえ。

食堂に行つてメシでも食うかな……

「待つて」

授業中で誰もいない廊下に声が響く。ピアノのような、奏でるような声。

その声のした方向に目を向けると、そこには複雑な表情の立華がいた。

「……テメー何してんだ？ 授業中だぞ？ 速やかに教室に戻りなさい」

立華「あなたを探しにきたの。授業に戻つて」

立華はそう言った。

校内では成績最下位のアホと言われて、挙句生徒会長の座を降ろされた。なのに立華はそう言った。生徒会長の時の癖なんかじゃなく、コイツがそうしたいから。

「つたく……お前はもう生徒会長じゃねーんだろ？ そんなこと言われる義理なんかねーよ」

立華は少しうつむき、眉間にしわを寄せる。だがしかしすぐに顔をあげまっすぐに俺の目を見て口を動かした。

立華「……だけど、あなたが言ったことよ？ ……『どつちかが折れるまで、自分の正義貫くしかない』つて」

立華「だから、私は私の正義を貫
グウウウウウー——」

立華「ふあ……………つ……………」

「……………」

……………えー……………？ ナニ今の音……………

立華の頬がほのかに紅く染まる。

「……………何？ ひよつとしてお前ハラ減ってるの？」

立華「減ってないっ……………」

立華は少し怒ったように俺を見てそう言った。

まー……………かっこよくキメようとした途端腹が鳴りやあ不機嫌にもなるか……………つてか
どんなタイミングで腹鳴るんだよすげえな。

「ちつ……………立華。丁度俺もメシ食いに行くところだ一緒に来るか？ 今日だけ奢るぞ」

立華「そんなのいい……………それより、早く授業に」

「麻婆豆腐」

立華「何してるの？ 食堂行くんでしょ？」

早っ！ 早いよ刹那で正義曲げんな麻婆豆腐そこまでか!?

★—学園大食堂 内—

「……いつ見ても禍々しいな」

俺は立華の目の前に置かれた麻婆豆腐に若干恐怖を覚える。もうトラウマだこの赤いの。

立華「あなたの程じゃないと思うけど……」

立華は俺の目の前に置かれたカツ丼 *ver* 宇治銀時を見てそう言った。

「うっせーよ。それよかお前それ食って平気なの？俺は三途の川バタフライしてきたんだが」

立華「そんなことない……ただ、」

立華はそこで一端言葉を区切り、皿から麻婆豆腐を一口食べてからしみじみと感じるようにこう言いになった。

立華「……うまいわ」

……どうやらこいつの性格が変なのはこの麻婆豆腐を食べ過ぎて人格が変わってしまっただけらしい。

立華「……——死ーぬまーでー♪ 食ーつとけー♪ 麻婆ー豆腐ー♪ ふふっ

……」

「……何歌ってんだよ」

立華「麻婆豆腐の歌」

「……………作ったのか？ 自分で？」

立華「？ そうだけど……………」

「……………正直異常だぞ……………何だその麻婆豆腐へのあくなき執念は。好物とかそんなレベル軽く吹き飛ばして別の次元に飛び立ってんじやねーか」

立華「……………？ あたし、麻婆豆腐が好きなの？」

「いや知らねえよ俺がそんなこと俺に聞くな。ってか歌まで作ってて気付かないって……………何だ？ お前は麻婆豆腐に呪われてんのか？ 生前麻婆豆腐に恨みでも買ったのか？」

立華「初めて知った……………」

立華は蓮華にすくった一口の麻婆豆腐をもの珍しそうにいろんな角度から覗き見る。

こいつの脳内は一体何パーセントくらい活動できないでいるのだろうか？ 一度見てみたい。

「立華さん……………」

そんな脳内お花畑状態の立華を呼び止める一つの声。

げっ……………この声は……………

直井「こんな時間に何をしてるんですか？ 休み時間の食事は校則違反ですよ？」

直井文人……………

「……好きな時にメシも食えねえのかこの学校は？ 何てつまんねえトコだ」

直井「あなたの立場でそれを言いますか……あ、それと先生？」

直井があなたかも今思い出したかのようにわざとらしく俺に話しかける。

直井「他の先生方から……坂田先生の行動、言動には最近目に余るものがあるので僕からから注意しておくように、と言われていたんです。……僕のやり方で」

「……実は俺って嫌われてる？」

直井「あなたから嫌われに行つたんでしよう……？ 同僚にクズなんて言われたら僕だって不快な思いになる……おっと、無駄話が過ぎましたね。覚悟はいいですか？」

「じゃあせめてこのカツ丼食い終わってからで」

直井「連れて行け」

★

立華と俺は、よくわからない独房のようなところに突っ込まれ閉じ込められてしまった。

あのカツ丼楽しみにしてたのに！！

「オイテメーらしい加減にしろよ！ いたいけな女の子と飢えたオツサンをこんな狭い

空間に二人つきりにしやがって！！ ただで済むと思うな!!? もう一人の俺が黙っちゃ

いねえぞ!!」

立華 「なんでやねんー」

「いややつつけにも程があんだろおおおおおおおおおおおおおお
俺の魂のツツコミが独房内に響き渡る。
!!!!???

どっちがボケかツツコミかわかったもんじやねえこの女!!

立華 「慣れないツツコミしたから疲れた……」

「お前あんな適当でよくそんなこと言えるな!!」

立華 「眠るわ……」

「今度はこっちのツツコミ総スルー!? てかホントに寝るの!? 言つとくがお前今危険な状況だよいろんな意味で!!」

立華 「おやすみなさい……」

「ちよ、オイ立華!」

立華は小さなあくびを零すと、そう言つて眠りに入ってしまった。かすかに寝息が聞こえてくる。

マジかよ……ロリコン歓喜じやねえかこんな状況……

★

——このまるで独房みてーな反省室……

ただ校則違反を咎めるだけにはやりすぎてる。

確認したがかなりの強度の扉……完全防音の壁……

おそらく特定の誰かを閉じ込めるためだけに作られた独房……

……立華を閉じ込めるための部屋か。

直井野郎が立華の天使としての力を驚異と思っていたのは間違いない……そこで立華をここに閉じ込める計画を立てた……

だがそこでとんだイレギュラーがこの世界に來ちまった。

立華とサシで殺り合つて生き残つた存在……つまり、俺。

せつかく立華を閉じ込める計画をコツコツ立ててたつてのによりにもよつてそんなタイムリングで立華以上の力を持った奴が現れたんだ……しかもそれは教師……

生徒会なんかの権限じゃどうにもならない……だから奴は俺が他の教師から嫌われるように仕向けたのか？ 自分で俺を裁く権利を得るために。

難しいことじゃない……俺は戦線の立場上好き勝手にやってきた。それを逐一他の教師に報告すりゃ俺の教師間での評判はだだ下がりつてか……そりゃあ他の教師にも嫌われるわ。

だとすりゃあ——

「——み——とに策にはまつちまつたつてことか？ コレ」

自分で笑えてくる……あの野郎——こつから出たら全殺し確定だな。

ゆり『表で模範的な活動をし、裏で悪事を働く……それでこの世界でのバランスをとっていたというわけ』

ゆり『彼はずっと狙っていたのよ……天使を生徒会長から引きずり下ろし、自分が生徒会長となるチャンスを……』

ゆり『……皮肉ね。この世界を狙っていた私たちが、同じくこの世界を狙う者に大きな手助けをしまつていたなんて……』

ゆり『今、天使とゆう抑止力から解放された彼は、私たちに攻撃を仕掛けてきた。』

ゆり『彼は私たちが一般生徒を攻撃できないことも知ってる。だから、盾にも人質にもしてくるのよ?』

ゆり『私たちはいいなりになるしかない……それはもう、一方的な暴力——』

ゆり『次々と仲間がやられていって……悲しいことに、私じゃ何もできない。仲間を助けることも……護ることもできない……』

ゆり『お願い……銀さん』

ゆり『——助けて——!!』

★

グラウンドに雫が落ちる。

その雫がだれかの眼に落ちた。それでもだれかは動かない。

雫が、そのだれかから流れる血によって赤く濁っていく。

何もできずに……助けを求める暇もなく、ただただ殺されていく。
死んで、不死になって忘れていた……

ああ、これが……絶望、つてやつなのか——

日向「つたく……つくづく雨はキライだぜ……」

日向は赤く染まった瞳で周りを見渡す。よく馴染んだ人。口を交わす程度の人。よく知らない人。たくさんの人が血を流し倒れている。

怒りを覚える。俺らをこんなにした奴らの主犯を——直井文人を、持っている銃で撃ち抜きたい、そういう思いが体をめぐる。

でも力はいらない。何もできない……

日向「仲間の仇を……討つことさえできないなんて——」

日向の目から一筋の雫が垂れた。思わず泣いていた。自分の無力を悔いて日向は涙していた。

直井「……まだ息がある奴がいるな」

目の前の直井文人は、自分と同じように地面に伏している仲村ゆりに向かって歩いて行く。

日向「おい……ウチらのリーダーに何するつもりだ……っ!!」

直井「おや、もう一人いたか。丁度いい、見ている」
 ゆり「……っ……!」

直井文人は地面に倒れている仲村ゆりの元へ行き、まるで神にでもなったように両手を広げ笑って見せた。

直井「今から僕が——神だ」

日向「何を……馬鹿かコイツ……!?!」

直井文人はそう言う日向をあざけるように鼻で笑い、口を開く。

直井「愚かな……ここが神を選ぶ世界だと、誰も気づいていないのか?」

ゆり「……?」

直井「生きていた記憶がある……みな一様に酷い人生だったろう……何故?」

直井「それこそが神になる権利だからだ……」

直井「生きる苦しみを知る僕らだからこそが神になる権利を持っているからだ」

直井「僕は今……そこに辿り着けた——」

ゆり「……その、あなたの言う“神”になって……一体どうするつもり……!?!」

直井「安らぎを与える……」

日向「俺たちにかよ……!! ！こここまでしておいて何言ってやがる!! ふざけんなよ

!!!」

日向は大声で怒鳴りつけた。自分が血反吐を吐いてもどうなつてもこいつは許せない。だから怒鳴りつづける。今の日向にできるのはこれくらいしかなかつたから。

直井「抵抗するからだ……君たちは神になる権利を持った魂であると同時に、生前の記憶に苦しみ、もがき続ける者たちだ」

直井「神は決まった……ならば僕は、君たちに——安らぎを与えよう」

直井文人は足元にいた仲村ゆりを甲斐甲斐しく抱きかかえる。

ゆり「——!?! 何、を……」

直井「君は今から成仏するんだ……」

その言葉に日向は衝撃を受ける。止めなければ、今すぐ!!

だが他の生徒が日向を抑える。何もできない。彼は声にならない悲鳴を上げた。

直井「岩沢まさみを覚えているか……?」

そんな日向の叫びなど耳に入っていない様子で直井文人は続ける。

直井「生前彼女は声を失い、歌う夢を断念」

直井「酷い家庭環境の元、みじめに死に至つた——」

直井「だが彼女はこの世界で夢を叶えた……『歌う』という夢を」

直井「だから消えた……成仏できたんだ」

日向とゆりは岩沢のことを思い出す。確かに彼女はこの世界で夢を叶えた。生前の

悔いをここで晴らすことができたんだ……まさかそれで……

直井「君も今から成仏するんだ……幸せな夢とともに……！」

直井のゆりを抱える手に力が入る。

ゆり「あなたは……私の過去を知らないっ!!」

直井「知らなくても可能なんだ……」

ゆり「……？」

直井文人の目がおもむろに——赤く、赤黒く染まっっていく。

直井「僕が時間をかけて準備してきたのは、今現在天使を閉じ込めてる牢獄だけじゃ

ない——」

直井「——催眠術だ」

日向「っ!？」

その言葉を聞き日向は自分を抑えてる者の顔を覗く。

とてもうつろな目をしていた。口も半分開いている。

そこで日向とゆりは納得した。いくら直井に脅されてるとは言えNPCがここまで

のことをするはずがない。直井がNPCたちを操って従えていたんだ……

テスト時の情報の漏洩も戦線メンバーを操って吐かせたと考えれば……

直井「さあ……目を閉じるんだ——」

ゆり「……!?!? は……っ……」

見たくもないのに直井の瞳に引きこまれるように目線が行く。何も喋れない。もはや簡単な抵抗すらできなかつた。

彼の赤い瞳に自分が写り、ゆっくりと……目を閉じる――

直井「君は今から幸せな夢を見る……」

直井「こんな世界でも、幸せな夢は見れるんだよ――」

ゆり（まさか……まさか、まさか――）

ゆり（そんな――）

★

気付いたら白い空間にいた。

何も無い、ただただ広がるその世界に倒れていた……

目を見開くと目の前に三人、人が立っているのが見える。

どこかで見たような面影――

（ああ……あの子たちだ――）

目の前に映る彼らは……笑っていた。

とても幸せそうに――

お菓子を貰った子供のように。

おもちゃを買ってもらった子供のように。

めいっばい遊んでもらった子供のように。

——笑っていた。

(違う……嘘だ、そんな幸せそうな顔しないで……)

(あたしは守れなかったのよ……？ 一人づつ死なせてしまったのよ!?)

(一人づつ、一人づつ、一人づつ——)

(そして誰も残らなかった!!)

「なのに——」

『おねえちゃん』

!!

『あのね、おねえちゃんがおねえちゃんですよかった!』

やめて………

『ありがとう、おねえちゃん!』

やめて………

『もういいよ、おねえちゃん』

やめて………

『おねえちゃん!』

やめて!!

——んなトコで何してんだ? 寝不足ですか?

……?

——お前はあいつら背負うって決めたんだろう? だったらもういいことなんかねえよ。

この、声は……

——さつさと起きやがれ。

銀、さん——!!

「その女に——触れんじやねえよ」

ガラガラと大きな音を立て、自らを包んでいた白い空間が壊されていく。

最後に見たのは——おそらく殴られて吹き飛んだ直井文人と、その目の前に立つ、私たちの……先生の姿——

★

直井「つ……あそこからどうやって出た?」

直井文人は困惑していた。もちろん不意打ちで殴られたこともあるが、自分が何年も

掛けて作った牢獄を脱出してきたことが一番理解できなかったのだ。

しかも万一脱出された時にこの男の隣にいと推測していた天使がいない。この男一人で脱出してきたとでも言うのか——

直井「……まあこの際どうでもいい。」

直井文人は隣にいた一般生徒の胸倉を掴み、脳天に銃口を向けてこう言った。

直井「こつちには人質がいるんだ。下手に動かない方がいいですよ……先生？」
こうすればこいつも、このイカれた集団も、天使も、何もできはしない……

この僕にたてついた罪だ！ 散々いたぶった拳句に殺

「撃つよ」

直井「!？」

直井文人はまたも困惑する。

コイツ、こいつらの仲間じゃないのか!？ まして先生だろう!？ 何故……

「こちとら^{自分}テメーで背負った^{武士道}ルール護んで精一杯だ。そいつらが勝手に作ったルールなんざ知るか」

「だから……俺は、俺の^{武士道}ルールに従って、テメーを——叩つ斬る」

……銀時は一步、また一步と直井文人に近づく。

直井「ま、待て！ 来るな！ 撃つぞ!!」

直井はすかさず標準を銀時に移す。だがなおも銀時は止まらない。

直井「——つつつ!?!」

直井文人に恐怖が走る。自分が……まるで、眠れる獅子の縄張りを荒らした小動物のような感覚にすら陥った。

直井「う……うあああああああああああああああ!!!!!!」

直井文人は銃の引き金を引こうとする。しかし目の前には銀時の姿はない。

ふと、直井文人は自分の懐にそれを見た。

白銀の髪をなびかせる——夜叉の姿を。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

大きな音が響き渡り、直井文人の体が宙に浮く。

数メートル後ろに吹き飛び、ピクピクとわずかに動いていた直井文人の体は、やがて動かなくなった——

「——俺の人生が酷い人生だった……? バカ言ってるじゃねー」

「確かに俺の人生は泥だらけだったさ、これ以上何を失っても後悔なんかできなくなる

くらい」

「だがよ……」

「あいつらと過ごした時間だけは……魂に刻まれたこの記憶だきやあ、誰にも文句なんか言われたくねーんだよ……」

第十五訓に続く

第十五訓

……ここは、どこだ？

僕は気付くと、大きな木が立派に立つ広い庭の中にいた。

……？ この木……どこかで……

途端、何となく見慣れた顔が僕の顔を心配そうに覗きこんできた。これは……僕？
地面に倒れてる僕を見下ろす僕。

——ああそうか、僕は夢を見てるんだ。

生前——僕の過去……思い出したくもない、昔の記憶——

★

陶芸の名手の家に生まれてしまった——僕と、双子の弟……

僕は他人よりも……弟よりも才能があり、後継ぎとして名を世間に轟かせた。

弟は惨めにも引きこもり、ずっとゲームをして過ごす日々……親からも誰からも期待されずに、無意味に過ごす人生……

その日、僕と弟は一緒に木登りをして遊んだ……

突然景色がひっくり返り、僕の体を激しい痛みが走る。

——木の枝が不自然にゆれた。僕ら二人はあそこから落ちたんだ。

隣で弟が血を流していた。岩に全身を打ちつけ死んでしまったのだ……

『死んだのはお前だ』

僕は生きているはずなのに、目の前に広がる空はそう言っていた。

——弟が死に、僕はしばらくの間入院生活をしていた。

不自然だったのは弟の死を嘆く人がとても多かつたこと。

あんな出来そこないで引きこもりの弟が死んで悲しむ人がこんなにいたとは……

退院してすぐ、僕は厳しい修行を強いられた。

世間にはリハビリということになっていっているらしい。なんでそんなウソを吐くんだろう。

「恥を知れ!! こんなもの作ってきおって!!」

父の怒声を聞く毎日。

こんなはずじゃなかったはずだ……どうして？

これじゃまるで……

修業は苛烈を極めた。どんなにやっても事故の前の僕の実力が出せない。昔の自分がひどく遠く感じた。

これじゃまるで………

展覧会で入賞を果たした。

今までの僕からは考えられないほどにひどい結果。こんな展覧会で入賞程度なんて

……

それでも……

「……何だ？ お前——」

「——泣いているのか？」

それでも、涙が止まらなかった。

こんな、こんな結果に終わって……残念としか言いようがないのに……!!

何で、こんなに……喜んで、涙まで流している？

これじゃまるで……

まるで僕の弟みたいじゃないか……!!

『死んだのはお前だ』

そう、空が告げていた。

あの時死んだのは本当に僕だったのか……？

では僕とは誰だ？

僕は自分の作った作品の裏に刻まれた文字を読む。

……健人。そうだ、僕の名前は直井健人。

あの出来そこないの弟の名前は、直井……文人。

父が床に伏せた。

回復の見込みはないらしい。もう轆轤ろくろは回せない。

僕に陶芸を教えることはもちろん、僕を叱ることもなくなった……

食事を与えると、優しげに微笑むのだった——

どうして？ どうしてこうもうまくいかない？

あの頃の調子が戻らないままのこんな腕じゃ……工房は持てないし、独り立ちもでき

ない……

ずっとこの人の世話をしていく人生なの……？

………ねえ!!!
神様!!!!

——どうして——

★

目をあけると、真つ黒な画用紙に白い砂をちりばめたような見事な夜空が広がっていた。

僕は、グラウンドに横たわっていた。

夢から覚めたんだ……ここは………!!?

突然頬に痛みを感じる。何だ、何が!? つねられている? 一体誰に

「……………」

「……………何をしてるんだ貴様」

目が慣れて、ぼんやりとだか少しずつ僕の頬をつねってる奴の顔を見ることができた。

死んだ魚の目に、銀髪天然パーマ……

その男は、僕と目があつたと同時に、不敵な笑みを浮かべた。

「放せ!! 僕は神だぞ!! 何を………ツ!!」

「は？ 何で殺しても死なねえゾンビわざわざ殺さねーといけねーんだよ？ もう俺の気は済んだしな……」

……しばらくの間、グラウンドを沈黙が包む。さっきまではまるで気にならなかった虫の声がとての間近に聞こえてくるほどに。何だろう、コオロギ……？

「よお」

その沈黙を破ったのは、僕の隣にいる教師だった。

「何でんなかったりーことしたんだよ？」

「……愚問だな。僕だけでなく貴様らや他の奴も……神になるためにここに来たんだ。それに気付かずのうのうと生きている貴様らより僕は優秀だった、それだけだろう？」

「違うな」

「……？」

「お前はただ……認めてもらいたかっただけだろう？」

目の前にいる男の一言に激しく心がぎわつく。何が——何を言っている？

「お前は、神になって……俺たちに認めてもらいたかっただけだろう？ この世界の頂点に立って、誰かに見てもらいたかっただけだろう」

「……何を」

「生徒会に入ってたのだったってそうだ。生徒会長の座を奪うために副会長になったって

ても……その肩書はほとんど必要ねえだろう？ てめえの催眠術を使えばどうとでもなる。」

「見てもらいたかつたんだらう？ 自分の実力を。生徒会副会長としての自分の頑張り
を」

目の前の男は……僕の心にどンドン入ってきた。

何も知らないはずなのに……

「アంతに僕の何がわかる……!!」

「わかんねえよ、わかりたくもないしな……俺はテメーがキライだから」

ただ——、そう前置きしてその教師は呟いた。

「この俺を手の平で弄んだことだけは褒めてやるよ。」

その言葉は……僕の世界に色をつけた。

「直井文人、だっけ？」

その言葉は……僕の世界に音をつけた。

僕を認めてくれた。

生まれてから今まで誰にも見られなかった。僕の言葉は兄の言葉。兄は僕だった。

僕にかけられる賞賛の言葉は僕を認めているのではない。兄を認めているのだ。

ずっと、ずっと——認められなかった。

ふと、昔の記憶が頭をよぎる。
 ずつとずつと埋もれていた――

――取ったってどうせ、渋柿じゃぞ？

――あつ！ やった！ にいさんにかつた！ ……う、うああ!!

――あやと!!

――いてて……

――つたく、渋柿ごときで何を……

――だが……文人もやりおる――

一番聞きたかつた言葉――僕を……認めてくれた言葉――

★

日向「……おい、銀さん……何だよソイツ」

直井「銀時さんお腹は減っていませんか!? 大福とクッキーとパフエ、それにイチゴ牛乳をお持ちしました!! ……はっ!! しまった……これでは虫歯になる可能性がある……!! 食後には歯磨きを、もしくはキシリトールガムを嚙んでください!! ところ

お楽しみにね！

番外篇……と思わせといてエピソード

……俺はふと、窓の外を覗く。

暗く淀んだ空から水の粒が激しく打ち付けられる。

あの日以来か……

——雨は嫌いだ。

こんな世界でも天気は変わる。雪はまだ体験してないが……雨は降る。

——俺はこの世界の雨が嫌いだ。

雨の日の俺らはいつだって不幸な目に会う。

この前だって、何人もの仲間が傷ついた……

だから、俺はこの世界の雨が好きになれな

ゆり「オペレーション、シューティング・オブ・カン（缶蹴り）よ!!」

遊佐「……ルールは皆さん知っての通り、缶を守る人……すなわち鬼をかいくぐり缶を遠くに蹴ることができれば皆さんの勝ち、それができずに鬼が全員を捕まえたら皆さんの負けです。どうも、久しぶりの登場でテンションが高くなっております。実況兼審

判の遊佐です」

ゆり「見た目からは全く察せられないけど……ルールは以上よ！　じゃ銀さん鬼ね
！」

銀時「はあ!?　ふっぎけんなクソガキ何で俺が缶蹴りの鬼無限スパイラルにはまん
きやなんねーんだよ!?!」

藤巻「どーでもいーからさっさとはじめよーぜ」

ユイ「私最近露骨に一番ありませんでしたから頑張りますよー！　いくぜテメー
ラあああああああああああああ!?!?!」

大山「やつぱりやめよーよ雨の日に缶蹴りなんて!」

椎名「あさはかなり……」

ゆり「あら大山くん椎名さん！　これだつて立派なオペレーションよ？　漫画の修行
とかで滝に打たれるシーンあるじゃない？　あれと同じよ、多分」

松下「なんと！　このオペレーションにはそんなに深い理由が!?!」

高松「フツ……この肉体に更に磨きをかけるには丁度よさそうですね」

TK「Love trainのPassenger」

野田「ゆ、ゆりつぺの制服が濡れて透けて張り付いてーギャアアア
アアアアアアア目があああああああああああああああ!?!?!」

藤巻「野田アアアアアアアアアアアアアア!」

ゆり「うふふ♪ 野田くん一体何を見てたのかしら? てゆうーかさつさと銀さん鬼し

なさいよ!」

直井「貴様ら僕の銀時さんに鬼を強要するなど……許せない!! ここは公平にジャンケンが定番だろう!」

銀時「いやお前ツツコむとこそこ!? てつきり代わつてくれると思つちつたじゃねーか!!」

直井「いや流石に銀時さんの頼みでもそれは」

銀時「お前神でも殺すとか言つてたじゃねーかどんだけ鬼やりたくねーんだよ!! お前ひよつとしてあれか!? 昔鬼からどうしても抜けられなくて百数えてるフリして泣いてたヤツか!」

ひさ子「なんで私らまで……」

関根「まあまあいいじゃないですか、何か面白そうですし♪」

入江「せ、関根つちあんまり飛び跳ねたらスカートが見えちゃうしというより泥がこつちに〜!」

……

俺は、この世界の雨が嫌いだ。

この世界の雨は俺たちにいつも不幸を呼び込む。

……だから、せめて今度来る不幸が風邪程度に済むように願いなから——

「——おーいお前ら!! こーいうのはムードメーカーの俺がいないと始まんねーだろー
がよう!!」

銀時・ゆり 「あ、日向くん日向くん丁度いい所に。あなたお前鬼な」

「何でだよ!？」

みんなと一緒に——雨のグラウンドを駆け回る。

おしまい

E P I S O D E . 7 A l i v e

第十六訓

★—対天使用作戦本部—

「……毎度毎度いい加減にしろよ……テメエ今度は一体何をしでかしゃがった?」

俺はいつも出入りしている対天使用作戦本部……まあ要するに校長室なんだけど。その惨状を見返し、唯一すまし顔で本を読んでいた直井文人に青筋を立てながら尋ねる。

「日向は輪ゴムに向かって膝をついて号泣しているしピ^クンク^イ頭はそんな日向に見たこともない技をかけようとしているしTKと松下は永遠ムー^ンウ^オークに興じちまつてるし高松は百円シヨップで売つてるような☆メガネを取り出しては拭いているし椎名は『あさはかなり』という字をノートに書き取っているし大山はよだれを垂らしながら犬のおもちやと戯れているし野田に至つては何かニヤけてハアハア言いながらハルバートをいじくっているし今何が起こつてるんだこの部屋でてか文字数多いわ読者の方が読みにくいだろ少しは自重しろテメエ!!!」

直井「あ！ 銀時さんおはようございます!! コイツらが僕の読書を邪魔したんです!! これは正当防衛です！ 僕は無実ですよ!!」

「例え無実でも正当防衛でここまでやらかしたらもはや無実とは言えねえよ!! ……テメー毎回毎回催眠術を腹いせに使いやがっ……？ 何読んでんだお前」

ふと、俺は直井が読んでいる本にカバーがついてる事に気付く。

こいつが他人に見られたらまずいような物を読むとは思えねえが……

直井「！ ……いいですよ。銀時さんも、興味を持ってくれるんですね？」

何か意味深な物言いだが……

俺は直井からその本を受け取り、ブックカバーを外す。そこに書かれていたのは……

『絶対に傷つかない男と男の愛』

「オイいいいいいいいいいいいい!!! てつめ何てもんをここに持ち込んでん

だ!!! んでコレ読むの邪魔されたから催眠術ってお前ただ興味津々!? 部屋で読

め一人で読め誰の迷惑も掛からないところでひっそりと読めエエエエエエエエエ

エエエ!!!」

直井「……銀時さんがこれに興味を持ってくれるなんて……いいですよ、こうなつた

らこの僕を、煮るなり焼くなりモニヨモニヨするなり好きに滅茶苦茶にしてください

!!!」

「ねえ何勘違いしてんの!? モニョモニョつて何俺にそんな趣味無いですから!! 一人で勝手に滅茶苦茶になつてろ!!」

俺が直井も肩を掴んで揺らし、若干直井がきもちいいような表情をし始めたところで仲村が入口から顔をのぞかせ声をかけてきた。

仲村「直井くん、銀さん。お取り込み中のトコ悪いんだけど、ちよつといいかしら?」

★—教員棟3階 空き部屋—

仲村が俺たちを連れてきたのは、狭く、わずかに埃が舞う、しばらく使われていない空き教室だった。真ん中に机がある以外は他の部屋に比べて何の変化もない殺風景な。

「今度は何だよ、こんな狭い部屋に呼び出しやがつて。言つとくが校長室のアレのことなら俺あ何もしてねーぞ。全部コイツだ」

仲村「そんなことじゃないわよ。直井くん、銀さんの失われた記憶を取り戻して見せて」

仲村は窓に向かい、こつちを見ないままですう言った。

……俺の、記憶?

直井「僕に命令だと……さつきから貴様何様のつもりだと言いたいところだがこれは合法的に銀時さんに催眠術がかけられる!! よくやった愚民これで僕と銀時さんのムフフぶぎやつ!! 何するんですか銀時さん! 突然頭を叩くなんて!!」

「オイ……仲村ホントに大丈夫かいっ」

仲村「そうね、ちょっと心配だけど……それでも、」

そこまで言い、仲村はこつちを振り向く。

仲村「直井くんの催眠術は本物よ。それはかかった本人である私がよく知ってる……あなたの失われた記憶も取り戻せるはず！」

直井「ふうむなるほど。確かに、それは僕の手で何とかしてみたい。銀時さんのためになるならば、今回は久しぶりに真面目に行くとしましょう」

「お前自覚あったのか……つてか待て。何回も言ったら、俺は記憶喪失なんて起こしてねえよ」

俺は仲村に訴える。

俺は記憶喪失なんて起こしてない。

あいつら……新八、神楽、定春。その他もろもろ……

やかましかったが退屈しなかった、俺の日常は——まだここに

仲村「……あなた、まだ自分が死んでないなんて思ってるの？」

……

仲村「ここはまぎれもない死後の世界よ？　ここに来る方法はただ一つ——死ぬこと。」

仲村「それとも何？ 私たちがあなたが見てる夢の中の登場人物だとも言いたいの？ あなたの適当な記憶から作られた架空の人物だとも？」

仲村「だとしたらお生憎様ね。おあいにくさま私は実在しているわ。そこにいる直井くんだって天使だって、戦線のメンバーだってNPCですら実在しているの」

仲村「それらすべてを認めないつもり？ 私たちを今まで助けてくれたあなたが、私たちを否定してしまうつもりなの？」

「……んなわけあるかよ」

仲村「だったら認めなさい。あなたは死んだの。死んで、私たちと同じようにこの世界に来了。あなたのやっていることは私たちに対する明らかな冒瀆ぼうとくよ？」

……………

「悪かった」

仲村の言うとおりに、なのかもしれない。

俺は、突然この世界に来了。だからまた、何かギャグ漫画の補正的なのが働いてすぐに帰れるのではないのかと思っていた。

けど違った。俺は死んじまったんだ。

もう会えねえんだ。新八にも。神楽にも定春にも。

ババアにも長谷川さんにもキャサリンにもたまにもヅラにもお妙にも、その他の連中

にも……

「……………」

直井「……銀時さん」

仲村「……………」

「……オイお前ら、もう昼だろ？ ハラへらねえか、奢ってやるから何か食ってこいよ」

仲村「……そうね、そうさせてもらうわ」

直井「じ、じゃあ銀時さんも一緒に」

仲村「あんたは私と来るの！ こんな美少女と食事なんて嬉しいでしょ？」

直井「なっ！ 放せ！ 貴様、僕は神だぞ!? 何て無礼な！ オイ!!」

仲村は暴れる直井を外に放り出してから、俺にこう言った。

仲村「……前に言ったわよね？ あなたが私を背負ってくれるって」

仲村「でもね、私借りを作るのが一番嫌いなもの！ ……だから」

仲村「あなたが笑ってる時は、私も一緒に笑ってあげるわよ」

仲村「あなたが泣きたい時は、私も一緒に泣いてあげるわよ」

仲村「こんな私だけど、重くて倒れそうになるかもしれないけど」

仲村「その時は、猫の手でも戦線のみんなの手でも何でも借りて、」

仲村「あなたを背負って……あげるわよ」

それじゃあね。そう言っつて、仲村は足早に出て行つた。

顔を見られないように後ろを向いて、声を震わせないように力強くそう言っつて——出て行つた。

「……泣き顔で言われても説得力ねえつつの。馬鹿女が」

★

俺はもう元の世界には戻れない。

俺がずつと糸を張つた江戸の、かぶき町の、よろず屋には。

……そりゃあ、少しテンションは下がるわな。

だけど……こんな世界だが、こんな……どんな糸さえ届かない世界だが、

支えてくれる奴らがいる。

頼んでもねえのに人の荷物奪い取つて勝手に持つて行つてくれる奴らがいる。

「……新八、神楽、定春」

——俺アあいつら見捨ててこの世界出ていけなくなるほどこの世界に馴染んでたみたいだぜ？

俺は、お前らとあいつらを気付かないうちに重ねてたのかもしれないねえ……

「……上等だよ」

「一体俺が何で死んだのか——俺が何でこんな世界に来ちまったのか、知りに行こう
じゃねえか」

次回に続く——

第十七訓

★—教員棟3階 空き部屋—

俺はしばらくして、仲村と直井をまた同じ部屋に呼んだ。

今度こそ……俺の死んだ時の記憶を取り戻すために。

俺が真ん中にある机に座ると、直井はその向かいに静かに座った。

直井「……銀時さん。どんな過去を見ても、どうか自分を見失わないで……」

直井「もし、貴方がどうなっても……僕だけは、味方ですから」

「クサイ、キモイウザいくどい近づくな変態」

仲村「ちよつと銀さんコレ一応原作どおりなんだからあんまりデイスらないでよ!!」

「お前もこの展開で原作とか言ってるんな前の話台無しじゃねえか」

やがて、『銀さんの一言なら何でも嬉しい!!』と悶えていた直井を何とか普通に持ち直し、催眠術をかけてもらう。

直井「では、いきます……」

直井の目がしだいに赤く染まり……意識が海に沈む。記憶という波紋を広がらせる



「おにいちちゃん学校楽しい?」

——夏だった。セミがやかましく鳴く夏の日。

その日オレは妹の見舞いに来ていた。

「……楽しくかねーよ。学校なんか行ってねーから」

「行ったら楽しいかもしれないよ?」

「頭がよかつたらそうかもな、だけどオレ馬鹿だからさ。成績悪い奴には居場所がない

所だよ」

「勉強は楽しくないの?」

「楽しい訳ないだろ? 勉強だぞ?」

「友達は何? お友達と遊ぶのは?」

「一人でテレビ見たり、ゲームしたりするのが楽しい。相手の趣味に強引に付き合わされたら、面白くもない冗談に笑ってやらなきゃいけなかったり……疲れるだけだよ」

「そお? ……わたしは勉強、楽しみだなあ。友達作るのも、スポーツするのも楽しみ」

妹のその言葉に思わず笑いと——少しの罪悪感がよぎる。

「……あ、そうだ。コレ」

オレは鞆から包みを取り出すと、妹に渡した。

「うわあ……ありがとうおにいちちゃん」

☆

「バツカヤロウ!!!」

「っ……………」

怒られて、頭を下げる。

非礼を詫げる気なんて無い。ただ、形式として頭を下げる。

「……………」

オレは、生きている意味がわからない。生きがい知らない。

他人に興味なんか持てない。だから誰とも関わらずに今まで生きてきた、その方が楽だから。

最低限食っていけるだけのアルバイトを惰性で続けて——そんな暮らして、十分だった。

——それでもオレはずっと、妹にだけは会いに行っていた。

なけなしの金で漫画雑誌を買っていく。いつも適当に、本屋で平積みになってるのを買っていくから同じ雑誌であるかどうかすらわからない。

もしかしたら、違う雑誌になっていて話は繋がってないかもしれない。

でも、

「ありがとう、おにいちゃん」

妹は決まってそう言った。

結局、オレからの物なら何でも嬉しいようだった。

……妹はオレとは違う。

こんな体にも関わらず、生きることには希望を持つてるし生きる意味も……きつと見つ
けられるだろう。

なのに、この二年ずっと、病気が治らず退院できないまま過ごしている。

(……可哀想に、代わってやれたらいいのに)

「……どうしたの？ おにいちゃん」

「ん？ ああなんでもない。……面白いか？」

「うん。とつてもおもしろいよ？」

「……そっか」

……最近、いつもそんなことを考える。

代わってやれたらいいのに。何の希望もない、生きる意味すらわからない……こんな
オレと。

その蓮杖の思いが、オレをここまで通わせていた。

☆

……冬になった。

「……髪、伸びてきたな……」

夏もそうだが、冬のバイトはいっそう辛い。寒さで力が抜けていく。指先がかじかんで裂けそうだ。

それでも、生きるために続ける。

（——『生きる』？ 何のために？）

……考えちゃダメだ、考えてしまったらこのバイトすらも辞めてしまいそうだから。これを辞めてしまったら食っていけないし何より……妹に何も買ってやれなくなる。

「……ふう……」

バイト後、オレはベンチに座り、缶コーヒーを両手に握り一息つく。

缶コーヒーは昔から好きだった。

バイト終わりのかじかんだ手を、温かい缶コーヒーが暖めてくれる。

（……そうだ）

（クリスマスは、医者に相談して少しだけでも外に出られるようにしてもらおう）

（車いすは、雪が積もると使えないのかな……？）

(……だったからおんぶでいいや。アイツ一人ぐらい、いくらでもおぶって歩ける!)
(それで、好きな店で好きな物を買ってやろう)
(できれば、いいお店でケーキも食べさせてやりたい!)
(……だったなら、もつと稼がないとな……!)

☆

クリスマスが近づいてきた十二月のある日。オレは妹に訪ねた。

「クリスマス……さ、出歩けるならどんなところに行きたい?」

マスク越しのくぐもつた声が俺の耳に刺さる。

「? 町の大通り……」

「ははっ、あんなところでいいのか?」

「だってね? 全部の木に電気がつくんだよ? 知ってる?」

「いや……クリスマスにあんなトコ行かねえし」

「すつごくキレイなんだって。……去年からそうなんだって、先生がね? 言つてたの」

「へえ……じゃあさ、そこ行くか?」

「……行けるの……?」

「行けるように掛け合ってみる。もしダメでも……ナイショで連れてつてやるよ」

「ホント……?」

「ああ、ホント」

「くくやったあ！　ありがとうおにいちちゃん！」

これまでで、一番大きな『ありがとう』だった。

☆

バイトの掛け持ちを始めた。

「……ちよ、何やってんの！」

「ああ！　す、すみません!!」

前のようにミスをし、謝った。

このバイトをクビになったら、妹に喜んでもらえない……！

「……………すう……………」

家では、寝るだけになった。

帰っても、ゲームをやる暇もなく布団に倒れこむ。

……今は、目的があるから働けている気がする。

ただ一つ、心配なのは――

アイツの容態が……悪くなっていることだった。

☆

外出の許可は当然出なかった。

だからオレは、面会時間が終わった後、病室に忍び込み……妹を、夜の街に連れ出した。

☆

前に言っていた、町の大通りの真ん中を妹を背負いながらゆつくりと歩く。

並木のすべてにライトが飾られており、色とりどりに光り輝いている。

降る雪もあいまってそこは何か、神聖な物を感じさせた。

「スゲえ……おい、見えてるか？ スゴいぞ！」

「うん……すぐキレイ……」

「だな……！　すぐキレイだ！　オレも見られてよかったよ……お前のおかげだな！」

「さあて、これから楽しい時間が続くぞお！　まずはプレゼントだ！　何でも買ってやる！　にいちちゃんこの日のために実はすげえ貯金貯めて来たんだぜえ？　だからどんな高いものでも買ってやれる！　何がほしい？」

「お、まず店に入ろうか！　宝石店でもいいぜ？」

「あ、普通にデパートがいいか？」

「……おにいちちゃん」

「うん？」

「……ありがとう、ね」

「っ……ああ！」

「買い物の後にもなあ？ いいことが待ってるんだぞ?! 今度は夕飯だ、よくわからないけど……雑誌に載っていたいい店予約してあるんだ!」

「コースで決まったものが出てくるんだぞ? コース料理だぞ?! すごいだろ!? オレだって——」

——その後も、オレは一人で喋り続けて……歩き続けた。

☆

オレは、一人になった。本当に……

一人になって初めて気付いた。オレは本当に生きがいを持ってちゃんと生きていたんだ……生きる意味は、ちゃんとすぐそばにあったんだ……

気付かなかっただけだ。オレはあいつに喜んでもらえるだけで、笑ってもらえるだけで……ありがとうって言ってもらえるだけで……生きていられたんだ。幸せだったんだ……

……馬鹿だ、オレっ……今頃気付くなんて。

そんなに大切な存在だったのに、何も……してやれなかった。

もつとたくさん会いに行つてればよかった。

もつとたくさん漫画でも何でも買つてやればよかった。

もつとたくさん……もつとたくさん……もつと、もつと——!!

ずつと、ずつとあんな……

ベッドで寝たきりで適当に買つてきた漫画読んでただけの人生だなんて……

アイツは幸せだったのか……？

……そして、

そんな、唯一の行き所を失ってしまったオレは、どうなつてしまふのだろうか……

気付かない幸せに満たされていた日々。

でももうその時間は過ぎ去ってしまった。

もうオレには、何も、何一つ——残されていない……

☆

目的もなく街を歩く。バイトをする気も起きない。家に居る気も起きない。何もする気もない。

ふと、声が届いてきた。病院の入口の前で。子供の頭を撫でながら微笑む医者

が。

「退院おめでとうねー！」

「うん！　ありがとうございまして！」

（……………）

その子供はとてもうれしそうに、心から、心の底から微笑んで、特大のありがとうを口にした。

ありがとう……ありがとう、ありがとう——

……まだだ。

まだオレは全部失っちゃいない。

オレはもう一度、生きがいを見つげられるかもしれない——！！

☆

勝手に足が動きだす。近くの本屋に転がり込む。

財布の中身を全部ひっくり返し、医学関連の本を買いあさった。

平積みになっている漫画雑誌を眼の端で捉えながら——今までで一番大きな一歩を踏み出した。

助けるんだ。

妹と同じ境遇に立っている人たちを。理不尽な人生を強いられている人たちを。この手で、オレの手で！ オレの命で！！

学校にも行つた。勉強もした。バイトも続けた。

絶対になつてやる。今度は、今度こそ助けるんだ！

☆

——電車の中だった。

この日がついに来た、オレにとっての最大の試練の日——医大の受験日。

オレは自分の受験票を目にする。

もう少し——あと少しで、

——ゴウウウウウウウン……

(……何だ?)

……!!

——大きく揺れた。

——辺りが暗くなった。

——悲鳴が聞こえた。

——オレの受験票がどこかへと舞う。

オレはそれを——音無結弦おとなしゆずるはそれを、掴むことはできなかった——

★

「——つつつ!?!」

しだいに目が開いた。目の前には、数分前に見たツラが二つ。

催眠術が解けた……というより、俺の忘れてた記憶が全て蘇った、つてとこか。

………

直井「ぎ、ぎぎぎ銀時さん!! 大丈夫ですか?! 悪いところはありますか?! 僕がわかりますか?! あなたの直井文人です!!」

「お前なんか特売されてても買わねえよ絶対」

もう何年もここにいなかったような感覚が俺を襲う。俺の目には変わり映えのしな
い教室が映っているはずなのに。

直井「な、何を見たんですか銀時さん! 僕でよかつたら聞き」

仲村「おおーつとそこまで! 過去は詮索しない。死んだ世界戦線の掟よ? 銀さ
ん、私たちは先に出て行くわ。落ち着いたら私のとこまで来なさい」

「おう」

そう返事をする、仲村とぶーたれながらもそれに続いた直井は教室から出て行こう
とした。

「……ちよつと待て」

直井・仲村「……………」

「直井、お前俺にどういう催眠術をかけた？」

直井「え？ 失われた記憶を思い出すように、と」

「……………そうかい。サンキュ、んじやお前帰れ」

直井「え!! で、でも銀時さ」

「今度一緒に食事でもどうだ？」

直井「お疲れ様でした銀時さん!!」

直井がドアが吹っ飛ぶ勢いで部屋を出て行ったことを確認すると、俺は次に仲村に質問をした。

「……………仲村」

仲村「何よ？」

「——お前、音無ってヤツ知ってるか？」

仲村「——……………知らないわよ」

「……………そうかい」



俺の記憶じゃなかった。

直井によつて思いだした記憶は、俺と縁もゆかりもない赤の他人のものだった。

赤毛で、病弱の妹がいて、イケメンで……

何で？ 何でそんなやつの記憶が——

……その日、夢を見た。

いや、夢というにはあまりにも鮮明すぎて——まるで、実際の出来事のように語られていた。

——アンタ、万事屋よろずやだろ？ 何でもやってくれるんだろ!?

——頼みがある。

——オレは救えなかった。みんなを救えなかったんだ。

——みんな、自分の抱えてたものを仕方なく心の底においやつて、そうして消えていつちまったんだ……

——情けないよ。あんなデカい口たたいたといて、この手で救えたヤツなんてほんの一握りだ。

——オレは……生きてた時も、死んだあとも、目の前のヤツを救えずに消えちまったんだ……っ！

——頼みだ、万事屋さん。

——オレの代わりに、何も救えなかったオレの代わりに……

——アイツらを、救ってやってくれ。

——アイツらのすこし先を生きて、アイツらを導いてやってくれ——

★

「……冗談じゃねえ、何で俺がテメーの尻拭いなんかしねーといけねえんだ」

「しかもそんなくっだらねえことのためにこんなシケた世界に来させられただど？ ふ

ざけんのも大概にしろ」

「……だがよ、少しだけ感謝するぜ」

「こんな最っ高のクソツタレどもと会わせてくれてよ」

……俺は前を歩く。

意思を受け継ぎ、自分の武士道を通すために。

アイツらのすこし先を生きて、アイツらの道しるべになってやるために。

次回に続く

第十八訓

天使「……何？　こんなところに呼び出して」

私と天使は一緒に、対天使用作戦本部——要するに校長室にいた。

それについては全くまずいことなんて何も無い。私が呼んだんだから。

「そうね、一言あなたに言いたいことがあつて」

そう、私は言いたいことがあつて天使をここに呼んだ。

天使が人間だと発覚した瞬間から抱いていた感情——

天使を討つために用意したこの作戦本部で言うのも変な話だけど、

それでも、これだけは言っておきたい。

「——ごめんなさい」

そう言つて私は天使に頭を下げた。頭を下げたまま続けた。

「私は……私には何も見えていなかった。神に敵対しようと、ただ無関係なあなたに迷

惑ばかりかけていた」

「あなたが何度『天使じゃない』と言つても聞きもせず、目の前の異能を『神』による

ものだと決めつけてしまった。元々はあなたのガードスキルも、私たちのせいで作らせてしまったようなものなのにね」

天使「……………」

「今更謝つてすむような話じゃないけど、許してくれなんて言わないけど……一言謝りたかったの」

天使「……………」

彼女は動かない。いつものように無表情に無機質に、頭を下げる私を見下ろしていた。

天使「……とりあえず、」

「……………」

天使「私の部屋でお茶を飲んで？ 話はそれから」

「……………」

天使「だから、お茶」

天使は無表情に、無機質に、ただいつものようにボケた。え？ この空気で？

このモノログですらシリアスに徹してる場面であるにも関わらずにこの娘どんだけ天然なの!? どうして今の話の流れからそこにいたるのよ!

「あの……何で？」

天使「だって——」

天使はほんの少し不服そうに口をとがらせると、先の言葉を口にした。

天使「——前に部屋に来た時に飲んでくれなかったから」

「……………」

前……

そういえばあった。チャーと私が決闘して、勝った私が友好を深めるといふ名目で天使の部屋に来て秘密を探ろうとしていた時だ。何のことかわからない方はTrack ZEROまたはHeaven's Doorを全国の書店などでお買い求め下さい

！

つと、これ以上はステマ乙とか言われちゃうわね。確かにあったけど……

「……………えと……いつの話してるのよ？ 確かにそんなことあったけど——」

天使「来てくれないなら話は聞かない」

そう言い天使は私に背を向けた。

「……………」

透き通るような白い肌、川を流れ落ちる様な白銀の長い髪、何より後ろ姿のちっこい

体。

——か、

「——かあわあいいいいいいいいいい！！！！」

天使「!？」

「ああびつくりして身をこわばらせる姿もたまんない！　ち、ちよつと抱きしめていい？」

この娘いつからこんなにかわいくなつたのよ！　少し前までは私たちには悪魔に見えたのに頬膨らましてぷいってあざとすぎるわ！　そりや天使ちゃんマジ天使なんて呼ばれるわよそりや人気投票でぶつちぎりの一位取るわよ誰も勝てないわよ！！

天使「……………」

あ、天使引いてる……………これはいけない。

私は壊れてしまった空気をとりつくう意味で咳払いをすると、天使にこう言った。

「——わかつたわよ」

天使「……………」

それを聞いて、天使は返事のかわりに少し笑って見せた。うっわマジ天使…………

「そのかわり、」

天使「？」

「あなたのこと、名前で……………奏ちゃんって、呼んでいい？」

天使「……うん」

銀時「うんうん、仲良きことは美しきかなってね」

「いやあんた何でナチュラルに盗み聞きしてんのよ」

★

日向「おーいお前らー！」

「あん？」

藤巻「日向かよ？ 何か用か？」

大山「日向くん、何？」

——それは、とても些細なことから始まった。

日向「いや、そこで誰の物かもわかんねえメガネ拾っちゃまってさ？ ここらへんは俺らしか近づかねえしお前らのものかと思つて」

野田「俺がそんなものつけるように見えるか？」

高松「だれもあなたには聞いてないと思えますよ。ちなみに僕の物でもありません」

——きつかけなんて無いに等しい。ほんの気まぐれだった。

日向「んだよてつきり高松あたりのものだ……しよーがねえ、しばらく俺が持つておくか」

「おいおい日向さん今更キャラ立ててに必死か？ 今更テコ入れしても間に合わないよ？ お前はいつまでたつても仲村の奴隷だよ？」

日向「うるせえな！ 持ち主が見つかるまで預かるって言うてるだけだろ!？」

——ただ、気まぐれに、

大山「でも丁度いいんじゃない？ 日向くん前にメガネ欲しいって言うてたでしよ？ 試しに掛けてみたら？」

日向「ん、そつか？ んじやちよいと……」

——突然、それはやってきた。

日向「ど、どうだ……?？」

「おお……! すっげえ似合ってるぜ、まるで元から一部だったかのようだ」

日向「う、うそだろ!?! 銀さんからそんな言葉が聞けるなんて……」

「いやいや俺だつて目の前の現実を否定することなんざできねえよ。」

日向「? おい何を——」

「……ホントよく似合つてらあ、いいメガネ掛け機に出会えてよかったなー日向くん」

——この時、彼がメガネを軽くつまみ、メガネに向かつてこんな事さえ言わなければ、

日向「——イヤ日向くんこっちイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
 ——こんなことには、ならなかったのだろうか。
 !!!!!!!」

日向「メガネ掛け機って何!? もしかしてあのメガネ掛けてあるヤツか!! そんなのと一緒の扱いなの僕!」

「……いや日向の九五パーセントはメガネだ。それつてもうこつちが日向じゃね? お前メガネ掛け機じゃね?」

日向「何でさつきつけたばっかりなのにそんなにメガネが日向占めてんだよ!! 僕ってそんなに影薄かったの!」

「……まさか……」

日向「——ん? あれ? 俺は一体何を……」

全員「……」

「……新八……?」

★

藤巻「……おい日向、さつきのやけにキレの良かったツツコミは何だ? ツツコミキャラ目指して特訓でもしてたのか?」

日向「……や、あんま覚えてねえんだけど……」

「……………」

藤巻「……ん？ 何だよ先生」

俺は日向からメガネをぶんどり、藤巻に渡してこう言った。

「お前掛ける」

藤巻「？ いや、別に構わねえけどよ……」

藤巻がそのメガネを掛けたことを確認して俺は口を開き、こう言葉にした。

「おい童貞駄メガネ」

藤巻「童貞ナメんなああああああああああああああああああ！！！！ 童貞はな、三十まで貫

くと魔法使いと呼ばれ人間という枠を超えた超越者になれるんだよ！！！！」

大山「うわ！ 藤巻くんまるでさっきの日向くんみたいなツツコミだよ！」

野田「言ってることはまるで理解不能だがな」

予想通りというべきか、藤巻は俺に掴みかかって激しいツツコミを浴びせてきた。

……うん、新八だ。

★

日向「……んじゃあ何か？ そのメガネにはお前の生前の知り合いの魂が宿ってい

て、

藤巻「ツツコミのキレが増したのは、その知り合いがツツコミの名人だったからと」

「……まあ」

全員「「へーそーなんだー！ ……って信じられるか!!」」

よほど衝撃的なのか、校長室にいるやつらが声をそろえてツツコんできやがった。いやまあ、俺もまだ半分信じらんねえんだけど……

高松「いいですか？ この世界は死後の世界です。この世界に来るには死ぬしかないんです！」

松下「聞けばその知り合い、父親を早くに亡くして実家の道場の復興のために必死に働いてきたらしいではないか。ここに来ることもできないわけではないはずだが……」俺たちは再度、その知り合い……新八の魂が宿っているというメガネをそろって眺める。

メガネにはさつきは感じられなかった、何か禍々しいものが感じられるように思えた。

またメガネってあたりがそれっぽいなあ……

大山「そのメガネには、知り合いの意識とかはないのかな？」

藤巻「んなワケねえだろ。日向がその知り合いのツツコミをした時にアイツはしっかりと僕って言ってたんだぜ？」

野田「アイツって誰だ？」

松下「それはやはり日向のこと……だろう？」

高松「わけがわからなくなってきましたね」

TK「絶望のCarnival……」

連中が今の状況を整理しようと思いを交わす。だがこんな事態この戦線でも初めてだったようで、議論は進むどころか混乱してきている。

「……とりあえず、だ。少しまとめると……」

俺は部屋の真ん中の机にみんなを集め、紙に今の状況を箇条書きしてみせる。

- ・このメガネには坂田銀時の知り合いが宿っている
- ・そのメガネをつけるとツツコミのキレが上がる
- ・多分、その知り合いの意識はメガネに宿っている

日向「何で意識がメガネに宿ってるって言えるんだよ？」

最初にメガネを付けた張本人である日向が疑問を口にする。

「俺がさつき藤巻に『駄メガネ』つつつたろ？」

野田「そうだったか？」

日向「そーだったんだよさつき一体何を見てたんだお前は！ んで？」

「そりゃーこいつのあだ名みたいなものだ。いつもそう言ったらキレて掴みかかってきやがってよ」

俺は机に置いてあるメガネを軽く指ではじきながら続ける。

大山「さっきの藤巻くんとおんなじ……」

高松「……では、日向さんがあくまで日向さんのまま、その知り合いのツツコミをしていたのはどう説明するんですか？」

高松がめずらしく鋭い指摘をしてきた。

そう、それが一番の問題だ。

日向が付けた時はあくまで日向の意識をベースに新八が宿っていたようだったが藤巻の時は違った。

明らかに藤巻の意識を新八の意識が食っていた。

なぜそんな違いが起きたのか……

「……俺のその知り合いな——」

「——影が薄いことを気にしてたんだよ」

日向・藤巻「は？」

メガネをつけて変わったメンツが意味のわからないような声を上げる。

「だから、影が薄いことを気にしてたんだよ！ 藤巻、お前みたいになー！」

俺は藤巻をまっすぐ指差してそう叫ぶ。

藤巻「……何が言いてえんだよ」

少し溜めて、自分の考えをしつかりと頭で言葉にしてから俺は口に出してこう言った。

「つまり、影が薄い⇨近い魂同士、その知り合いもお前の体を使いやすかったんじゃないかと」

全員「こんなトンデモ理論あるか!!!」

予想はしていたが、これには戦線のみんなが反論してきた。

俺はこれしかないとおもうんだが……

藤巻「影が薄いからとり付かれたって？ ふざっけんじゃねえぞ!! んなことあるかよ!!」

大山「先生……さすがにそれは……」

高松「無理がありますね」

日向「大体ゆりっぺはどこにいったんだよこのよくわからん状況で!」

野田「少し出ると言っていたぞ」

「ちっ……んじゃ、しゃーねーな。仲村に直接見せてくつか……」

「このやろ!! 捕まつてたまるかクソがあああああああああ!!」

★

「はあ……はあ……何とかまいたか」

俺は周りに人がいないことを確認するとメガネを取り出し、目の前に持つていく。

「……新八よお、何でお前までこんな所に来ちまつたんだ?」

メガネは答えない。それもそうだ、こいつはただのメガネなんだから。

「……アホらし。さつさと仲村探して——あ」

仲村を探そうと足を動かした瞬間、メガネを地面に落してしまった。

「つといけねえ、さつさと拾わねえと『バキッ』バキ?」

耳に何かいやな音が響いてきた。

俺がメガネをもう一度見ると、そこには何故か誰かの足があった。

……アレ? もしかしてこれって——

仲村「んもー奏ちやんつかわいいよう! 髪サラツサラ! 肌スベツスベやだ何コレ

! ……つて奏ちやん何か踏んでない?」

立華「ゆり、そんなにくつついたら歩きにく……!! おつきい、やわらかい………

ん? 何コレ……」

「……」

仲村「……」

立華「……」

……

立華「……てへっ」

「てへっじゃねーだろ新八
 イイイイイイイイイイイイイイイイイイ
 !!!!!!!」

★

……結局、新八メガネは立華によって粉砕、修復不可能になった。

どうして新八がこんな世界に来たのか、そもそもあれが新八だったのかももう分からずじまいになっちまった。

——だが、あとから仲村に聞くと、そんなことはこれまでに一度もなかったらしい。

……変わってきてるのか、俺が来たことで。この世界が……

★—次回予告—

「十八の八は新八の八！ やーまさか俺以外の銀魂キャラがこの小説ででてくるとはなー」

新八「イヤ、あれ出たって言うんですか、遠回しにバカにされた気にしかなれないんですけど」

第十九訓

……あ、もうだめ、死にそう。

『——生！』

や、この世界では死なねえんだっけか？　　まったく難儀な世界だぜ……

『あの、先生？』

死なないんだったらハラすかねえようにくらいしとけよ！　こちとらせつかく教師
やってるってーの前に前と同じでひもじいだけじゃねーか。

『……先生！』

……ほらどつかから幻聴も聞こえてくるよ？

あの腐れリーダーめ——

★——三日前——

ゆり「で、報告って何？」

高松「本日の食券が不足しているとのことです」

いつもメガネをいじくりまわしてる陰気な参謀の高松がつぶやいた。

は？ 食券が不足？

「前にトルネードやった分は？ 肉うどん100杯分くらいはあつたらーが!？」

松下「すまん、俺が全部食べてしまった」

「何やってんのお前?! 吐きだせ!! 肉一枚でいいから吐きだせ!!」

松下「うむ。ちよつと待つとれ……おぶぶぶろつしやあああああああああ!!!」

日向「銀さん落ちつけよ——つてぎやあああああああああ!!!」

大山「うわあ！ 日向くんが黄色くて読者の皆様にお見せできないような何かにまみ

れてるよ!!」

ゆり「あーもうそこうるさいつてかくつさ!! ちよつとあなたたち久しぶりの本編更

新だからつて気合入りすぎよ!!」

てゆーかそんなことはどーでもいんだよ!!

「メシ!! メシがねえつて事じゃねえか!! どーすんだこれ!!」

藤巻「どうする？ ここらでトルネードいっとくか？」

ゆり「いや……今回は——アレをやるわ」

デスクにどっぴかり座つて腕を組んでいる仲村が意味ありげに言葉を溜めて言った。

野田「ゆ、ゆりっぺ本当にアレを!？」

大山「うあああああああああ!!」

松下「ついに来たか!!」

TK「絶望のcarnival……」

松下「そうだな! まさしく絶望のカーにはるだ!!」

日向「ゲロ吐いたのに微塵も口を洗おうとしないお前の精神と口臭に俺は絶望だ」
野郎どもがお決まりのオーバーリアクションをかましてくる。

「アレってなんだよ?」

藤巻「説明するとだな……絶望のcarnivalってな感じだ」

日向「あああれは本当に絶望のcarnivalだ!!」

大山「すぐくカニバルってでデンジャラスなんだよ!!」

野田「というかカニバルって何だ?」

「俺に聞くな馬鹿ども勝手にカニバルつとけや。仲村、説明」

脳内カーニバル野郎どもはほつといて仲村に話を聞く。

とりあえず食料に問題はなさそうだが……何かイヤな予感が。

ゆり「ええ。準備ができるのは三日後よ? それまでのお楽しみ!」

………は? 三日後?

「んじゃ何か? 俺たちに三日間何も食うなつてことか?」

ゆり「要約するとそうなるわね」

カロリーになっちゃうかもしれないねーぜ？」

『へ？ それって……私、先生に食べられちゃうってこと？ あられもない姿になった私を銀時先生が優しく包みこんで作者の能力ではとても表現しきれなくんずほぐれつアハンウフンなことになっちゃうってこと!? 保健室や体育倉庫や中庭で!? ナニソレ燃える！ むしろ萌える!!』

おい、毎度毎度だが何でこんな奴が一般生徒やってんだよ。特徴ありまくりじゃねえかどつかの生徒会役員の共に出てきそうな勢いじゃねえか。

「オイテメー俺イライラしてるつつつたる、さっさと用件を言え」

あらぬ妄想をしてハアハア言ってる一般生徒に用件を聞く。こいつはこれ以上喋らしたら危険だ。いろんな意味で。

『ああ、そうでした。あの……先生、これ』

そう言つて目の前の人間以上一般生徒未満な女子生徒は俺に包みを差し出した。

『あの、あのあの！ 先生が最近いつもひもじそうって、友達から聞いて……食べて下さい!!』

「……」

ほのかに香る暖かい匂いが俺の腹を掻き立てる。

後光が、後光が見える……！

「天使つていたんだ、本当に……」

神も仏も信じちゃいなかったが、この時ばかりはこの世界の神様に本気で感謝した。俺は女子生徒にお礼を言い、すぐその包みを受け取り食べようとする。

この世のすべての一般生徒に感謝をこめて、いただきま

仲村「あーいたいた銀さん、例のオペレーション準備出来たわよ！ さあ来なさい！」

「え？ ちょオイ待て俺の三日ぶりのカロリーが」

仲村「レッツゴー!!」

「俺のカロリーイイイイイイイイイイ!!」

『やっぱり仲村さん、銀時先生と……』

★—植物園—

「……で、なぜに立華も一緒？」

俺の目の前には、わずかにおどおどして仲村の背後に隠れている立華の姿があった。

仲村「何よ！ 奏ちゃんももうウチの戦線のメンバーでしょ!？」

「ちよつと前まで天敵だったじゃねえか……」

日向「ついに天使まで仲間入りか……どーなっちまうんだこの戦線は？」

直井「なに心配するな、いづれ僕がお前ら全員追い出して銀さんとの愛を育む場所と

して使う。感謝するんだな」

「ちなみにお前も仲間に入れた覚えはないけどな」

てゆうか俺はいいとして、他の奴はだいいじよぶなのか？

アイツは今まで戦ってきた争いの張本人なんだぜ？

すんなり受け入れるわけ

松下「うむ。天使ちゃんと釣りなんて夢にまでみたシチュエーションじゃないか。決めるぜ俺！」

高松「まあ、かわいければ何でもいいんじゃないでしょうか」

TK「Come On Let's Dance！」

大山「た、立華さん憶えてる？ この前、君に告白したんだけど……ああしまった忘れてたよ！ この小説では僕告白してないんだった!!」

藤巻「おい天使よ、今度麻雀やろうぜ？」

ユイ「藤巻先輩カモにしようって考えが見え見えです」

ひさ子「私に勝てないからってそこまでするか……」

関根「こんな男の人とは付き合えないなー、しおりんはどんな男の人が好み？」

入江「ええ！ そんな、どんなって言われても……」

遊佐「何でそこで銀時先生を見るんですか？」

椎名「流石に既婚者は言うことが違うな」

日向「おい椎名!? 何受信してんだよそれ中の人!」

……そういえばコイツらバカだった。

もう嫌だこの戦線。

「ん」

ふと、俺の裾が何かに引つ張られる。何かと振り向くと、不安そうに表情を曇らせる立華がそこにはいた。

立華「駄目?」

……はあ。

「いいんじゃないの? お前もう生徒会長じゃねーんだし、一緒にいたけりや勝手にしろ」

立華「……うん、そうする」

★—第二連絡橋下 河原—

「……三日も時間置くから何かと思えば、ただの川釣りかよ」

周りを見ると、他の連中が川に釣り糸を垂らして泳いでる魚を釣っていた。

釣れない奴や大量な奴、エサをつけられなくてあたふたしてる奴もいる。

「ただの川釣りとは、言ってくれるじゃねえか」

俺が一人でエサをつけていると、見慣れない麦わら帽子の男が話しかけてきた。

齋藤「フィッシュ齋藤だ。よろしくな」

……

「どっかの高校で野球チーム作ってました？」

齋藤「？ 何の話だ、俺は野球なんてやったことないぞ」

「……や、ならいいんだけどよ」

齋藤「そうさ、結局野球というより理樹を中心にみんなでワイワイやるだけの集団だったからな」

「おい今理樹つつつたコイツ？ 絶対あの人だよ（21）の人だよね？」

齋藤「失礼な！ 俺は今まで一度だってロリロリハンターズなんてチーム作った覚えはないぞ!!」

「通じちゃったよ。絶対あの人だよこれ、棗な人だよまうーな人だよ」

そんなどーでもいい（ある意味重要な）やりとりを齋藤としてみると、どうしていいか分からない様子で釣り竿を睨む立華が目に入った。

「何やってんだよ」

立華は視線を釣り竿から俺に向け直すと、少しばつが悪そうに、

立華「別に……」

そう返した。

「エサ垂らさねーと釣りになんねーだろーが。オラ」

立華から竿をぶんどつてエサを川に垂らす。そしてそれをそのまま立華に手渡した。

「そーして待つときや、何かは釣れんだろ」

立華「……ありがとう」

立華はそのまま浮きを見て動かなくなった。

竿の先がわずかに前後する。自分のエサに何かかかるのを楽しみにしてるのがそれだけで感じてとれた。

アイツは、今までずっと一人だった。

アイツの生徒会長という立場のせいで、隣にいただけで、『人間』はこの世界から消えてしまうからだ。

そのくせ背中にはいろんなもんを背負つて、それでも必死にここで、この死後の世界で死にながら生きてきた。

俺たちに敵対視されながら。

その身に銃弾をぶち込まれても、

地下で生き埋めにされても、

卑怯な手で陥れられても、

それでも俺らを導こうとした。

一応こいつのやりたいことについてはわかってるつもりだ。

だけど、少しだけ。もう少しだけなら。

青く澄んだ空を見て、川に目を落とす。

川はさつきまでの落ち着きをどつかに落つこととしたようにうねりを発生させて俺たちを拒むように——拒む？

え？ オイさらつと言ったけど、うねりって何!?

俺は立華の方を向く。立華の竿が激しくしなっていた。その糸の行く先にはあの謎の怪奇現象。ここ川だよね!?

斎藤 「ここ、これは……モンスターストリーム!!」

「え!? 何その適当な名前!？」

斎藤 「モンスターストリームはこのオペレーションの名前の由来にもなった現象、この川の主の怒りの象徴だ……」

「この川釣りってそんな派手な名前だったの!？」

なんて話をしている間に立華の竿がさらにしなり、わずかにみしみしといった音が聞こえる。

「どうするってんだよ!？」

斎藤「さつきも言ったとおりモンスターストリームは主の怒り！ 普通ならコレが出たら即退散だ……だが!!」

斎藤「今まで俺たち戦線とたった一人で渡り合ってきた天使なら!! 主を釣ることができるかもしれない!!」

斎藤が立華の体にしがみつき必死に体勢を立て直そうとする。

日向「おいおいお前ら主を釣るのかよ!? 正気じゃねえぜ……へっ松下五段!!」

松下「む?」

日向「今度天使の秘蔵プロマイドやつから手伝え!!」

松下「ウホホっ了解だ!! 天使ちゃんんんんんんん!!!」

それに続いて日向、松下が天使を支えようとしがみつく。

そんなこいつらを見て戦線の全員がさながら大きなカブのように前のヤツを引っ張り合っている。

「「オーエス!! オーエス!!」」

……俺らって何やってんだっけ?

斎藤「今だ!!」

立華「……っ」

そう呟き、立華が何かを踏み台にして主に突っ込んでゆく。

ドオオオオオオオオオン——

そう響いた後に俺の目の前にあったのは、見事に切り刻まれた主の体だった。

日向「やった……やったぞ!!」

藤巻「釣った、のか? 主を」

松下「信じられん……」

野田「へっ、これがこの戦線の力だ!!」

大山「それと天使の力、かな?」

うおおおおおおおおおお!!!

と連中が勝手に盛り上がってる中、俺は一人輪の外でアホな顔して突っ立ってるだけだった。

「………あり?」

………この小説って、こんな感じだったっけ?

★

主の肉は俺たちが食べれる量をはるかに超えていて、しょうがないから一気に調理し

て一般生徒にもふるまうことにした。

日向「まるで慈善授業だな」

野田「戦線どころか、何かの奉仕団体になつてるぞ」

運動場に人が集まる。

日向「つてゆうか銀さんもいい加減機嫌直せよ」

「……いいんですう俺は端っ子でウノしとくから、勝手にお前らだけで川の主でも世界の主でも狩つてりやいいいじゃねえか」

大山「……先生どうしたの？」

藤巻「いやな？ 主を釣る時に置いてけぼり食らつたからすねてるみたいだよ」

野田「知るかそんなもの」

松下「てかこつち手伝え」

何なのコイツら？ 慰めるとかないの俺一応先生だよ？

そんな俺の肩をぽん、と銀髪の女の子がやさしく叩く。

「おお立華、お前なら——」

立華「この野菜切つて」

——チョップ。

立華「……痛い。何で叩くの？」

立華はわずかに、叩いたおでこを押さえ上目づかいで聞いてくる。

「や。何かお前も、アイツら戦線に似てきたなあって思ってたよ」

立華「……そう」

「何でちよつと嬉しそうなんだよ」

立華「別に」

それきり立華は口を開かなかったが、

立華「……」

立華の動かす包丁の音が小気味よく響いてきて、少し心地よかったのは秘密だ。

★

「そーいや仲村は?」

日向「言われてみれば見てねーな……」

藤巻「どーせどつかで高みの見物だろ? こんな奉仕活動みてーなことに参加するタ

マかよ」

そんな問答を繰り返してる時、バタリと。人が倒れるような音が耳を障る。

見覚えのあるSSSの刺繍、見覚えのある——紫の髪。

日向「ゆりっペ!!」

野田「ゆりっペ!!? どうした、誰にやられた!!」

見ると仲村の制服はところどころ破け、血が滲んでいた。

そして、仲村の口から出てきたのは——俺たちが予想も出来ない名前。

仲村「——天使」

「天使、つて……立華はずつとここに——」

そして俺は、仲村が俺たちではない、立華でもない、どこか遠くを見ていることに気付く。そこに目をやると……

白銀の髪をなびかせ、こちらを見下すように立っている——立華^天奏^使の姿。

「……お仕置きね」

次回に続く

E P I S O D E . 8 D a n c e r i n t h e D

a r k

第二十訓

仲村「天使が、もう一人……！」

俺たちが向かう先に立ちふさがる少女が一人。

白銀の髪に華奢な体——そして、紅に染まった瞳。

もし今、この少女をなんと表現すればいいかと聞かれても、即答できる自信が俺にはあつた。

だつてソイツはどう見ても——

「ただの中二病じゃねーか」

日向「おい銀さん今まあまあシリアスなシーンだからそういうの勘弁してくれよ！」

「いやだつてよく言うじゃん？ バカと煙は何とかーつて。むっちゃキメ顔だし。月を背後に背負つてるのも絶対アングルとか夜どうし考えてるだろコレ、ぜつて——ただの中二病だよ。」

中二病「……」

「ホラもう目とか真っ赤だよ？　どんだけ恥ずかしかったつー話だよ？　病気患ってるよこの病まない世界で中二病という病に苦しめられてるよ！」

高松「もれなく名前まで中二病ですしね。それと目が赤いのは元からです」

「マジでか」

竹山「ちなみに中二病とは、思春期特有の精神病みたいなもので『自分には特別な力がある』と思いきんでしまいイタイ行為を繰り返したりしてしまう人のことです。まあ彼女の場合あながち間違いででもないですけど」

「あ、何だ竹山いたんだ」

竹山「いましたよ！　ちよつとホントにいい加減にしてください！　ボクこんなキャラじゃなかったじゃないですか!?　こう言うのは藤巻さんとかの役目じゃないですか」
「や、だって藤巻はなんだかんだ言っても漫画で一発当てたし。腐女子にも大人気だし。もう好かれてるといふよりはまわりつかれて一緒に腐っていく勢いだし」

藤巻「ソレ違う藤巻だろーが！」

竹山「とにかく！　ボクは藤巻さんとは違うんです！　キャラデザも誰とも被ってないし！　クライストって言うカッコイイハンドルネームもありますし!!」

好き勝手言ってくれるなオイ……と地味ドス野郎が呟く隣で、竹山が必死になって

こつちにツバを飛ばしてくる。

何でこんなに鬼気迫るようなんだよ。

「お前、生まれ変わったらクライストしてなきそーじやねーか。実家の商店とか継いでなんだかんだけ機械とか全然ムリになってそーじやねーか」

竹山「何でボクの実家が商店やってるって知ってるんですかあああああああああああああ
あああああ!!!」

大山「うわ!! 竹山くんが先生に掴みかかっちゃったよ!?!」

藤巻「どんだけ実家が商店やってるって知られたくなかつたんだ……」

松下「存外お似合いではないか?」

野田「そうだ、商店のクライストでも何でもやっていけばよかつただろう。」

おなじみのアホどもが第二の天使なんて無視してだらだらとアホなことをくつちやべる。

「まあ、立華のコピーか何かならこんな中を突っ込んできたりしねーだ——」

一瞬。

その刹那。

激痛と浮遊感と、微かな違和感と不安感と焦燥感と。その他諸々をぐちやぐちやに混ぜ合わせた、矛盾の感情が交差する。

最初から腑に落ちなかつたんだ。

立華と、俺達と一緒にいたこの立華と、本当に見た目も趣味も思考も何もかもが一緒なら、何故仲村はこうして傷ついてんだ？

俺たちはもう闘わなくていい。俺も、他の連中も、立華でさえ心からそう思っていた。時間が、思考が、感覚が一瞬に凝縮され、いつもの酒と砂糖とジャンプでふやけた脳ミソでは考えられない速度で憶測が浮かんでは沈んでいく。

浮かび上がったそれを一つ手に取る。ひどく言葉にしづらいものが掌憶測に包まれていた。

それをあえて今。この、まさに宙に浮いて野郎どもを見下ろしてる状態で今、無理矢理言葉にするとしたら、こうだ。

仲村「ウソ……!!？」

一体いつから、目の前のコイツを立華だと錯覚していた？

日向「ぎ、銀さあアアアアアアアアアアアん!!!」

★

話しかけてくるんだよ。

俺が必死こいて何かを背負ってる時に、うるさくネチネチと。

お前がしてきたことは何だ。目の前のヤツを斬って斬って斬りまくってそれでお前は何を為した？ 死体の山を作っただけだ、ただの死体製造器だよお前は。

俺が泥だらけになってテメーを貫こうとしてる最中に、やかましくガミガミと。

お前には何も護れない。その血塗られた刀では、それを使ってきたお前自身では、護れるものなんて何にもねえんだ。

うるせえよ。頑張ってるんだろーが。必死に護ろうとしてんだろーが。今だってこうして――

……俺は一体、何を護るために刀を握ってるんだ？

いつの間にか、俺の背中も話しかけてくる。

背負った何かが話しかけてくる。

『テメーに護れるもんなんて、何一つねーんだよ』

★――医局 保健室――

気がつくとき……いや、ホントは大分前から気付いてただけだ。保健室にいた。ベッドで寝てた。

薄いカーテンを隔てた外では、どうやら戦線の連中が今回の件での話し合いをしているらしい。ガラにもねえシリアスモードで。

あんまりシリアスな雰囲気醸し出してるから起きてこれなくなっちゃったじゃねーか。

どんなノリで出て行きやいんだよコレ？

ごつめーん！ 立華みたいな何かに切り刻まれてて意識が光る雲を突き抜けてF r y a w e y しちまつてたぜー！ とかか？

いやいやいやナイナイナイ！ そんなこと言つて出て行つた日にや光る雲どころか三途の川をS w i m a w e y することになつちまう。

そんな感じで、どう出て行こうかと天井のシミの数を数えている俺だった。

野郎どもの会話をB G M 代わりにしてな。

日向「同じ奴が二人つてどうということだよ？ そんな訳わかんねー世界になつちまつたつてののかココは？」

高松「天使と姿形がそっくりな人間という線はどうでしょう？」

野田「なるほど双子というやつか！」

藤巻「おーいテメーラー、全国の双子が全く同じ顔してらって勘違いしてる馬鹿がここにいるぞー」

大山「可能性は無い、わけじゃないんだろうけど……」

仲村「ほぼゼロよ。それに彼女はガードスキルを使ってた。間違いない天使よ」

高松「ではあれは何だというのですか？」

仲村「……天使エリアへの侵入ミツシヨン、憶えてる？」

天使エリア侵入……立華の部屋に不法侵入したときか。

仲村「彼女のPCには、スキルを開発するソフトがあつたのよ」

竹山「Angel Prayer……ですね」

日向「つまり、今までの天使の力は全て……」

仲村「それによるものよ。奏ちゃんが、自分の自衛と最低限私達と闘えるように作ったもの」

仲村「そして、その中には見たこともないスキルがたくさんあつた。おそらくそのうちのひとつ、harmoni^{ハーモ}cks^{ニックス}が発動したのよ」

大山「は、ハーモニクス？ それってどんなものなの？」

仲村「二体が二つに分かれるスキル……要は分身ね」

分身。

つまり、あれは真正正銘、立華奏だった。ということになる。

藤巻「しつかし、そっくりそのままじゃないって感じだったぜえ？」

日向「元の天使、立華と違って好戦的だ」

松下「うむ。なんというか、敵意の塊というか……」

敵意の塊。

松下は、あの立華を指して、そう表現した。

何に刀を向けていいかわからずに、ただただ暴走しちまつてる。

俺はそんなやつを一人……や、二人知っている。

何に刀を向けていいかわからず、ただひたすらに刀を振っていたかつての夜叉おにと、
護るべきものを失い、何かを護ろうとすることをやめた鬼おに。

もう二度と。違えたくねえ。

『テメーに護れるもんなんて、何一つねーんだよ』

もう二度と。

直井「フン……全く無能の集団だな貴様らは。可能性を一つ教えてやろう」

直井「その分身を発生させた時に、立華奏が強い攻撃の意思……敵意を持っていたとしたら？」

仲村「あの時、ね」

あの時とは、多分川の主に食われそうになった頃だろう。

あの時、立華は何かを踏み台にして主に突っ込んだった。

あれは分身で作ったもう一人の自分自身だったってことかよ……

日向「なるほど。その時の本体の敵意が、アイツを動かしてるってわけか」

高松「その上、実質の戦線最高戦力である坂田銀時先生の負傷……」

椎名「……絶望的、だな」

藤巻「癪だが、アイツには結構助けられてっからな」

日向「そもそも、銀さんが勝てない相手に俺らが立ち回れるのか？」

保健室に重たい空気が漂う。

コイツらどんだけ頼りねえんだよ。

大山「あの、結局のところ今の問題って何なの？」

野田「あの天使と戦う方法か？」

直井「馬鹿か、消す方法だ脳筋。一回死んでこい。馬鹿は治らなくても、少しはマシな思考ができるようになるかもしれないぞ？」

野田「つ……だとコラあ!？」

日向「ま、まあまあ……」

仲村「あなた、今日は様子が変ね。妙に冷静の割に言葉の端々には刺がある。」

直井「……冷静だと？」

……?

直井「貴様らこそ、見事な冷静っぷりだな。神である僕も少し驚いたよ。」

直井「立華奏はヤツと闘って負傷した。それはまだいい。だがヤツは何もしてない銀時さんに向かって刃を向けたんだぞ……!？」

……立華も、やられちゃったのか。

直井「今も、貴様らと話してる時間ですら無駄だと感じているよ。あの腐れ銀髪赤目野郎をどう捌って何回殺してやろうかと考えてる方がよっぽど有意義だ」

直井……

大山「な、捌ってって……」

直井「だが」

仲村「？」

直井「残念ながら、僕の尊敬する人は。少なくとも、僕の知る銀時さんはそんなこと望んじやない。だから僕は復讐はしない」

……んだよ、ただの変態ヤローとばかり思ってたんだがな。結構わかってんじゃないか。

仲村「……そうね。実際私たちじゃ、本気で剣を向ける彼女にはおそらく対抗できないわ。」

竹山「だから、消す」

仲村「そうよ」

……だが、問題はここだ。

松下「だが、彼女が意図的に出したのなら、意図的に消すことも出来るはずだろう。」
藤巻「だが事実、天使はそれができずに負傷している……」

仲村「おそらく、奏ちゃんは無意識にハーモニクスを使ってしまったのよ。だから彼女には消せなかった」

大山「オイオイちよつと待てよ！ アレが消えないって冗談じゃねえぜ！ あんなのが居続ける世界になっちゃうのかよ!？」

仲村「今でこそ見逃されてはいるものの、明日はない。私たちに模範的な行動を取るという選択肢が無い以上、エンカウントしたら最後。この前のような血なまぐさい戦闘になるわ」

日向「今回は銀さんと立華、二人で済んだ……が、」

仲村「奏ちゃんが、ヤツを刺し違えてでも止めてくれたからね」

仲村「でも次があるかはわからない。今度は全員やられるかもしれない……」

高松「実質、あの天使が負傷しておとなしくしている今この瞬間が、ヤツを止める最初で最後のチャンス。というわけですか」

日向「傷の全快とはいかないまでも、動けるようになるまで大体半日……時間がなすすぎる」

仲村「私が天使エリアに侵入して、ハーモニクスを止める方法を探るわ。あなたたちは授業に出て時間を稼いで」

大山「ええ!? 授業をまともに聞いたら消えちゃうんだよ!」

仲村「あなたたちの唯一の長所は何だと思う?」

日向「はあ? 何だよゆりっぺ突然。俺たちの長所つつたつて……」

「アホな所、か?」

仲村「——遅いわよ! 銀さん」

「アホか、死んでたんだっつの」

日向「くく銀さん! 無事でよかったぜ!!」

「やだから、さつきまで死んでたんだったの」

★

「お前らはアホだ。アホだったんだ。どのくらいアホかというところそれぞれがアホで定番の吉沢くんを十体フュージョンさせたほどにアホだ」

藤巻「例えはわかりにくいけどただただ馬鹿にされてるのが伝わってくるな」

「だがそれを授業でうまく生かして、パツと見聞してる風を装ってアホなことに勤しめ」
日向「戻ってきた途端に無茶ぶり激しいアンタ!!」

「何でもいいんだよ。パラパラ漫画作るでも、教科書に落書きでも、窓の外でハルバート振り回すでも、踊るでも」

仲村「アホね」

日向「アホだな」

「その間に、俺と仲村で立華の部屋を探る。それまで適当に頑張つて」

大山「さすががしいほど適当だ!」

仲村「……あなたも来るの?」

なぜか仲村が何かを期待するような顔で俺を見てくる。

何か久々だなこういうの。

「悪イか」

仲村「いや、別に……」

「んじやいいだろが。時間がねえんだ、さっさと行ってこい！」

俺は野郎どもを作戦へと送り出す。

ふと、目の端に、寝ている立華が入ってくる。

つたく、どんだけ不器用なんだコイツ。ダチ公つくんのにここまで大騒ぎになるか普

通？ この天然花澤野郎が。

少しは先生を頼りやがれ。

「んじや、俺たちも——」

行くか、と仲村に言おうとして、言葉が詰まる。

そーいや一つ言い忘れてたわ。

「おいテメーら」

その声で、戦線のガキども全員が俺の方を向く。

んだ、何か緊張すんじやねえか……

一つ大きく息を吸って、と。

「次会う時は、作戦本部で。だからな」

「……………おう!!」

★—次回予告—

直井「いやいやー、銀時さんが無事戻ってきてくれてよかったです!」

「おう。てかお前かつこいいこと言ってた割に、俺が戻ってきたとき騒がなかったな」

直井「はい。銀時さんが不在の時でも、僕は情けない姿をさらすようなことはしません。いつもと変わらない態度で迎える。そう決めたんです」

「……おお、サンキュー」

直井「!? 銀時さんにホメられた!? うそでしょ今夜はお赤飯ですね!! ホメるのがaに変わるのもそう遠くないですよ!」

「こーいうこと言うから俺はお前を素直にほめらんねえんだよ……」

「次は第二十一訓だ。次回もよろしくメガドツクな。」

お楽しみに!

第二十一訓

★—女子寮 天使エリア—

私と銀さんは、突如出現した攻撃的な天使の対策を探るため、再び天使エリアこと奏ちゃんの部屋にお邪魔していた。

パスワードとかは前回竹山くんが解読してたから余裕として……問題はここからね。「あった……」

デスクトップにアイコンが表示される。私はその中の『Angel Player』と書かれたものを開いた。

銀時「……んだコレ」

移ったのはヒトの体のモデルのようなものと……難しくてわかんないけど何かの統計のグラフのようなもの。

その隣の、おそらく奏ちゃんが作ったスキルのリストがあった。その中のharmornicsをクリックする。でもモニターは私たちの欲しい情報は与えてくれない。

銀時「……おい、もう離れるのはわかったから消し方探せって」

「出来るんならそうしてるわよ！ 予想以上に難解だわ、このソフト……」

銀時「予想以上に南海？ 何、南に行きたいの？ 常夏のワイハーで一夏の過ちを犯したいの？」

「奏ちやんだって、分身を出したまま放置するようなことはしない筈。どこかに絶対消す方法はあるはず。なんだけど……」

銀時「無視？ ねえ無視ですか？ 寒いギャグ言ったから？ 一夏の過ちに箒さん怒っちゃった？」

「……！ 銀さん、コレ！」

私は半分ベソを書いてる銀さんに、今さつき見つけたブ厚い本を見せる。背表紙にはやっぱりAngel Playerの文字。

「マニュアル、みたいね」

本の埃を軽く払い、適当な一ページを捲る。

ぜ、全部英語……

「……一応ダメ元で聞いわ。銀さん、英語わかる？」

銀時「カッブヌードルのCMに感化されて英語の勉強をしようとしたけどスピードラーニング三十秒聞いて諦めた程度の英語力なら備わってる」

「ダメ元でもあなたに聞いた私がバカだったわ……」

だってカッコいいじゃん！ ファインサンキューアードユウウウウウウウウウ

ウウって！ むっちゃカッコいいじゃん！！ とボソボソ呟くおっさんはほつといて、マニユアルに目を通す。

……うん。全然わかんない。

「くっそ、ただでさえ時間がないってのに……」

銀時「おい仲村、これなんだ」

そう言い、さつきまで騒いでたおっさんは画面を指さす。

「何これ……『a b s o r b』？」

銀さんが指さしたそれは、さつきのリストの、ハーモニクスのすぐ上にあった。

見たことないスキル……何かしら。

カチカチと音を立て、そのスキルの詳細を表示する。

デスクトップに別れた二つの体が一つになる映像が表示されると、これがハーモニクスを止める方法なのだど私と銀さんが気付くのがほぼ同時だった。

銀時「おい……あの立華^{バカ}いつのまにかメタモル星に行つて来たんだ？ こいつあまさしくあの伝説の技、フュージョンじゃねーか!!」

前言撤回。私が気付いたのこの銀^{バカ}さん^カがいらん妄想してたのがほぼ同時。

「ともかくやったわ！ 本来この命令に繋がって、勝手に消えるはずだったんだ……これであの天使を止められる！」

銀時「え何？ 立華がフュージョンを体得したんじゃないやねえの？」

「あーもうメンドくさい!! あなた今回ボケてばかりよ!? 少しはまともなこと言いなさいよ!!」

銀時「テメーこそ、今日はやけにツツコミに徹するじゃねえか。どした？ 試験前夜の一夜漬けですか？」

「うっ。せ、戦線みんなの命がかかってるのよ？ 真面目にもなるわ」

銀時「はーん……」

言えない……この前の天使エリア侵入で銀さんにキスしようとしたのを思い出して気まずいからだなんて絶対言えない！

「ま、どーでもいいーけどよ。それよりもそっちだろ？」

銀さんが画面を顎で指す。

「そ、そうね……発動条件は、」

……

……

……

「あーもうわかんない!! 英語って何よ何で英語なのよ気取ってんじゃないわよ!!」

銀時「バツカお前冷静さを欠いたらしまいだぜ？ ここはみんなの銀さんに任せてみ

な」

「あら、あなたパソコンなんて扱えたの？」

銀時 「まあな、要はノリだノリ。見てろ……」

……

……

……

銀時 「この腐れパソコンんんんんんんんんんんんんんんんん!!」

「あなたが一番冷静さを欠いてるじゃない!」

どこかのドイツの少年の如く、キーボードをバンバンと叩きまくる銀さん。

銀時 「シネエエエ!! ドンベエチャン、スウイイネエエエ!!」

「あーもう邪魔よ銀さんどっかいけ! こうなったらプログラムを書き換えるわ!!」

ハーモニクスとアブソープの間にtime waitというスキルを追加し、この三つを連結させる。これでハーモニクスを使えば、連鎖的にアブソープが発動するはず!

「とつとと消えろ……time waitは十秒! どうだ!?!」

ツターン! とエンターキーを鳴らす音が部屋内に響く。

……

……十秒って案外長いわね。何で十秒以下に設定できないのかしら?

「ヨガノスウィーディーデルウ!!」

ほら銀さんだつて十秒つでKBCから修羅パンツにキャラ変わつてるし。十秒で人つて変わるのね。そりや三年もあれば1Dがパン屋からスターにもなるわ。

「てか何で銀さんはキャラ見失つてるのよ。そろそろ戻つてきなさい。」

銀時 「チツ（・ム・）」

画面は、ハーモニクスで分裂した十秒後、その分身が一つになるシュミレーションを映した。

つまり、もう一度奏ちゃんにハーモニクスを使わせればアブソープが正常に働いて、十秒後には分身が元に戻り、この件に片がつくということだ。

「ふう……何とかなつたわね。」

銀時 「おつかれさん。まあよくやったんじゃねえの?」

「あなた何もしてない割にはエラッそうね! ……う? ……これは」

連結させた三つのスキルの上に、また見たことのないスキルがあった。

「何コレ……howling? 分身の方が作つたのかしら」

消すべきか?

……いや、ここまで周到にやって来たんだ。そりや確かに銀さんのせいでキーボードとか少し壊れてるけど、最低限の修正にとどめないと。

でも、せつかくいいもの見れたんだから。対策はしとかないとね♪
 「さーってと、とりあえず全部片付きそうね。今日は奮発して高いパフエでも食べようかしら」

銀時「なあ仲村よ」

「んー？ 何」

銀時「もしこの設定で分身に本物の立華隠されたら打つ手なくね？」

……あ。

★—医局 保健室—

銀時「おーおー、随分と派手なプレイなさったご様子で」

しくった……。

割れたガラス。飛び散る書類。倒れたイス。そして、空のベッド。

私の目の前には、何者かに乱暴に荒らされまくった保健室が広がる。

もつとも今のこの状況じゃ、犯人も目的も予想できるけど。

大山「どこかに出かけたんじゃないの？」

銀時「窓からか？ 最近のガキは気合入ってるな」

直井「この乱れようは攫われたとしか思えない。貴様、何をした」

直井くんが私を指さし、言ってくる。

貴様って。

「プログラムを書き換え。もう一度あの子がハーモニクスを使えば、追加した能力が発動してすべて丸く収まるはずだった」

高松「そんな事が出来たのですか」

「付け焼刃だけだね。でも敵の行動が予想以上に早かった……」

グチャグチャに割れてしまった窓の外に目線を向ける。

奏ちゃんを隠されたら打つ手がない……！

銀時「だーから言ったじゃんだーから言ったじゃん」

「うるさいわね！ あなたがもう少し早く言ってくれたらここに護衛を何人か配備したのに！」

いや、何人配備しても無駄だった……天使とまともにやり合える人材は銀さん以外にはほとんどいない——

銀さん置いてくればよかった！

「あなた肝心な時に役に立たないわね！」

銀時「テメーそれがさつきまで死んでた先生に言う言葉か」

松下「どうするんだ」

「探すしか、ないじゃない」

高松「凶悪な天使の目を逃れつつですか……」

藤巻「授業を受けるふりでさえやっただったつてのによお」

打開策の奏ちやんは誘拐された。何処に居るかはわからない。

探そうにも校内には自身が目を光らせている。見つかったら即アウト……

状況は限りなく最悪ね。

日向「陽動がどれだけ持つか……」

ユイ「ふえっ？ 陽動ってアタシですか!？」

日向「お前何のためにガルデモ入ったんだよ？」

ユイ「えと、岩沢さんに憧れて……」

日向「ガルデモは陽動のためにあるんだよ!!」

ユイ「えええ!?! 無理ムリむりです! あんな怖い相手に陽動なんて出来ないで

すって!」

日向「しろよバカ!!」

ユイ「バカとはなんじや何様だおまえ!!」

日向「ここじゃ先輩ですが何か!？」

銀時「テメーらいちやついてるとこ悪いが、今回陽動はナシだ。やっこさん下手した

ら楽器とか設備ごとガルデモをぶち壊しかねえ」

「そうね……私たちは今できることをしましょう。」

「総員に通達！ 天使の目撃情報を集めて!!」

★

TK「Hey, yo! Check this out! It's moonwalk, it's a moonwalk! Head spin!」

★—体育館内—

仲村「迅速に集められた情報から、幽閉場所はギルドの可能性が高いとわかったわ。となれば、その最深部ね」

「ねえ今のTKのシーン何？ TKが迅速に遊んでただけだよ？ 情報集め全くしてないよね？」

とりあえず一ツツコミいれて、仲村の言葉を「反芻する」。

最深部つつつたら、あの派手に爆破したところか。

仲村「トラップも稼働したまま。最も危険で、最もここから離れた場所ってわけね」

日向「またここに潜れってかよ……」

藤巻「前回はほぼ壊滅状態だけ？」

野田「フン……何を臆してるんだ？」

藤巻「まっ先に死んでたろお前」

ただでさえこの前は俺と仲村しか残らなかつたってーのに今回は分身立華のオマケつきと来た……厄介なことこの上ねーな。

仲村「さつきも言ったとおり、今回陽動はなし。正々堂々、天使と闘いながら行くわよ」

仲村「いい？ 作戦はギルドを降下して、その最深部にて奏ちやんを保護すること」

仲村「オペレーション、スタート！」

★—ギルド連絡通路 B4—

昔、ここに突入ちたのとほぼ同じ陣形で俺たちは歩く。

一番後ろ……てか俺の一つ後ろには野田が、俺の前には仲村が立っている。

「最深部……懐かしいねえ」

仲村「そうね、あなたがあの時途中で消えたりしなかつたらもう少し懐かしんだりもできたのかも」

「あれ、仲村さんもしかして怒ってらっしやる？」

仲村「怒ってないわよ」

「そーかい」

仲村「……」

仲村がわずかな上目づかいで俺をにらんでくる。

……？

仲村「心配したんだから。馬鹿」

「へーへー。過分な心遣い痛みいります」

仲村「……馬鹿」

日向「前のトラップはそのまま放置されてるな、ラッキー！」

ユイ「あの、こんなところで天使に出くわしたら漏れそうなんですけど……」

「38にもなつてシヨンベン漏らすマダオもいる。心配すんな」

ユイ「心配してください！ 大体マダオって何ですか!？」

「まるでダメなオツさん。略してマダオだ」

ユイ「まるでダメじゃないですかこのまるで台無しな大人略してマダオ！」

「んだコラこのまるで騙されたかのような平らな胸の女略してマダオ!!」

仲村「……!」

「……おでましたな。まるで墮天使な女、略してマダオが」

「——墮天使。言い得て妙ね」

目の前の女はその言葉を聞くなり怪しく笑い、そう返した。

前方30mくらい先の方に、赤い瞳を引っさげて、以前と変わらぬ様子で立華はそこ

にいた。

立華とは言っても、分身の方だな。

「おいコラテメー立華、この前は世話になったな。どうしてこんなところにいる。世界ふしぎ発見に憧れてミステリーハンティングですか？」

「……？ 少し考えればわかるでしょ？ あなたたちが私を遠ざけるために作ったことは、今の私にとってとても都合がいいからよ」

仲村「くっ……」

……やっぱこの立華、ここまで考え

「なぜならここは闇の真影……暗き暗黒が私に朱の力をもたらしてくるー！」

「いやそつちイイイイイイイイイイ！ てつきり今の状況的に考えてつていう意味だと思つちまつたじゃねーか!!」

やっぱこいつただの中二病じゃねーか！ 若干パワーアップしてるし!!

「他にどんな意味があるというの？ この能力キアスよりすばらしいものがあるかも？」

「いやもういいから喋らなくて！ 喋れば喋るほど痛いから抜けられない止まらないから!!」

「……私をバカにするのもいい加減にしたらどう？ また刻まれたいの？」

「もしかして俺が前襲われたのって中二病って言ったから!? どんだけくだらねー理由

で殺されてんの俺!! てか中二病って言って怒るってことは自分でも薄々中二病って感じてる証拠じゃねーか!!」

仲村「銀さんあまり挑発しないで!!」

「だってギアスだもの! 能力と書いてギアスと読んでもの!! 設定イジリすぎて取り返すついてないもの!!」

「つ……死になさい!」

「ホラやつぱ凶星じゃんらんらん!!」

仲村「総員、構え——!?!」

立華は文字通り目にもとまらぬ速さで俺らをつつきつていった。

日向「つ、武器が!?!」

見ると、野郎どもの武器が全部破壊されている。

わかっちゃいたが、戦いに甘さがない分立華よか厄介だ!

藤巻「速すぎだクソ!」

松下「対応できない!!」

仲村「まだハンドガンがある! 各個射撃!」

仲村の合図で一斉に、目の前の立華に銃をぶつ放す。俺は銃持っていないんだけど。

「Guard skill: Distortion」

弾が自分に当たるすんで前、立華がスキルを発動する。

いくら弾道捻じ曲げようと、流石にこの量じやきついだろ!!

仲村「意外と早くけりが付きそうね」

おいおいそれはフラグだろ……

仲村が言い終えるが早いか、後ろから短い悲鳴が響く。

野田「ぐ……はっ」

「!?!」

野田「なっ……に!?!」

ハルバートが落ちる音と、野田が崩れ落ち、後ろのソレが見えるのがほぼ同時。

そして、その姿を見て、おそらく俺だけが、激しく驚いたのもほぼ同時だろう。

仲村「……何よコイツ!?!」

日向「こんなヤツ見たことねえ……何だこのペンギンお化けみたいなやつ!?!」

いや、この言い方には少し語弊があった。

驚いたんだ。俺もガキどもも。

だが、俺が驚いたのは、そいつにひどい既視感を覚えていたからだ。

ひどく目覚えのある面。間抜けな口、目。すね毛がちらつく足。微妙な加齢臭。

それは――

直井「……ごめんなさい。」

日向「もういいから！」

……お、お楽しみにね！

第二十二訓

エリザベス。

俺の知り合いが飼ってるペンギンお化け。

自身は喋らず、どこからか言葉の書かれたプレートを持つてきてそれで会話をする。

黄色いくちばしとまっ白い体とは裏腹に、まっ黒な言動とちよくちよく香る加齢臭。スネ毛。

中身はオツさんで、たまに口からバズーカとか出てきたりする。

幻の傭兵部族・蓮蓬に属していて、將軍の地位に居ながらも星に仇名し、最後には地球すらも去って行つた……のはシフトエリザベスの話。

とにかく、その（一見）かわいい風貌からマスコットキャラとして扱われてて、汚い大人（おもにアニメスタッフ）から金稼ぎの道具として使われてきた。CVは監修のおじさん。

そんな、元の世界にいる、腐れ縁のツレ。

ニュートンでもエジソンでもノーベルでも、だれでもいいからこんなことが起こるな

ら、論文なり発明なりで後世に伝えてくれたらよかったんだ。重力や電気やダイナマイトなんてのは知ってるやつが知ってればいい。一般人は障りだけで、後はノータツチだ。知らぬ存ぜぬで生きていけるんだ。

こんなクソツツタレ野郎のツラを、こんな死後の世界で拝むことになるなんて。

★—ギルド連絡通路 B 4—

ドサ、という、布の擦れる音や地面に物が落ちる音なんかが入り混じった音が聞こえた。

昔よく嗅いだ鉄くさい匂いが届いてきた。

見慣れた黄色いくちばしと白い体と、見慣れない銀色の髪をしたそいつが目映った。

「エリ、ザベス……」

片手には剣。片手にはプレート。なんてマヌケな姿だ。

《お仕置きね》

そう書かれたプレートをどこかにしまい、目の前のエリザベスはゆっくり、ペタペタという場違いな音を響かせながら近づいてくる。

仲村「何、何なのよこいつ!？」

「……多分、立華だ」

日向「これが!？」

高松「にわかには信じがたいですね」

藤巻「んなこと言ってる場合か! 野田が殺られたんだ! また真つ先に殺られたんだぞ!？」

松下「真つ先を強調する必要はあったのか?」

藤巻「や、なんつかさ。使命感つての? こうしないと野田がうかばれないって言うか」

TK「Oh my crazy!」

仲村「コラ馬鹿ども喋ってる暇があるならあのペンギンを撃ちなさい!!」

仲村の一言でエリザベスに銃弾が降り注ぐ。

《Guard skill:Distortion》

ご丁寧にそう書かれたプレートを出しながら、エリザベスの体が光に包まれる。

光に触れた銃弾は、そこを拒むように屈折して無茶苦茶な方向に飛んでいく。

大山「これってデイスティーション!? ホントにこれ立華さんなの!？」

「そーいつてんだろがシャキつとしろガキども! 後ろのが動き出した!」

言った瞬間、後ろの立華はゆっくりと起き上がり、その赤い目で俺らを嘲るように一瞥した。

「忙しそうね」

埃をはらい、剣をこちらに向けてくる。

これぞまさしく前門の虎、後門の狼。

や、前門のペンギン、後門の墮天使か？

「つて言ってる場合じゃねえな……どーすんだ仲村！」

仲村「今考えてる！」

仲村は銃の引金を引くのを忘れず、思考し続ける。

大山「もう弾がないよ！」

日向「万事休す、か？」

仲村「——！ あそこ、ペンギンの後ろ！」

見ると、エリザベスの後ろには閉ざされた通路があった。

仲村「あそこに逃げ込む！ ついてきなさい！」

エリザベスにスモークグレネードを投げながら、仲村はそこに走り、みんなを先導した。

仲村「あと十秒！ 間に合わなかった者は残していく！ 精々二人の天使に翻られて

時間を稼ぎなさい!!」

日向・大山「ソレだけは嫌だ!!」

仲村の叱咤に慄いたのか、続々と通路にメンバーが逃げ込む。

仲村「あなたも早く！」

「髯られんのは御免だが、十秒もやつこさんが待つてくれると思うか？」

仲村「……足止めなら私がする」

「テメーじゃ役不足だつってんだ」

仲村「あなたに言われたくないわよ！」

「んだとこの紫野郎!!」

仲村「何よこの○毛!!」

「ああんコラ見たことあんのか白い○毛見たことあんのかこの劣化ハ○ヒ!!」

仲村「あ言ったわね!? みんなが思ってるけど氣遣つて言わなかったことをついに言つたわね!!」

藤巻「てか喧嘩する暇あんなら少しでも足止めしろよ!!」

竹山「この間わずか七秒」

日向「やかましいわってかソレこの状況だとむっちゃ長いからね!? あと三秒!!」
「弾はよ!!」

仲村「ないわ! あと三秒なんとかして!」

なんとかって何だムチャぶりしやがって!

仲村「あと二秒！」

えちよつと待ってまだどうするか浮かんでな

仲村「イチ！」

「あ、あー！ あそこにとつてもおつきな麻婆豆腐が！（棒読み）」

……

仲村「……最悪ね」

あ、視線が痛い。

「いやでも効いてますが？」

「どこ!? そこまで大きなブラッディ・イーター（麻婆豆腐）がこの世界にあるなんて!!」

《麻婆豆腐どこ》

仲村「……」

★—ギルド連絡通路 B5—

仲村「なんだか自分が今ものすつつつごいどーでもいいようなことしてる気分になつてきたわ……」

「まあまあへこむなよ。犠牲はとりあえず一人で済んだんだし」

日向「それよかあのペンギンだろ！ 何だよあれ!？」

高松「天使……でしようね」

仲村「そうね、ガードスキルを使った。間違はなく天使よ」

戦線の連中が一息つくついでにエリザベスについて話していた。

大山「先生、あのペンギン知ってる風だったよね……」

大山のこの発言に、連中の視線は一時俺に向けられる。

藤巻「そうだ、確かエリザベスーとかなんとか」

松下「エリザベス女王か！」

日向「パンがなければお菓子を食えばいいじゃない!!」

直井「それはマリーアントワネットだ脳細胞までお菓子になったか愚民。グミだけに愚民」

仲村「そもそもあんなのがエリザベス女王のわけないし、あの天使の味方してたらとつくに消えてるでしょ。それと直井くん動揺でキャラぶれてるから」

「……アイツは」

俺のぽつりと零した一言は、この謎すぎる状況において、こいつらを黙らせるには十分すぎるほどの力を持っていた。

だが残念だな。お前らの知りたいようなことは教えてやれない。

「アイツは、エリザベスっつー、俺の知り合いのペットだ」

これ以上は言えない。てか言っても意味がない。

冒頭で語ったことをもう一度ベラベラ説明したところで、この状況ではまるで必要とされない。

仲村「あんなのがペットって……流石はあなたの知り合いね」

竹山「類は友を呼びますね」

「おい俺とあんなのを一緒にするな」

高松「つまり、あれは生前の先生の知り合いであるが、姿だけそっくりの天使である
と」

「まあ、そうなるな」

松下「もう訳がわからんぞ……」

藤巻「それ以前に、何で敵が増えてんだ!？」

日向「あんな凶暴な天使が二体なんて、前の降下作戦よかタチが悪いぜ……」

仲村「分身は野田くんを刺し殺す際にハンドソニックを、銃弾をかわす際にデイス
トーションをそれぞれ使って見せた」

竹山「つまり分身を発生させるスキル、ハーモニクスも使える。と?」

仲村「おそらくはね」

軽く顎に手をやる仲村に、相変わらず高圧的で自信たっぷりな直井の声がかかる。

直井「つくづく低能な奴らだ貴様らは……あ勿論銀時先生以外ですが。無能な貴様に代わって、問題点をまとめてやろうか？」

仲村「ハイハイよろしく直井さま」

仲村の嫌味に少し眉を動かしながらも、それをあまり気にするそぶりを見せずに、直井は話し始めた。

直井「おそらく今一番貴様らが気になっているのは、『おそらくハーモニクスで出現しただろう天使の分身が、なぜあんな姿をしているか……』だろうが、正直これはさして問題ではない。どんな姿であれ、あれが天使の力を持つているのに変わりはないからだ。考えるのはオペレーションが終わったあとでいい」

直井「それを除いたうえで、現状の問題は二つ」

直井「まず一つは、何体分身が作られたのか。分身が分身を作れるのなら、数に限りなんかない」

日向「ちよつと待て、それなら数なんか考えるだけ無駄じゃないのか？　こうしてる今だつて増え続けるはずだ」

直井「少しは頭を使えこのババロア脳が。そのリーダー（笑）と銀時先生（尊）が、

ハーモニクスを使ったら分身が元に戻るようになってあっただろう」

直井「それでもあのペンギンは存在していた。つまり、そのリーダー（爆）がスキルに細工をする以前にあの分身は作られたということだ」

直井「そしてそれらが、こうしてここで待ち構えていた……」

藤巻「つまり……」

直井「ようやく気付いたか駄民どもめ。あ勿論銀時先生は」

「いいから話進めろ」

直井「はい。そしてこれが二つ目の問題」

直井「もし僕らの突入が読まれていて、すでに分身を量産し、このギルドに配置させていたとしたら？」

日向「そ、それって……」

TK「trap」

直井「そう、罠だ。勿論二体なんて生易しい数じゃないだろうな……」

直井「すでに退路はふさがれている。貴様らに絶対に勝ち目は無い」

仲村「……あんたもでしょうが、ってツツコむ気にもなれないわね」

閉じ込められたことは、武器の補充もできない。この先にもウヨウヨいてこれら全部を倒すのはほぼ不可能。

今来た通路を強行突破してギルド脱出ならまだ可能性はあるかもしれないが、それだと立華を助けられねえし、何よりただのその場しのぎにしかならねえ。

松下「ここまでくると異常だな……何の目的があつてここまで。」

「さあな……自分でもわかっちゃいねえんじやねーの？」

仲村「とにかく、進むしかないわ。生きるためにはね」

★—ギルド連絡通路 B10—

案の定、そのマヌケなペンギン野郎は俺たちの目の前に現れた。

こんなに笑える姿してるのに、だれもクスリとも笑いやしない。

藤巻「三体目……」

仲村「どうやら直井くんの推測、当たったみたいね」

そう言つてハンドガンを構える仲村。顔は険しいままだ。

下手すりやこれで詰みだからな。当然か。

全員が全滅を覚悟したその瞬間、一人の男が前に歩み出た。

「……弾が、勿体無かるう」

仲村に銃を下げさせ、下駄をカラカラ鳴らしながら目の前に歩み出る大男。

「松下、いけるのか？」

松下「フン……誰に言つておる？」

ブレザーを脱ぎ捨て、その漢は雄たけびを挙げる。

松下「姓は松下、名は護驛！　それがこの俺松下護驛よ！！　ここで退いたら五段の名が泣くぜ！！」

そう言い、エリー天使に掴みかかる松下。

アイツ名前、護驛ごだんって言うんだ……

《この、離せ！》

そのプレートが見えるとともに、ブスリという刃物が体を貫く音が響く。

日向「！！　松下五段！　腹を！」

松下「っ……オオオオオオオオオオオ！！」

しかしそこにいたのは、腹を刺され、それでもなお敵に立ち向かう戦士の姿だけだった。

松下「行けっ……！　俺の意識があるうちに！！」

「何こいつむっちゃカツコいいんだけどロリコンの松下はどこ行った肉うどんズルズルすすってる松下はどこ行ったんだよ！！」

仲村「今のうちよ、急いで！」

藤巻「耐えろよ松下五段！」

「ちっ……松下！　今度肉うどん奢ってやるからな！！」

★—ギルド連絡通路 B12—

日向「四体目……！ どーすんだゆりっぺ」

仲村「……！！」

黙って考えをめぐらせる仲村の脇から、手を鳴らしつつ前に出る男が一人。

「今度はお前かよ、TK」

TK「It's my turn……」

大山「そんな、危険だよ！ やめたほうが——」

そう言う大山を、仲村が無言で引き留める。

仲村もわかっている。そう、これが一番だ。

さっきの松下みたく、玉砕覚悟で相手を止めて時間を稼ぐ。これなら一体につき一人の犠牲で済む。俺たちがオペレーションを成功させれば、犠牲になった奴らも助けられる。

それになにより、男の覚悟を無下にするのは野暮つてもんだ。

TK「Get chance and luck」

その言葉の意味はわからない。おそらく何かの歌詞の引用だろうから野郎自身も、どいう意味かなんてあんまり気にしてなんかないんだろう。

だがその言葉に込められた想いは、彼の放った勇氣は、まるで熱のように降り注ぐ天

藤巻「へっ、へへ……ビビってられるかってんだ!! うおらああああギヤアアアアアアアア!!」

「藤巻イイイイイイイイ!!!」

★

椎名「あさはかなり……あさはかなりイイイイイ!!」

「椎名アアアアアア!!!」

「いやお前は戦えたんじゃね?」

★

仲村「もーめんどいわねぐずぐずしてると順番決めるわよ!」

日向「あなたは鬼ですか!」

仲村「あアンタ今口ごたえしたわね? 行つて来い」

日向「理不尽だグッフアアアアア……」

「日向アアアアア!!!」

★

竹山「何ですか僕原作じやここに居なかつたじゃないですか出番増やしてくれるのは正直ありがたいんですがもつとまともなシーンにはできなかつたんですかギヤアアアアアアア!!!」

ユイ「ア、アンタラオボエトケヨ……!!」

仲村「あらやだ喋ったわ。気味が悪い。捨てて行きましようか」

「てかそれ躓いて気絶寸前のユイじゃね?」

ユイ「ヒグ……先生え……!」

「まあその、恨むんなら仲村と、ストレス溜まってテンションおかしくなってる作者を恨め。な?」

★—ギルド最深部 爆心地—

私たちはギルドの最深部、つまりギルド跡に辿り着いた。

懐かしい……ここで奏ちゃん爆撃したのよね。

……

銀時「また派手に爆破したもんだな……あ? どしたオメー、のび太くんへのおんまりな扱いを自覚したジャイアンみたいな顔してんぞ」

「そんな的確な表情してなかったと思うけど……」

奏ちゃんのがのび太ってことは私はジャイアンか。誰がジャイアンよ!

何なのよこの人ホント。

「つてそんなことはどーでもいいの。早く奏ちゃんを捜すわよ!!」

私は爆発によってできた大きなクレーターを転ばないように滑って落ちる。

「よつ……と。ふう」

軽くスカートの埃を払いながら、中心を見回す。

奏ちゃんもいないし分身天使もいない。やつばもう少し奥に行かないとダメか……

銀時「おおおおおおおおおおあああああああ!!!」

「うわ!! ちよつとアンタなに転げ落ちてきてんのよ!!」

銀時「あだだだ……白衣に躓いたんだよ悪いか」

「別に悪かないけど、ホントあなた頑丈よね。前の降下作戦の時も生き残ったの私とあなたただけだったし」

銀時「んあ? ああそーいやそーだったな。何? おたく俺のこと好きなの?」

んなつ!? すつすすす好き!?

銀時「なーんて、冗談……仲村?」

「はあ!?! なな、なに言ってるの!?! わけわからないわ! どうしたらそんな思考に至るの!?! アンタバツカじゃないの! いっぺん死んだら!?!」

銀時「や、知ってるよ。そんな原作一話のセリフ抜粋してこなくても」

いや好きとか嫌いとかで言ったらそりや何でも助けられてるし? 先生だし一見死んだ魚みたくないな目も戦闘とかシリアスな場面になったらキリツとしてちよつとかつこいいなーとか思ったりもするわよ? そういう客観的視点から落ち着いて冷静な判断

を下すとすれば嫌いとは言えないわけで、そもそも好意にもやつぱり度合いがあると思
うし、単に二択になっちゃうと私が彼のことすつ……すす好きつてなっちゃうし!
それは本意といますか不本意といますかうあああえつとえつと

「ブツブツブツブツ……」

銀時「あの、仲村さん？ 何呪文みたいの詠唱してんの？ 鬼道か何か？」

《見つけた》

銀時「!!」

そもそも何で先生はこのタイミングでこんな話題を振ってきたの？ この先生のと
とだからまたデリカシーのないただの言動つてオチなのかもしれないけどもし、もしよ
？ もしこれがこれからの告白の前準備的なあれだったらどうするの!! どうしよう
まだ心の準備が!!

「ブツブツブツブツ……」

銀時「ちよつと仲村さん!! 来てるから、ベンギンお化け来てるから! いったん詠
唱やめよう? 詠唱破棄して黒棺となえちやお? ねえ!」

よし心の準備できた……えちよつとまつて? もし成功したとして、これからどうす
るの? そこから彼の義母さんに挨拶に行ったりするわけ!! 毎日味噌汁作つて、ダメ
だしされたりするわけ!! 『この子は甘い物好きだから、味噌汁には砂糖を入れてくだ

「さい』みたいな!？」

銀時「だから仲村さん!! 迫ってきてるから、お化け迫ってるから! ちゃんと魂葬してあげよ?」
虚ホロウにならないように尸ソウル・ソサエティ魂界ソウル・ソサエティに送ってあげよ!!」

「うんわかった! 味噌汁には角砂糖たくさん入れるね!」

銀時「いい加減にしろ何トチ狂ってんだ仲村アアアアアアアアアア!!」

《Guard skill: Howling》

銀時「ハウリングだあ!?! くそ、仲む——」

いやでもよく考えると甘い味噌汁ってどうなの常識的に考え——

★

「……くそつたれ。焦点が定まらねえ」

《苦しそうね?》

《ハウリングは、強力な音波により相手の感覚を麻痺させるスキル》

《いくらあなたとはいえ、十分はまともに立つことすらできないわ》

それやかよ……さつきからどこぞのオツさんのスネしか見えねえのは。俺が地面にはいつくばってるのはペンギンお化けに畏れ慄いたからじゃないのね。

次々プレートを出しながら、エリザベスはペタペタと俺のほうに歩いてくる。

《女のほうも動けないようね。わざわざ新しく作った甲斐があったわ》

《……あら、どうしたの？ おなかでも壊した？》

「ハ、ハ……言うなこのペンギン野郎。だれのせいだと思ってるんだ」

口から滝みてえに血があふれ出てきやがる。この野郎俺がまともに動けねえのをいいことこ——

《立ち上がったのは予想外だったけど》

《棒立ちするだけなら意味はないわよね》

《じゃ、あなたから死になさい》

もうプレート上の文字なんか見えやしねえ。かろうじて聞こえたのは、野郎の刃が俺の腹から抜かれた音と、俺の身体が地べたに這いつくばる音。感覚なんかありやしねえがな。

スマネえな……

パアン。

……？ おかしい。一向になにも起きねえ。俺の首はまだつながってるし、野郎の足音もなにも聞こえてこねえ。俺の体も動くようになってきてる。

銃声。そうだ銃声。俺の意識が途切れる寸前、一瞬だけ、おぼろげながら確かに聞い

た。

誰の？ エリー天使は銃なんかつかわねえ。俺も持つてねえ。
とすると。

「……仲村か」

仲村「あら、起きたのね」

「何で気絶してねえ」

仲村「につしつし。どーだ！」

手のひらに二つの小さい何かを乗せて見せてきた。

この形、耳栓か。

仲村「にしてもアホよねー。ホントにこんな耳栓ものなんかで防げちゃうだなんて。ほかにも対抗策用意してきたのに台無しだわ」

対抗策。これで辻褄が合う。

野郎はこのスキルを新しく作った、つつつた。

だが俺たちが再度、立華の部屋に突入した時すでに仲村はこのスキルを見つけていたんだ。しかし必要以上のプログラムの改変は危険と判断して、対抗策だけ用意してこのオペレーションに臨んだ。

道理でさつきも話をきかねーハズだ。味噌汁に角砂糖つて何だ。ちよつとうまそー

いつか、向こうのガキどもにも似たようなこと言われたっけな。

何の役にもたたねえ眼鏡ヲタクと胃拡張チャイナと巨大糞尿製造機のくせして。

何にもできねーくせに、俺と一緒に居る時だけ、みんなと一緒に居る時だけなんでもできるようなツラしやがって。

今のこいつにそっくりじゃねえか。

「勝手にしろよ」

仲村「勝手に……そう。そうね。勝手にするわ」

そう言つて、仲村ゆりは、死後の世界とか戦線とか、全部忘れたような。

いや、違う。絶対にそうじゃない。それはこいつに対する侮辱だ。

こいつは全部背負った上で、全部と向かい合つて、全部を認めた上で。

服を買つて喜ぶような、

おいしいものを食べたような、

大切な人を送り出すような、

そんな笑いを俺にくれた。

仲村「行つてきなさい。そして奏ちやんを助けてきなさい！」

★

「よう、立華」

仲村と別れた地点からそう遠くない場所に、紅い眼をした立華は立っていた。その奥には、弱りきって廃材に身を寄せる立華が見える。

立華が立華を護っている。

何で？ さつきも言つたじゃねえか。

答えは多分、『自分でもわかっちゃいねえ』んだ。

「どうやらお前は、一番最初に俺に斬りかかってきたヤツみてーだな。あの時の借りを返しに来たぜ」

「私は分身の中で唯一、オリジナルから作り出された」

「聞いてねーよ。そこどけ」

「ここは通さない」

「何で」

「……」

「……それが、私の使命だからよ」

「んじや質問を変えてやる。そのお前のまだるっこしい使命って何だよ？」

「……………」

「ホントはわかっちゃいねーんだろ？」

「お前が初めて出てきたのは川釣りの時だ。戦線の連中を助けようとして、お前は後ろの立華から生み出された」

「そんなお前の使命って何だ？」

「無事俺たちを助けられて、それでお役御免のはずだった。そんなお前の使命って何だよ？」

「……それは、あなたたちの屈服。消去」

「それはあそこの立華のものか？ それともお前のものか？」

「……」

「そうじゃねえ。そのどちらでもないんだよ。お前は何がしたかったんだ？ 一番最初、お前が川の主に剣を向けてくれた時、どんなことを思ってた」

★

「……助けたかった」

「あなたたちを、護りたかった」

「大切な、やつとできた絆を」

「あなたたちを護れば、それで私はオリジナルに戻って、またいつもの立華奏に戻れるはずだった」

「けど、違った」

「オリジナルでさえ私を元に戻してくれない。残ったのは歪んだ怒りと敵意だけ！」

「これは何かに向けるもの。でも、何に？」

「私は！ ……何に立ち向かえばいいの!?!」

「少しでもオリジナル立と近い行動をしようとた。非模範的行動を繰り返すあなたたちに立ち向かおうとした」

「でも、うまくいかなかった。一度向けた怒りは！ 敵意は……自分のものだったとし

でもコントロールできない」

「私の中で少しづつ私が崩れていった。でも、それでもあなたたちに立ち向かおうとした。私が、立華奏であるために」

「そして、ハーモニクスを使った。使ってしまった」

「出てきたのは、喋れないペンギンお化け」

「ハーモニクスは分身のスキル。こんな化け物が出てくるはずがない」

「何度、何度何度繰り返し返しても、立華奏は出てきてはくれなかった」

「目の前の化け物が、自分？」

「怖い」

「怖いよ……!!」

「私は、あなたたちを護りたかっただけなのに！ 気がつけば化け物にまで身を落とし
てしまっていた」

「私は、何？」

「天使でも、人間ですらなくなってしまう私は一体何なのよ!!」

——私は一体、どうすればいいの——

銀時「どーもしなくていいんじゃないの？」

まるで光を帯びた雨のように降り注いだ、けだるそうで適当な声は、しかしそれがゆえに私の心の奥に沈み込んでいった。

銀時「お前は立華だ」

銀時「鏡見てみる？　ロリコンが歓喜しそうな童顔の銀髪美少女が映ってるぜ」

銀時「激辛麻婆豆腐食って、無邪気に笑ってりゃいいんだよ」

銀時「それで充分だろーが」

銀時「お前にとつてのすべては、そこに詰まってる」

銀時「今のお前は抜いた刃を鞘に収める機を失い、ただいたずらに暴れまわってるだけだ」

銀時「俺はそーいうやつを二人知ってる」

銀時「もう違えるな」

心が満たされる。バラバラになった心の破片が、魔法のように、時が戻るように、少しづつ組みあがっていく。

「でも！　……私はもうあなたたちにひどいことをした」

銀時「んなもん半日もすりや治る。仲間全員虐殺しかけた直井だって仲間にしてん

だ。あのバカどもはこんなもんでテメーを見捨てたりしねーよ」

「すでに私はオリジナルとは違う!! 性格も、身も心も、敵意に浸食された。まさしく化物よ!」

銀時「テメーが化物? 笑わせんな。俺北物から見りや」

銀時「テメーはただの女の子だ」

心が組みあがった。血がめぐり、どくん、どくんと鼓動を撃つ。これが私だ。

ちよつぴり頭は悪いけど、ちよつぴり背は低いけど、ちよつぴり中二病だけど。

それも含めて全部私。

私は、立華奏でいて、本当にいいんだ。

「……いいの? 戻っても」

「こんな私でも、戻っても」

銀時「何度も言わせんなアホ。全教科1にすんぞ」

銀時「剣を収めろ」

銀時「もうお前は戦わなくていいんだ」

銀時「お前は立華奏なんだからよ」

「くっくッ」

泣きそうになる。せりあがった想いが、涙に代わって、頬を伝って零れ落ちる。

銀時 「つたく、何で女つてのはそうすぐに泣きたがるかねえ」

銀時 「お前は、まだまだこれからだろーが。その涙はまだ背負つとけ」

その言葉をはさんで、目の前の先生はハンカチを私に差し出した。

「……ハンカチなんて、似合わない」

銀時 「うるせえ……あ、あとお前に一つ頼みがある」

「……?」

★

「……やっとなつた」

眼前には、前の爆発でボロボロになった何かの柱と、それに横たわるようにして、分身でない、正真正銘元生徒会長の立華奏の姿があった。

疲れた。たるい甘いもん食いたい。さっさとおわらせて帰ろう。

「つーわけだ立華ー。たーちーばーな。おつきろー」

立華 「ん……?」

目を開けた立華は、状況を理解できないようで、ぱちぱちとまばたきを繰り返す。

立華 「……は……?」

「あ、今はもうそーゆうのいいから。銀さんもう疲れたの眠たいの。」

立華 「??」

「えーつとだな、とりあえず立華、もう一回でいいからハーモニクスを覚え。それで全部丸く収まる」

立華「あ……ごめんなさい」

やつと現状を理解したようで、身体お起こして謝ってくる。

「何の話だ？ 俺はちよつと色々間違えたアホを助けに来ただけだ」

立華「……うん、ありがとう。じゃあ——」

体調的にもきついのか、冷や汗をかきながらではあるものの、立華は立派にこう唱えて見せた。

立華「Guard skill: Harmonics」

唱え終わるや否や、立華の頭上にはエリザベスの姿が現れた。

「つーわけで、テメーらの負けだ。めでたしめでたし」

《ちゃんちゃん、といけるといいわね》

「……どーゆうこつた」

《確かに私たちは負けた》

《けどね、私たちがアブソープで『消える』のは大間違い》

《『同化』するの。私たちはね》

《そこで一つ問題。出題者は私。回答者はあなた》

《——大量の私たちと同化されて、彼女が正気を保っていられるでしょうか？》
「!?」

《知つての通り、私はもう立華奏なんて人間なんかで収まっていない》

《彼女を乗っ取った後は、まさしく『天使』とも呼べるこの力であなたたちを支配する》
《楽しみね……》

表情はないが、声は聞こえなかったが、目の前のこいつは確かに邪悪に笑っていた。
これが立華。認めたくない。

この世界は、こんな女の子までここまでにさせちまうのか……？

考えた瞬間、俺は立華の肩をつかんでいた。何か黒々とした、おそらくさつきまですべてのエリザベスの形を成していたものが立華に宿っていく。

立華「うっ……ああああああああああああああ!!」

「……俺の声が聞こえるか、立華」
立華「っ。な、に……？」

痛いだろう。苦しいだろう。それなのに、俺のこんな一言にでさえ、必死に痛みを耐え、耳を傾けようとしてくれる。

俺はこいつがこうならないように、今まで剣を握ってきたんじゃないのかよ……っ!!
「立華、俺はさ」

「料理が得意なんだよ」

立華「……?」

「ツレの二人がよ、料理が下手でさあ。一人はまあ食べられるんだが、もう一人が飯番の時は卵かけごはんしか食えなかつた」

「元々一人暮らしだったんだが、そいつらが着いてきちまったことでよ、俺くれえはまともなもん作れるようにならねーとって思つてな。まあめんどくてもとんどやつてねえが」

「あ、えつとすまねえ。なにがいてーかつてーとだな」

立華「……」

「麻婆豆腐。作つて待つてるから食いに来い」

お前が苦しんでいるときに、こんなことしか言えない先生でごめん。

立華「……うん。待つて。食べに行くから」

「約束だかな」

立華「うん」

俺と立華は約束の指切りをした。

立華「——アアアあッ!!!」

掛け声を言い終わった瞬間、立華は痛みと疲労で叫びながら倒れてしまった。

何が先生だ。何が護ってやるだ。

見守ることしか、待つことしかできない俺自身が、その時、ひどく小さく思えた。

次回に続く――

EPISODE 9 In Your Memory
第二十三訓

★―医局 保健室―

仲村「この娘、一度にたくさん意識と同化しちゃったんだってね」

眼前に映るベットで横たわる立華を思い、仲村はぼつりと呟く。

もう一週間このままで。

凛々しくも儚い、そんな表情でたたずむこいつを見てしまうと、今この瞬間も必死に闘っているとは思えなくなる。

こいつの意識を乗っ取ろうと、この一週間こいつのちっぽけな頭ですさまじい数の意識がひしめき合っている。俺はなにもできずに、ただこうして眺めているだけだ。

「薄情なヤローどもだ。見舞いにすら来やしねえ。昔の敵がどうなってもしつたこつちやねえってか」

自分のしていることを肯定したくてそんな言葉を吐く。そんな自分が嫌になる。ヤローどもがあの後どんだけ様子を見に来てくれたか。どんだけこいつを心配してくれているか知っているのに。

自嘲ぎみな笑みも、手持無沙汰な怒りも、本当は自身に向けるべきものであるはずなんだ。

仲村「私のせいね」

仲村はそんな黒々とした感情を受け止めて、自分で受け止めて責任を感じていた。

「……驕おごってんじゃねーよ。あれは俺たちにできる最善の手だった。これは当然の結果だ。これ以外の道なんてありやしなかったのさ」

仲村「……できたらもつと優しくなぐさめてほしかった」

「なぐさめてるつもりなんてねーからな。それとも何？ そのベツトで一発慰めてほしいの?」

仲村「嬉しいけど、冗談につきあうほど元氣じゃないわ」

「そーかい」

……

仲村「それ」

「あ?」

仲村が指差す先には、俺の木刀が転がっていた。

仲村「何で持つてるの? オペレーシヨンの時以外は持ってなかつたわよね」

「……多分、テメーの腰に刺さってる銃と同じ理由だろうよ。何のこたあねえ、ただの棒

きれさ。立華が起きたらな」

仲村「……そう。なら私もただの鉄クズよ。奏ちゃんが起きたらね」

……起きなかつたら。意識してか無意識か、そこには触れなかつた。

仲村「じゃ、私もそろそろ行かなきゃ」

今の戦線ではこの状況をどうしようかと会議が行われているの。と、手短に説明した仲村は、出口のドアに触れる。

仲村「起きるといいわね。奏ちゃん」

「……ああ」

★——対天使使用作戦本部——

高松「これまでにないことです。天使のあんな状態は初めてだ」

(二応) 参謀の高松くんが、今の状況を鑑みて言葉を吐く。

それに対するメンバーの反応も、いつもと違い沈んだものとなっていた。

あの小憎たらしい白髪天パがここにいたら、みんなはまた違う反応を示してくれるのかもしれないけど。

高松「場合によっては、もう起きないということもあるかもしれないですね……」

「それこそこの世界のイレギュラーよ。彼女は目覚めるわ。問題は——」

直井「問題は、どっちの天使として目覚めるか……だ」

……そう。私たちが今まで一緒に居た奏ちゃんか、私たちと闘った、あの銀さんの知り合いらしいペンギンか。

藤巻「で？ どっちで目覚めるんだ？」

大山「それはやっぱり最初の天使……立華さんだよ。僕らと釣りをした」

野田「だが俺を刺したのも、お前らを襲ったのも、全て冷酷なほうだぞ」

日向「ああそういうやお前見ないと思つたら前の話では序盤で串刺しになつてたな」

野田「フン！ ちょっと油断しただけだ……俺があんな赤目小娘に後れを取るなどと！」

藤巻「ちなみにお前を刺したの小娘じゃなくてペンギンだからな。それより、数で言つたら100:1くらいだぜ？」

あんな鳥類に刺し殺されたのか俺は……と膝をつく野田くんを無視し、話を進める。

どっちかっていうとペンギンってかオ○Qだったけど。

日向「今なぜ意識を失っているのか——多分、その沢山の意識があいつの小さな頭の中で……こう、ぐちゃぐちゃになって、ひどいことになつてからじゃねえのか？」

大山「じゃあ目覚めるとしたら、100の意識で目覚めることもあるの？」

「むしろそつちのほうが可能性和しては大きいわよ。99%、あの冷酷な天使で目覚める」

最悪の状況を乗り切った先にあつたのは、最悪だった。

おそらく奏ちゃんも目覚めない。だけどそれで足を止めてる暇は私たちにはない。

「もしあれが天使を乗っ取って目覚めでもしたら、また直井くんの時みたいに好き勝手されるわよ。良くて一生奴隷かもね」

そのワードで、みんなの顔が一気に険しくなる。冗談で言ってるならまだしも、これはれっきとした可能性なのだから仕方がない。

日向「どうする？」

「手は打つてある、と言いたいところだけど……。天使エリアに竹山くと、プログラムを解読できるメンバーを送り込んだ」

直井「それで Anger Player を無効にする、と。時間稼ぎにしかならんぞ」
「そう。いつかそれも突破されて、データを打ちこまれる」

野田「ならばマシンごと壊してしまえばいい！」

日向「もしもし野田先生？ ドヤ顔んとこ悪いんだが、PCなんてこの学校にはいくらでもあるぞ？」

「ソフトも同様だね」

椎名「打つ手はあるのか？」

「無い、わけではない」

ユイ「どんなのなんですか？」

「簡単な話。彼女が起きたらどちらか確認して、冷酷な方だったら先手必勝。あとはこちらが管理するだけよ」

「……!?」

この言葉で、みんなの表情がまた変わる。

さつきまでの絶望じみた顔ではなく、わずかに怒りを帯びた、鋭い視線が一気に私に向けられた。

日向「昔、チャーがやったみたいにか？」

「それもいいし、直井くんみたいにどこかに監禁するのもいい。生き返る暇なんて与えないくらいに殺し続けるのもアリね」

チャーは昔、私たちと初めて会った時、あの超人的な力を持つ奏ちゃんを封じ込めるため、一度身動きをとれなくして一人では脱出不可能なほど深い穴に彼女を放り込む、という計画を実行しようとした。

今回もなにも変わらない。

「天使には、いや Angel Playerには不可解なことが多すぎる。ここらでその一端を潰すのもいいかもしれないわね。今回みたいにまた暴走されたら打つ手がな
いし」

大山「ゆりっぺ、それ本気で言ってるの？」

「あら？ 冗談に聞こえた？」

日向「……………」

大山「立華さんはもう、僕らの戦線の仲間なんだよ!? まだ日は浅いけど、命だつて助けられたんだ! その仲間を殺しちゃうの!?!」

「殺すも何も、私たちは今まで彼女と戦ってきたじゃない。感情論じゃ何も解決しないわよ」

藤巻「ゆりっぺ、それは流石に…………」

今回も何も変わらない。だからこそ、

「そんなに嫌なら、祈りなさい。」

日向「…………」

「あの奏ちゃんが戻ってくるように。麻婆豆腐が大好きで、ちよっぴり天然で、だけどとっても優しい彼女が」

「勝率1%以下の、自分との死闘を生き残れるように」

「また、みんなで釣りなんかができるような未来に」

彼だつて、今まさにそうしているのだから。

藤巻「…………へっ」

大山「……やっぱりゆりっぺはゆりっぺだね」

「何それ馬鹿にしてるの?」

日向「そうだぜ? この暴君が今まで他人の意見に耳を貸したことなんて一切なかったら? 今回も同じさ。何も変わらねえよ」

日向くんがこちらに軽くウインクしてくる。

「気持ち悪っ!」

日向「酷い!」

だけど、彼の言う通りかもしれないわね。

このアホども、もうあなたの仲間になったつもりみたいよ? 私も含めてね。

だから、早く戻ってきて。奏ちゃん。

次回に続く

His Memory①

いやはや、現実とは誠に小説よりも奇妙なもので、ここぞ！ という時には必ず不測の事態が着いて回る。これには大小種類様々あり、テレビではそれを武器に人気を集めている芸能人も少なくはない。世間ではそのような人たちを指しておつちよこちよいとか、ドジなんて呼ぶ。

かく言う俺も、今現在絶賛不測の事態に遭遇中なのだが。ある意味での未知との遭遇中なのだが。

しかし、俺がこのことを将来おもしろおかしく、優越感に浸りながら、そして僅かな恐怖感に侵されながら、悠々自適に語ることで済む日はおそらく来ないのであろう。

なぜなら今この瞬間こそ、悠々とゆったり落ち着き、自適に自分の思うまま行動出来るような状況ではないからだ。

いや、むしろこんな体験を乗り越えて初めて悠々自適にこれを語れるというものなのだが、今の状況はさながら、竜巻が起きた遠くの海をあそこにいなくてよかつたねーと立派な船から呑気に眺めているようなものではなく、今にも転覆しそうなボートから嵐

により表情を変えた大自然の猛威に為す術も無くただただ傍観しているようなものなのだ。

傍らで観ているのだ。

まるで傍らに居るなにかから目を背けているように。

——一つ、ここで勘違いしてもらいたくないところは、これが『不測』の事態であつて、『予想外』の事態でないことだ。

予想はできたのだ。テレビでも新聞でもドラマでも漫画でも、ここぞという時には大なり小なり不幸が下りてくるものだとして知っていたから。

それが待ちに待ったセンター試験ともなれば、むしろそういうことがいつもより余計に頭に浮かぶ。

だが俺の脳みそがそれを自然に意識の彼方へと追いやっていた。それを畏れるあまり、金庫の最深部に何重もの錠を掛けて封印していた。

まさか。そんなことはフィクションであり、

実在の人物・事件・団体とは一切関係のないものであり、

よつてこの瞬間の俺とは一切関係のないものだ、と。

安心しきっていた。

しかしながら、今ではそう早合点してしまった俺を、大人ぶってさっさと決断を下してしまった早計な俺を、おもいつきりブン殴ってやりたい。むしろ長年の受験勉強で培ったストレス発散用ヘッドバンキングで頭蓋を撃ち砕いてやりたい。早くたつて良いことはないぞ。特に下の方は。

未来は『予想』するものであり、『未知』であり、そして決して『観測』できるものではないということを、

畏れ、封印していたものが、自身の知らぬ間に這い出し、復讐と言わんばかりに自分を苛み^{さいない}浸食していく恐怖を、

俺はとつくに、知っていたはずなのに。

さて、ここらでさっさきの『悠々自適』よりもこんな状況を表すに相応しい表現を捜してみよう。

そうだな。俺はあまり言葉に詳しくはないけれど、一番しっくりくるのは——
——お仕舞。物事が終わること。

この場合、終わりは死。

だから、

お死舞。

| Day 1 |

空が真つ黒だった。

というか、真つ黒なのは俺だった。

というか、前にもこんなことあったような気がした。

「……頭痛え」

酷い既視感が襲う。

起き上がろうとしてまず俺の頭に浮かんだのは、今度はどっかの先生に起こされるんじゃないんだなー、という間の抜けた感想だった。いや今度はって何だよこんなこと今まで一度もなかったろーが。

とても重苦しいスライムのような空気を必死に吸い、自分が何をしようとしていたのか、その結果どうしてここに横たわっているのかを思い出そうと、うつろな脳みそに鞭を打って考える。

確か、今日はセンター試験だったはず。試験会場に向かうために電車に乗って、それで……？

……思い立ち、右のポケットに入れていたはずの携帯を取り出す。

「一二時、一二三分……」

過ぎてんじやねーか、センター試験。

折角ここまで頑張ってきたのに。ふぎけんな遅刻してでも行き着いてやる、試験官の靴舐めてでも試験受けてやる。

その怒り混じりの思いが、俺の体をゆっくりと起き上らせる。

渴いて砂まみれになった眼球をパチパチと潤しながら目を凝らすと、なるほど俺の思いは叶わないのだと悟った。目の前の光景が、俺にそう説いてきた。

「……」

瓦礫と化した座席に、吹いて飛ばした洗濯物のように散らばり垂れ下がる、人。

そのまま死ねたら幾分かは楽だったかもしれない。

しかし辛うじてというべきか案の定というべきか、赤黒く重たい血の元に倒れながら、かろうじて生きながらえ、眼前の光景に言葉を失う人々。

虫籠の中みたいだった。

籠が振り回され、死にゆく者や生き延びる者が出る。

それを無邪気に楽しそうにどこからか眺める子供神が、ちらついて頭から離れない。

「また、失うのかよ……!」

掌を血が滲むくらい握りしめ、ガラクタのシートにたたきつける。焼けた鉄と砂が混

じった埃が舞う。

「つぐ、が、ゲホつ、ゲホツ」

暗くてよく見えなかつたがそのシートにはどうやら人がいたらしく、俺が立てた埃がわずらわしいと言うように咳き込む。見ると怪我をしているようだ。

「す、すまん……オイ、どうか大丈夫なのかその怪我！」

「ゴホツ！ いやなに……気にするな、大丈夫だ」

「アホ、頭から血イ出てんだろうか！ 俺が見えるか、意識は？」

質問を続けながら、手近にあった布を引きちぎり、血を拭き取り、包帯代わりに頭に巻く。少しきつくしすぎたのだろうか、うめきにも似た息が顔にかかる。

「……少し、ふらふらする」

「気分は、吐き気とかはするか？」

「大丈夫、だ。」

「……ここは空気が悪い、外に出るぞ。立てるか？」

「ああ。なんとか……何だ？ アンタ医者なのか」

「……まさか」

実際実用的な知識なんて勉強した覚えはない。不思議なもので、自然と身体が動くんだ。さつきからそんなばつかだ。どうも記憶が判然としねえし。

……そういや、センター試験つて。何で、何処に受験なんかしようとしてたんだ？俺。

男に肩を貸し、黒板を引つ掻くような音を鳴らすドアを蹴破り、外へと降りる。

外に出て、初めて「泣つ面に蜂」の本当の意味を知ることが出来た気がした。この歳でまた一つ賢くなれたよかったな、と冗談を言う気力もなく、俺は瓦礫で塞がれてしまった退路を、傍観するしかなかった。

蜂の毒は廻つていく。俺が傍に気付くまで。

「……ひとまず、中の奴らを助ける」

「手伝おう」

「大丈夫なのか？」

「何、まだ少しふらつくが……五十嵐だ」

「ああ、よろしく。俺は——」

——俺は、誰だ？

思い出そうにも記憶がない。事故のせいかな？

いや、これはもつと……

「——よろしくな」

五十嵐と名乗る少年は、まるで満足のいく返事をもらったように握手を交わし、電車

の中に入って行った。

ちよ、待て。俺は――

★

非常用のライトをかざし、無事な人に手を貸し、外へと送る。

誰のかもわからない荷物から、利用できるものを探り、応急処置に使った。

重症の者から外へと連れ出し、必要であるならシートを引つpegがしてそこへと座らせる。

「……ほら、ここで休んでろ」

「す、すまない……ありがとう」

「気にしないでくれ。こんな時はお互い様だ」

全員が……生きてる人全員が、電車の外に出られたのは、始めてから三時間くらい経ったところだった。

「これで全員だな。おつかれ、五十嵐」

「ああ……じゃあ。みんな聞いてくれ！」

五十嵐の声が、空気を伝わりみんなの耳に届く。

案外、こいつはリーダーとか、そんなのに向いてるのかもしれないねえな。

どっかの紫も見習ってほしいもんだぜ。てか何だこの俺のリーダー＝紫の方程式。

どこで習ったんだどんな定理だよ。

「オレたちは電車の事故に巻き込まれて、現在閉じ込められた状態になってる。携帯の電波も圏外で、外とのコンタクトは取れない」

「オレたちが助かる方法はただ一つ、救助が来るまで生き残る。それしかない！ 悪いが、誰か一人だけ助かるうなんて思いはここで捨ててくれ。まずは水と食料を共有して——」

「ちよつと待てよー！」

事故にあった中でも比較的軽症で済んだ、派手なニット帽を着けた目つきの悪い学生とそいつの取り巻きがつつかかってくる。

「その話し方からすると、水だの食料だのはお前が管理するように聞こえるんだが？」

「ああ、そのつもりだ」

「ぎけんじゃねえよ、今日会ったばつかの奴を信用しろつてのか!？」

「それは……」

当然と言えば当然な言葉が聞こえてきた。

俺だって、昨日今日会ったばつかのこいつが根から良い奴だなんて本当に思えるほど、酔狂な奴じゃない。

「……じゃあ、誰が適任なんだ」

「俺とかどうよ？　少なくともツレは、俺のことを良い奴って言ってくれてるぜ？」
ヒヒ、と帽子のガキとそのツレが意地悪く笑う。

「ふざけないでよ！　あんたみたいなガラの悪い奴信用できない、私と彼で管理する！」
「そうだ！」

カツプルなのだろう、寄り添い合う二人の男女が声を挙げる。

「んなもん疑つたらためえらだつて怪しいだろうが！」

ここから水と食料を奪い合う論争に発展していった。

渴いた唇から貴重な水を飛び散らせ、血走った瞳にはもはや自分しか映っていない。
おそらくこいつらの誰に管理を任せても、最終的には私欲に走ることだろう。

誰か一人だけ助かるうなんて思いはここで捨ててくれ——そう言った五十嵐の姿が
思い出される。

わかつてない。こいつらはこの言葉の意味も、五十嵐の思いも。何も理解しようとしていない。五十嵐の提案が、『自分が助かるために』言ったことではなく、『みんなを平等に助けるために』言ったことにすら気付けない。

「朱に交われれば赤くなる」とはよく言ったものだ。この光景はまさに水の中に墨を一滴垂らすようなもの。

僅かな光から生まれた影が、ゆつくりと俺たちを呑みこむようで……俺は。それが、

気に入らない。

連中のしようとしてることは一つ。貴重な物資を何としても自分が独占する、というもの。

しかしこれは、奴らも無意識下でしか意識できていないことだ（あの帽子野郎どもは知らねえが）。信用のない人に物資は任せられない、という明確で強い建前がある今ならば、全員公平で平等な正当意見を以ってねじ伏せることが出来る。

この電車事故に巻き込まれ、生き残った者達の中で、全員から等しく信頼され、食料の管理を任せ得る人物……あるいは、食料を持ち逃げする可能性があるがなからうが、連中が信頼するしかない人物。

なら、自然と答えは決まる。

「んじゃ。その役、俺がするわ」

めんどくせーけど、と、聞こえないくらいの声で零す。

「お前とこいつらで何が変わるってんだよ」

「ああ？ 誰に向かつてその汚え口開いてんですか？ その素敵な帽子、口に突っ込んで窒息させんぞ。テメーを助けたのは誰だ？」

「……こんなの放つといても何もねえよ」

ついさつき俺が見てやった腕の傷に、わずかに悔しそうに触れてから言う。

「他の奴らは違うだろうが」

目線で、周りを見るように促す。

いまだに苦しみの呻きが止まない状況をもう一度目に焼き付ける。

酷い奴は目も潰れて、骨折までしてる。中身臓器はもつと酷いはずだ。

「俺は医学をかじってる。お前らを助けたのは俺と五十嵐だが、お前らを生かすも殺すも俺次第だ。そんな状況で俺を信じられないようじゃ、どの道みんな御陀仏だろ」

「なっ……」

どよどよと不安と期待が混じった言葉の渦が生まれる。

うーん我ながら惚れ惚れするほど最悪なセリフ。いやね、これでもオブラートに包んだんだよ？ 包んだんだけど刺激が強すぎて溶けちゃったよね。ボンタンアメ剥き出しだよ。これは業者の方に問題があるよね。業者出てこい。

そう心でぼやいていると、ハハツ、と隣の五十嵐が喉を鳴らす。

「そうだな。食料の管理を任せようがそうしなかうが、こいつに消えられたら、結局オレたちはもう生き残れない。ならいつそこいつを信頼する意味も込めて、任せてみようぜ？」

しばらくの静寂の後、わずかづつだが賛成の声が上がる。さっきの帽子野郎も、文句ねえみただ。



「……イチゴ牛乳飲んでえ。どっかに転がってねーかな」

一か所に集められた大量の水や食料などをなんとなく眺めながら、しきりに垂れるよだれを吐きだしつつそう言った。

(なんでこんなメンドクサイことに……)

あの時、みんなが荒れ始めた時。あのままだと何かを失う気がしたんだ。また失ってしまう気がした。

また。と言っても、俺にはその『また』の時の記憶がない。というか事故の前の記憶が全くない。自分の挙動や言動に不信感を抱くことはあっても、なぜそうするに至ったかを自分に言及することが出来ない。

というかそもそも、俺は自分の名前を知らない。

最初からおかしいんだ。

俺にはセンター試験なんて受けようとした記憶なんてないし、受けようとした理由に關しても全く知らない。まるで設定のように、物語の筋書きのように、貼り付けられた付箋に従って行動しているようですらあった。

正直、記憶もやる気もないのだから、ついでに言えば一緒に事故にあった連中を助けてやる義理も俺にはない。こいつら全員はつ倒して食料奪って救出まで生き残るのが、

俺にとっての最善の手なのだ。

「……」

けど、無いはずの記憶が零す。『もう奪われたくない』と血へド吐きながら訴えかけてきやがる。

どうしても俺には、それを無視することができない。

考えろ。みんなが生き残る、みんなを救える可能性を。

今までのこと全てを思い出せ。脳みそが焼き切れようと、記憶が飛んでようと、そこにし活路はない。

みんなが団結し、脱出まで一丸となれる可能性。

この暗闇から脱する可能性を、文字通り微かな光明すらない暗闇から探し出せ。鈍つて錆びた刃を必死に研ぎ澄ませ。目の前の絶望なんざその剣で切り伏せろ。銀色の光で連中を導いてやる。逃げるのにはもううんざりなんだよ。失う怖さも、立ち向かう痛みも、錆びと一緒に落として行け。

一瞬に執着しろ。自分達が生きているこの一分一秒を何よりも敬え。そこで止まらず、満足するな。考えろ。次の一瞬を生き抜く術を。

たとえ一寸先が闇だろうが、そのたかだか三センチを全力で美しく生きろ。

——俺が素直に言うことを聞くと思ってたか？ 台本なんて貰ったその日に失くしちゃまったよ。だが幸いにも俺はアドリブを売りにしてんだ。設定だろーがなんだろうが関係ねえ、好き勝手やらせてもらう。

てめ^神ーの書いたシナリオなんざつまんねえからよ、俺がもつと面白くしてやる。吠えヅラかかしてやるから覚悟しとけ。俺をこの舞台に組み込んだこと、盛大に後悔しろ。

水と食料の配給や計算が一息ついたところに、肩をぼんぼんと叩かれる。

見ると、そこには五十嵐が立っていた。

「ありがとよ、さつきはうまくまとめてくれて。危うく収集つかなくなる所だった」

元々軽症なのか、具合が良くなってきたのか、五十嵐は俺の肩を豪快につかんで言うてくる。

「……俺はただ、自分が少しでも生き残る可能性が高い地位と、それに就く口実が欲しかっただけだ。それより、何かヤバそうな奴がいたらすぐ俺に言え。あと、悪いが動くる奴ともう一度、電車の中を探索してみてくれ。まだ何かあるかもしれん」

「……の割にみんなの様子を気にかけるじゃねえか？」

「うるせえなそのニヤケ顔やめろ腹立つ。俺は出口を見てくる。ちよつくらライト借り

るぞ」

「はいはい。んじゃ精々オレは、お前の右腕として尽力させていただきますよ」
「何でそんなに楽しそうなんだよ……じゃな」

★

ライトをかざしながら、暗闇を歩く。足音がいちいち反響するから無茶苦茶不気味だ。ユーレイとか出ないよね？ コレ。

だけど、もしも出口が開いてたら外に出られる。みんなを助けられる。その気持ちが俺の足取りを速く、軽くさせた。

——思えば、甘かった。

「……………」

神は、そう思うことでさえも、希望を持つことでさえも、

「何だよ、これ……」

徹底的に、許さない。

必死に絞り出した希望を、湧いてくる絶望が根こそぎ蹴散らしていく。

明確で巨大な壁となって。

「こんなの、どうすりゃ——ガッ、ハ……っ!?」

必死に押し殺していた毒が、じわりじわりと俺の腹に広がる鈍い痛みに変わってきた

頃に、俺にもようやく少しづつ、気付けるようになってきた。なってしまった。傍らで笑う、死神に。

★—次回予告—

「いやーついこの前久々の更新だと思つたら何だこれ？ 何で突然電車事故に巻き込まれてんの俺訳わかめなんですけど……はて、電車事故？ 前にもこんなことがあつたよ
うな、なかつたような……」

日向「おお久々の登場だな、つて……あれ？ お前、いやアンタ誰だっけ？」

「おいおいいきなり出てきて失礼だぞ日向。俺の秘技・木遁の術であの世に送つてやる
うか？」

日向「いや、ここあの世だしそれ木の葉にて最強な方の日向さんだから……にしても
そのボケのセンス、いや喋り方か？ どっかで……」

日向「確か白髪で、赤毛で。だらしねえマヌケ面してて、イケメンで。イチゴ牛乳好
きで、コーヒー好きで。——あれ？ ますますわかんねえ」

「ま、アホ日向がいくら考えても無駄つてこつた。そのうち、俺の正体もわかるかもしれ
ないぞ？」

日向「……それもそうだな！」

「納得するのかよ……一応原作見てない人にもわかるように書いてるつもりだが、ちよつとよくわからないって人がいたら申し訳ない。とりあえず、次回。H i s M e m o r y ②。楽しみにしててくれ」

日向「あ、わかった！ 坂無銀結さんだ！」

「誰だソレ……じゃ、また今度」

おしまい

His Memory②

— Day 2 —

「……なんて言うか、お前って随分と献身的だよな」

俺たちが事故に遭ってから二日目の朝を迎えた。

といつてもこの状態じゃ、外に日が昇ってるだの、ニワトリがコケコッコと鳴いてるだの、世話焼きの幼馴染が起こしに来るだの、そんな朝特有のイベントは一切起きない。ちなみに幼馴染って聞いただけで、窓から侵入してくるお隣の美少女が想像できちゃうのは、世界広しといえども日本人だけだと思う。

かろうじて残された携帯電話の数少ない使い道の一つであるところのアラーム機能が、七時きっかりに、トチ狂ったように空間を伝わり響き伝わりやがったのだ。

おかげで折角の睡眠時間を大いに削ってしまった。今度からアラームは解除だなと思っただが、どうやら俺とあと一人以外の皆様方は不安で一睡もできなかつたらしく、この時間に起こされようが何の問題も無かつたそうだ。

それどころか、むしろ朝が来たとわかる分ずつとマシというみんなの思いが、彼らそ

れぞれの携帯にアラームという形で宿ってしまい、結局、俺の睡眠は今後しばらく侵され続けることとなった。

みんな多数決の原理って知ってる？ ホントは少数派の意見も尊重しないといけないんだよ？ それができないから日本はダメになっていくんだ。

そんなわけで、間違って早起きして生まれてしまったこの時間で、健康チェックがてら連中一人一人の話を聞いてやる俺なのであった。

そんな状況を見てか、俺と同じく爆睡して眠りこけてた『あと一人』である五十嵐が手を貸す。

「……大丈夫ですか？ 吐き気とかはありませんか？」

「え、ええ。昨日よりは大分楽になったわ」

というか、俺から必要なことを聞き出して勝手に他の奴らの健康診断に行っちゃった。何でアイツあんなにアグレッシブなんだよ。もっと沈んどけよ仮にも絶体絶命のピンチな場面だろ今。

そう彼に尋ねると、帰ってきた答えは結構意外なものとなった。

「ん、いや？ これでも十分落ち込んだぞ？ だからもう大丈夫」

「普通の奴はそこで大丈夫とはいかないんだけどな……」

「じゃあ、オレもお前も普通じゃないってことだな」

ニカツと、思わず擬音が聞こえてしまいそうなくらいさわやかな笑顔とともに送られる言葉。お前、図太すぎだろ……

「て言うか、お前があの時オレを助けてくれてなかったら……いや。お前に会ってなかったら、今だってその人らと同じように落ち込んだままだったよ」

「……俺、お前になにかしたか？」

「いいや。けど、なんて言うか、お前見てたらさ、自分の寝る時間まで惜しんで、みんなを献身的に診てるお前と話してたらさ、なんか無性に楽しくなってくるんだよ」

いや目覚まし誤爆しただけなんだけど……

「そうは言っても、まともに寝てたのオレとお前だけなんだぜ？ 他のみんなは不安で眠れず、膝を抱えて丸まってたんだ。お前の言った通り、普通はそうなんだよ」

「まあ、な」

「そんな中で不安をふっ切って、今自分にできることをやってる姿とか、なんつーか、上げえって思う」

「……」

「不謹慎かもしれないけどさ、こんな、死の瀬戸際って瞬間になって初めて、琴線に触れたって言うか。なんかよくわかんねえけど、なんとなく今、楽しいよ」

「そうか」

「ああ。……そうだ、助かったら一緒に飲みにも行こうぜ。良い店知ってるんだよ」

「いや俺未成年だから……というか、お前も学生だろ」

「恥ずかしながらオレ、二回ほど留年してまして……」

「失礼しました五十嵐さん。もう用が済んだのなら私も仕事がありますのでこれで」

「おいちよつとやめろよ大丈夫だから馬鹿は感染しないから距離置くなって！」

「……はあ、イチゴ牛乳でなら付き合つてやる」

「おいおいイチゴ牛乳って、子供じゃねーんだから」

「あ？ お前今イチゴ牛乳を馬鹿にしたな？ ふぎけんじゃねえぞ人生つてのはな、とりあえずカルシウムとつときや全てうまくいくんだよ！」

「そのカルシウムがほとんどないんだが……」

「じゃーねえ、石でも食うか」

「おい待て血迷うんじゃない気を確かに持て!!」

「——ぐぎやああ歯が、歯がああああああああ!!」

「だから言つただろーがああああああああ!!!」

「ぶふつ……くつだらねえ」

「牛乳か。私はちよつと苦手だな」

「あ、ワタシもだよ。給食の牛乳とか、いつつも残してた」

「え、給食に牛乳出るの？」

「え？ 今は出ないの？ 時代の流れってすごいね……」

「今のすごくオバサンくさいっすよ」

「あ、ひどいなあ。君も石でも食べてると良いよ！」

「なんだなんだ、何の話？」

「えっと、給食の牛乳はアリかナシか。だったはず！」

「え、そんな話だったっけ」

「アリでしょ！」

「ええーナシだよ」

怒声と笑い声と、あと主に俺の叫び声と。

それらが他の奴らにも波及したのか、周りは、騒がしくて賑やかでうるさくて、笑いが絶えない。この日のここは、そんなどっかで見たような、懐かしい空間に染まっていた。

最近、肩がこる。

こういう状況に陥ったからかはわからないが、知らず知らずのうちに疲れが溜まってきているのかもしれない。このままじや気晴らしなんて期待できないし、寝るつつてもこのいつ切れるかわからない緊張の糸の中じや、取れる疲労も簡単にはとれない。これは必然だ。我慢するしかない。ないんだけど……

気のせいかな、今日は特に落ち着かない。

「はい、これでもう大丈夫です」

「ごめんなさい、毎日毎日……」

「こんな時はお礼の方がいいですよ。男はそーいうのにグツとくるもんです」

「……そういうもんなかな？」

「そういうもんです。折角、御綺麗なんですから」

「……君、結構言うねえ。ちよつとときめいちゃったぜ。実は女つたらしだったりするの？」

「い、いや。別に……」

「ふふつ、冗談だよ……ありがとうございます！」

「ど、どういたしまして」

それでも、みんなのケアだけは続けている。

医者ではないとはいえ、医療の知識を持つのは、この中で俺だけだ。俺が止まってしまったら、その時点でみんなが終わるんだ。気合いを入れなかせ。

食料の管理だって欠かせない。最初は三日もつかどうかだった食料や水も、丹念な電車の捜索によって少しずつではあるが増えてきている。

怪我を負ったみんなも、もう安心できる程度にまで回復してきている。

ただ一人を除いて、ではあるが。

「具合は、どうですか」

「あ、ああ………大事ないよ」

安原さん。

この事故で、もつとも重い怪我を負ってしまった人だ。右腕は動かさず、右目は簡易な眼帯で覆われている。おそらくではあるが、外傷だけでなく臓器にまで深い傷を負っている。立つことも言うこともできずに、この三日、電車から無理矢理はぎ取ってきたシートに座ったままだ。彼だけが一向に良くなる気配がない。

「もうちよつとの辛抱です。すぐ助けが来ます」

「すまない。平気だよ、いつも悪いね………」

「………」

どうみたって平気じゃない。

彼の針金のような笑みは、いつも俺の心を締め上げる。

……そもそも。

この状況で、彼に満足な処置が出来るはずもないのだ。安原さんには水も食料も、僅かではあるが、みんなの了解を得て、多く配分している。それでも普通の病院の四分の一あればいいほうで、当然、身体は弱っていく。

道具も水も食料も。本来の適量を満たしきれていない。

「過ぎたるは猶及ばざるが如し」とは孔子が言った言葉であるが、こうもこの言葉に物申したい気分になったのは生まれてこのかた初めてだった。

そんなものは、及ばない気持ちを知らない馬鹿の戯言だ。

早く助けが来なければ。手遅れになってしまう。

ともあれ、今のところ目立ったことは起きていない。

安原さんの容体も、おそらく今すぐに悪くなるものではないし、食料も水も、あと二日はもつだろう。揉め事も起きていない。みんなの関係も良好だ。と思う。

ほら、今だってあそこで集まってみんなを話をして――

……？

俺がそこに目を向けた瞬間、何故か、話していた人たちと目が合ってしまった。慌てた様子で目をそらされたが、気がつけばそこから妙な視線を感じる。

隠そうとする作為が込められた、不自然な視線。

何？ 何なのこれキモチワルイ。俺なんかしたつけ？ 一人だけグースカ寝てたから？ いびきとかうるさかった？

★

「——ああ。そういうや昨日から、女の人たちはあーやって集まって話すことが多くなつたな」

五十嵐が言うには、昨日の夜——というか今日の深夜も、眠れない女性陣が集まり、いわゆるガールズトークをしていたんだとか。

言われてみれば、よく見るとあの輪の中には男がほとんどいない。事故に遭った女性陣全員が、空間のど真ん中に大きな集団となつてガヤガヤ言ってる姿は、やけに異様というか、こんな状態だからか、悪目立ちしていた。

しかし五十嵐。ああも集まって彼女らは何を話してるんだ？

「しらねえよ。『二十歳越えたオツさんは話しかけないで！』つてのが、オレのクラスの女子の口癖だったんでな」

「……ここから出たら、良い奴紹介してやるから」

「ホント!? どんなやつ!？」

「立ち直り早っ!」

こんだけ期待されたら紹介しないわけにもいかないじゃないか……誰にしようか、金髪ツインテのあの娘とか紫カチューシャのあの娘とかどうだろう。なぜかこの話したら殺されそうな気もするが。

てか、今はそれよりやることがあるんだよ。

俺は、彼女らから感じた妙な視線について知りたいんだ。なんて言うか、放っておいたら後々面倒なことになりそうで。

そう、五十嵐に伝えると、何故か何の疑いも持たないような顔で女子の集団の中に突っ込んでいった。

アイツ、メンタルすげえな……

しばらく、というか、数十秒もしないうちに五十嵐が思いつきり肩を落としながらとぼとぼと帰ってきた。

「……今度はなんて言われたんだ?」

「『えー……オジサンにはちよつと教えられないかな、ゴメンネ』って……」

「まあ、妥当だな」

「お前わかかってて行かせたのか!？」

「お前が止める間もなく自分から行ったんじゃないか」

「おおそつか、すまん」

「納得しないでくれ……むしろ罪悪感が湧く」

まあそれはいいとして。

圧倒的女性比率が多いあの空間ではあるが、一応男子がいないわけではない。

ちらほらと暇を持て余したチャライ男連中が「飛んで火に入る夏の虫」の如く突入していつて、打ちひしがれて帰ってくる姿を、俺はさつきから観察の途中に見つけて来ているのである。

そして、そいつらから俺への視線にも、嫌でも気付いてしまう。

あの輪からの視線とは違い、明らかな敵意が込められた視線に。

俺あいつらに何かしたかな……？

それは置いておくとしても、今度は五十嵐だ。

あくまでもあの男どもは、話に着いていけずにやむなく自然と離れていくように見える。五十嵐と違い、明確な拒絶はされていない。

あいつらは良くて、五十嵐がダメな理由って何だ？

「……やっぱ歳か？ 五十嵐がオツさんだから……」

「ねえ。何でお前といい、オレと関わる奴はみんな、さながら神から授かった天命のようにオレを傷付けにかかるの？ 義務なの？」

「よくわかつたな、国民の四大義務だ。①納税、②勤労、③子供に教育を受けさせる、④五十嵐への誹謗中傷」

「国ぐるみでいじめられてたのオレ!? 再審だ再審、もしくは控訴を要求する！」

「却下、ギルティ有罪」

「オレに権利はねえのか！」

そんな五十嵐は放っておいて、俺は今日あったことをまとめにかかる。

が……まだ情報が少ない。仕方がない。

それなら、ちよつと事情聴取に行ってみようか。

★

「今は……二三時、五十分」

流石に三回目の夜なこともあり、みんなの雰囲気の前よりずっと和やかなこともあり、この時間に睡眠をとっている人も多くなってきた。

昨日から目になじんでいたガールズトークも、どうやら今日は休みらしく、みんなの寝息が空気を伝い聞こえてくる。

「——わざわざすみません、こんな時間に……」

「ううん。いいの、君には助けられっぱなしだし」

目の前の女性は、川宮三栗さんかわみやめぐりという。

俺たち、事故にあつた面子の中で、女性陣最年長の人だ。

……といっても、ほとんどが学生な俺らの中で、ではあるから、特別歳をとつてゐるわけではなく、むしろ身につけている大人びた装飾品やスーツが浮いて見えてしまうほどの童顔美人だ。俺の見立てではおそらく23、24くらいだろうか（正直、制服を着させれば高校生といつても通りそうであるから、当てずっぽうだ。彼女の言動を読み取つてみたら、多分この辺りだろう）。

陽の射さないこんな空間で、恒星の如く光り輝きみんなを照らしてくれる素敵な女性だ。状況が状況であるから、ふとした瞬間理性が爆発しそうになる。落ちつけ俺この歳で犯罪者なんて人生終わってしまうじゃないか。

そんなんだから男性陣の中では人気があり、男たちのアイドルとして本人の知る由もないところで活躍してもらっている。変な意味でなく。

あとこれは何よりも言っておかねばなるまい。男どもよ喜べ、おそらくお前らが期待していた通り、彼女は巨乳だ。ロリ巨乳だ。

「それに、こんなときにお礼を言われた方が、女の子はグツとくるんだよ？」

こんないかがわしい思考をフルで行っている俺に、彼女は優しい声をかけてくれる。まさに女神。てかどっかで聞いた台詞だ。

「はい。ありがとうございます」

「うん、どういたしまして。で、用って何かな？」

「いや、えっと——」

「呼び捨てでいいよ、三栗って呼んで？」

「え。じ、じゃあ三栗……………さん」

「あははっ、まあいつか。なあに？」

……………なんか調子狂うな。

「三栗さん。あの、結構変なこと聞いちゃうんですけど…………」

「うんうん」

「……………いつも、女性陣とのガールズトークで何を話してるんですか？」

「——え？」

この時の俺は失念していた。

何故、火星のチャラ男の虫どもに話を聞こうとしなかったのか。

この光景を客観的に見ていたらまるで……………会話に入る勇気のない非リア充男子が、話しかけられた時に話題を合わせられるようにと情報集めに必死になってるみたいでは

ないか。

はつきり言うのと、中々にきもちわるい。

「——いや、えつと!! 決してあのそーいう浮ついたことじゃなく!」

「……じゃあ、何?」

やべーよこれ絶対勘違いされてるよ。色々と可哀想な子だと思われてるよ! 三栗さんの笑顔な視線が痛いよ!!

「あの! 最近そちら側からの視線を感じて……それで。いやそれでっていうかそれだけなんですけど、別にそれは問題じゃなくて。男性側の数人がギスギスしてることもあつてなんです——ええと」

「……」

これを放っておいたら、後々面倒なことになりそう。そんなただの予感を、目の前のほのぼの系天然箱入りお嬢様みたいな女の人にどう説明したらいいんだ。

そんな俺の意図を察してくれたのか、ポン! と手を叩いて電球を出してひらめいてくれた様子の三栗さん。見えないけど電球なんか。あつたら重宝するけどねここじゃ。

「……わかったよ! うんうんもう大丈夫。心配しないで、全部伝わったから」

「ホ、ホントですか!? 流石大人の女性は違う!」

「やーあはは。照れちゃうな、そんなに褒められると。えーと、要するに……」
少し気恥ずかしそうに頬に触れながら、三粟さんは口を動かす。

「もつと女の子と仲良くなりたいたいんだよね！」

「俺の褒め言葉を返せ!!!」

あれー違つた? と笑いながら話す三粟さん。どうやらガチだったらしい。

天然お嬢様は大人になつても天然でお嬢様だった。おかげで一瞬素に戻つちまつたよ。

「いや、ね? 別に秘密つてわけじゃないから話してもいいんだけど……聞いてきたのが君だったから」

「? 俺に聞かれるとまずい話だったんですか」

「うーん、まーまずいというか何というか」

珍しく口ごもる三粟さん。まあ、俺もまだ、このほぼ三日の間の彼女しか知らないんだけど。

にしても、俺に聞かれるとまずい話か。だから、俺と仲のいい五十嵐はあそこからハブられたんだな。後でちゃんと教えておいてやろう。五十嵐のあんな哀れな姿は一度見れば十分だ。

「で、俺に聞かれるといけない話つて……あの、ええと。陰口、とかですか? 俺なんか

嫌われるようなことしてました?」

「ううん、むしろ真逆だよ」

真逆、つてどういうことだろう。そう三栗さんに尋ねると、彼女はゆつくりと少し申し訳なさそうに話を始めた。

「えつとね、女の子の中の数人が、君のこと結構イイカンジだなーつて。そういう話」

「……? イイカンジ、つて言う」と

「うん、なんて言うか……好き、とか?」

「あー……」

ようやく、あの時の男子の視線の理由がわかった。嫉妬か。ざまあ。

「ホラ。君つて結構、イケメンでしょ? 目は死んでるし、時々変なことし出すけど。けど、熱心に看病してくれる姿とか、わかりにくいけど確かに優しい態度とか、そういうところ女の子的に評価高いみたいで」

「……ありがとうございます」

悪い予感ほこれだったのか。

恋愛による男女分裂。女子がそれで仲良くなっても、男子はそれで険悪になる。仕舞にはそれが女子にも伝わり――

道理で、アイドルグループとか会社とかが恋愛禁止にしてるわけだ。何というか、一

概に悪いと言えないあたり、普通の喧嘩より厄介だ。

「……というか、女性陣の何人かは彼氏持ちじゃ……？　実際、カップルでここに閉じ込められちゃったって人達もいるみたいだし」

「んーそこなんだよねー。君って結構、罪な男の子だね♪」

「そんなにこやかに言われても……」

でも確かに、この状況での恋愛は罪以外の何物でもない。下手したらカップル間の関係も悪くなって俺に火の粉が降りかかりそうだ。これ以上行ったら罪どころか『詰み』になってしまう。

「明日中に、何とかしないと」

「……」

この問題を解決する方法……まあ、そんな難しくない。こんな時は先人の知恵を借ればいいのだ。

「目には目を。歯には歯を。」ならば、罪には罪を上塗りすればいい。

「ありがとうございました。こんな夜遅くに話を聞かせてもらって」

「ううん、かまわないよ。それより……」

「何すか？」

「ええと、大したことじゃないんだけど。すごいな、って」

……すごい。って、何だ？

「同世代の女の子から好意を寄せられてるって知って、そうしてる人なんかまずいと思うよ？ みんなソワソワするか、照れて俯いちやうか、お調子に乗って話しかけに行くか、とか」

「……どうやら俺は、普通じゃないみたいなので」

「あはは、そうかも。君も、五十嵐くんだったっけ？ 彼も、ちよつと変わってるよね」「俺から見れば、三栗さんもかなり普通じゃないですよ？」

「えー私は普通だよー？」

「いやこんな状況でそこまで和やかに笑いかけられたら流石にちよつとびつくりするぞ……」

そう伝えると、

「あ、それはアレだよ。君らのおかげ」

なんてことないように、そう返された。

「？」

「君らの、馬鹿みたいにはしゃいでる姿見てたらね。自然と笑えてくるんだよ。こんな状況なのにさ。変だよな？」

「さーらつとキツいこと言いますね……」

ほのぼの系天然箱入りお嬢様の称号に毒舌も付け加えないといけなくなってくるでしょうが。

「それに、私と君とはやっぱり違うよ。良い意味でも、悪い意味でも」

「? あの一——」

「君、ホントに喜んだりしないんだね。女の子が自分のこと好きって言うてるのに」

——何だ? 三栗さんは何を言おうとしてる。

「私ね、これでも大学では心理学専攻してたの。ちなみに首席入学首席卒業!」

……へえ。三栗さん、ものすごく勉強できるんだな。なんだか今の彼女からは想像もつかないぜ。

「す、すごいですね……ちなみにどこの?」

「オックスフォード」

「へーそーですかーすごいですねー、あのオックスフォードオックスフォード!!??? 何かの間違いじゃ、ホントはコックサンフォアード大学とか!!」

「コックサンフォアード? そんな大学無かったと思うけど……」

俺だって知らないわ。何だコックさんフォアードって。何厨房放り出して戦地に特攻してるんだこいつは。仕事しろよ。

「なんだか興味深いね……その人が職場を放棄してまで戦場に向かわざるを得ない理由

はなんだったのかな？ 戦地に貴重な食材でもあったのかな？ あは、何だか漫画みた
い」

「いやむしろ戦地に大切な人がいてそれを助けに行く、みたいな展開が燃える——じゃ
なくて、コックサンフオアード大学はもういいんです！」

それより……ガチなのですか？

「うん」

「……いやいやいやいや絶対なんかの間違いだ」

「およ？ 私の言うことが信用できないのかな？」

逆にあなたの言うことだから信用できない。あんまりにもポワポワな雰囲気してる
もんだから信じるに信じられないのだ。「狐につままれる」とはまさにこのことか。

今だつて俺は『ごつめーん、オックスフオード大学じゃなくてフォックスワード大学
の間違いだったよーあはは』と三栗さんが言ってくれるのを待っているんだ。てか
フォックスワード大学って何だ。右手に異能をかき消す特殊な能力を持ったウニ頭の
青年が講師でも務めてるのだろうか。というか独り言多いわ妄想が膨らむやばい動揺
してるマジその幻想をぶち殺したい。

「……ないな」

「む。君って結構、頑固だね。本人がそう言ってるのに」

「う。じ、じゃあ。俺が問題を出します。出題は……そうだな、英語から。それに答えられたら全部信じましょう」

「おー。おもしろそうー」

なんて乗り気なんだ……だが負けない！ 全力で行かせてもらおう！

問題はこれだ！ 大学の模試の時に俺がどうしても解けなかった奴だ！ 解けた時のすつきり感と解答者を小馬鹿にしたような雰囲気漂う完璧な問題！ これが解けるか！

「I never saw a saw saw a saw. 日本語に訳すと!」

『私はノコギリがノコギリを切るのを見たことがない』

「あっさり解かれた!?!」

ええーこんなの簡単だよー、と零す三栗さんを尻目に、俺は十八年の記憶を必死に掘り返す。てか記憶ない設定じゃなかった俺、何でこんな問題とか憶えてんの？ 何というご都合主義。

……そうか、そうだ！ 三栗さんはあのオックスフォード大学に行ってたんだぞ!?!

それなら英語なんて楽勝じゃないか！ 日本人に『五月蠅い。これ何て読む?』って聞いているようなものじゃないか！ 解けて当然。ちなみにこれは『うるさい』と読むよ！ いや誰に話してるんだ俺それより次の問題を……

「ていうか、その理屈で言うとなら、私がオックスフォードに行つてたこと認めちゃつてない……?」

「なん……だと……!?!」

「ま、負けた……俺が?」

「す、すごく頭いいんですね……どこの大学に行つてたんですか?」

「だからオックスフォードだってば。君、さり氣にまだ認めてないでしょ」

「ちつ。バレたか。」

「まあこの話は置いて。えと、何の話でしたっけ」

「もういいよ別に……あ、だけど一つだけ聞いてもいい?」

「何ですか?」

「三栗さんは軽く手を合わせて質問をしてくる。」

「好きな飲み物とかって何「コーヒーですね!」食い気味で!」

「だつて仕方ないじゃないか。コーヒー大好きなんだから。泥水とか言う奴は死んでしまえばいいんだ。」

「君、前は牛乳好きじゃなかったの?」

「いやいや、俺は根っからのブラック派ですよ。甘い物とかは少し苦手で」

「……そう」

「そんなの聞いてどうするんですか？　もしかして心理テストの一環だったとか」
「ん。まあ、そうだったんだけど、ね」

何でそんな含みのある感じなんだ？　何か変なこと言ってるか？　俺。

「あーもう普段しないツッコミまでしちゃったよー……——ん」

そんな思いに気付いたのか、三栗さんは落ち着き払った言葉を零す。

「……気をつけてね」

気をつけて、つて？

そう聞こうとした時の三栗さんは、その感情をどう言葉にしているかわからずに、一言に全てを集約して、俺に何かに気付いてほしいような表情をしていた。俺の聞きたいことは、彼女が今、一番知りたいことらしい。

「——はい、わかりました。改めて、ありがとうございます」

「いやー、お礼言いきすぎだよ。じゃあおやすみ。また明日もよろしくね」

「はい。おやすみです」

さてと、俺も寝るか……

「あー！　ちなみに私は給食に牛乳はナシ派だよー？」

何の話だ。

★—次回予告—

「えーさてさて。この急に始まった謎の電車事故編も、ついに残すところあと一話なのでありますが」

三栗「いやーさみしいね。私なんか多分次で出番終わっちゃうよ？ みんな私の名前覚えてくれたかな。『めぐり』じゃないよ？ 『めぐり』だよ？」

「そろそろ本気で読者に怒られそうな気分なので、ポンポンと進めたいんですが……何とか内容が内容だけあって、ね」

三栗「内容が無いよう？ えーと、私はここで笑えばいいのかな？」

「いやダジャレじゃないしそのようなカンペは出てませんからそんな生きる価値なしの虫けらを見るような渴いた愛想笑いはやめてください」

三栗「川宮三栗です！ 趣味は他人の新しい部分を見つけること！ 特技は料理！

彼氏はいません！」

「どしたんですかいきなり」

三栗「いや、出番増えるかなって」

「何でそんなとこだけガツガツ来るんですか……」

三栗「私って結構、でしゃばりだね！ それはそうと、次回はついにHis Mem

ory完結話、パート③です！」

「お楽しみにー」
おしまい

His Memory③

囁く声が聞こえた。

他の誰に向けるのではなく、完璧に確実に俺へと向けられた囁き声。

虫がカサカサと這いずりまわる様な気に障る声が、俺の耳の傍から鼓膜を伝い骨を通り340m/sの早さで脳を正確に貫いてくる。

お前に護れるものなんて何一つない、と。

それが夢であることに気付いたころには、俺は大量の汗を滴らせながら起き上がり、いつもの殺風景な光景を見渡していた。夢から覚めても何ら変わりのない光景を。

ある程度落ち着いてきて、みんなが睡眠くらいはしつかり取れている、と思っていた。思いたかっただけかもしれない。

四本足の獣が二足歩行できないのと同じように、希望と期待を失った俺の身体は、ガクンと力が抜け落ち地に伏した。

カサカサと虫が這いずる様な音を響かせながら何度も寝がえりを繰り返し、俺と同じように寝汗と涙で地面を濡らしながら自身の体と心に休息を強要する人たちの姿が、そこにはあった。

俺が必死に護ってきたのは、こんなものだったのか？

俺の頑張りは無駄だったってのか？

——じゃあどうすりやいいんだよ。

ここから出るには俺がしつかりしないとイケない。

恋愛？ 友情？ 好感度なんかいらんない。ここじゃそんなもんクソだろうが。何の

役にも立たない。求めてもどうにもならない。目の前にちらついたそいつを追いかけ、捕まえた時にはもう俺らは動かない肉になるだろう。

女と恋をして腹が膨れるのか？ 友と笑いあつて喉が潤うのか？

そんなもんを踏みにじつて、人の思いを操つてでも、俺は救わないとイケないんだよ。

俺は——を、救わないとイケないんだ。

—Day 4—

「第一回チキチキ！ 閉じこめられたトンネルでの恐怖体験きもだめしツアー！！（ドキッ！素敵な出会いもあるかも☆）」

我ながら大それたことをしたもんだと、トンネル内に響くほどに大きな声を張りつつ

思ってしまう。

「さあさあ始まりました、こんな時だからこそ沈んではいけない上げてこうぜテンジョンMAX！なこの企画でありますが！ ルールは簡単、好きな男女でペアを組んでこの先にある壁にサインをつけ帰ってくる。これだけであります！」

流石にここまで説明しただけあって、俺のもとには人が随分と集まってきた。

「さあさあ記念すべき第一号はどなたかな！」

といつつ、俺は近くにスタンバイさせてある五十嵐に目くばせする。

流石にこんな状況じゃ、どんなに元気な奴でもきもだめしなんて色んな意味で空気の読めない企画に参加しようという気にはなれないだろう。参加しようにも男女間のしがらみは払拭されていない。

女性陣の人気の的であるらしい俺は幹事にまわっているし、三栗さんにも同様に幹事を頼んだ。わざわざ険悪な雰囲気男性陣に声をかける人は少ないはずだし、そのまた逆も言える。

そんなんじや、俺の目的は果たせない。

だから、布石を打つ。

「あ、あアー！ なんかおもしろい企画やってらあ。どうだいそのレ、レデー、オレと一緒に参加しないかい？」

「え？ いや、まあ別にいいけどさ……」

……五十嵐お前無茶苦茶棒読みじゃないか。女の子引いてるぞ。一応ちゃんとした作戦なんだからしつかりしてくれよ。

まあ五十嵐の大根役者っぷりはさておき、効果は出てるみたいだな……

「五十嵐くん参加するの？」

「三栗さんボクと一緒に！」

「ごめんねー私も幹事だから」

「あたしも参加しよう……かな。どう？」

「……まあ、久々のデートと思えばいいかもな」

五十嵐には三栗さんとは別に、開幕速攻に先陣を切つて企画に参加するように頼んでおいた。こうすれば大なり小なり他の連中も参加はしやすくなるだろうし、空気がなごんでくれればなおOKだ。

「じゃあ、男子と女子分かれてくれ！ 男子には俺が、女子には三栗さんからマジックを支給する！」

ここで男女を分断し、軽いミーティングの時間を作ったのも勿論詳しい説明のためではない。

素敵で綺麗な花の種を配るためだ。

「そんな顔すんじゃねえ」

「……つ、アンタ、案外言う時は、言う、のね。」

「……一言余計だ。じゃ、サインしてきつきと帰んぞ」

「うん……」

「……あの」

「あ、何だ？」

「帰る時は、一緒だかんね？ 責任もって私をずっと護つてよ」

「う、お。おう」

★

二組目が帰ってきた。腕を組んできこちなくしてるところを見ると、どうやら成功したみたいだ。

(……ありがとよ。あんたの世話になるのは癪だが、あのセリフ、結構効いたみたいだ) 二組目の片割れの男が、わずかに耳打ちをしてきた。何を言うか。寧ろお礼はこつちがしたいくらいだ。ここまでやるとは思わなかったよ。

——そう、これが、俺の布石。

昔何かの漫画で読んだ気がする。頭に溢れかえった感情は、少し衝撃を加えるだけで

容易に恋愛感情に変わる。

それだけでなく、人間は危機的状況に陥ると本能的に子孫の繁栄のために異性を求めるらしい。

俺はこのきもだめしのゴールを、初日に俺が見てきた出口の岩壁に設定した。

俺だつて激しい絶望を味わったんだ。それを見た時のショックは他の奴にとつても相当なものだろう。唯一の希望が消え、そして懸念していた絶望が一気に膨れ上がる。

だが俺はさつき男女に分けた時に、男性陣にだけこの事実を前もつて伝えた。そして、

『どんなにショックを受けても今から教える台詞を忘れるな』

そう言つてそれぞれに見合つた台詞を教えた。

溢れかへつた絶望を、この衝撃台詞で無理矢理恋愛感情に塗り替える。

二番目の連中の仲が変わつたのを感じてか、何人かがそわつき始めた。

あのアドバイスがここまで効くとは思わなかつたのか、尻込みしていた連中が突然順番を争い始める。全員とはいかないまでも、男女間の仲は急速によくなつていくだろう。

「泥中の蓮」。どんなに汚れた泥の中でも清く正しいままのものを言うらしいが、な

るほどもってこいの言葉だ。

清く正しいものほど、扱いやすいものはない。

★

「——今回はありがとうございます」

俺はその日の夜、三栗さんに改めてお礼を言った。

この日、以前から見られていた女子会は開かれず、それぞれがそれぞれのパートナーと夜を過ごしていた。

全員恋愛関係に発展したか、というところでもないが（五十嵐含む）、これで男連中の雰囲気も和らぐだろうし、少しでも前向きになれるのならそれで十分成果は出た。

「……ううん。いいの」

それでも、三栗さんは何か不満げだった。

昨日俺に何かを言いかけた時の表情で、俺に咎めるような視線を送る。

「君は、誰を救おうとしてるの？」

唐突に投げかけられた質問に、数秒固まってしまう。

「誰を、って」

「少なくとも、ここに閉じ込められて最初の時の君は、みんなを救おうとしてた。けど、今君の眼には何が映ってるの？」

今俺の眼に映っているもの。

心がざわつく。

「君、今日は安原さんの看病、他の人に任せっきりで一度も行かなかったね」

「それは……今日は忙しかったからで」

「見捨てたよね、安原さんを」

心を揺さぶられる。

「素人の私が見てもわかる、安原さんはもう長くはない。あと二日、助けが来なかつたら多分死んじゃうよね」

「それを言い訳にして、安原さんを『みんな』から省いたの？」

「今の君は確かに『みんな』を救おうとしている。だけどそれは何のために？」

心の奥の錠に触れられ、奥の奴が怯える。ここに人が入ってくるのが怖いと嘆く。

「人の想いまでも操って、道具にして。一体何のために」

「みんな一緒に外に出るためですよ。それ以上の理由はありません。安原さんの件にしたって、妙な勘繰りを入れすぎです」

では。と言って自分の寢床に戻る俺の背中に、三栗さんの泣きそうな声が降ってくる。

「あぜ道に何が転がってようと、それが自分に何か影響を及ぼすと思つたら迷わず踏み

碎き歩く——そんな人の目をしてるよ、今の君」

「君は一体、何に怯えてるの?」

—Day 5—

この日は朝から騒がしかった。

目覚ましの騒音ではない、もつとこう、悪意やら混乱やらが伝わる騒がしさ。

いつもより最悪の寝ざめで見たその光景は、俺の予想と大きく反したものになっていた。

トチ狂ったようなわめき声。

殴られる男。転がるペットボトル。零れ落ちる水。わめく人。わめく人。わめく人。

「やめろ!」

数秒の後状況を理解した俺はその騒動を収めようと中心に特攻していった。

「こいつがオレらの大切な水を盗み出しやがったんだ!!」

声を荒げてそう叫ぶソイツは、自分がかんでいた男を俺に差し出しつつそう言った。

殴られ蹴られ青あざだらけの身体で、男はなおも数本のペットボトルを離そうとしな
い。

「…………ふ、フハ。ハ。も、もうおしまいなんだよ…………何もかも!!」

その代わりと言うように、よだれを飛ばし俺に向かって大声で叫び倒す男。

「みんなも見たろ!! 昨日の出口!! あんなどころから助けがくるわけがない! こいつは俺らから希望を取り去るためにあんな企画を実行したんだ!! 用意した台詞を言わせ、パチモンで安いパートナーを無理矢理作らせ、俺たちを騙そうとしたんだ!!」

「俺は見た! 昨日の夜こいつと三栗さんが話してるのを! 俺ら全員まとめて殺して二人つきりになるつもりなんだ!! 人気者のリーダー様は邪魔な女どもを他の奴とくつつかせて最後の思い出に思う存分三栗さんと乳練り合いたいんだとよ!!」

今度はみんなの方向に動き直り、なおもそいつは声を張り上げる。

「助かると思っただか? 何かが変わったと思っただか!? 何も変わんねえよ! みんなここで死ぬんだからよオ!!」

——何を、何処で間違えた。

—Day 6—

「……昨日、やらかしたんだってな」

五十嵐が俺の隣で小さくつぶやく。

「俺は何もしてない……みんながわかってくれなかつたんだ」

「お前、オレに言ったよな。『みんなを仲良くするために必要だから協力しろ』って。こ

れがどうだ。今や誰も他の奴と喋りやしない」

「……俺にはもうわかんねえよ、何が間違ってたのかなんて」

「オレにもそんなのわかんねえよ。わかるほど頭がいいなら二回も留年してねえからな」

「……………」

「だけど、あの時のお前の選択は間違っていた。見る相手を間違っていた。救うべき相手を間違っていた」

「お前はみんなを救おうとしてない、みんなを救うことで自分を救おうとしてたんだろ」

「だからみんなを顧みない。手段を選ばない。自分しか見てない」

「お前は、何に怯えてんだ？」

「そこまで話したところで、鋭い悲鳴が耳に届いた。

「安原さん……息してない」

——恐れていたことが現実になった。

また失うのが怖かった。

また護れないことが怖かった。

奪われることが怖かった。

そんな自分を救いたかった。怖がりな自分を救いたかった。

もう昔とは違うって。誰かを救う力があるって証明したかった。

だけど無理だったよ、初音。お兄ちゃんはまたダメなお兄ちゃんだった。

—Day 7—

もう誰も、動いている人はいなかった。かろうじて息をしていますが、地面に突っ伏して死を待つだけ。

「ねえ、おねーさんがお話してあげようか」

どこからか三栗さんの声が聞こえた。返事をする体力もないので少しうめく。

「神様はさ、大勢の困った人たちを見捨てたり、酷いこともするけど……その分、必ずどこかで釣り合いのとれるように幸福を落とすとしていつてくれるんだよ？」

「神様は、そんなに悪い人じゃないよ」

「……………」

じゃあ、初音の命で訪れる幸福もあるってことか？

初音が死んで、俺は医者を目指した。

なら、今の俺を生んでくれたのは他でもない、初音じゃないか。

俺には初音に訪れた不幸の分の幸福を、誰かに与える力があるってことじゃないか—

けど、どうやって。

そこまで考えて、俺はポケットから一つのカードを取り出す。

「……何だよ、それ」

「……ドナーカード」

「この生活では、自分を救うためのここでの時間では最後まで役に立たなかった代物。だが自分ではない。今度は本当に、最後だけは、他の誰かのために——」

「——へっ、つたく、お前はつくづく……」

「えへへ、思った通り。やっぱり君って結構、最高な人だね」

言いながら五十嵐と三栗さんも、身分証の裏に最後の力を振り絞りメモを残す。

他にも、弱々しいが確かに聞こえる、ペンを走らせる音。

「——見ろよ。お前のおかげで、さつきまで死んだ目をしてた連中が、誰かのためにこの一瞬を生きようとしてる」

「オレはそんなお前に救われたんだ」

「なあ、聞いてんのかよ——」

——全部書けた。最後、あとは、俺の、名前。最後まで思い出せなかった、俺の名——

「——音無イツ……………」

——音無、ゆずる…………

★

…………長い夢を見ていた。

あの時、直井のヤローに無理矢理記憶を引つ張り出された時に出てきた男、音無弦結。俺は確かに少しの間そいつだった。そこまで鮮明な夢。

「…………つとやべ、寝ちま——」

頭を起こそうと力を入れると、温かな温もりに触れた。

鏡のような瞳にあどけない表情。銀色の髪を漂わせる天使のように神々しい姿。

「…………ただいま」

「おう、おかえり。立華」

おしまい

第二十四訓

『ガガツ……オ昼の楽曲放送を始め……す。』

壊れかけたスピーカーから、いびつな音声が流れ出る。

その内容はとりとめのないもので、毎日聞いているものだからもうとつくに聞きなれてしまった。静かに食堂でご飯を食べるなんてとてもガラじゃないけれど、飽きもせず毎回同じ声が流れてくるんだもの。

「今日、月曜の放送はパツヘルベルのカノン——」

『今日、月曜の放送はパツヘルベルのカノンを——』

台詞までしつかり暗記してしまっている。

一通りの説明の後、いかにもな調子の音色が放送される。壊れてて音質が悪いから、何だか流れると言うよりはズルズルと這い出てくるような感じだけれど、なんとか聞き取れるはず。何度も聞いて憶えているから、自分の中で補正がかかっているのかもしれない。

「……あれ？　でもカノンってこんな曲だったっけ」

言われ尽くした名前、奏で尽くした音色のハズなのに、どこか偽物のようだ。そういえばここにきた時からずつとかな。何度立退き要請を出しても、その違和感私の頭を不法占拠し続ける。

心臓は動いているのに今ここに生きていないような違和感。時計は動いているのに世界が止まっているような不協和音。

灰色の音色は私たちが元居た世界と比べるとあまりにも残酷で、さびしいものだ。

もしかしたら私は、そんな世界で壊れずにいるため……色のまやかしを作るために、あんな集まりを作ったのかも知れない。

色の残像を追って、人を集めて、みんなでバカなことをして回った。そうまでして、この残酷な世界にしがみついた。

ここが偽物でも、虚構の世界でも。ここがあの現実でない以上、私の心を潤わすには十分だったから。

あの時のたつた数十分で、私は既に世界から取り残されていた。私を包む色がとても眩しくて、痛々しいほどに眩しくて——残酷で。

どうせ残酷なら、少しでも軽い方がマシじゃない？

だから私はこの世界が好き。この世界で感じる春夏秋冬喜怒哀楽にホントの色がなかったとしても、それがどんなに残酷なことだとしても。

私にとってはその方が慰めになるから。

『——アー、テストス』

あれ、何この放送、聞いたことない……てかこの声、

「銀さ」

『……入ってる？ これ入ってる？ ……えー青春を謳歌しようとする悪ガキどもに次ぐ。十分以内に体育館まで集まるようにー。コンマ一秒遅れでもしたやつは去勢するんでよろしく』

『……ねえ、去勢って何？』

『あん？ 悟りの極致のことだよ。こう、男の股の下のだな』

『ふむふむ』

「校内放送ジャックしてまで何下ネタぶっこんでんじやこらあああああああああああああ
あああ!!!」

『あ、やべ今仲村に怒られた気がする。そんなわけで以上ー』

あの陰毛教師、人がせつかく冒頭から感傷に浸って神秘的な雰囲気作ってたのに台無しにして!! 何がしたいのよ!

『そんなにおこってつとしわがまた増えんぞ。以上ー』

「ないわ!! こちとらびっちびちのJKだったのよ!!」

『実年齢h』

パァン!!

「おいあのスピーカーついに壊れたぜ。」

「マジかよ、なんだかんだで結構もってると思ったんだけどな」

「いや、てか砕けてね?」

「てか銃声しなかった?」

青春を謳歌しようとする悪ガキ、って……私^sたち^sのことよね?

「この前まで落ち込んでたと思ったらもう……!! 行きやいいでしょ体育館!」
手に握りしめた銃をホルスターに戻して、体育館へと足を向ける。

★—体育館—

「おーテメーら。がん首そろえてよくきやがったな」

「アンタが去勢するーなんて言いやがるから急いできたんだろが!!」

十分を待たずして、彼の前には戦線の大部分のメンバーが揃っていた。おそらく彼が『幹部連中』と言わなかったのも、全員を集めたからだろう。

汗を飛ばしながら舞台上の銀時先生に嘔みつく日向君。昼食中だったのだろうか、髪の毛にトンカツがついている。え、何それどんな状態!?

「今いない野郎どもは……大体顔覚えてねーからいつか。んじゃぼちぼち始めましょーかね」

「何を、始めるといいますか。まあ、何が来ようとも、この肉体の前に恐れなど——」
ちよいちよい、と彼が手招きをすると、舞台袖からトテトテと見慣れた制服の見慣れた女の子が歩いてくる。

我ら戦線と長きにわたり文字通りの死に返す死闘を繰り広げてきた天使。そして……今では戦線の大切な仲間になってくれている、立華奏。

「……そう。奏ちゃん、治ったのね」

「みてーだな。いいのか? 飛びつかなくて」

「二人つきりになったときにそりやねつとりとぬめぬめと飛びついてやるわよ」
「……」

おおう奏ちゃんが怯えている……。今はみんなの前だし少し自重自重と……
「んで、この俺がガキども勢ぞろいで何をするかってーとだな」

意味の分からない重みみんなを襲う。少しだけ息苦しい中で、息をのむ者、汗を拭う者、頭のトンカツを頬張る者……つて捨てなさいよ汚いわね。とにかく全員がかたず

得意げに掴んだマイクにハウリングするくらいの声量で、音をぶつける白髪教師。「消えるって何？」

銀さんは、おそらく顔も知らない喋ったこともない平メンバーにこの質問をぶつけた。

質問された側は、頭の中で答えを用意しつつ、頭の端っこでなんでこんなわかりきったこと聞くんだよといった顔をした。

「消えるとは、成仏することです」

「せーかい。じゃとなりのお前。成仏って何」

「え？ 成仏って何、って……ほら、ふわーって」

「はいじゃあ反対のやつ。そのふわーってどんなの？ 気持ちいい？」

彼はそんな質問を延々と続けた。それこそ全員に当たるくらいに。

しばらくして、一人のメンバーがしびれを切らしてこう言った。

「なんなんだよ！ くだらない問答はもう飽き飽きだ！ 言いたいことがあるならばつきり言えばいいじゃないか!!」

おそらく大半の気持ちをそのまま表したものだっただであろうから、誰も止める者はいなかった。

「へーへーわかったよ……んじゃー最後、仲村」

色が、崩れる。

「この世界、楽しかったか？」

必死に積み上げたものが少しほころぶ音。それはまるで、夕方を告げる鐘のようでもう帰らないといけけないという焦燥をもはらんでいて。

「楽しかったわよ」

「……ああ。正解だ」

そこで彼はマイクを離れた。私たちの、本当の耳に届くように。魂に届く音を、各々に投げつける。

「要するに俺が言いたいのは、いつまでもフェニックスの如くダブリ続けてねーでさつさと卒業しやがれクソガキどもってこった」

「それって……消えろってこと？」

「まあそうなるな」

「んだとテメエこら知った口ききやがって!!」

幹部以外の、彼と関わりの薄い男が舞台上に上がり彼につかみかかる。

「テメーらは知らな過ぎたんだよ」

しかし、なおもその言葉は続く。止まらずに流れる

「テメーらは知らな過ぎたんだ。この世界のことを」

「自分たちの理解を超えた現象にもがき、苦しみ、その矛先を過去の自分ごと神に向けた。そしてその過程で出た立華を天使と決めつけた」

「結果、何十年たつても神様なんかでてこなかったらどう？」

「だがそのことで仲村を責めちやいけねえ。そんな奴がいたら俺がここでぶつ潰す」

「ここまでテメーらを引つ張つてきたのは紛れもねえ、仲村なんだから」

「そもそもこの世界はそんな大層なもんじゃねーんだ」

「時間がなくて遊ぶ余裕のなかったクソガキどもを集めて囲つて好き勝手させる公園みたいなもんだ」

「てめーらの過ごせなかつた青春つてやつを取り戻すための場所。そして送り出す場所」
学校

「んだが、そんなとこにいつまでもズルズルいるわけにもいくめえよ。なんだっけ？」

「本末転倒つてやつだ」

「せつかく時間はたっぷりあるんだしよお、」

「ここらで現実逃避はやめて、自分の芯をもう一度見てこようぜ」

「てめーらの魂に聞いてみる」

「何がテメーらをここに残している？ 何がしたい？ 何がそんなに心残りなんだ？」

「俺がそれを全力でかなえてやる」

「卒業式で点呼とるのは、担任の役目だからな」

彼をつかんでいた男の手が固まる。そのまま膝から崩れ落ちる。

シンと静まり返る中、広く野太い声がかまた、みなノ耳に届く。

「ただ楽しいじゃ……ダメなのか？」

「松下くん……」

「この世界にきて、生前でできなかったいろいろな事ができるようになった。天使との戦いは辛く、長かったが総じて楽しいものではあった。それでは、ダメなのか？」

「ダメだね」

その、松下くんの懇願ともとれる言葉さえも今の銀さんは押しとめる。

「それじゃただの現状維持じゃねーか。何かハラに抱えながら食う飯がうめえか？」

「テメーらには明日が待ってんだ」

「その胸につつかえてるもんとって生まれ変わってよお、名前も変わって性別も変わって人間ですらなくなっただとしても、こんなちっぽけな灰色の世界で見るものよか、ずつとましな景色なはずだろうよ」

「そうか……そうであつたな」

——この世界で見る景色は、どうにも色が欠けている——

必死に胡麻化していても。

どんなに楽しくても。

脳裏にあの光景が蘇るたび吐き気がする。

あの自分はやつぱり、どんなに胡麻化しても、償いのまねごとをしても、自分なんだ。救われたい。心からそう思った日は、おそらく後にも先にもこの瞬間しかないだろう。

「そこでこれだ！ バン！」

銀さんはまるでさつき作ってきたようなポロポロのプレート掲げる。

「ばんじ、や……？？」

「バカ、ちげーよ万事屋よろずやだよ。私わたくし銀ちゃん先生はここに、万事お悩み相談所を設けるこ

とを宣言します！」

「悩みがあつたら俺のところに来い。相談に乗ってやる」

「テメーらが抱えてるもんぶちまけてくれたら、俺が腕力握力脚力知力視力精力その他もろもろひねり出した全力でそれを解決してやる」

「俺みてーなの救われるなんざ癪だろうが、イチゴ牛乳冷やして待つてるぜ」

そういつて彼は舞台袖に消えて行ってしまった。

奏ちゃんもまたそんな先生についていくように、お辞儀をして、とてとてと消えて

いった。

カチリ、と。

止まっていた時計が、動き出す音がした。

E P I S O D E . 1 0 G o o d b y e D a y s

第二十五訓

この景色を見るのも、もう何度目になるだろう。

紅く染まる空。わずかに感じる風。授業終わりで下校したり、これからの部活に喜んだり悲しんだりする空気。晩御飯のことを考えてうっとりしてる女の子や、その女の子のことを見てうっとりしてる男の子。

青春だなあ。

ドラマで見たような光景に思わず笑みが零れる。

ここは幸せな場所。ここにいれば私はなんだってできる。歌うのだって、ギターを弾くのだってできるようになった。他にもまだまだたくさん、叶ってないことはあるけど、なんたってここは夢みたいな理想郷。きつと全部叶うはず！ いや叶えてみせる！

——あ。

でも一つだけ、この世界に言いたいことがあるとするなら。

あの窓越しの夕焼けのほうが、綺麗だったな。

カチ。カチ。カチ。

秒針の音と重なる。

カチ。カチ。カチ。

「……めんどくせえ」

なんで俺があのがキジどものために頭を悩まさないといけないんだ、アホらしい。

思えばこの数日はバタバタしすぎてた。碌に飯もくってねえからか、腹の虫がうるせえし。

立華のヤローがやっとこさガキどもと打ち解けてきたと思ったたら立華の分身が襲撃かけてくるし、その分身がまた分身してそれがエリザベスになったりして――

……。

「そーいやすつかり忘れてたが、あのエリザベス天使はなんだつたんだ？」

思考の奥へと身を落とそうと一呼吸置いたところに、それを阻むかのように

コン、コン。

と、部屋のドアが鳴った。

「どござー」

入ってきたのは、何処かでみたNPCの女子生徒だった。

左目の眼帯がよく目立つ。

「こちらお悩み相談所、通称万事屋です。お客さん、今日はどういった用件で？」

『え、いや。今日はお悩み相談とかじゃなくて……いや！ 確かにそれもあるんですけど』

こ、これ……。

そう言つて差し出してきたのは、いつかどっかで見た弁当箱だった。

「これ……俺にか？」

『は、はい。この前、渡しそびれたので』

渡しそびれた？ 前にも渡そうとしてたのか？

いや、待て。似たようなことがあった。あれは確か2年前……じゃなくて！ 3日く

らい前か？——

——へ？ それって……私、先生に食べられちゃうってこと？ あられもない姿になった私を銀時先生が優しく包みこんで作者の能力ではとても表現しきれないくんずほぐれつアハンウフンなことになっちゃうってこと!?! 保健室や体育倉庫や中庭で!?

ナニソレ燃える！ むしろ萌える!!——

「あの時俺に弁当渡そうとしたド変態ヤローか!!」

『最初からそう言ってます。というか、それ本当に私が言ったんですか……?』

あの時の女子生徒か。すっかり忘れてたぜ……思い出せない方はEPIISODE.
7 Aliveの第十九訓を確認してね! その勢いで一話から読み返してね!

言われてみれば雰囲気がちよつと違うが、今さら何の用だ? 弁当だけ置いてさつさと失せやがれ。

そういうと軽くショックを受けたような表情をした後、ゆっくりと左目の眼帯に手を伸ばした。

——全身の毛穴から汗が噴き出る音が聞こえた。

「……いつは……」

隠された左目は、まるで血を映したような朱色をしていた。

同じ目をしたやつを、俺は一人知ってる。

あの、ハーモニクスで生み出され、俺たちに剣を向けた、第二の天使。

エリザベスでない、立華奏。

★—学園大食堂 内—

「……それで、どうしてこのメンバーなんです?」

イチゴパフェと先生の不機嫌顔を堪能しつつ、私——遊佐は、先生に聞き返した。

事の始まりは今日の正午過ぎ。うわのそらな様子の銀時先生を見つけ、なんとなく声

をかけてみたら、彼が「パフエ奢るからついてこい」と言われ、今に至るのである。

それはいい。それはいい、……んだけど。

「……？　なんですか？　私の顔に何かついてますか？　このクラ」竹山さん　なんでこの人がいるんだらう……

「……話を整理していいか？」

頭を抱えた様子の銀時先生が私たち二人に向かって語りかける。

「構いませんが……一体私たちはなんの用件で呼ばれたのでしょうか？」

「頭が足りん。手伝え」

「問答無用ですか」

「あん？　だつたらいつだったか貰った『遊佐にいつでも何でも頼める券』使つてやろーか？　なんでもいうこと聞かせてやろーか？」

「そういえばあげましたねそんなものも。使わなくて結構です」

それはもつと、なんとというか、使いどころを考えてほしいとかもつとゴニョゴニョな時用にとつておいてほしいとか……

「おーい、遊佐さーん？　……返事がねえ、屍のようだ」

「大して変わらないですけどね。ていうか、僕をおいてけぼりにして話を進めないでください」

……ああ。一瞬どこかに飛んでしまっていた。ええつと、なんだっけ……

そこから数十分。彼の今朝あった話、それとあの時出現した、不可解な天使について説明を受けた。

天使や他のどさくさに紛れてうやむやになっていたけど、確かにあの天使の姿は異常だった。

あの時の姿は銀髪をたなびかせるどこか神々しい天使とは全く違い——それどころか人間のあるべき姿とは全く違い、なんというか、ペンギンおぼけのような恰好をしていた。ちよつとだけかわいいと思ってしまったのは秘密です。

しかも話を聞くとどうやらあのお化けは銀時先生の生前の知り合いの姿をしていたという。その上で中身は天使……。

というかあのお化けとお知り合いつて、先生の交友関係がとても気になります。

「そこはどーでもいいんだよ。重要なのは次だ」

「では、次は僕が」

軽くPCにメモをとりながら、竹山さんが説明を引き継ぐ。

「今朝、ある一般生徒の少女が先生のもとを訪ねてきた。その生徒は以前銀時先生と接触していたことがあり、その時はNPCとは思えぬ言動をしていた……」

「彼女は眼帯で左目を隠しており、その下は……第二の天使と同じ、朱色であった」

「今朝会った際には一般生徒らしい落ち着いた雰囲気、言動をしていた。彼女の話では『ここ数日間の記憶がない。記憶がなくなる直前は、激しい嫉妬にかられていた。記憶が戻った時には自分はよくわからない地下の施設跡のようなところに横たわっており、そこから仲村ゆりが助けてくれた』とのことでしたね」

「あいつからは聞いてなかったんだがな」

「特に話すようなことではない、と戦線の皆には伝えていませんでした」

「続けます。記憶がない中、彼女が唯一感じてたことは、激しい敵意のみだったといえます」

竹山さんが言い終えたあと、わずかな静寂が訪れる。事の異常性に触れて、次の一言が出なくなっているのかもしれない。

「……確か、似たようなことがありましたね」

「似たようなこと、とは？」

第一声を放った竹山さんに、聞き返す私。

「戦線の記録では、掛けたら個性が身につく——具体的には、ツツコミのキレが増す眼鏡が一時期出現した、とあります。しかも、この時も先生は、『この眼鏡には知り合いが宿っている』と仰っていたそうです」

「……ああ」

「これらの情報からの、あくまで推測ですが」

竹山さんが口を開く。

「銀時先生のお知り合いがなぜこの世界に、という現象の理由はわかりません。それ以外の、天使の異常な姿と少女の話についての推測です」

「天使のガードスキルは、Angel Playerによつて作成されたものです。僕も少しだけ触ったことがあるのでわかりますが、基本はプログラミングソフトと何ら遜色ありません」

「であれば、あれはプログラミングが不十分であつたハーモニクスのバグ、ではないかと考えられます」

「バグ？ あのスキルは完璧じゃなかったってことか？」

「はい。おそらくは」

竹山さんは、自分の経験則から導きだした考察を、ゆつくりと、要点を押さえて語り始めた。

——ハーモニクスとは本来、使用者本人（この場合は天使）の身体を2つに増殖させるスキルである。

しかし、プログラミングの不具合により、その増殖対象は身体どころか精神、つまり魂の部分のみになってしまった。身体がなければこの世界には存在できない。

天使の精神はこの世界を一瞬のうちにさまよい歩き、その時の自分の魂に則した肉体を探した。つまり……敵意と憎しみに満ちた肉体を。

そんなとき見つけたのが嫉妬心でいっぱいだった今朝の彼女。魂は彼女に宿り、彼女は第二の天使として私たちに剣を向けた――

「そして第二の天使のハーモニクス時にも同じ現象が起こり、あのペンギンお化けに天使の魂が宿った……と?」

「エリ……あのペンギンが肉体も増殖可能だった理由は?」

「そこまでは……わかりません」

竹山さんが軽く肩を落とす。そんな、ここまで推理してくれた時点で出来すぎなくらいなのに。普段みなさんからバカにされてても、やっぱりこの人はクライストだ。

「そっか……いや、サンキューな」

そこまで言って、先生は私たちに帰っていいといった。

「……あの、先生」

「んだ遊佐、下校時間だつて言ってるんだろ。さっさとおうちに帰りなさい」

「いえ。たいしたことでは……先生」

私たちに、まだ隠し事してませんか?

そこまで質問すると、先生はなんとも言い難い、後悔に似た表情を作ってみせた。

「……女つてのはどーしてこうも目敏いかなあ」

「先生がわかりやすすぎなだけです。安心してください」

「やかましいわ」

悪態をつきながらも、彼はその『隠し事』を話してくれた。

実は銀時先生が死んでここに来たわけではないということ。

生前の世界で、この世界にいたという音無弦結という青年の依頼によってこの世界に
来てしまったこと。

その青年の願いが、この世界から死んだ世界戦線みんなが救われて消えていくこと
だということも……

「あの時、体育館で言ったことは別にこいつに願われたからとかじゃねえ、俺の本心でも
ある」

「いつまでも囚われてちやいけねーんだよ。その苦しみを知ってる俺が言うんだから
な、間違いねえさ」

今の先生の話を反芻し、何とか理解する。言葉にするのがとても難しく、次の言葉を
発するのにとても時間がかかってしまった。

「……つまり、今の先生は死んでないのにこの死後の世界にいる、勝手に遠くに行ってし
まって帰れないでいる飼犬みたいな状態、ということですか？」

「誰が飼いだ無表情女……まあ、そういうことだ」

勝手に遠くに行ってしまうて帰れないでいる犬、という例えで進めるとしたら、今の先生に首輪とリードはついていて。リードはここと、先生の元いた世界をつないでいる……

先生の言っていることがすべて事実であるなら、と前置きして私も話を始める。

「貴方が完全な形でこの世界に来ているのではなく、どこかであの世界と繋がっているのなら」

「その『どこか』をたどって貴方の元の世界の方が来ても、まあ説明はつくのではないのでしょうか」

「……!!」

「あの、ツツコミが達者な眼鏡の方は魂のみで眼鏡を依り代にでしたが、ペンギンの方はその繋がりをたどってこの世界に来て、騒動のあと帰っていった……のでは？」

「自分の意志で、とは言いませんが」

言っただけで頭が痛くなる。

この世界で全く前例のない現象について追っている。確証もなにもない、すべて推測の話ではあるけれど、

何かが、少しづつ繋がってきている。



「……あんがとよ。大分考えがまとまった」

「気にしないでください。パフエのお礼です」

あ、あと。と、また話をつなげる。

「あの一般生徒の女の子から、以前弁当を貰ったんですよね？ それはどうしたんですか？」

「あん？ 仲村のせいで貰いそびれちゃったよ。つたく、あの野郎……」

「……その少女の気持ち、わからなくもないかもです。」

「あ？」

「なんでもありません」

嫉妬心。こんなわずかな炎が、私たちを危機に陥れる業火になってしまふなんて……

私も気を付けよう。

「今朝そいつから改めて弁当貰ってさーこれがうめえのよ意外と」

「死んでください」

「なんで!?!」